明治卅六年九月十五日定期増刊（毎月一回五日發行）　明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可

女學世界定期増刊秋の巻

花すゝき

第三巻第十二号



東京博文館發行

女學世界定期增刊

花すゝき目次

九月十五日發行

口繪

表紙

工業叢書

工學士 簑田猪太郎君編

硝子製造法

（近日發行）

全壹册

洋装上製總クロース金文字入極美本正價郵税共未定

硝子製造業は甚だ廣くして粗造の瓶硝子より精巧の技を疑らせる工藝硝子に至るまで種々のものあり從て其製造技術の如き最も多岐に渉れり本書は總論に於て沿革畧説より硝子の成分性質及び原料の調合より熔融を述べ各總に於て硝子器良法硝子板類製造法非日用品並に工藝硝子製造法を述べ終りに其製造品に施すべき装飾模様に就て充分の説明を與へたり本邦未だ斯業に關するの良書なし本館今此書を紹介して斯業の發達に貢献す讀者の利益蓋し鮮少ならざるなり

工學士 淺野幸作君著

アルミニユーム製造法

（近日發行）

全壹册

洋装上製總クロース金文字入極美本正價郵税未定

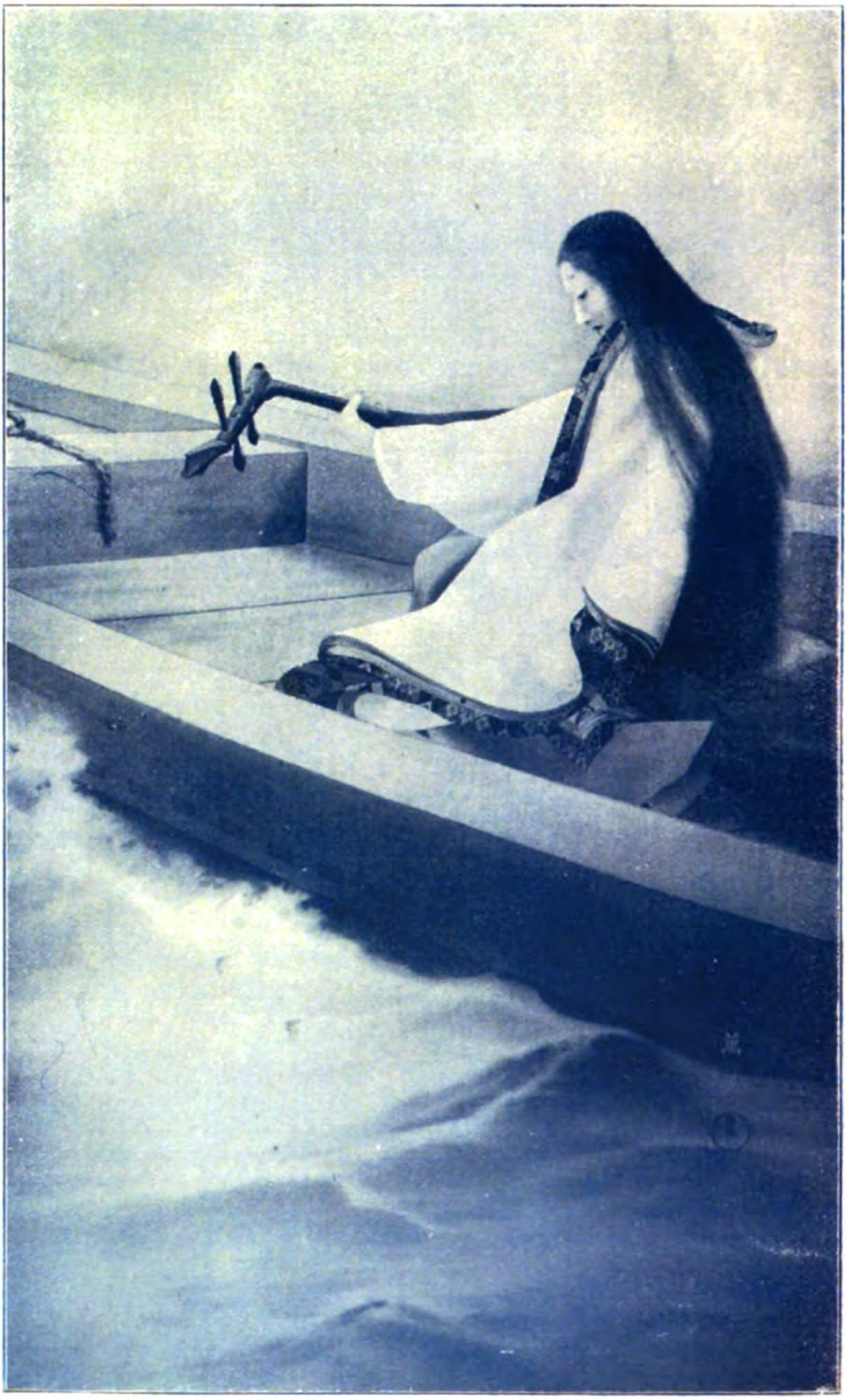
「アルミニユーム」の發見せられたる當時は其價一斤四百圓なりしも次て金に彷彿し銀に按近し今や銅に迫りつゝあるなり而して其製作品は益々銅の好敵となれり而して其製造方法も始め化學法なりしも今は全く電氣化學法となり尚其詳細なる點に就て益改良せられつゝ其應用に就ても著く發達しつゝあるなり此の如く既に日用金屬となりたるにも係らず我國にありては尚珍奇品として扱はれ之れが製造應用學に干する智識を欠く本書は玆に見るあり曩に著者歐米に在學の日其見聞したるものを基礎とし「アルミニユーム」並に「アルミニユーム」諸化合物の性質「アルミニユーム」の製造法「アルミニユーム」の諸應用及び合金並に之等の分拆等の尤も斬新の進歩を網羅して一册とし之を世に行ふと然り

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（甲の二）

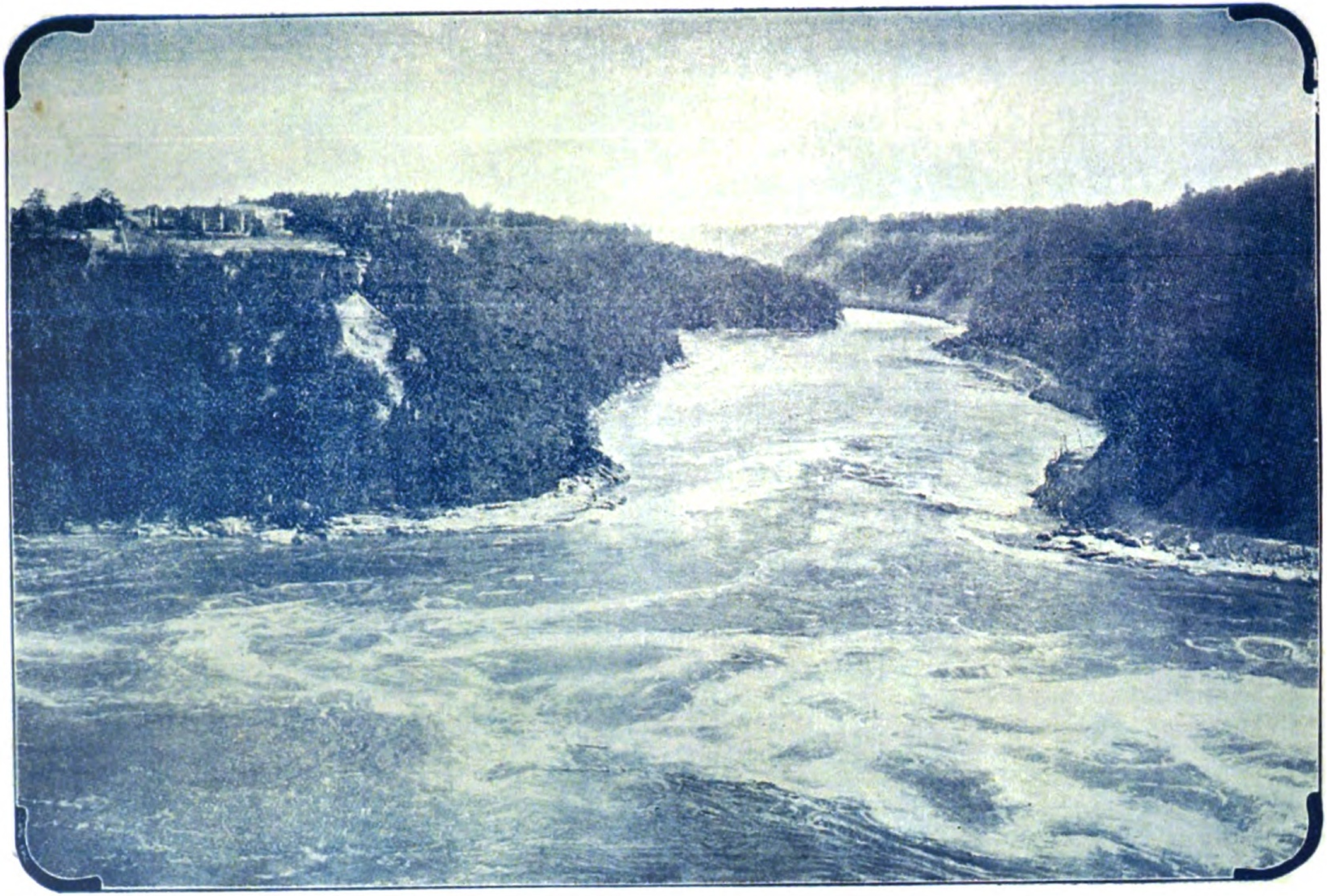
（甲の三）

哀音



三井萬里氏筆

（博進社工場印行）



ナイヤガラ瀑布の上游

（紀伊新宮　久保昌雄氏撮影）



紀伊熊野川の打網

宗祇法師遺山賊圖



松本楓湖氏筆

明治少年節用

學習院長 公爵 近衞篤麿君題字

帝國大學名譽教授 文學博士男爵 加藤弘之君序文

巖谷小波君 武田櫻桃君 木村小舟君 共編

十一月三日天長節發兌

紙數七百頁内外
挿繪約數百個
總クロース美本
定價郵稅未完

明治少年節用は出でたり この書口繪には我が東宮仝妃兩殿下をはじめ奉り兩皇孫殿下の御尊影をかゝげ各訂盟國々旗及び日本勳章の等級陸海軍服制等すべて精巧無比なる彩色石版を以て印刷したるもの 内容にいたりては鼇頭にお伽噺二十四題、日本歷史、西洋歷史、日本立志談、西洋英雄傳、等を收めまた本文には教育勅語を始め、天文、地文、地理、物理、化學、動物、植物、鑛物、農業、工業、商業、体操、遊戲、數學、音樂、軍事、國文、漢文、英語、作歌、作文、俳句、内外事物起原、格言集、福引、考へ物、座敷手品、骨牌法、少年吟誦用詩歌、笑話、養魚法、昆虫採集法、救急療法、學校案内、旅行案内、郵便案内、遊學案内、皇室一覽、皇族一覽、皇統略圖、日本形勢要覽、萬國形勢要覽、和漢洋對照年表、年齡早見表あり 日本少年座右の寶典とは即ちこの書の謂也

(乙の一)

謹啓
殘暑つのり申候處益々御清適奉賀候さて
實に突然の儀には候へ共弊師多田親愛翁
追々高齡に及ばれ候まゝ此度門下打寄申
候て古歌色紙の染筆を乞ひ同じく一定の
表裝に州し永く紀念と可致心得にて既に
十數幅出來致候處辱知諸君よりも加入手
續き等御問合せ有之候から此際特に弊
師にせまり申候て如下會規めくもの相定
め申候就ては斯道御嗜好家諸彦にして自
然御加入の思召もわらせられ候はゞ御贊
助の榮を得度奉存候乍然決して御迷惑相
掛け候やうの儀候ては弊師はもとより生
等に於ても不本意千万に御座候まゝ其邊
の處も御ふくみ迄申上候右以書中如此御
座候草々不一

明治三十六年八月　翠雲會幹事

岡　三郎
田中親美
太田義之
栗山銑二
安田善之助
古筆了信
小島亦次郎
下田豐吉
（イロハ順）

會規

一本會は多田親愛翁に古歌の染筆を乞ひ直にこれを表裝せしめ同
　嗜好の者にわかつひのとす
一本會規定
　色紙壹枚　古歌ちらし書
　色紙鳥の子紙胡粉引　堅四寸五分　横四寸二分
右表裝　堅物總紙仕立一文字風帶茶色印金道引雞頭巾濟色銀泥
　古代模樣天地モミ紙軸黑塗
右箱　桐箱印籠蓋
　但箱書附自筆
一右一幅を壹口とし壹口を金拾圓と定め一名數口を申込まるゝも
　妨なし
一加入者は住所氏名並指定の古歌を附末の加入申込用紙へ御記入
　の上或は古歌は筆者隨意と記入せられ申込期限内に翠雲會へ御
　送附被下度候
一指定せらるゝ古歌は三代集中の短歌と定め候
一加入申込期限は來る九月三十日迄とす
一加入者は申込の節に金五圓を書幅表裝出來現品引替金五圓を御
　出金被下度候事
一地方加入者は申込の節に總金額を御送金被下度候
一總て金圓は下谷郵便局宛の爲替にて御送金被下べく候
一色紙染筆表裝出來現品御渡しは申込の順序に據り可申候
一現品出來は本年十月十五日より本年十二月三十日とし必ず期限
　内に現品差出可申候
一右之通りに付御希望の諸君は御加入わらむ事を懇請致候也
　明治三十六年八月

筆者　多田親愛翁
表裝者　麹池鑄三郎

下谷區西町廿四番地
多田親愛方　翠雲會

林學博士ドクトル本多靜六先生著（近刊）

増訂 林政學

全壹册洋裝上製

總クロース金字入美本
用紙上等紙印刷最鮮明

總紙數六百有餘頁

正價郵稅未だ定まらず

林政學は森林事業の國家及國民事業に對する關係を論するものにして主として國家及社會學上の觀念を以て森林に關する諸件を論究せり今本書に專述する所は林學本科中三大別の一なる所謂廣義の林政學に屬する諸學科中一般社會の上流に位せる人士並に政府若くは公共事業に關係する人士の須らく知らざるべからざる事項にして筆を森林分布の狀態に起し間接又は直接に於ける森林の効用國家及び國家經濟上林業の性質民林、官林、保安林、市町村林、組合林、帝室林等の利害得失及び保護干涉の可否を詳論し森林の教育及び帝國林政の沿革に論及して其局を結びたり

類書目

林學博士本多靜六先生著

●帝國百科全書第三十七編 **提要造林學**（全壹册洋裝）

上製五十錢 郵稅十錢
並製卅五錢 郵稅八錢

林學士新島善道先生著

●帝國百科全書第五十五編 **森林保護學**（全壹册洋裝）

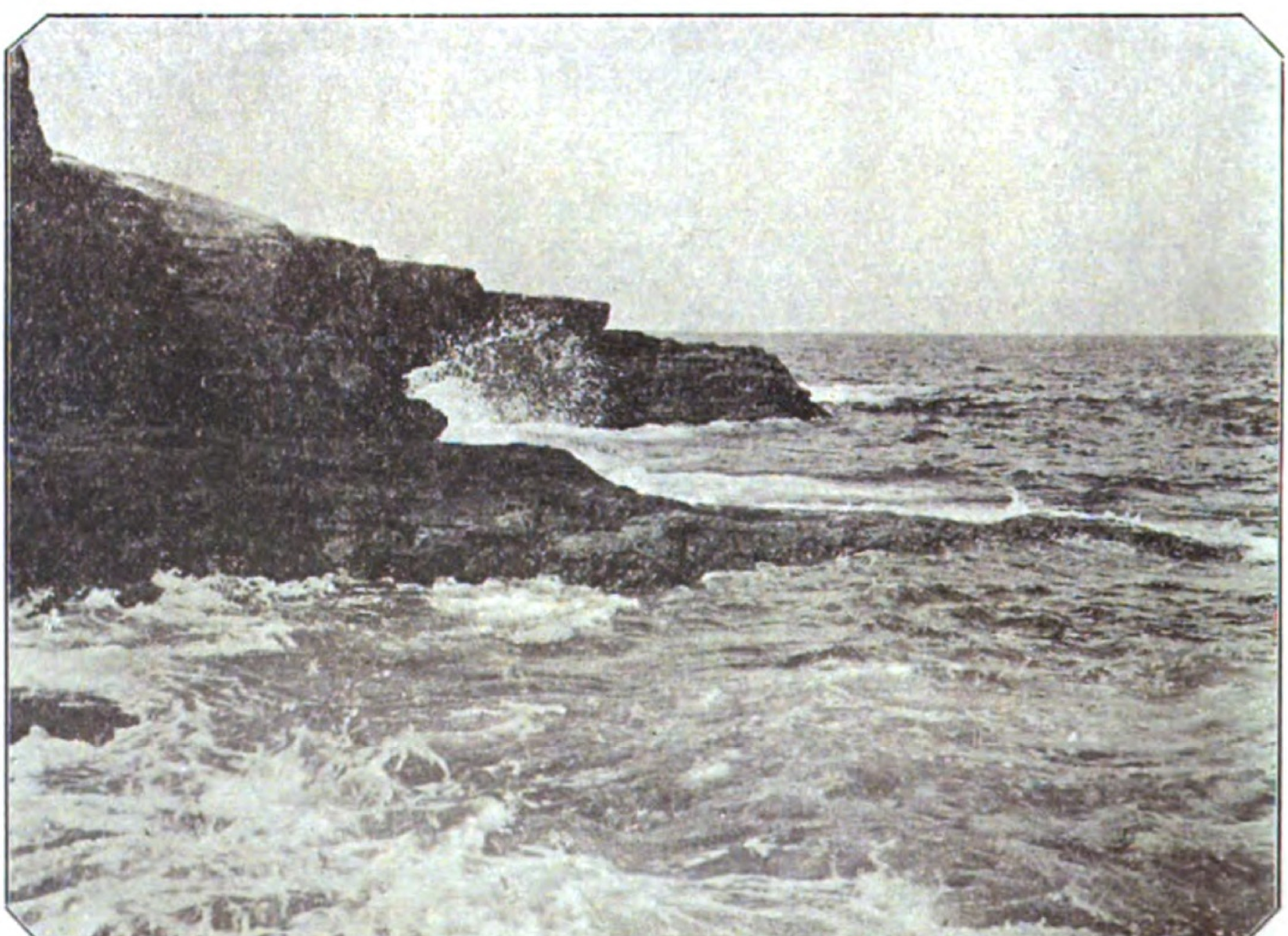
上製五十錢 郵稅十錢
並製卅五錢 郵稅八錢

（乙の三）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

秋の野





秋の海

支那の音樂隊



駿州吉原の富士





箱根葦の湯

摘　　花



(丙の二)

新奇發明 増酒資料

壹斗の清酒は即座に倍増し(即ち貳斗)となる大金儲的釀造化學作用の一大發明 新法なり(附錄)腐敗酒直し法、醤油三倍增法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍增法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者の大有益案内……右今回披露の爲拾萬部限り

無代進呈

す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる

大有益

の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あることを確證す(注意)本館の隆盛を羨み近時當館廣告に贋せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ……(當館は去廿壹年の創立也)

確實發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授産館**

肉體 **色白新劑**

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體

純白色に變化

し絶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製八拾錢特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくむし 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち

快通流下

する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及

惡血毒血

を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが (腋臭症)

根治確證 新發見藥

醫療賓藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても

誓て根治

し決して再發或は他病に變ずるも憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢若金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事(電話下谷五四六番)

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

歐洲風景



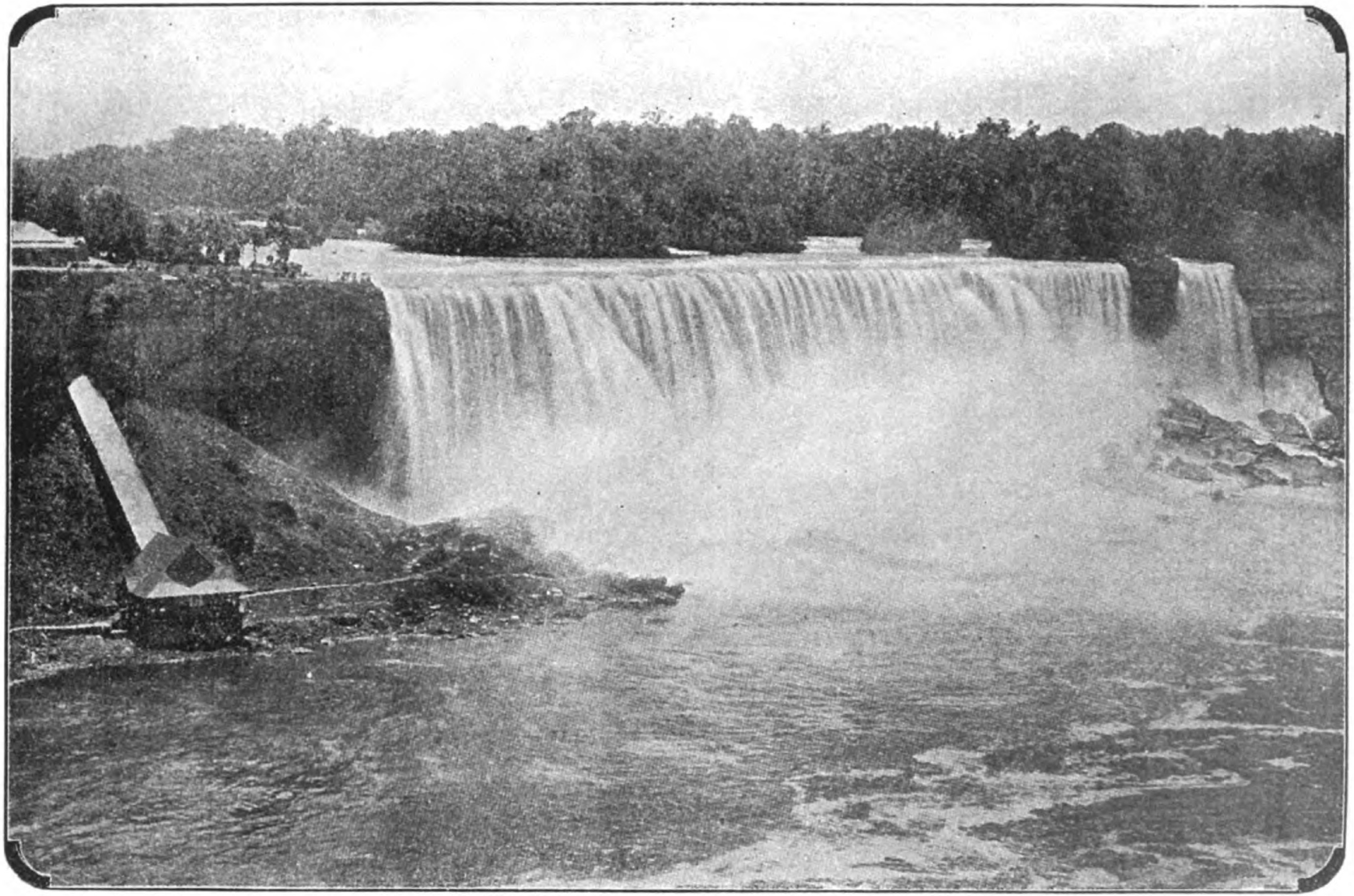
獨逸國ドレスデン府

噴水

(齋藤紫白撮影)

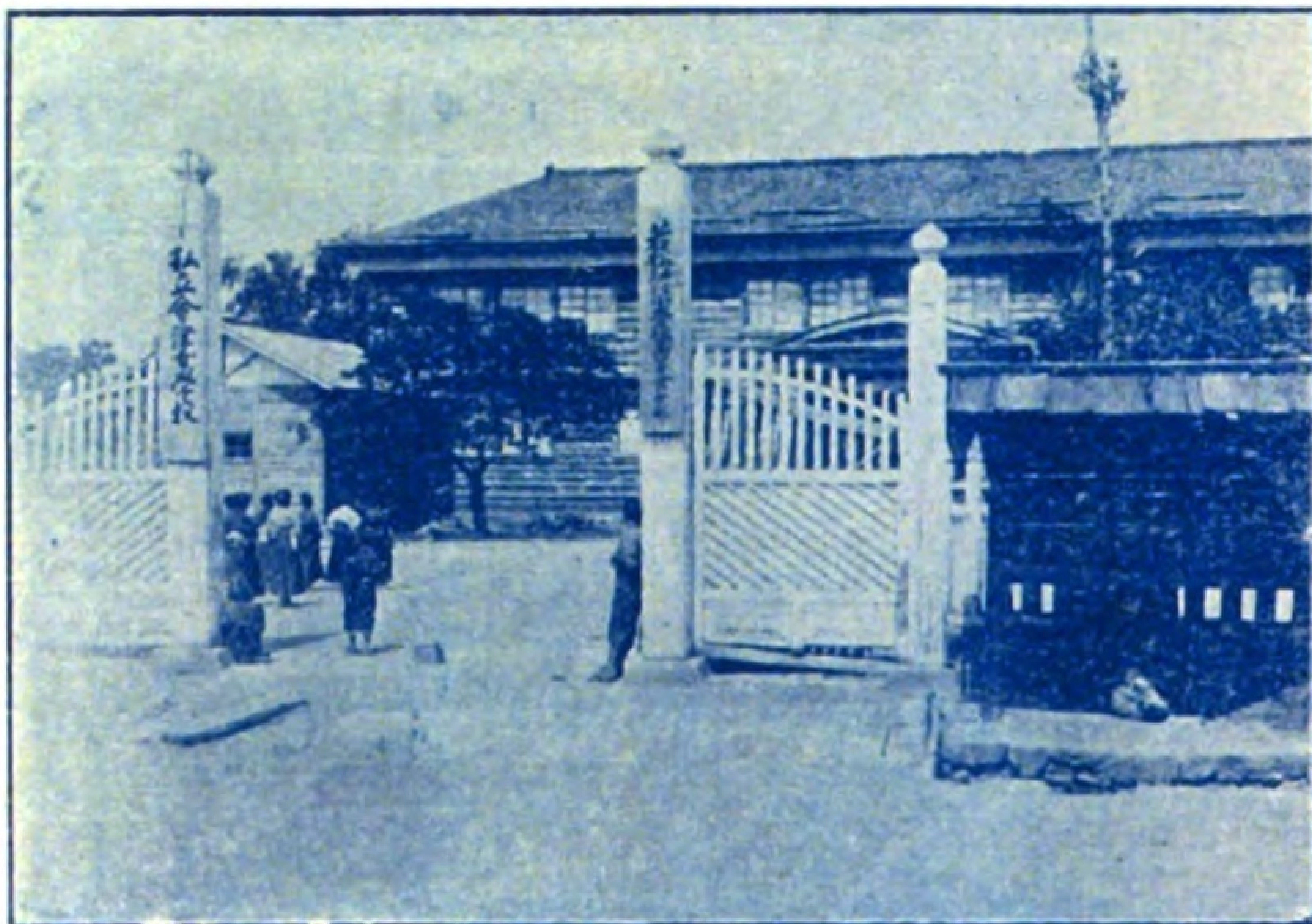


東京淺草觀音境內

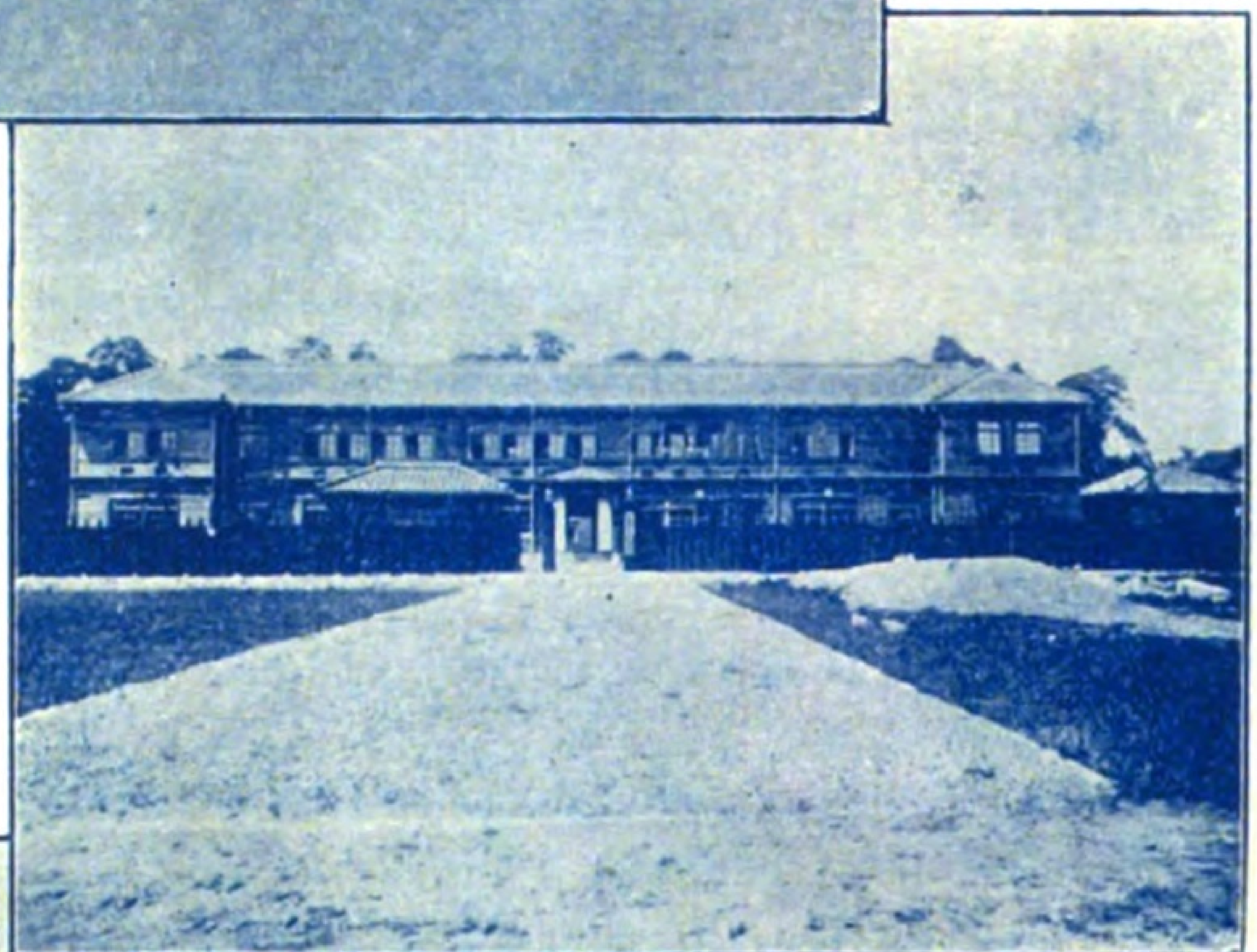


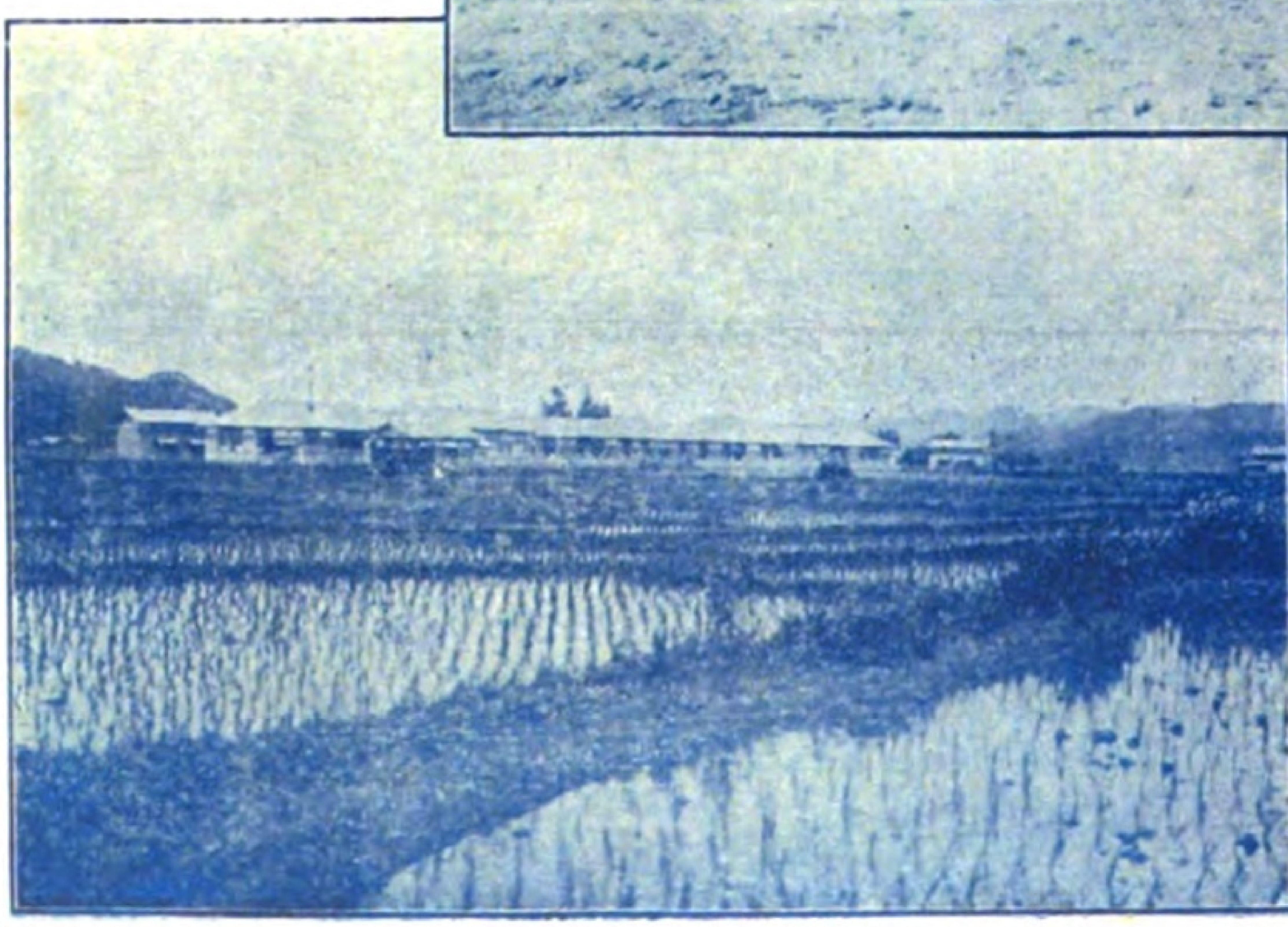
ナイヤガラ瀑布の一支瀑

若松會津女學校



明石女子師範學校





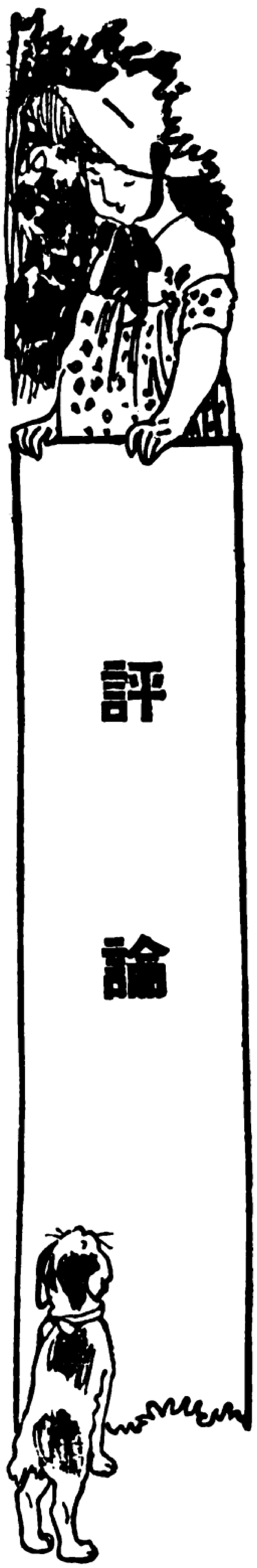
福島女學校

女學世界定期增刊秋の卷

第參卷第拾貳號

讀書の好季節

秋の日は人をして物に親しましむ。物に親しむの時にあらざれは書を讀みて箇中の趣味を感ずるの量深からず。秋の夜は人をして眞面目ならしむ。人、眞面目の時にあらざれば書を讀んで個中の消息を解するの量饒からざるべし。此の點に於て秋は實に讀書の好季節なり。此の時に方り吾人は平素吾人の信ずる文壇の匠人を傚ひ、天然より人事より各々我が婦人社會の夙夜に資すべき好材料を捉へ來らしめ以て我が愛讀者に新たなる趣味を供給せんと欲す。倘し長夜のつれ〴〵に一讀の勞を惜み玉はずんば吾人が花すゝき編輯の勞も亦空しからずといふべし。



今日の智識

○結婚は一事業

× × ×

世の中には結婚を富籤引くやうに心得、好配偶を得るも然らざるも天運のみと放言する人往々之れ有り。是れ結婚後の諦め方として、至極穩當なれとも、結婚前に周到なる注意を要するは言ふ迄もなし。親として數人の男子が良妻を持ちたるを見るは嬉しき極なるべけれど、男子は己が意思にて妻を擇ぶゆゑ、或は親の心に副はざるあるを免れず。女子は柔和にして親の撰擇に待つを以て、親の心配一方ならぬと同時に、佳婿を得たる滿足は他に比ぶべきもの無からん。加藤弘之、松尾臣善、細川潤次郎諸氏が、各々四人の令孃に佳婿を得られたる、故三島通庸氏の令息彌太郎氏が四人の姉妹方に善き夫を擇ばれたる、何れも平生注意の周到なりし結果に外ならず。我々門外漢はこれを傍觀して、緣組にも一種の技術を要するかと驚歎しつゝある程なり。

久保田政擧氏と云ふは餘り名の聞えたる人ならず。而も此人の長女は帝國大學名譽教授濱尾新氏の夫人たり、此人の二女は工學博士長谷川芳之助氏の夫人たるを思へば、此無名にして平凡なるが如き人は、婿を擇ぶの眼識ありしことを想像し得べし。會計檢査官伊藤祐敬氏も赫々の名なけれども、其妹の爲に陸軍少將安東貞美氏を擇び、其長女の爲に理學博士平山信氏を擇び其姪の爲に文學博士桑木嚴翼氏を擇びたるを見れば、

決して無能平凡の人にあらざるなり。

○美人の三缺點

美人と云ふものは、兎角缺點の多きものなるが、重なる缺點と云ふべきは、驕慢、妬悍、痴呆なるが如し。驕慢、妬悍は積極的缺點なるを以て、何人の眼にも觸れ易しと雖も、痴呆は消極的なるを以て一見して看破し得ざるもの多し。而も俗に毛三本足らぬと言ひ、狐を馬に乘せたやうだと評し、利口の樣な馬鹿、或は氣が利いて間が拔けて居ると譏るは、何れも此痴呆なり、最初に見たるとき天成の麗質に恍惚たる者も、一二度話したる後には愛想を盡さゝるなし。嘗て一美人の地方より東京へ來りしあり、其兄が懇親會に二圓の會費を要すと聞き、早合點して言ふやう『鮓や汁粉や鰻飯や天麩羅や茶碗蒸や小田卷や、先ア十五錢位の御馳走が十三種ほど出るのですネ、妾には何卒鮓と天麩羅を持つて歸つて下さい』と。其調子の奇異なる、流石の兄も茫然として呆れ返らざるを得ざりしとぞ。

眞逆この痴呆美人はとならざるも、世間には此種の痴呆多し。温泉と云へば、上州でも岩代でも熱海と思ひ、五重塔を見れば、奈良でも京都でも天王寺と思ふ、總て數理や地理の觀念極めて乏しく、恍然惚然として夢心地なるなり。嗚呼此の如くんば、美人も忽ち愛想を盡されて顧みられず、況して美人ならざる者をや。

○一時間の辛抱

近頃の一惡風とも云ふべきは、湯屋の「流し」に於て、三助にお水を一盃お呉んなさいナと請求し、コップに波々持ち來るをば恰も上戶が醉ざめの水でも飲むやうに、舌皷うちて召し上る奥樣多き事なり。この風は男子の方に始まりしものが、婦人の方へ傳染したるなるべければ、其根本たる男子を責むべきなれども、男子は元々殺風景なる擧動多きものにて、錢湯の水を桝の隅から飲む位は左まで目立たず、婦人にありては如何にも生意氣に見ゆるなり。務め向によりては、三四時間以上湯茶も水も飲まぬ人さへある事にて、入浴中三

十分乃至一時間ぐらゐ喉の渇を耐へ得ざる道理あるべからず。奥様とも申さるゝ方々、決して斯る卑しき眞似をなさらぬが宜し、高が一時間の辛抱なれば。

○躾と紀律

日本には昔より躾と云ふヿありて、男女とも幼時より嚴しく敎えたるものなるが、特に女子には一層嚴しく躾けたるが如し。西洋は躾と云ふもの、餘り嚴しくはあらねど、總ての仕事が秩序整然として紀律を守る風習なり。さて我國今日の女學生は如何と云ふに、日本の躾は舊弊なりとて守らず、西洋の紀律的風習も未だ入らざるヿなれば、書室の書物は亂抽して片付けず、洗濯すべき衣類は堆積して顧みず、來客あるも之を待遇する法を知らず。宛然碗白小僧の如く、疊の汚れを拭ふに疊の目に順うて拭はぬゆゑ、却て汚れを甚しくするヿあり。風呂敷包をするにも結ぶべき隅を定め置かざるゆゑ、風呂敷の四隅を皺苦茶にするヿあり。書輸を披見したる後、元の通り卷き返す能はずして新し

き折目をつけるゆゑ、信書の秘密を破るヿなど出來ざるは結搆なれども、女學生ともある者がさりとては餘り腑甲斐なきヿならずや。

○地方の少年

僻地に生れたる者は、ノートブックなど買ふべき處なきゆゑ、男女十二三歳にもなれば自ら半紙を折りて、手帳を拵えるなり。半紙二つ折の本を綴るは六ケしからず、短冊の樣に切りたる紙片を四つに疊みて錐を通せば四孔は一直線と爲り、これを半紙二十枚乃至三十枚折り揃へたる折目と反對の側に正しく當てがひ四孔各々に錐を透し、二本の紙撚を以て裏面に綴り、短冊樣の紙を裏面へ反して糊を付け紙撚の綴目を掩ふ如きヿにて彼等自然に發明す。然るに都會の少年はノートブックも買ふべく、鉛筆削りも買ふべく、錐を以て手帳を綴る必要もなければ、小刀を以て鉛筆を削る必要もなし。故に地方の少年が器用なるに似ず、都會の少年は丁年近くなりても、紙撚さへロク／＼拵え得ざる

者あるなり。

○都會少年劣敗

書肆等に雇ひたる小僧を見れば、都會の少年が地方の少年に劣れるを證據立て居るなり。都會の少年は書籍の目録を暗記すると敏し、顧客に對する應接振りは氣が利いて居る、市内の町名など熟知して方角見當など一聞直に呑込み得る點に於て、確かに優勝者たり。然れども幼時より仕事に慣れざる都會少年は、荷拵えなど爲すと能はず、安逸に慣れたる少年は、根氣なくして少しの勞力にも疲勞すると甚しく、食物粗末なりとて不平を言ひ、他の商店の休む日に休まぬとて雇主を罵るなどの事多く、到底雇主に愛想を盡かさるゝに至る。これに反して地方出の少年は仕事に慣れ居りて荷拵えも巧みに、根氣强くして長時間の勞力に疲れず、漸々都會の風に慣れては、書目も暗記し町名番地等の呑込も敏くなりて、顧客に對する應接振りも熟練するに至り、遂に都會の少年を壓倒し了るなり。

○母の心掛次第

前述の次第なれば、都會の父母たる人々特に母親は、其兒女を幼時より仕事に慣れしむべし。兒女を遊ばせ置くが故に、彼等は本を讀むより遊ぶ方が面白しと思ふに至るなり、尋常の遊戯に飽きたる時は、カルタ、トランプより賭博に類する遊戯に侵入するに至るなり。幼時より仕事の習慣を付け置けば、仕事の暇に書物を讀む樣になるゆゑ、決して讀書勉學を苦痛と感ずる如き懶惰者とはなる可らず。兒女を勤勉家とするも、懶惰者とするも母たる者の心掛一つに在るものりと知るべし。

○不謹愼不愛嬌

近來の女子が不謹愼不愛嬌なるは實に驚くべきなり。彼等は放埒なると男子に讓らず、新しき書物を與ふれば三日ならずして綴目を離れしむるとあり、掃除せしむれば、座敷の隅々に塵を殘すとあり、水を打たしむ

れば、人の裾や足に水を迸らして平氣なるあり。若し又たまゝ規帳面なる者あるときは、人の讀みつゝある新聞をも片付けんとし、人の用事の立ちたる間に椅子を片付けんとす。怪む勿れ、某商店に於て採用せる店員が男子よりも不愛嬌なるとを、女子の多くは主我的にして、顧客が粗品を買へば侮蔑し、顧客が高價精良の品を買へば嫉妬の焔を燃し、煩悶懊惱して迚も愛嬌を振り蒔く餘裕あらざるなり。

○大買ひと小買ひ

米なり醬油なり炭薪なり大買ひを利益とする細君あり、又小買ひを德用とする細君あり。これは何れにも理窟ある事にて、大買ひを利益とするは、多く買へば割が廉い、物によつては卸し並に賣る、物によつては小買の倍もある、又其品物の直段下落せる時に大買ひする、何れより觀察しても利益なりと云ふに在り。然れども小買黨の言ふ所に據れば、大買ひは金ある人の爲し得る所にて、貧乏人の爲し得る所にあらず、或貨物の直段下落したりとて如何ぞ一年二年分を買ひ置く餘裕あらんや。且つ人の性として、潤澤にあれば潤澤に使用するものなれば、書翰用紙多ければ書翰用紙にて鼻を拭ふにも至るべく、書翰用紙なければ半紙に書信を認むるとあり、筆なければ禿筆を何時までも用ゐ、筆多ければ二三日用ゐて毛先切れたりと言ひ又も新しきを用ゐるに至る。下駄なり足袋なり手拭なり、總て此調子ならざるなく、之に加ふるに日用品大買ひの結果は、日々の消費金明白ならざる爲に不ㇾ知不ㇾ識これを過小に感じて、漸々贅澤なる衣類を買ひ、不急好事の書籍を買ひ、植木道樂と爲り、寫眞道樂と爲り、書畫骨董道樂と爲り、芝居角力道樂となる、是れ實に免れ難き所なりと。

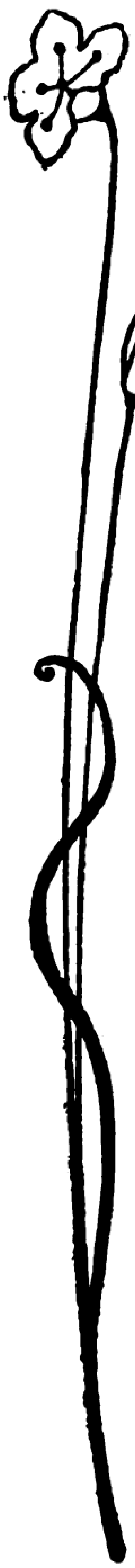
○杓子定規

女子の弊は杓子定規なるに在り。如何なる場合にも、有爵者は上に置くべきものと思ひ、老人は少者に命令すべきものと思ひ、古人は今人より優れるものと思ふ

が如き是なり。曰く我父は斯る場合に如何に計ひたり、曰く我兄は斯る場合に如何に扱ひたりと、萬事萬端、己が父兄母姉を模範として說き出す如き是れなり。曰く如何に先方が好まぬ品なりとて、此禮には此品を贈るべきものと一定し居るなり、曰く如何に先方が好む品なりとて此見舞には之を贈るべきに非ず、曰く重陽なれば暑くとも袷を着ざるべからず、曰く五月なれば寒くとも單衣を着ざるべからず。或は貴人の前に扇を使用すべからずと說き、書信は卷紙にあらざれば認むべからずと說き、何から何まで杓子定規なるは、識者をして長歎大息せしめずんばあらざるなり。

○小我を打破せよ

以上述ぶる所は、大抵婦人を酷評したるものなり。而して之を約言すれば、婦人の見聞寡陋にして小我を固執するを攻擊したるなり、小我にさへ到着せざるを攻擊したるなり。蓋し大我と云ひ、小我沒却と云ふは、固より赤子の如く無我夢中なるを謂ふにあらずして、一たびは小我を固執し、煩悶懊惱の域を通過したる後、小我を擺脫したるを謂ふなり。故に予は今の婦人に向つて、無我夢中赤子の如く痴呆なる者は先づ小我の域に到着せよと責め、小我の域に煩悶懊惱せる者は早く大我の域に達せよと責む。人或は過酷なりとて、予を責めんかなれども、佛敎の說きし如く「三界無家」に滿足する婦人ならば酷論する必要もなきなり。今日の婦人は最早無我夢中の赤子にあらずして、小我の域に煩悶懊惱せる者多きを以て、「三界有家」を自覺せしめん爲に、敢て涙を揮つて大鞭撻を加へたるなり。



婦女小言

○家庭の二字は此頃の流行で世人も稍や注意するやうになり心得ある婦人は深く其改良に肝魂を碎き最も尊敬すべき高尚なる動作を取つて居る方も甚だ少なくないらしい、誠に祝すべきことであるが又一方には茶の湯、生花等贅澤三昧のことも頗る流行して居るらしい終日家内に閉籠つて人と云へば八百屋の小僧か油屋の丁稚より外誰にも遇はない淋しい境界に在る、日本婦人に取つては是等の慰みも必らずしも絕對に排斥するではないが中流以下の主婦であつて是等に立際り得るだけの餘悠があるか無いか聊か考へて見なければならない、若しも他に成すべき仕事のあるのにそれをも打捨てゝ茶の湯、生花などに日を送るのは至つて好くないことである男子も左樣であるが女子は近來最も遊惰に流れて居る傾向がある勞働の神聖なることは今更ら云ふ迄もなく、其地位相應に何人も勞働はせなければならないのに、如何にも遊惰を愛するの氣風があると同時に却つて勞働を耻とするの傾向きが見えるのは家に取つては衰運の兆で國に取つては不景氣の先驅とも云ふべきであらう、然かのみならず。

○衣服に贅澤を競ふの風は殆んど其頂上に達し、試みに某の停車場に往つて見れば來往織るが如き多くの婦人中には若いもあれば老人もあり小供もあれば地位の低いのもある其階級の如何に拘はらず身に着けて居る處の衣裳は概ね綺羅を飾らないものはない之をしも物質的文明の現象と云へばそれ迄だ余と雖も何も立派な物や美しいものを排斥するのでない適當な手段を以て爲し得ることならば安樂もし奇麗な風もするが善ひとは思つて居るが身分不相應なことには絕對に反對だ、例へば月收三十圓五十圓の家の妻君の身に纏ふて居る總ての物を計算し着物から帶から頭の物から足の物に至る迄の金高は遙かに一個月分の收入に超過して居るのが多い家には主人もあり、子供もあり、家賃から食事までの一切を辨じて往かなければならない然るに人の衣裳のみにて此莫大な金を費すとすれば其他の家計は何

に依つて始末を附けるか暮し向きの困難などは云はずも知れて居る、市中で見受けた奏任官以上の奥方は何時しか三尺路次の十間長屋に隱れて仕舞ひ惡衣惡食を嘲るものは共に語るに足らないと云ふ、修業中の身の上なる女學生の現今の贅澤は抑も何たることであるか、是等の惡習を矯める爲めには余は寧ろ吝嗇の誹を受けるまでも大に節儉の美風を養成したいものと考へて居る。

◎以上は現今に於ける女子の欠點の概畧であるが是に由つて見れば女子は如何にも贅澤をなし遊んで至極呑氣に此世を暮して居るかの如くに見えるけれとも、其實決して左樣でない素より二三の例外はあるであらうが押均して女子は厭世的の傾きを有つて居るのが多い是れ一つには女子に對する男子の勞働が頗る未開的であつて妻君と下女と殆んと何等の區別もない取扱ひを爲し甚しきは下女よりも猶ほ下等な取扱ひをする等のことがあるにも依るので、此邊は男子たるもの丶大に注意すべきことであると同時に凡そ此世に在つて一身一家を經營して往くには男子と云はず女子と云はず將た貴賤を問はず是非とも之に伴ふ處の苦勞がある青春二八の花娘の時代には新たに嫁入つた友達の家庭が浦山しく思はれる、扨て自分が人に嫁して見れば嬉しいとも嬉しいが又是迄に無かつた悲しみも増すと云ふ風に既に樂中に苦あることを知らば苦中にも亦た自から樂あることを悟らなければならない。

◎即ち人の此世に生れ出でたる以上は一種の苦勞は必らず免れざるものと覺悟し之を遁れんとするよりは之に打勝んとするの氣概を奮ひ起すことが肝要である女子に厭世の傾向きが多いと云ふのは詰り此氣概に乏しいからである今日の女子に對しては世間から誠に多くの注文がある中には隨分無理なこともあるに相違ないが是まで徒らに男子の玩弄物であつた處の女子が其自分を高めて男子と對等の地位を維持せんとするには、それだけの責任を負ふべきは云ふ迄も無いことなのである。

◎昔の人も敵の國や外の患ひが無かつたなら其國は必らず亡びると斯く云つたことがある近くは我日本が此數

年間に世界一等國の列に加はつたのも維新前後から外國の刺激を受けることが非常に强かつた然しながら盡すべきだけのことは大に奮發して、果し終せた爲めに今日の如く立派な國に爲つたのである其通りに女子に異論な注文や責任が負せ掛けられつゝあるのは勿論將來に向つて女子の地位を高め得る處の前兆であるから、大に勇氣を鼓舞すると同時に苦心經營して其責任を果す處の手段方法を講じなければならない、恐ろしいと思ふて戰爭をすれば必らず負ける、元氣を出して戰ひに臨めば戰爭ほど面白ひものはないと云ふ余が此篇の初めに於て女子の欠點を少なからず揭げたのも高尙なる志操と堅忍不拔の氣慨ある姊妹の爲めに聊か研究の材料を捧げたいと云ふに外ならないので、人生の眞樂は茶の湯、生花の如き隱居然たることには無くて寧ろ責任を果し實權を握ると云ふ戰爭的勇氣の間に在るのであるから、若しも眞の樂みを得、眞の慰安を望むならば絕えず此責任と戰つて之に打勝つことである。

◎近頃に至つては世の女學を論ずる者の方針が稍や一變して所謂西洋風の女ハイカラーは漸く排斥され、餘程着實なる方向に傾きつゝあるは慥かに一の進步と認められる、余は竊かに女界の爲め又社會全般の爲めに之を喜こんで居る、左れば從來英和女學校などと稱へて設立された處の多くは外國宣教師に屬して居る女學校すらも、西洋風を丸呑みにさせやうとする幼稚な教育法は殆んど跡を絕つて、日本婦人は是非とも日本婦人らしく養成せなければならない、と云ふことが外國人の頭にすら入つて來たらしい、就ては今でも澤山な女學生の內であるから絕無とは云はれないが例の生意氣な極めて嫌らしい氣風も追ひ〳〵改つて貞淑とでも云ふべきオトナシクシトヤカな動作を尊ばれるやうになつて居る、中には餘り女らし過ぎる結果、着物のことや臙脂白粉のことにのみ氣を奪はれ自から男子の玩弄物たるに甘んずるやうな婦人も出來はせないか是れ聊か一時西洋風の大に流行した反動でもあらうが左ればとて餘り骨の無い人間になつて貰ふても困る。

◎是に於てか徐ろに日本中古の女子敎育を想起し、男子の心身を武士道で固めた當時女子は果して如何であつたか、之を今の世に比べて嘗に遜色なきのみならず或は大に勝れた處があつたではないかと云ふ處から或る女學校の如きは頻りに女子に武士道敎育を施して居る、其結果は如何に成行くべきか、何とも斷言は出來ないけれども、隨分面白い成蹟が得られるであらうと思はれる。

◎斯く云へば、一も二もなく女子には古代の敎育を施し、支那の女四書、我邦では貝原益軒の女大學などを金科玉條として一歩も其外に出てはならぬと云ふやうに誤解さるゝ方があるかも知らないが、左樣な時勢後れの議論を持出さうと云ふのではない、二十世紀文明の潮流は慥かに我女界にも流込むべきもので、余も亦た之を喜ぶ一人ではあるが、一國には各々其歷史があるので、幾千年來の慣習と云ふものは自から第二の天性を成して容易に改めるヿの出來ないものである、それも差したる弊害があれば素より何事を置いても之を取除かなければならない、けれども隨分立派なものがあるのに、それまでも無理に之を排斥しやうとするのは骨を折つた上に更に新らしき害を招くヿになる、女四書、女大學の如きは何れも數百年前に書かれた書物であるから。それが悉皆今日に應用されるとは勿論出來ない併しながら其中に大に取るべき處があるヿを忘れてはならない。

◎當世育ちの若い婦人に女大學を讀ませて其意見を聞いて見ると、貝原先生の議論は無暗に女子を責めて男子には頗る寛である、所謂男尊女卑の誹りは到底免れるヿは出來ないと先づ一口に斯樣に申すのである、之は誰かの說を受賣りして居るのか、或は自分で左樣に感じたのか、其邊は能く分らないけれども、女子のみを責めて男子を責めないと云ふ不平は女大學に對して云ふべきヿではなからうと思はれる、女大學は本々女子の戒めとして書いたものであるから其敎が女子に適するや如何と云ふヿが大切なる論點であるので、男子のヿがないからと云つてそれを不平にするのは少々間

違つて居る、尤も貝原翁の時代には實際男尊女卑の精神が盛んに流布されて居て男女同權とか、女尊男卑とか、云ふヿは毛頭腦裡になかつたものであらう、又其書中には科學に暗い爲めに隨分無理な注文を女子に持込んだ處もある、殊に此書物が單に女子を敎育するのみならず、男子が女子を壓制する處の一つの口實に利用されたのは誠に遺憾なヿではあるが、畢竟これを利用した處の男子が惡いので之を以て翁を罪するのは酷である。

◎余の見る處に依れば凡そ道德の敎は槪ね其身を責めるヿが多いやうに思はれる、「汝の敵を愛せよ」と云ふヿは出來るとか出來ないとか、「人若し汝の右の頰を打たば其左をも向けて之に打たせよ」と云ふヿは馬鹿らしいとか眞實の道理か是等は先づ凡人以上のものでなければ行ふヿの出來ない處としても同じ門より出入し同じ釜の物を食べて苟にも親と呼ばれ子と呼ばれる身の上でありながら、自分の身を修めるヿは云はないで嫁が惡いとか姑か憎くいとか云つて居るのは道德上立派の婦人とは云はれないのである。

◎女權擴張の論が一たび流行してよりは之を妙な處に穿き違へて女權擴張とは成るべく多くの責任を遁れるヿで姑にも事へないでも宜しい夫をも左程大切にするには及ばない、家事經濟など面倒臭いヿは打遣つて置け、其代りに我輩は矯風會にも慈善會にも出でお饒舌もすれば奔走もして居ると內心高慢の鼻を高くする女流ハイカラーは縱し少ないとしても早い話が今余が是等の婦女責任論を主張するのを見て又しても女征討かと顏を蹙める人も少なくなからうと思はれるが責任から云へば女子よりは男子の方が餘程重いので如何なる職業を執つて居るものでも今日の日本に於ては女子よりは男子の方が遙か重い處の責任を負ふて居るに相違ない、男子も務めの面白くない時には隨分不平を漏らすヿもある、併しながら其責任を遁れやうとはして居ない、誰しも責任の重いのを好む人は無であらうが左りとて既に定まつた責任がある以上は之を遁れやうとするのは卑怯千萬な話である。

○米國歸りなどの若紳士で盛んに女權擴張を唱へ何でも個でも女の肩を持つて社會改良の手始めなどと考へるのは多くは是迄妻を持つたことの無い人である、處が其女權擴張論者が一旦妻帶をすると以前の議論がガラりと變つて來るのが多い彼等は美しい少女の容貌に其魂を奪はれ如何にも可憐なるものよとばかり想像して居つた其少女が愈々同棲して世帶の苦勞を共にすることになつて見ると、隨分我儘も云ふ又思ふた程には内助の功が上らないと云ふ處から、始めて婦人の眞價が解ると云ふことになるのである、素より婦人は大切なもので昔より英雄豪傑の大事業を天下國家に成したるものが一人として内助の功に依らざるものなきは云ふ迄もなく、賤が伏屋、三尺戸口の裏店の家内に至るまでそれ相應に夫を助ける功績はあるに相違ないが、此上一層女子が家政に重きを爲すやうになつたならば、一家の幸福は云ふ迄もなく女子自身に取つても實際の權力を擴張し得ることと信ずるのである。（池田秋旻）

園生の日記

大阪　田中瑜瑳子

廿六日小雨　雨中のながめまた惡からず、岩崎氏より給ひし朝顔初めて開きぬ。黄に海棠の斑點一寸變りたれど輪の小さきがうらみなり。あまりに木々の葉の茂りたればとて父君は若者をして南園の栗も椿も根本より切り取らしめ給へり、年毎におとづろ谷の鶯あはれこむ春よりは何をしるべに淋しき宿をおとづろならん。

廿七日　今朝も一輪朝顔咲きぬ。いつとはなしにのびゆく若竹早や親竹しのぐやうなりたり、若きものの延ぶるは竹のみかわと父上は苦笑し給ふ。

夕方弟と共に野菜畑へ行く　例のぢいや水掛に餘念なし。五寸計になりし里の葉にそゝぎし水の一雫こぼれて風のまに〳〵ゆらめく様いと涼げなり。あれ玉がと弟のとらへんとすれば彼方此方へ傾むきて遂にはぽたりと地におちぬ。

廿八日雨後晴　疏あとの「きようちくとう」數多害をつけて上なるは三つ四つ開きたり雨にあひて少しくうなじたれたる様海棠の其にも似ていとやさしう。

かの一輪かざしにほしやと手をのばせど高根の花只だうらめしう仰ぎ見る折から「花ぬす人ゆだんはならじ」と何處よりか可愛ゆき聲のす。驚てかへりみれば切戸のひまより浴衣の袖あらはれぬ。

廿九日　鉢植の秋海棠うす紅の色美しう五六輪咲き出でたり艶かなる丸葉におきたる露の旭に輝ていとゆかし。たそがれ枇杷の實とらんと弟つれて菜園にいづ。未だ三房計りのこれる筈なるに一粒もあらず。あたりをながむれば數多種こぼれたり弟は今にも泣き出でん有樣なりしが折しも藤の陰に人のけはひす。すかし見れば緑の葉がくれに紅白の絹ほのあらはれぬ「小い姉さんと薫ちやんとだ」と弟のいきまくに吾もおほねす「ぬす人見つけた」と昨日の返しすればほゝと笑ふこゑ池にひゞけり。

卅日晴　菜園の棚また切らしめ給ふ今日よりはハンモック釣るべき處もなし。いたづらに暑き日照りて陰なりし葵何となく打しほれけり。晝餐時のつれ〳〵に弟等金魚いぢりて遊びぬ。兩人のおもざし似りなく〳〵瓜二つ眼鼻口元頬のあたりまでよくもかく點と思ふ計りなり。



文藝

小説 秋の夕暮

米光關月

其一

上野の花はもう散つて終つて、向島は今が盛りと云ふ此頃、しかも近來に無い上天氣の爲め、さらぬだに、暖い陽氣の、殊更ら今日は暖い日影の、それを玆處では知らぬ顔に、ピタリ障子を閉切つた儘、六疊の小座敷に膝突合して、互ひに深い溜息を洩らして居る二人の婦人がある。

一人は眞白になつた頭髮を切下にした、年齢六十斗りの如何にも穩やかな顔附の老婆で、それと差向ひに座つて居るのは、時節柄尠し暑さうに見える、色の變つた黒縮緬の綿入羽織を引掛けた、頗る窶れの見える細面の年齢三十斗りと思はるゝ丸髷で、今しも漸く乳房を放し、すや〳〵と眠りに就いたらしい嬰兒を、遠慮のない中と見えて胸押し擴げた儘、靜に膝の上に抱へ乍ら、何んとなく憂に曇る面を、自然と俯向勝ちにして居る樣子だ。

『でもお前なんではないか』と、老人は其しよぼ〳〵した眼を急しさうに瞬き乍ら、

「二十幾里と云へば大した道程、可く獨りで遣つてお在だつたね。」
丸髷の婦人は其俯向勝ちの面を一寸上げたが
「だつておッ母さん、汽車では三時間斗りしか掛りませんからね、なんの造作もないのでございますよ。」
「否、そりやね、汽車だから早くも來られましようが、左に右お前そんな乳呑子を抱へてさ、假令汽車にもせい可く獨りでお在だつたよ。」
老母は其打悄れた婦人の頭をつく〴〵眺めて、
「幹雄さんだつて女一人、しかも乳呑子を抱へて居るものを、可く一人で出しなすつたものだと、私は第一それが不思議でなりません。お前汽車で來れば早いと言條、途中で間違ひでも起つたら何うする心算だつたらうしかしまあねエ、何事もなくて久振りお前の顔も見られて、私も全く安心しましたよ。」
この詞を熱と聽いて居た婦人は、心中有繋に面白からぬ處のあると見え、母子の中とて直ぐに愚痴めいた調子になつた。
「それはおッ母さん宅だつてもね、其位の事は萬々承知して居るのでございますが、貴方も御存じの、此頃の始末ですから、思ふやうにも參りません。何うせね、不運な性に生れ附いたのですから、乳呑み子を抱へて獨り旅もするのですよ。それもこれも因縁づくで、今になつちやあおッ母さん仕方が無いぢやありませんか。」
「あれ、お前直ぐと然う惡く取つてお終ひだから仕樣が無い、私は然う云ふ心算で云つたのでは無いよ。怒つてお終ひぢやあ何も彼も話が出來無いね。」
老母ははら〳〵とした樣子で、我子の顔を下から伺ひ、
「久し振りで逢ひ早々、何もお互ひに角突合ふにも當ら無いわね。私は唯お前の身の上が氣掛りで氣掛りでな

りませんから、ツイ這麼事も云度くなるのさ、氣に障つたら堪忍おし、ねエ、私も一寸言樣が拙かつたね。」
「何もおツ母さん氣に障る障らぬと云ふ事もございませんが、全く不運だから不運だと申しましたので、オホヽ、那樣に有仰る事も無いぢやありませんか。」
「それはまア然うだがね、お前の氣性だから落目になつて、いよ〳〵負けん氣の突走るのも無理もないよ。本統に人間の運と云ふものも解ら無いものさね。まア〳〵然う思つたら物は諦めのつくやうなもの、さて齢の加減か然う計りも思れん事がありますよ。幹雄さんだつて腕の無い人ではあるまいし、永く草深い田舍に引込んで居ずともさ、此方に出た處で幾らも仕事はありさうなものだと思ふがね。猶且あの人も負けん氣な損な性分で、自分で自分を苦しめてお在なのだね。それはあの人は男の事だから、それで腹の中で辛棒も出來るだらうが、日頃なら何かにつけて負けん氣のお前が、さぞ悔しい事だらけだらうと思つてね、私は全くそれが苦勞さ。何かえ彼地ぢやあ猶且何も爲無いで、筆斗り持つてお在なのかえ。」
「此節では四五人村の若衆が集りますので、英語を敎へて居るのでございます。」
「フム、ぢやア何も月給取りをなさるのぢやあ無いね。それぢやア成程苦しいだらうね。尠しはお前と云ひ、那樣可愛い者が出來たからには、自分の負惜みも可い加減に廢しになすつて、なんとか月給取りにでもなんなすつたら甚麼ものかね。」
「おツ母さん、幹雄にそれが出來るやうでございましたら、わざ〳〵草深い田舍にも引込んでは居りませんよ出來る腕はあつてもそれを遣ら無いのがあの人の病ですからね、私はもう那樣事は、所詮徒爾だと諦めて居るのでございますよ。」
老母はつく〴〵眉を寄せて、苦い口附をした樣子であつたが、投げ出す樣な調子になつて。

「然うだらうね、不相變と見えるね。それぢやお前の苦勞もよく〳〵だ。實の事を云へば私だつてね、然うして段々取る齢ではあるし、成る事ならばお前方の方にも折々行つて、居たいのさ、それと云ふが、宅の嫁も氣性は、惡い方では無いやうだがね、何分それ、里の方があんなに全盛なものだから、つい〳〵折々それが鼻に出ますのさ、妾は何も氣には爲無いが、せめてお前達の宅が近くにあつて、折々泊りがけに出掛けて氣を脱くやうにでもしたら、滿更ら今のやうに窮屈な事もあるまいと思つてね、いろ〳〵それは齢の爲か、時々愚痴の出る度に、お前達の今些し樂な生活になつたらと、それ計りを思ひ出すのさ。私は何も樂々と榮耀が爲度いと云ふのでは無いがね、日頃からお前が口癖に云つてくれた、おッ母さん今に私共が引取つてお世話しますと云つてくれた、あの事を諦めながら當にしてね、それ〳〵は心細くなるのだよ。」

「ぢやアなんですか、姉さんは那樣に貴方に酷く當るの。」

「否、當りが酷いと云ふのではないがね、唯もう何うも、私とは性が合んのだね。」

二人は胴の中に不思顔を見合して、ホット深く溜息を吐いたのである。

稍あつて老母は、涙にづまつた鼻を手で抑へ乍ら、

「しかしまあ愚痴は云ふやうなもの丶、昇の會社で幅の利くのも、お雪の里のお父さんが、あんなに社長になつてお在だと云ふのだから、少々の事は私も耐へなければなら無いのさ。唯其中でも時折にね、私の胸に据へ兼ねる事があると云ふのは、お前なり、お霜なりの片附いた先が、皆不運なものだからね、それを左や右裏の方で云はれるのが一番つらいのさ。其時はもうお前にも迷惑だらうが、構はず田舎へでも押掛けて行うかと思ふ事があつてね、あれは何時だッけ、一度お前に手紙を出した事があつたね。」

「慥去年の事でございました。」

『あゝ、然う〳〵、去年の暮だつたね。あの時お前、お霜の縁附いた先で大變な事が持上つて、その尻を此方に持込むやうになつたのさ、すると、昇はがみ〳〵言出す、お雪はお雪でぷり〳〵する、年寄りの心細さは甚麼だつたとお思ひだ、あゝもう居る空は全く無つたよ。』

『それは兄さんだつて酷うございますね。』

『何、あれ計りが酷いと云ふのでもあるまい、私の我儘もあるのだらうがね、隨分それは身を切られるやうにつらかつたのさ、其時斗りは、全く私はお前の處へ、飛出す斗りの覺悟で居ましたよ。』

熟と聽いて居た丸髷の夫人は、靜に此時顏を上げたが、眼には充滿の露を含んで

『それもこれも私共の不運から、おッ母さんに御苦勞を掛けるのですね、考へりや濟みませんです。』

『否、濟むも濟無いもありは爲無いわね、畢竟は私共の我儘さ、しかし係らねばならぬ宅は針の筵に座つて居るようで、それで係り度いと思ふお前達の不仕合だと云ふのも、なんと云ふ双方の因果なのかね。何事も諦めるより外にやア仕方はあるまいさ。』

折から寂然して玄關の口に、轟亘る車の響、今迄物音一ッ爲無つた屋の內の、俄にさゞめき出して、衣摺れの音さへ手に取るやうに、この一室に聽へたのである。

『オヤ「還つたらしいよ。』と、老母は驚きの眉を昂げて、身を起しかけると。

『姉さんですか。』と、此方の婦人も不思眉を寄せて、言ふべからざる不快の色を其面に浮べたのであつた。

『今日はお見花だと云つてね、夫婦連で出掛けたのだから、未だ還ら無い心算で居たが……』と、老母は靜に立上つて、

『一寸お前も出迎に出ると可いね。』

『然うですね……。』と、丸髷の婦人は輕く言つたが、心の中には悔しい〳〵と思ふ念慮の、顯然其面に溢れたのである。

『おッ母さん』と、不意に出た聲音の聊か顫へて居たので、老母は驚いて振返へると、

『貴方は那樣に、何時も氣兼計り爲ていらしつたのですかね。』

はら〳〵と零る涙の、抱へた嬰兒にかゝつたものと見え、無心の夢の茲處に破れて、切られるやうな悲し氣な聲を張上げ、嬰兒はなんの遠慮も無く泣出したのである。

其二

丸山鈴子の父は、某省の官吏であつても、左迄裕福な方では無つたが、体面丈けは左に右立派に張り、殊に其子弟教育に就ては、自分が時世後れであつた丈けに、財を惜しまず意を注いで、成丈けの事は遣らして見たのであるから、爲めに一男二女とも其成績頗る優等、取別け兄妹中でも、鈴子は尤も勝れた方で、私立でこそあるが某女學校を卒業して、一時は春の海の如き希望を兩親に懷しめたのであつた。

しかし渠も亦夢のやうな希望を懷きつゝあつた折から、圖らずも戀の俘となつて、遂に知りつゝ我身を狹めるやうな始末となつた。それは其頃、父方の身寄りで三枝幹雄と云ふ法科大學に入學して居た若者の、鈴子の宅に寄宿して居たのであつたが、此男元來法理よりも文筆に耽ける癖のある處から、時の風潮に連れて一篇の小説を某新聞に投じたのがそも〳〵の名を出す始めとなつて、一頃は文壇に俄然盛名を賣る事となつたが、思ひきやこれが大に鈴子の心を動す次第となつたのである。

されば理想界を追ふに急なる二人が中は、忽ち萬事を急に實行したくなつて、感激に情を逞べて先事の由を母

に計ると、以ての外の驚き何はしかれ父に相談して見てからの事となつたが、父は昔氣質の一も二も無く不屈者の言下に、幹雄は家を追ひ、鈴子は深く閉込めの謹愼させられるやうな事になつた。でも此時は二人の熱度其頂點に達した場合であつたから、直ぐに二人に道ならぬ事とは知りつゝ、暫時遠く身を隱す事となつて、靜に時機を待ちつゝあつたが、不幸にして其中父はこの二人を許す事なく、突然死去する始末となつたので、二人は驚きと歎きの中に姿を顯はして、これ迄の罪を母に謝すると、有繫に母は女親丈けにさる場合折れる事も早く、兄の昇も納得の上、日頃願つた夢を、始めて晝間の實にして見るやうな理となつた。しかし其折は幹雄も戀の爲め我から身を狹くして、大學も中途退學『なんの筆さへ持てば』と自負して居た文壇の地位も、さる不名譽の次第柄で、作物よりも先づ何かしら蹴落しに迅速な批評界の爲め、八方の攻擊、どうする事もならずあはれ折角得た地位もめちや〳〵にされて、以後次第――に幹雄の了簡の變な方面に走るやうになると共に、なんと思つたか斷然文壇から退いて、都の生活も可厭！、草深い田舍に今は二人とも住むやうな始末となつたのである。

されど二人は猶此時も依然理想界の人間であつて、中々に都の繁雜なる生活よりも、幾ら草深き田園生活の增されるかを喜んで、明日は左も右、其日々々を蝶の羽よりも輕く思つて居た。

併しかゝる事の永く續くべき理もなく、女は早くも生活の苦を知ると共に、次第々々に田舍の單調な住居も面白くないやうになつて、折々夫の機嫌を伺つては、再び世の中に出るべく勸めて見たのであつたが、中々頑然として應ずる景色もなく、其度び毎に却て自分の弱い處を罵倒されて、所詮肯入れる樣子は無いのである。

されど近來幹雄も何に感じたか、久しく遠ざかつて居た文筆に親しむやうになつて、何時かは目に物見せてくれると、口癖のやうに云つて居た、一つの作物に取掛つたのであるが、其熱心に机に向つて神來の興味に乘ず

る時の活々とした顔附を見ると、有繋にお鈴も其趣味をより多く解する丈けに、強いてこの興味をそぐべく都會の煩雜な生活と鬪はせる事の非を知つて、つい〳〵二度訴へる愚痴も一度となり、夫のいよ〳〵以前の樣に机に親しむ事の繁くなるにつれ、增々お鈴も其生活の愚痴を云は無くなつたのである。とは云ふもの依然女丈け、折に觸れては心の中であれを、これをの生活慾が、この夫の趣味慾を害せぬ限り、燃んにそれと鬪ひつゝあつたのである。

別けて去年一子を設けて以來は唯この儘に無意義な生活をして進む事の、目下の苦よりも將來に於て心細く、さりとて飽迄夫の趣味慾については嘴を入れたくなく、每日思案に暮れての果が、とう〳〵面目ない乍ら萬事を母親に相談する心算で三年越しで久々我家の敷居を跨いだのであつた。

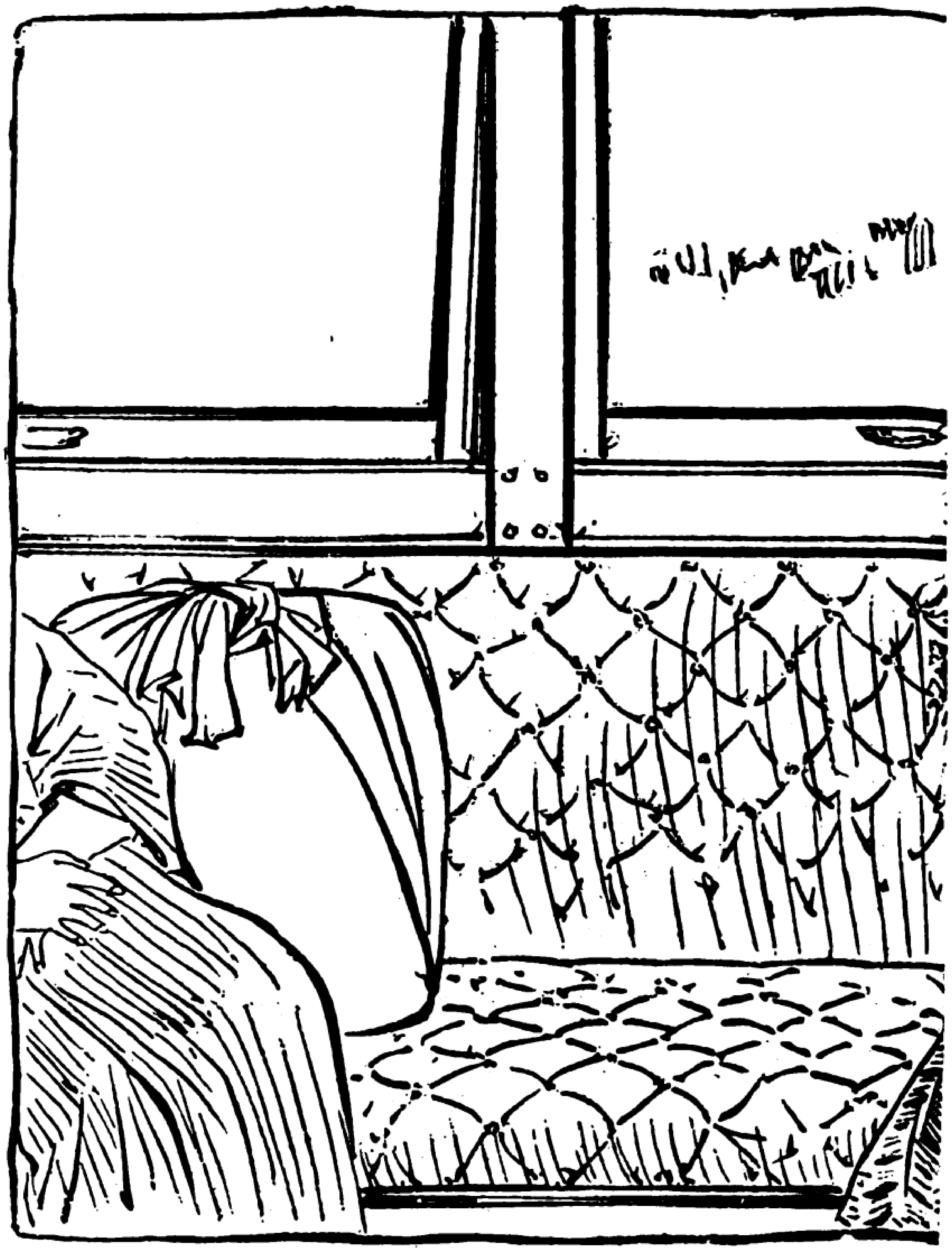


然るに圖らずも愚痴を述べんとした自分よりも却て母から無理からぬ愚痴を聞いて、元來負けん氣の女丈けに

先づ其兄の家庭の頗る面白からぬに尠なからず憤慨したのであつた。

其　三

T、驛からは汽車の乘替へになつて、鈴子の乘込んだ列車は乘客至つて尠なくM驛からは廣い列車内に、僅か



三人の乘客となつたが、胸に憂のある身は却つてそれの嬉しく、獨り乳呑子を抱へて、窓の下に深き思ひに耽つたのであつた。

汽車は今兩側とも菜の花畑の、廣濶とした野を西北に走りつゝあるので、恐らく春の長閑さは四面の霞と共に、人をして不思煩雜な念慮から一時遠ざからしめるのであるが、鈴子は決してこの穏やかな景色に目をだもくれず、依然首俛倒れた儘平常から胸に繰返へす『あれやこれや』の鬪ひに餘念も無いのである。

有繋に渠も、普通一般の女とは其閲歴を異にして居るので、思ふに任せぬ事位は深く承知して居た。所詮自分

等の運命が決して世に云ふ幸福と云ふ場合に立至らぬ事も自覺して居た。しかし斯くも物事意の如くならなからうとは、夢更ら思ひも染め無つたのである。

嗟！自分は若氣の一時の情に任して、父にも逆き、母をも捨てゝ、世は唯だ自分の目的さへ達しられゝば、それで可いと思つた折もあつたのであるが、世の中の波と風とは、有繋に惡い方に斗り吹付けもせず、流しもやらず、今日此頃は別して獨りしか無い母の身の上の、如何にと氣掛りになつてならぬ處へ、久し振りで逢つて見れば實に豫想外の始末で、苦勞の上に又一つの苦勞を脊負つて、面白からぬ草深い假の宿りに歸へる身の、さてこの後をなんとしたものであらうか。

われ程分別のあつた兄も、義姉の勢力には卷れたものと見える、其義姉も亦思ひ掛けない、不知不識の間に全く兄を卷く氣になつたものと見える、此間に老いたる身を措く母の心は、成程他人にするよりも一倍の氣象を遠慮、氣苦勞の數々は並大体な事ではなからう。

現に昨日も兄夫婦のお花見還へりとかで、一杯機嫌の調子もあつたであらうが、私の如何に今のつまらぬ境界にあるとは云へ、あゝ迄母への當擦りを言はずともの事だと思ふ。あの狀で行けば母の愚痴も萬更ら老の爲斗りとも思れぬ。

聞えぬは兄の心だ、胸に据へ兼ねるのは義姉の仕打だ、唯々いぢらしいのは母の身の上である。

嗟さてなんとして斯くまで自分の一家の家庭は、面白からぬ雲に閉ぢられて居るのであるか。

今は自分の勝手でもあらうが、歸り早々夫にも計つて、是非〳〵草深い田舎の生活は、夫に廢めて貰はねばならぬ。豫てより其事に就ては、幾度勸めもし、又願ひもし、一つには夫の身の上の爲めとも思つて、說いて見たのではあつたけれど、其度每に機嫌を損じる斗りで、自分もつい〳〵云ふべき機會を失つて、今日迄も過し

て來たのである。しかし今は自分も意を決して、三方四方の爲めに夫に計つて、是非ともあらぬ方へ曲つた夫の魂性を取直して貰はなければなるまい。

一家の事情を知らぬ迄は左も右も、恁う母の苦境を知つてはなんとしてか。分別を爲變へさせねばならぬ。今日此頃のひし〳〵と以前の事が胸に當る自分は、せめても老先永く無い母の身を安らかに、一日なりとも伸びりと長閑に生活さしたいものである。

それには是非とも、自分等夫婦が引取る外に手は無い。しかも老の身も草深い地に連行く事は、云ふべくして行れる事でもなく、是非〳〵夫に奮發の心を起さし、そして浮世の生活と鬪ふべく、再び帝都の地を踏せなければならぬ。

今は決して我身の上計りでは無いのだ。

夫へも此事を話したならば、心の取直し方が、必ず〳〵出來るに相違あるまい。

三方四方、引いては自分の身の上にも、又我子の身の上にもなる事、よもや日頃の一徹なやうな言を云つて、唯一も二もなく罵倒されるやうな事もあるまい……。

嘻しかし、折角この節自分から興に乘じて、熱心事に當つて居る夫の耳へ、かゝる始末を語る事の如何にも心苦しい。

なんとして斯くまで一家の狀の面白からぬ方へ計り引附けられる事であるか……、それもこれも若い血の氣に誘れた自分の罪が……、否、決して然う斗りではないであらう……。

恰度此時滊車は停つて、何時の間に幾驛過ぎたか、早や自分の降るべき停車場に着いたのであつた。

鈴子は吃驚、夢から覺めたやうな顏附で、急ぎ列車の外へ降り立つた。

其四

しと〳〵と降る春の雨、時候後れの向山の櫻も、早や大分に色着いた樣子で、机上に疲れた眼を窓から放ては、有繋に茲處も捨て難い眺めである。

三枝幹雄は、今しも鈴子の汲んで出した茶を一口飲んで、除に窓越しに放つた眼を鈴子の方へ轉じ乍ら、如何にも味の無い調子で口を開いた。

『では何かね、お前の何時もの愚痴病が出たので、那樣事を云ふのぢやあ無いね。』

『なんの貴方。』と、鈴子は慌しく押へるやうにして、夫の顏を見上げたが、

『私が何うの彼うのと申ますのではございませんとも、唯母の身の上がいぢらしいですから這麼申難い事も申ますのです。』

『フム、お母さんに久振りで逢つて、私の意苦地の無い講釋でも聽いて來たのかね。』

『われ、然う惡くお聽きなすつては困りますね。』

『だつて大略止めは其處等なのだらう。永くつまらない草深い土地に生活して居るのが、何も見得でも無らうと云ふ位の、畢竟は御說法であつたのだらう。』

『貴方は直ぐと然う有仰いますから、里の方の事情も話せ無くなりますが、全く兄の家庭も昔のやうぢやあでさいませんからね。母もよく〳〵で私に愚痴も申しましたのでございます。』

『で、お母さんは何うしろと被仰るのだね。』

『何うは先刻も一寸御話し申ましたやうに、なる事なら貴方に願つて、東京の方へ出て頂けば、折々私の方

にもお母さんが參られるやうになりますので、至極都合よくもなるし、一つには兄の家庭の那樣に面白く無う空氣の洗ひ替へも出來やうかと申ますので、母も這麼事を貴方のお耳に入れやうと云ふには、よく〳〵なので御座いますよ。」

「成程な。」と、幹雄は冷然其髯を捻つて、妻の面を上から瞰下すのであつた。

「貴方は此節何うなさいましたか、何かに就けて私の申ます事を、冷淡に御聽きですから放心御話も出來ませんが、まあ私の身にもなつて御覽なさいまし。假令自分勝手な事計り申して居りました處が、母もあゝして段々と取る齡です、なんとかして遣ら無けねば可哀さうぢやアありませんか。全く私は御無理な御願ひか知りませんが、今度計りは私の申す事も肯いて頂かなければなりません。」

鈴子は不思其聲を顫はせ、膝を進めて、

「貴方だつて又然うぢやアございませんか、母一人位引取つて養ふ事に就て、何も御異存のあらう筈は無いと思ひますがね。何う覺召て被在るのです。」

渠は早や眼を霑ませて、昨日見て來た久し振で逢つた母の狀を、頻りと獨り胸に思ひ浮べたのである。

「昔の事と申ますると、又御叱りになるかも知れませんが、あゝして心配を掛けた一人の母ですから、貴方の御考へ一ツで何うかして遣り度いと思ふのでございます。何も貴方の意地計りを御徹しになるのが、貴方の御本意でも無いのでございましやう。」

「フム、それは無論私の意地を徹して迄も、おッ母さんに關はんと云ふ、那樣薄情な精神は決して持つて居りはせんよ。」

「それぢやアなんとか御分別を御爲變へなすつて、今一度世間に乘出す御考へをなすつて下さいまし。然うす

りやア三方四方、圓く快く生活せる樣になるだらうと思ふのでございます。」
天井を仰いで長い息を吐いた夫は、依然氣の乘らぬ調子で語も自然と力無く、
「しかしそれは隨分と考へ物だね。」
「何が貴方、考へものです。」
鈴子は屹と夫の顏を見上げた。
「否、まあ、お前の心持は無理からん事で、私の分別を爲變へる爲變へんは左も右もだがな、然うお前の思ひ通りにして、三方四方果して圓く行くか何うだか、それが私は考へものだと云ふのさ。」
「何も御考へになる迄も無いぢやアございませんか、私も嬉しければ、母も喜びましやう、貴方だつて御心地が可ければ、兄樣夫婦だつて、可い邪魔拂ひをした了簡でホットなさるでしやう。ですから三方四方屹度圓く行くに違ひありませんわね。」
「それ、それだからお前は不可、私の考へ物だと云ふのは其處の事だ。」
夫は始めて元氣ある調子になつて、恰も思ち設けたる或る機會を得たかの如くに、尠し口早に妻の言を遮つて、
「こりやア、世間に反いて居る、今の地位から私が言ふては可笑しくなるが、那樣事を遣つて圓滿に行くと思うて居るお前の了簡が既に卑見だ。
ぢやア假りにお前の言通りにして、私の處へおッ母さんを引取るとした處で、義兄さん夫婦が甚麼感情を懷きなさるとお前は思ふ、お前の負惜しみの強い肚では、なんの引取つて見せるわ、それ程御邪魔なものなら此方で見事世話をして見せますと云つたやうな了簡だらうが、義兄夫婦がそれで可いわで、決して濟しても居なさ

るまいから、必ず何時々々までも睨合の狀になつて、面白くないづくめになるに相違無いよ。殊に私は平常から自分で言つて措く通り、我儘に世間を渡るやうに出來て居る躰軀だからね、若し不幸にしてそれが又お母さんの氣に入らぬ樣な事にでもなると、物は增々面白からん始末になつて、却つて今の境遇よりもつと、拙い境遇に、お母さんを置かなければならぬ塲合に立至りは爲んかと、頗る杞憂に耐へ無いのだ。恐らく受合、双方面白からん事に立至るだらうよ。

成程、お前の話でお母さんの御氣の毒な事も充分可く承知して居る、承知して居乍ら這麼事を云つては、お前も定めて薄情のやうに思ふだらうが、私だつて未だ、血もあれば淚もあるのだ。なあに、いざとなりやア世間にも立うさ、お母さんも兄さんの手から無理から取らうさ。しかし未だ破れたと云ふでも無い兄さんの家庭を無理から破つて、私の手におッ母さんを養ふと云ふのは不賛成だ。

所詮お母さんも女にお產れなすつたのが損なので、御氣の毒ぢやアあるが暫時時節を御待ちになる外はなからう。これが義姉さんの仕打が全然惡いと云ふのなら左も右。お前も女なりや、お母さんも矢張り女だ、それで女の姉さんを中に狹んで、お互ひ僻見のしつくらをやつて居るのだ。否、必ず僻見だ、女は皆何時も那樣塲合那樣時に、那樣僻見を持つ事に定つて居るよ。

お前はお母さんの有仰つた事を尤もだと聞いたのだ、私は又お前の其話を尤もだと聞うさ。しかし又お前なり私なりが聞かぬ義姉の話を、誰れか他所で尤もに聞く人もあるだらう。然うすりやアお前の負惜みな耳へ、お母さんの僻見な愚痴の這入つたのを、知らずに私は負惜しみな、椽の下の力持ちをせんけりやアならんようになる。

第一それぢやア、義兄さんに對して濟ん話ぢやア無いかね。

可くわる奴で、嫁と姑、甚麼に圓滿に行うと云つても、得て多少の衝突の出來たがるものだ、それをお前が他所には無い樣に思ふのが、其處が親身の有難い處ぢやアあるが。負惜しみの強いお前がそれを強く憤慨するのが、旣に旣にお前の姑となる時代に、嫁との衝突を胸の中に描いて居るからなのだ。爲方は無い、暫くなるやうな成行を見るの外は無らう。お母さんだつて先祖からの御位牌の掃除を、他人に斗り任せて置く考へも無らうから、又其中にやア波の穩やかな日も出來ようし、風の凪ぐ時も出來てくるだらう、それと定りやア、別段何も、私がわざ〳〵おッ母さんを引取る爲めに、可厭な生活を遂げなくとも濟むだらうぢやア無いか。

それも不可、これも不可、いよ〳〵兄さんの家庭の破れとなつた時にやア。失禮ぢやアあるが其時こそは、食ふものを食はずとも立派にお母さんの御望み通り引取つて、御望み通りな事を爲て差上げる心算だ。それにやア何も、田舍にお越しを願つた處で御嫌ひになる理ぢやア無し、玆處に居ても出來る事ぢやア無いかね。這麼事を云ふと、お前は定めて私の世間に僻見を持つて、恁うして片意地を立て、居る事を不思議にも思ひ、且つ笑ひも爲なさるだらうが、私は其片意地を立通したお蔭で以つて、お前の尤もな話に直ぐ尤もだと贊成爲無い程、夫れ丈け肚が今日此頃は出來て來たのだ。だから何事も唯時と思つて居無けりやア、お前の負惜しみは私の負惜みと、いよ〳〵相去る事が遠くなるね。

滔々として辯じ立てる夫の顏を、呆れた狀で熟と眺めて居た鈴子は、此時漸く我に返つたが、

『それぢやア貴方は、這麼生活を何時迄も續ける思召で被在ますか。』

幹雄は事も無げに、

『左樣、先づ續くならば續く迄續けよう……、イヤ、恐らく死ぬる迄續けるだらうよ。』

『あの、私が這麼事を御話し申ましても、別段御悔しいとも思つて被在らずに……。』

『無論悔しいと思ふ理が無いから、私は何處までもこれで滿足だ。』

斯く言放つて獨り幹雄は、窓外霏々たる雨中の景に再び眼を轉じ乍ら、高らかに心地可く笑ふのであつた。

あはれこの夫と、この母を持つた鈴子は、夫の語る女として、夫の話の時と云ふものを、靜かに待たねばならぬであらう。

彼等夫婦は、其後再び都會の地を踏無つたのである。

（完）



小説 二重の名畫

高階柳蔭

上

世間で、優しい、慈悲深い、良い人は、誰であらうと云へば、何人も畫家のシエンフエルド氏を指すのに、異議を唱へる人はないでしよう、斯界の大家で、ことに神畫が得意なので、世の尊敬を受けて居ました。

この人の住居は、町中で立派なものゝ一つに、數へられて居ましたが、また貧乏人や、難澁ものが、救助を受ける、大切の〳〵書入れ場所でありました。

不幸なことには、その頃、國内で、戰爭がはじまりました、世の中は、非常に騷々しく、不景氣になりましたので、畫の揮毫なんかを賴む人はなくなりました。

シエンフエルド氏は、月々の收入がなくなつて、坐食の姿になりましたが、まだ〳〵貯へがありましたので少しも驚かず、日々精を出して、畫の製作にかゝつて、

『戰爭だつて、さう何時までも、つゞくものではない、また平和な世の中になつて、私の畫の賣れる時もくるさ今のうちに、畫を書溜てをけば、これも立派な財産になるのさ』と、云つて、妻子を慰めて居ました。

併し此人は世の中の靜かになるを待たず、死ました、戰爭と惡疫、つきものゝ様に極つて居ますが、この地方でも、夏のはじめから、惡い熱病が流行つて、此人もそれに罹つたのでした。妻や、姉妹兩人の娘が、手を盡した、介抱の甲斐もなく、病は重るばかりでありました。

シエンフエルドも、今度はとてもいけぬと覺悟をきめて、或朝妻子に對つて、
『お前達、私が死んでも、もう決して、歎いて呉れるな、永い間の不景氣と病氣とで、有るものも無なして了ひ、財産とて殘すものは何んにも無いが、神樣は今まで、我等を惠み給ふ樣に、此後とても、何時も我等を惠み給ふから、私が死んでも、お前たち寡婦や孤兒を、憐み給はぬことはない、私は之を深く信仰するので死んでも決して、悲しくない、お前たちも、これから益々神樣を信ずると、多くのお金や、財産を持つてるより、いくら幸福だか知れやしない』と、云つて、重き枕をあげて、暫時神に默禱して居ましたが、やがて、
『さらは、神樣のところで、また會ふ』
と云ふ言葉を最後に、妻子の手を握つて、安らかに此世を去りました。
それから、野邊のおくりを濟まして、喪に籠つて居ましたが、跡の始末をせねばなりませんので、段々調べて見ましたら、相應にあつた、財産も、永い間の坐食で、減して了ひ、それに、此町も、一旦敵の侵入に會ましたので、目ぼしい物は取られ、他に貸した金は取れず、借りた方からは、催促されると云ふ始末で、夫が豫て書きためて置いた、畫を賣りに出しましたが、思ふ十分の一にも賣れず、據なく住み馴た家を渡して、立ち退くことになりました。
差引勘定をしましたら、手に殘りましたは、僅少なお金でしたが、他人に一文半錢も損をさせなかつたを、せめてもの心やりとして、親子三人は、少し離れた横町で、小さな家を借りて移りました。
寡婦はヘレナと云ひまして、女の業には、何知らぬこともなく、わけて縫針の道は、勝れて上手でしたから、余所の仕事をして、節約しく親子水入らずで、暮して居ました、娘たちも、母を見習ふて、手助をして幾許かの稼をして居ました。

母子は、終日縫臺に對つて、裁縫をして居ましたが、折々談のうちに、ヘレナは亡き夫のことを云ひ出し、夫の畫いた畫を、せめて一枚でも殘して置きたかつた、と悔んで居ました。

母子は裁縫で忙しいので、滅多に外に出ることはなく、日曜日に寺院に參詣するばかりでした、その寺院も近いところに幾許も有のですが、わざ〳〵遠い町外れまで行きました、何故なれば、その寺院には、シエンフエルドが丹精を籠めて、畫いた額があるので。

その畫は、救世主の埋葬を畫いてゐるので、耶蘇の屍体は、もう穴の中へおいてありまして、松明の紅い光は、穴の中や、蒼白い耶蘇の顏を照して居ます、泣きはらした眼で、天を仰いで居るマリヤ、悲しさうな面をして居るヨハンナが、傍に立つて居て、少し離れたところに、アリマチアのヨゼフと、ニコデムスが、憂に沈んだ顏付で、耶蘇を見て居る圖でありました。

松明の光は、天の輝の樣で、救世主の面には、死の痛苦は毫もなく、何處となく笑を含んで居る工合は、實に何とも云ふに云はれぬ、良い出來でヘレナは毎時も、此畫を見て、

『お父さんも、この通り、痛苦もなく、神樣のところで、きつと、樂んで、笑つて入らつしやるに違ひない、私は、この畫を見て居ると、悲しい、可怖しいと云ふ、かんがへよりは、うれしい、ありがたい氣がして來る』と、云つて、日曜にはきつと此處へ來て、此畫を見るのを樂みにして居ました。

冬もすぎて、春になりましたので、ヘレナは一日、娘に對つて、

『春になつたのに、お前たちの衣服が、大分着古して、汚くなつたから、一とつ何か、見てお出で、柄の良い、似合さうなのを、見たてゝ、布でかつて來て、而して自分で、裁縫て見れば良い』と、お金を三圓出して、與りました、この三圓でも、今の母子には、中々の大金で、容易には、得られないのでしようが、さて、親の

慈悲は、有難いものであります。

年ごろの娘心は、何處も仝じことで、母親にさう云はれて、たとへ、どんなものでも、着物が一枚、出來ると云ふものですから、姉妹は、嬉くつて堪りません、どんな色にしよう、どんな柄にしよう、とその日は、相談に暮れて了ひまして、次の日、早くから、姉妹は、連れ立つて、買物に出かけました。

姉は、ロッテーと云ッて、十八才、妹は、一ッ下で、ルイゼーと云ひました。

途中、一軒の大きな家の前へ、來ましたが、そこに、大きな紙が張つてあつて、それに今日此家で、繪畫の競賣があるよし、記してありました。

ロッテーは、それを見つけましたが、さすがは、畫家の娘だけで、畫が好でしたから、ルイゼーに

『一寸、這入つて見よう、どうせ、買うことは、出來ないけれど、まあ、見るだけでも、良いやね』と、云ふので、ルイゼーも一所に、家の中へ這入つて行きました。

廣い坐敷の中には、多勢人が來て居まして、みんな立派な紳士や、着かざつた婦人ばかりでした。姉妹は、入口のそばで、人の後ろに立つて居て、なるたけ、人に見られない樣にして居ました。

競賣人は、今一とつの額を手にして、

競賣『サア、田舍の景色、金椽がついて、畫工は、シエンフエルドサア幾許』

客『壹圓五十錢』

競賣『サア、一圓五十錢、もつとないか』よく肥へた、一人の紳士は

紳士『フム、シエンフエルド、いつもに似合ぬ、粗忽な畫きかたゞ、併し筆は慥に、それにちがひない、エヽ、一圓六十錢、』

一圓六十錢、十錢上つた」ロッテーは、父の筆になつた畫を見て、自分の着物のこと抔は、忘れて了ひまして、恥しさうに、慄へた聲で

「一圓七十錢」と、叫びました。

多くの人は、何處から、この優しい聲が出たかと思ひまして、みんな云ひ合した樣に、振り向ひて見ました、聲の主は、汚ひ服裝をした、年の若い娘でしたので、驚ひて、何か密々と云つて居ました、ロッテーは、多くの人に顏を見られたものですから、赤くなつて下をむきました。肥つた紳士は、又、「一圓七十五錢」と呼びました。ロッテーは、すぐに、



漸く聞へる位な少さな聲で、「二圓」と、競り上げました。婦人のうちの一人は、ロッテーを見識つて居たものですから、隣の人に對つて、

「あの娘は、シエンフエルドの娘ですよ、お父さんの畫

いたものですから、恥しひのも忘れて、あんなにして居るんですがとうか、落してやりたいものですね」

「さうですか、可愛さうに」と談して居ました。其中に競賣人は、他に高直を求めて居ましたが、それより高直が出ませんで



したので、ロッテーの直段に落しました。

ロッテーは、競賣人の前へ出て、着物を買ふ、三圓の内で、二圓出して、額を受け取りました肥つた紳士は、ロッテーに對つて、

「良い買物をしなすつた、お前さんが、シエンフエルドの娘だと、聞いたから、私も競らなかつたが、私はもつと出す積だつた」と、云ひました、

額は餘り大きくないので、ロッテーは、それを持つて、ルイゼーと両人、大喜びで、呉服屋へ行くのは、止にして、急いで家へ歸へつて來ました。家へ這入ると、ルイゼーは

『お母さん、只いま、お母さんにいゝお土產があるの、お母さんが、平素から、欲しい〳〵と、被仰つて居たものを、今日はやつと見付けて、買つて來たの、何んだかあてゝ御覽なさい、お母さんの、きつとお喜びなさるものです』

『何んだねー、この娘は、お母さんのよろこぶお土產つて、姉さんは、どんな布を買つて來たの、見せて御覽』

ロッテーは、そこへ來て、只今『お母さん、今日は、嬉くつて、うれしくつて、堪りませんわ、やつとのこと、でお父さんの畫を買つて來ました』と、額を母に見せました。

ヘレナは、それを手にとつて、暫時だまつて、見て居ましたが、思はず、喜びの涙を、はら〳〵と溢て、

『さうだ、お父さんのお畫きなさつたものだ、何時お書なすつたか、私は覺えては居ないが、この筆はたしかに、お父さんのに違ひない、良い景色だこと、太陽がいま、沈んだばかりで、岡の森のところに、夕燒がして居て、藁ぶきの小屋から、淡い烟がたつて、而して、遠い村の寺の塔が、入り日の、名殘の光を浴びて居るアゝ、實に良い景色だ、だが、併し此畫はどうしたの』

ロッテーは、今日の一部始終を、はなしまして『私ら兩人は、着物なんかは、要りません、これで結構ですから、その代り、やつとの思ひで、お父さんのお畫なすつた、畫が手に入りましたから、これを掛けて、ながめて居れば、これほど良い、家の飾はありやしません』

ルイゼーも、着物の買へないのを、毫しも苦にせず、畫を得たのを喜んで居ましたから、ヘレナは、兩人の娘が、自分のことを捨てゝおいて母の望を叶た、孝心のふかひのに感じて、

『折角お前たちが、買つて來て吳たのだから、私は有難く貰ておこう』と、早速室の壁にかけて、それを詠めて、よろこんで居ました。

親子三人には、この一枚の額が、餘の額何枚よりも大切なので、裁縫に倦んだ時には、此畫をながめて、氣力を恢復し、外へ出て、歸へつて來ると、この額のもとに集まつて、亡き人の話をしたりして、慰んで居ました。

この畫が、のちに此一家に、大きな幸を、與へたことは、母子三人は存じませんでした。

下

ヘレナ親子は、仕事に忙しい外、無事に日をおくつて居ました、其年もくれて、翌る年の春になりました、近い田舍に、ヘレナのおさな友達で、官吏の寡婦がありましたが、永い病氣で、近頃はだん／＼重つて來ましたので、息のあるうちに、一度あつて、いろ／＼談がしたいから、是非來て貰ゐたいと云ふ、使がまゐりました、

ヘレナは使を受けて、舊ひ友達でもあり、何が言ひ殘すことが、あるのだらうと思ひましたから、支度も匆匆にして、次の日朝早くたちました

姉妹は町はずれまで、母を送くつて行きました、ヘレナは別れる時に、お金をロッチーに渡しまして、

「留守中これで、生活をして、よく留守番をして居ておくれ、久々で會ふのだし、それにいろ／＼話も、あるのだらうから、二三日はかゝるから、留守をよく賴むよ、今度のは、悲しひところへ行くのだから、せめて、家へ歸へつて、お前たちと、愉快にして、悲みを紛れる樣にして、おくれ而して朝夕に、お祈をするときにお友達の苦みを、和らげるよう、忘れないようにしておくれ」と、何かの事に心づけて、右と左りに別れました、

姉妹は、家に歸へりまして、そこらを片付けながら、ロッテーは、妹に對つて、

「ルイさん、冬中の煤がたまつて、お坐敷が汚れて居るから、お母さんのお留守の間に、大掃除をしやうじやないか、この頃は、暖で、お天氣もいゝから、窓掛も洗ひ、壁も塗りかへたりして、奇麗にしておいたら、お母さんが歸へつて御出なすつて、何んなに、お喜びになるかも、知れないね」

「姉さん、良いことに氣が付てね、さあ、すぐ、はじめましようか」と、ルイゼーは、まめ〳〵しく、姉に手つだつて、泥工をたのんで來たり、乾ものをしたり、洗濯をしたりして、此日と翌日とで、すつかり掃除を濟しました。その次の日の朝に、ロッテーは、

「お座敷はすつかり、奇麗になつたから、私は今日、市場へ行つて、買物をして來ましよう、お母さんは、今日あたり、きつと、お歸りになるから、何か晩の御馳走の支度をして、おきましよう」

「そうですね、それなら、私はお留守をして居ましよう」と、云ふので、ロッテーは、手籠をさげて、市場へ行きました。

暫時して、ロッテーは買物をして、歸へつて來ますと、ルイゼーは室の入口に泣いて居ました。

「ルイさん、何うしたの」と、尋ねますと、ルイゼーは、歔欷ながら。

「姉さん、私し、大變なことをしてよ、私し、つい、お父さんの額を、大變なことをして了つてよ、まあ、見て下さい、どうかならないかしら」ロッテーは、おろしてある、額を見て、吃驚しました。

「姉さん、あんまり、煤で、汚れてたもんだから、しやぼんで、洗つたの、而したら、畫具がはげて了つて、こんなに汚くなつて了つた、姉さん、とうしたら、いゝでしよう」

ロッテーも、何うして好やら、工夫がつかず、畫具がはげて、滅茶〳〵になつた、畫を抱いて、泣だしまし

たが、
「ルイさん、飛んでもないことが出來たね、だが、上手な畫師に賴んで、直てもらつたら、ちつとは、よくなるだらうと」、妹を慰めて、共々、思案にくれて居ました
ところへ、母のヘレナは、歸へつて來ました、そこらが奇麗になつて居るのを見まして、非常によろこんで、
「よく留守をして居てくれた、大そう奇麗になつたぢやないか」と、云ひまして、姉妹が眼を泣きはらして居るのを見まして、不思議に思ひまして、
「どうかしたの、兩人とも泣いて居て」と、尋ねましたルイゼーは、泣きながら、
「お母さん、御免なさい、この畫を見て下さい、私が粗匆しまして、畫を奇麗にしやうと思つて、つい、こんなにして仕舞ました、どうか、ごめん下さい」と、云ひまして、母の足もとに、泣き伏しました。
ヘレナは、畫を見ますと、吃驚しまして、面が蒼くなりました、額をもつ手もふるえて來まして、
「サア〳〵、大變なことが出來ました、何うしたものかしらん」と、眼鏡を出して、傷の付たところを、じつと見て居ましたが、
「アヽ、畫具は、水畫具で、淡ひところだから、餘計はげたのだ、しかし」と、云ひまして、なほ、よく見て居ましたが日光のところへもつて行つて、
「オヤッ、畫具の下に、油畫の地が見へる、オッ、こゝに小指が畫てある、これは他の人が書いたのだ、何うしたものかしらん、どうせ、こう汚れたんだから、いつそ、すつかり洗つて見よう」と、云ひまして、海綿をとりまして、洗ひました。
洗つて行きますうちに、だん〳〵、手、腕、とあらはれて來て、神使の姿が、はつきり出て來ました、しか

もそれは、上手な人の筆らしくありました。

母は、疲勞ましたから、ロッテーが、代つて、洗ひました、やつとのことで、水畫具をすつかり、洗ひ落して了ひましたら、ひじように立派な油畫が現れました。

それは、神聖なる家族の圖でありまして、マリヤは耶蘇を、膝の上にのせて、パルメンの樹の下に坐つて居ます、足許には、美しひ花が咲ひて居て、そばの枝には奇麗な鳥がとまつて居ます、ヨゼフは籠を持つて、無花果の實を摘つて居ます、一人の神使は、乳の這入つて居る皿を、小兒に捧げて居ますし、モウ一人の神使は、合掌して、小兒の前に跪づいて居ります、

ヘレナは、つく〴〵、その畫を、ながめて居ましたが、

『これは、きつと、昔の名人が、かいた畫にちがひない、私がむかし、お父さんと、旅行をした時分に、いくらも、こういふ畫を見たが、これは、それらの中でも、きつと勝れたものにちがひない、實に立派な美術品だ、而して、この畫のかんがへも、神の兒が生れて、地から花が咲き、天の鳥は、恐怖を去つて、傍へ來て居る杯の、考へは、いづれ、名人の考へに相違ない、私は、これから、これを持つて、樞密議官のケルン子爵のところへ行つて、見てもらつてこよう、子爵はお父さんの、友人でもあり、美術には悉しい方だから、ルイゼー、そこの上衣を取つておくれ』と、ヘレナは忙しく、油畫をもつて、ケルン子爵の邸へ急いで行きました。

ヘレナは、子爵の邸へ行つて、取り次の者に、子爵に面會したいよしを申しました。

子爵は、舊友の寡婦が尋ねて來たよしを聞いて、早速面會しました。ヘレナから、すつかり其ことがらを聞ひて、油畫を一見しましたが、

「さうです、〱、お察しの通り、伊太利亞第一の名工の手になつた、畫です、大した、立派な出來です、シエンフエルド氏が、この上に、二重に水畫をかいた筈です、戰爭が始まるので、敵にとられると、いけないと思つたから、それで、普通の畫額のつもりに、亡友に書たのです、前の所有者は、澤山の畫のうちで、こればかりを大切にして、寶物にして居たのです、それだから亡友は、洗へばすぐ剝る樣に、上へ水彩畫をかいたのです〜而して誰にも云はなかつたのです、戰爭のすむ前に、亡友は世を去つたものだから、誰もこのことを知つて居るものはなし、この名畫は、百年も、千年も、おそらくは、終世、知れずに了つたでしよう併し神は、貴女や小兒に、大きな幸福を與へる爲めに、貴女の小供の手によつて、この寶を世に再び出したのです、こうしたら、如何です、早速このことを、廣告して、賣に出したら、きつと、名畫のことですから、高金を出して、買う人があるに違ないから、これを賣つて、今の困苦を脫れたらいゝでしよう、娘さんも、大きくなつて、これから金の要るときですから」

ヘレナは、子爵に對つて、

「併し、私の手には、極く廉價くはゐつたのですから、そんな高價なものを、自分の所有にして宜しう御座ゐますか」

「よろしいとも、この畫については、法律上、誰れも、苦情をもつて來ることはありません、この畫の所有者、亡友にかゝした人は、私も知つて居る人です、それは、この田舍に住んで居て、親戚も何んにも無い人で、非常な慈善家でした、その人が繪畫がすきで、自分にも解るので、良い畫を澤山もつて居ましたが、これが一番、良いのでした、その人も亡友に、一寸おくれて、死にましたが、あとで所藏のものを、此町へ持つて來て、賣つたので、この畫も、そのとき知らずに、一所に賣られて、而して、貴女の手に這入つたのです、

それですから、貴女は立派な所有者です、』

『さういふことで御座ゐますなら、恐れ入りますが、どうか、よろしうお願ひ申します』と、ヘレナは、子爵にたのみました、

『承知しました、亡友の家族のためですもの、早速新聞に廣告したら、すぐ望み人は、ありましよう』と、子爵は、快く承諾しました。

この書の不思議な發見は、それからそれへと傳はつて、町中で知らないものはありませんでした、はじめ、競賣をした人は、シユワルツと云ふ人でしたが、その人は、とうに死んで、あとを、その息子がついで居ますが、この評判を聞きつけまして、よくあることのように、ヘレナのところへ行つて、賣價の半分を呉れろと、云ひました、ヘレナは子爵から云はれて居ますから、きつぱり、それを斷りました、二代のシユワルツは、裁判所へ訴へましたが、正當の手續で、賣買を了つたものだから、今更、請求するとは出來ない、と判事に叱られましたので、若いシユワルツは、頭をかゝへて引き込で了ひました。

ケルン子爵の世話で、或る侯爵が、その名畫を讓り受けました、莫大な代價を拂つた上に、年々ヘレナに、數百圓の年金を與へることに極りました。

親子は、にはかに、富有な身になりました。兩人の娘も、立派に結婚が出來る樣になりました、ロッテーは、其後、手腕のゐる、彫金家と結婚をしました、ルイゼーも彫刻家と嫁許しましたが、兩人とも、シエンフエルド氏について、繪畫を學んだものでありました。

ヘレナのもつとも、よろこぶべきことは、兩人の聟が相談して、一軒の家を購ひました、その家は、シエンフエルド氏が住んで居つた家で、近頃また、賣に出たものですから、兩人が購ひもとめまして、ヘレナを引き

とつて、兩家族が一所に住居したのです
ヘレナは、新しひ、むかし馴染の家に這入つて、自分の室に入り、第一に眼についたのは、兩方の壁にかゝつてある、金縁の額でした、それを見まして、ヘレナは、手をうつてよろこびました。
ルイゼーの云ひますには、
「お母さん、私のそゝうで、お父さんの畫を汚しましてから、始終氣になつて、代りを欲い〳〵と、思つて、道具屋に賴んで置きましたので、やつと、このごろ、この二つを手に入れました」
この二つの畫は、お父さんがお畫なすつたので、嬉いばかりではなく、この圖がいゝのさ、一つの方は、豫言者エリヤと、子供を連れた、ザルパースの寡婦とが居るし、モウ一つは、耶蘇がナインの寡婦に、泣くな汝の子は蘇生らんと、仰しやつた圖だから、丁度私等の身に應じて居るのさ、神は寡婦は孤兒を捨て給はず、信ずる者を助けて、永久の生命を與へ給ふのである」と、云ひました。
ヘレナ一家は、不思議に發見しました、名畫のために、思はずも、富有な身になりまして、貧苦を昔がたりにする樣に、なりましたのも、みんな、神樣のお惠であると思ひまして、いよ〳〵、信心怠らずに、睦ましく暮しました。

（完）



才媛小説

庭の露（第三賞）

渡邊たみ子

（上）

亞細亞をのろふ荒鷲の嘴を挫き翼を折り其羽たれの音を隣邦に絶ちて日の本のますら丈夫はつき〳〵多くかへりきぬ。

こゝ綾瀬の里の片邊り緑を敷き緑を仰ぎて息へる三四人の兒童わり竿を手にして朝の程より道と云はず田と云はず馳け廻りし彼等には流石に弱き秋の日も暑かりけむ、さゝやかなる流れによりて少き手に〳〵わかす水に親むなり

西山君、今彼處の家へ紫藤中尉が這入つて行つたのを知つて居るか「知らない紫藤中尉つて誰だい「君は迂濶だなあ、紫藤中尉を知らない奴があるかい、今度の戰爭で名高い、そら今日だつて先生に御話を聞いたぢやないか。傍の一童飛び上がつて何んだ彼の紫藤中尉か、何處へ這入つた、オイ片岡どこの家だ、片岡は後の方を見かへりて森を負へる雅びたる構へを指さし「彼處さ、兒童はふり向きて沈と見たるが「君は何是中尉を知つて居る「何是つて皆んな兄さんの友達だもの、未だ外に今度手柄をした人、澤山僕は知つてるんだと力み返ればヘン友達ぢや仕方が無いや、そんなに力んで君の兄さんはどうだい殘されたぢやないかい。西山は迂濶を爲られし返報に遣り込むれば片岡は躍起となり、僕の兄さんが殘されたのは何も弱いからぢや無いよ運が惡か

つたからだ。其れにそんな事を、兄さんに云つてやられ、云はれたつて搆はないよ。
先刻より默してありし兒童ひとり葦かき分けて上り芝生に足投げ出しつゝ「おい皆な茲へ來て早く辨當を食はないかと呼はれば、そうだ〳〵忘れて居た最う喧嘩は止さうねと罪なく打ち笑ひつゝドヤ〳〵上りゆきぬ。
秋の空心地よく晴れて鳥も息ふか影も見えず。ひるげや認むる鍬など捨てられて田の面に歌の聲絶えぬ。
茲は長谷部家の接客室、今卓を隔てゝ二人の人あり。客は兒童の口に登れる陸軍中尉紫藤秀夫、向へるは此家の夫人澤子なり、男爵夫人と尊はるゝ身を以て、看護婦として戰地に出で一年の月日を彼地に送り、赤の十字の分らぬまで黑ずみし帽戴きて月の初め歎呼の中に凱旋せし人なりき。俱に世に名を歌はるゝ名譽の人、勇ましき戰話に如何に意氣や登れるとは誰しも思ふ處なるに、こは何事ぞ相對して、只暗涙に言葉もなし。
室内の空氣殊に冷に茂る木の葉を透して弱き一條の日影は僅に室内に入り卓の上に置かれたる、一葉の寫眞の上を心ありげに照しぬ、中尉の瞬もせず沈を眺め入るはこれ、澤子の泣かじと唇嚙みて見るは是れ。寫眞の主は十字の帽を戴きし氣尙き優しげなる婦人なり。稍ありて澤子は靜に中尉を見やり「紫藤樣、靜波さんは其夜は御休み遊ばさなかつた御樣子でした、其れから翌日は一日お顏をお見せなさいませんでした。氣に成りますから日くれ方、そつと伺ひましたら椅子に寄つて沈と考へ込んで被居しやいました、其御顏の色は眞靑で帽子を亂れ出た毛は顫ひを帶びて、秀夫樣妾しは思はず泣きました、急いで甲板に登つて人の居ないのを幸に妾は泣いて〳〵泣きましたよ、彼の時の靜波さんの痛はしい後姿は今も見る樣で御ざいます、」夫人はそゞろ、ありし姿を思ひ出てゝ堪えずや、面を蔽ひぬ。中尉は何をか云はむとせしが、唇徒に顫ひて嗚咽漏れむとして遂に能はず眼を亡き人の上に移せば千古つきぬ恨みの涙は姿も浮べと下るなり。夫人は言葉をつぎ「暫くして室に歸りましたら誰か椅子に掛かつて居る人が有ります、それは靜波さんでした。突然妾の手を取つて「澤子さんすみません、貴君のお志は厚く受けますが妾はどう有ても昨日の決心は替りません、昨夕は寢ないで考へました、今日も一日考へ通しましたが妾は矢張りと云つて妾の顏を見上げて再び日本の土地をふまぬ事に極めました、と云つて手を解いて椅子に身を投げかけ卓に顏を埋めてお泣きなさいました、紫藤樣この「涙は御許

嫁の房子さんを恨みのお涙でも御ざいません、また、まゝならぬ世をお恨の涙でも御座いません、只、私、此澤子の志を無にするがすまないとてのお涙でした、眞實に靜波さんは喜んで死をお遂げ成すつたので御ざいます、船の欄干に手を掛けて我身の墓場をお見下ろし遊ばした其お顏には定めてお笑が登つた事と私しは存じます。紫藤樣妾しは最う其時にはお止め立ては致しませんでした。が何か申さうと思つたのですけれど胸が迫つて口へは出ませんでした、夫人は其聲震へり。中尉は面を上げて「何靜さんは喜んで死ました笑を含んで死んだと被仰るか「ハイまあお聞き下さいまし、其れから被仰いますには「澤子さん妾しは飽まで靈魂の不滅と云ふ事を信じます、妾しは此世では運拙く紫藤樣には再びお目に掛る事が出來ない身の上です、お目に掛る事が出來ない計りでは御座いません彼の方の事を思ひますさへ房子樣へ對して出來ないので御座います。澤子さん定めて貴女は妾しが房子さんを恨んで居やうとお思ひなすつてでしやうが、妾しは房子樣は愚か、それこそ天も地も決して恨んで居りは致しません。それは今迄には泣きました、お恥しう御座いますが隨分泣きました、が、つまり、妾は此世の神樣の憎まれ兒なのでしやう、ですから此世に居ります中は、どちらへ廻ても不幸な目を見るのです。ですが妾しの此世に容れられないのはつまり幸です、妾しの身體は此世を去りさへ致しますれば秀夫樣の事をとれ丈け思ひましても、すまない方は御座いません、と云つて確り妾の手をお取んなすつて「澤子さんやがては秀夫さんも世の務をお果しなすつてお出で成さいましやう、妾しは其時を樂しく待ちます、房子さんと仰しやる方の無い世で必らずお逢ひ申す事が出來ると妾は堅く〳〵信じます、澤子さん世の人の死は絶望の極決する悲しい死ですが妾の死は樂園に臨む第一歩の嬉しい死なので御座います、喜んで下さいましと被仰いました御顏には、紫藤樣最う一點のお涙もお見えなさいませんで御座いましたよ。

中尉が死灰の如き顏色は稍色づき來ぬ。

あゝ靈魂不滅靜さん。あゝ靈魂！不滅。」

嘗ては北亞の野に幾萬の敵軍を叱咤しけむ脣堅く結び眼を閉ぢ腕を頭に組みて身を斜に、深く思ひ沈みて身動きだもせず。夫人は靜にうちまもりぬ。暫くありて僅に口を開き夫人靜さんは僕を恨んでは居なかつたです

か、夫人は目を瞬りて「そ、そんな事、何してまあ靜波さんが、何うして貴君をお恨み成さるものですか、御自殺なさる其時まで、其時まで貴君の寫眞をお放し、お放し成さいませんでしたわ。」せきあえず夫人はまた涙なり。中尉は苦しき息をつき「あゝすまない靜、靜さん許して下さい、貴女の一生を誤らせたのは僕です許、許して下さい。」

澤子は聲をのみぬ、中尉は泫然として眼を閉ぢたり。

暮るゝに早き秋の日はとく山深く隱れ入りぬ、殘る夕榮えの名殘り惜しげに薄れ行くあたり、現れしもの一點又一點放れて又一點、一點並び合ひて此方に見る〳〵近づきぬ。見れば遙かの森影を、こむる狹霧をものともせず走せくる黑き四つの影あり。空なるは羽ばたきの音高くねぐらや急ぐ墓地に驅けより又遠くかけ去りて跡只雲清き頃下なる影は漸ふ近づきぬ、こは今日の一日を狩りくらしたる彼の兒童等なりき。彼等は男爵家の裏庭を覗きて佇みぬ一人「玆だよ紫藤中尉の這入つたのは、未だ居るか知らん」又一人「居つても居らないでも構はない、大に萬歲を唱へやうぢやないか」さらばと四人は少さき洋服姿の姿勢を正し、さあ好いか、そら、一イ二ウ三イ紫藤中尉萬歲！内なる中尉は愕然として頭を上げぬ。續きて又紫藤中尉萬歲！。彼はツカ〳〵と歩み出でたり。兒童等は遂に三唱せしが、思ひ掛けなく其人の窓に立てるを見て躍り上り期せずして四度び紫藤中尉萬歲！。

中尉は莞爾として是れを受けたり。兒童は勢よく驅け出でぬ。中尉は其勇ましげなる後影を見送りき。

夫人は後より「紫藤樣貴君國家の爲お身體をお大事に遊ばしましよ、小さい小供でさへも彼の通りで御座いますもの」。中尉は窓に靠れて默然たり。

稍ありて澤子を見返り「夫人名譽も何も最う僕は要らないです、あゝ僕は心にこんな負傷を受けやうとて出陣は爲なかつた。」

「然し澤子さん御安心下さい、僕は帝國の軍人です、たとへ如何なる苦悶を忍ぶとも僕は斷じて日本軍人の體面を汚しはせんですよ。」のべたる聲は凛然たりき。

「其御決心が何よりと存じます」夫人は愁然として中尉を見上げたり、視線はゆくりなくも合ひぬ、合ひたる視線は忽ちそれて卓の上なる亡き人のはとりにこそは落ちたりき。

雲は暮るゝにいやまして近き庭をも遠き野邊をも殘る方なく包み終りぬ。闇を貫く銀一流、靜に遠寺の鐘を傳へて餘韻幽なり。窓をたゝけば時雨か松風か、虫の音露に咽びて細く、嵐に通ふきぬたの調にまぎれて絶えて又つゞく。誰が業助くる燈火ならむ、哀れ遙に放れて只一點嵐におびえて明滅たり。蕭條たる滿目の風物、あゝ泣けよと人に迫るなり。

（下）

てゝを何地とも知らず、亦何の故とも覺えず、とある山路をひたすらに登り行くなり。思ひの外の險しさに、幾度か苦しき息をつきしが、さて何者にか身を引き行かるゝ樣にて休みも敢えず亦急ぎ行くなり。道はさながら我を導くが如く盡きむとしては開き。絶えむとしては續く。谿間をつたひ、巖を攀ぢ水を越え、足に任して行けども登れども、愈よ急なる山の姿、彼處を頂と覺ゆる方も見えざりき。いつしか心のたゆみ足も疲れて、休らうともなく思はず傍なる岩に腰を下せば氷の如く冷き山風さつと袂を拂ふ。つく〲四邊を見廻せば越し方の道は霧深く百尺の巖千仞の谷、只一面に漠々たり。見上ぐる行手も又一團の雲湧きて、いづこを道、何處を茂みと見も分たれず。今は曉なるか夕暮なるか、四邊は只いつまでも薄暗くして日影もさゝず星も見えず據れる岩の後に怪しき鳥聲々に物凄さまじく鳴き立てば恨むが如き友音彼處此處に起りて、一陣の魔風音なく我に迫り來るよと覺えて弱りし氣は次第に遠く、目は正に閉ざされむとして心機に現にさまよひ群がり來る怪鳥を避けむと覺束なくも歩み出でたり。

絶壁にそひて夢の如くに進み行くに不審や、いづこよりかなつかしき花の香、氛々と誘ふが如く我身を廻れり驚きて吃度見やれば、こは如何にせし身は今斷崖の上にあり、右も絶壁、左も絶壁、ふり返れば此にも亦苔累き大盤石頑として扣へたり。今歩み來し其道さへも分ちがたきに只呆れて佇ずむ面をかすめて白き花びら二

つ三つ。ひら〳〵と散り行きぬ。其行衞を眺めて思はず見下せば、計ざりき只見る眼下一脉の急流雪の如き菊の花を乘せて狂ふが如く岩の間を流れゆく。彼の花は折からの山風に煽られて、たま〳〵散り落ちしなりき。水は意外に淺く、流るゝ花は腕のばして取らばとらるべし。あゝ白菊、こは我靜波が好みし花ならずや。ゆかしなつかし花よ水上に人やある。よし何ともあれ行くにも歸るにも道なき身のなつかしき此花をしるべにていづくまでも溯り行かむにはと身を躍らして飛び込めば、水は身にしむ計り冷たきに指も千切るゝ計り覺ゆれど勇を鼓し白きを便りに幾めぐり傳ひ溯りぬ、花は猶も流れて絕えず。されども怪し其花の前には微笑が如く水の表に色見えながら足許過ぐれば影を滅して復た現はれず。前には點々白くして顧れば只徒に岩に激して浪の花白きのみ。不思議なる哉。

思ふに此花、徒に流るゝにはあらずして或は何者か我を求むる者の我を導かむとして斯るにはあらざるか。ああ導かむとしてかゝるにはあらざるか。疲れても止まり得ず、休まむとして休む能はざりしも亦何者か我を求めて引き誘ひしには似たらずや。

人の住むべくも覺えぬ所にありて我を求むる者あゝ靜波にはあらざるか。思へば堪らず、身も心も空にひた走り思ふに任せぬ急流を傳ひ行けば、水は愈よ激して飛沫全身に散り、行きて未だ幾何ならざるに衿も袂もしとゞに重きを覺ゆ。

左右に迫りて絕壁は漸うつきて水は歩々に淺みゆきぬ、ホッと息つきつゝ稍進めば、丈け頭を沒する計りの雜草の名も知らぬがいや茂りに蔓りて、兩岸相接し相交り、遠さゝの樣さや〳〵と嘲るが如く風に嘯くあり、行かむとすれば針の如く、鋭き葉は袖を裂き歩みをはゞむ。

何ぞ恐れむや、推して進む勇氣なきにあらず。されど道遂に天に通じて人の行くべき所ならずと、こゝに止むるにはあらざるか、躊躇は只それなり。折しもあれドッと計り嵐に俄に霧を吹いて足下に起り遮る物も行く身も倶に見ゆる限りを蔽ひ終りぬ。幾團々の雲霧を隔てゝ覺えある怪鳥の叫び幽に耳朶を打つ。

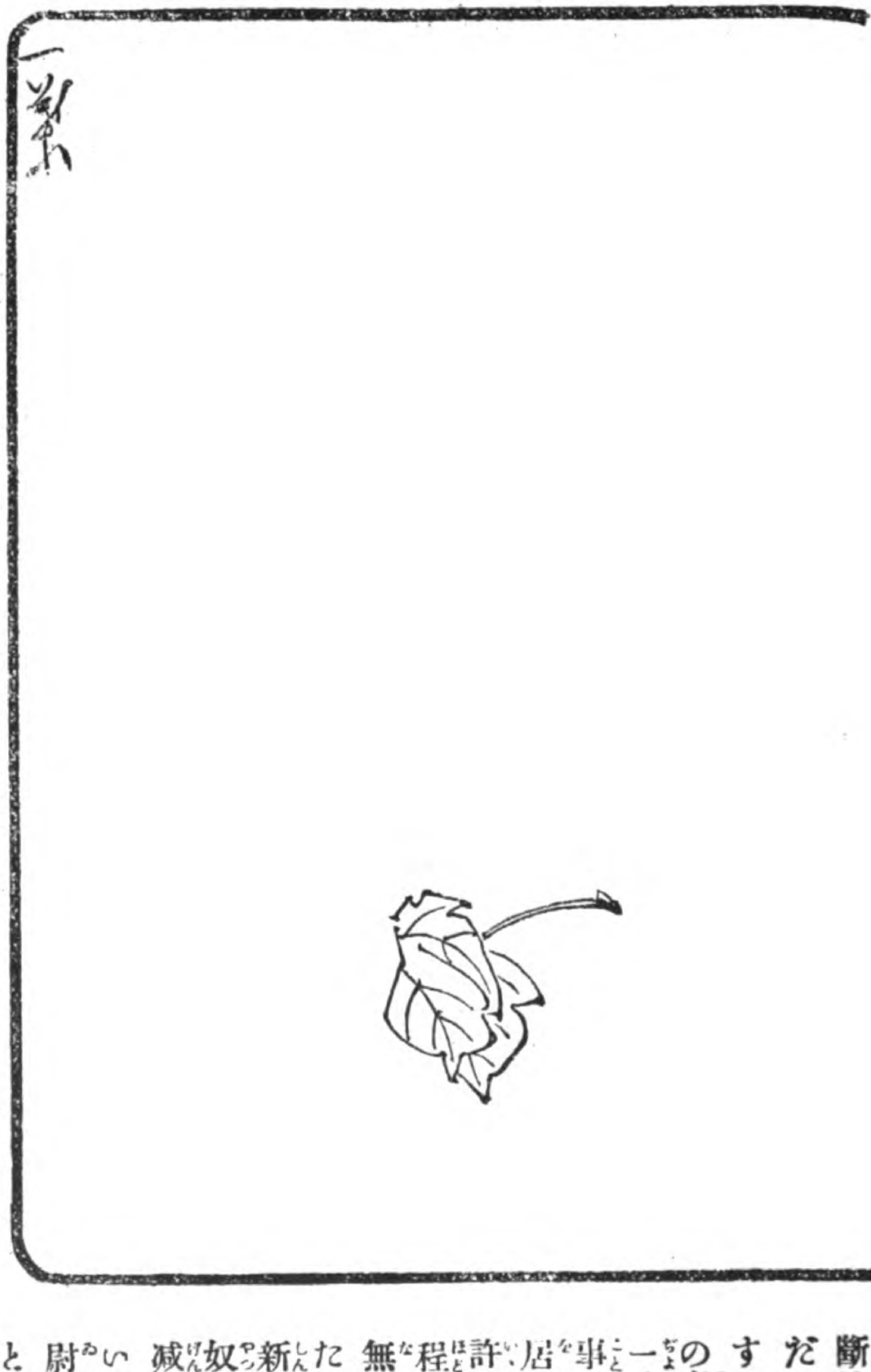
ふと薄闇のうちに一條の光り頂より落ち來れるを認めて屹度彼方を見やれば茲よりは程遠からぬ巖にあたり確

に人の影あり。光線は正しく其者を照さむが爲に落下せるに似たり。光は稍強くなりぬ。あゝ靜波、花の主にあらずや、今は何をか猶豫せむ天に通すればとて地にかよへばとて止むるな、裂かばさけ切らばきれと走せ出づれば不思議や一枝ふるゝ者もあらざりき。近よりて見ればまごう方なき靜波なり。身には白衣の裾廣をきつけ脊に散らしたる黒髪は倚れる岩にゆるくかゝれり。餘念もなく傍に咲ける菊の花をむしりては捨て採りては水に流しながしてありたるがふり返りて我を見上げ莞爾と笑み「秀夫さん花は首尾よく貴君をお誘ひ申ました」「おゝ靜波さん花を流したのは貴女ですね何是そんな事をするんです」我も岩に身を靠せつ「何是ですか」跡は只笑むのみ。其凉しき聲優しき面を見るに聞くに只わけもなく胸晴れて今は身を悩ます何者もなかりき。



「靜さん貴女け僕か憎

いでしやう何是だつて貴女の一生は僕が誤らせたも同然ですから」静波は答へず只我手を執りて打ち笑みぬ「けれども僕は決して貴女を欺いたのではないです、僕は凱旋したら彼の方は断然断はる積りだつたのですよ、房子の事は父が一寸そんな事を云つて居つた丈け許嫁と云ふ程なのでは無いのでした。それを新聞記者の奴、好い加減な事を書いて紫藤中尉夫人などと彼の房子の寫眞を紙上に載せたりなぞしたものだから留守中に親類や知己から俄に祝物を贈られる始末でね遂に抜きさしの成らない事に成つたのです。ぬきさしの成らない事と云ふのは、つまり僕が世に名を知られたからです。エ、名譽が何んだねえ静さん僕は名譽と云ふ物を殊に憎むです。名譽の為に僕は生きながら命を奪はれたです名譽は僕の敵だ仇だ。静波さん僕をして貴君を捨てざるを得ざらしめたる者は此奴です。



聲は次第に激して震へり。

されども彼は言葉なくて優しき笑を見せながら見よとや、何をか指すなり。

思はざりき空は心ゆくまで夜の色に打ち晴れたり。

一痕の月傾むかむとして岩頭影長く吹く山風そゞろ身に泌みて寒く、洗はれし如く心もすみぬ。

「あゝ靜さん僕が退院する前夜、天幕の外で行末の事など語り合つたのは丁度こんな月夜でしたね、貴女も忘れやしないでしやう。あゝシベリヤの月、僕は花の都よりも廣漠たる彼のシベリヤのあの時の月が戀しいです靜さん貴女にしても僕にしてもお互に幸福な生れだと計り彼の頃は思つてましたね。」

「秀夫さんそれが憂世ではありませんか、妾しは誰も恨みは致しませんこれが、成行と申すのですわ。」

彼は初めて涙を見せたるが、仰ぎて落ち行く月を瞬もせず眺め入るなり。稍ありてつと身を起し「秀夫さんよく來て下さいました。妾しは今一度お逢ひ申したいとそればかり祈つて居りましたが、こうしてお目に掛つてこんな嬉しい事はありません、いつまでもこうして居られゝば、ね、けれども最うお別れ致さねばなりません左樣ならと計りにて只一枝殘せし花取り上げて見上ぐる計りの崖を屹度見上げしと見る〳〵忽ち登り終りぬ。

我は呆れて只佇むのみ。

こゝに人あるを忘れたる如く見返りもせず行かむとするに堪らず「靜さん待つて下さい未だ云ふ事が有りますよと呼びつゝ吐嗟に馳け出でたるが見れば靜波は道もなき岩が根を飛び越えとび越え遙かなる茂に姿は早くも隱れむとす。

滿身の勇を揮つて岩を蹴りふるゝ樹引き折り怒る嵐をつき破りて何處までもと慕ひ行けど其姿は一度消えて復た見えざりき、苦しさに堪えかねて流れに下り咽喉うるほしつゝ、けはいやすると見てあれば嬉しや彼が姿は再び見えたり。程は近し此度こそは逃すまじと險しき道を物ともせず歩みの續く限り馳け出でたるが彼は早き事、疾風の如く走るとも見えざるに行きても〳〵其隔りは依然たりき。

暫くありて彼は歩みを止めつ何思ひけむ打ち笑みてさしまねくに漸う至りつきぬ。「全體貴女はとこへ行くんで

す一人で、さあ行きましやう一所に何處までも僕は貴君の行く所まで行くのです。」と息まけば、彼は靜に制し「それは不可せん。これからは人の行くべき所では有りません、貴君には未だ此世にお務が殘つて居りますお大事のお身體です徒に死をお急ぎ遊ばすのでは有ません左樣なら。流石に彼は言葉を切りしが再び「秀夫さん待つて居りますよ。」嫣然一笑逝る雲を目がけてさと一ふり持てる枝うちふれば花は亂れて雪の如く一齊に面を襲ひくるに驚きて打ちはらひふりはらひて見れば無念早や姿は見えざりき雲やのみたる霧や包みし、されども女の足の急げばとて何程か隔つべき。よし雲の上なれ水の面なれ、君を念ふの一念やはか得追果てぬ事のあるべきと一足踏み出す、悲しや己れは人の身のふみ立てむとすれど物なくふりて求むれども些の掛りもあらず我とわが身の重みに雲を裂き霧を開きて行衛も知らず落ちゆきぬ。と見て夢はさめたり。

窓より吹入る朝風にあはられて床に活けたる白菊は枝にも堪らずひた亂れにぞ亂れ散る。

庭にちる露寒き晩秋の曉靜なり。

ありし人は敢えなく去り、落花空しく音さえて、さめたる枕に通ふぞ悲しき。

秀夫は暫し四邊を見廻したるが憮然として再び其眼を閉ぢたり。

今日はこれ彼が大尉に陞進すべき日なりき。つゝきては許嫁山崎房子と合巹の式を擧ぐべきいとも目出度日にぞありけり。

（完）

白萩 （第貳等）

宮澤すみ子

上

秋は稍々更けし夜の、庭には露を命の蟲の音高う、峯よりの松風颯々々々、病める母が枕邊に、恭一は頭うなだれて、

「母樣の仰しやる事一々解りましたわ、ようく腑に落ちましたわ、エヽ僕も男です、何もあれ一人が女といふわけではなし、思ひ切るも切らぬもありません、別に深い約束などしたのではなく、ハイ、唯お互に少い時からの仲好であつたものですから、三年の間折ふしは文通も致したので、ハイ、それを村の奴等は早合點してお波は仕合者、あの大家の嫁になるだらうの何のと評判したのが、つひ六づかしい祖母樣の耳へはいつたものと思はれます、祖母樣へは僕からきつぱり申上ますから母樣は餘計な心配をせずに早く治つて下さいな、久しぶりで歸つて來ても母樣がかうやつてねて居られると何の樂みもなく、世の中が寂しいやうな氣がします、だが母樣三年見ない内に隣のお波も美い娘になりましたな、あれで親孝行だから感心さ、これが東京とか高崎とかいふ廣い場所なら、母樣隨分位の良い將官でも身分の卑い家から貰つて、立派な奥樣となつているのが澤山ありますが、田舍はそういふわけには行かず、丸で財産や道具と結婚するのですな、お波なんぞも可哀相な、あの容貌がありながら一生草の中で終るのだから、氣の毒なもの、母樣一つ村の習慣を破つてあれを貰ふては下さいませんか、僕は約束などした事は無い、無いといふて、深く心にしみこんだ思は母樣、僕は何とはなしにかう約束でも破る氣がして、心が責めます、たつた一人の母樣、かくすこととなく打明けて申上ますがね、やつぱり僕は、お波が可哀相で、どうしてもとかくあれの事が氣になります、母樣よい分別はありませんかね」

病める母は恭一の顔つく〴〵ながめ、兩の眼に熱い涙はら〳〵と、こは白萩の雨になやめるごとし。

「それ程お前がよいと思ふもの、母は何で拒みましよう、だが恭一、ようくきいて下さいよ、度々お前にいふ事だが私のこの家へ貰はれて來たのは、十七の春、祖母樣初め親類衆はな、一人も承知の無かつたのを、お前の御父樣が無理やりに私をお貰ひなされてな、私が其時せめて廿歳位になつても居たら、少しは分別もあり先先の苦勞が見へないでも無かつたらうに、何をいふても年弱の十七、まだ丸十五にもならなかつたから、つひうか〳〵と連れて來られて、間もなくお前が生れた時、エヽ、私は口惜しい、ねても忘られない、姑御樣を惡くいつてはすまないが、恭一や私は殘念で堪らなかつた、あんな貧乏人の腹から出た子、行々はこの財産を無いものにするだらうの、こんな子は今に見ろ、金の十圓もつけて母親諸共追ひ出して見せるの、眼の玉の黑い

中は、あんな嫁の世話にはならぬ、死水は取つて貰はぬ、私が死水を取つて貰ふ嫁女はな、振袖仕度の嫁樣に限ると、祖母樣明けてもくれても本家の大叔父樣とのお物語、きく私は身も裂ける計り、こよひはこゝを拔けて出やうか、明日は納屋で頸をつらうか、いつその事、お前を連れて、裏の池へ沈まうか、ほんに恭一や私は辛いといふ辛い眼、悲しいといふ悲しい眼にあひ盡したが、お前の愛に引かされて、今に姑御樣の氣が折れやう、私の眞心さへ變らずば、天道樣もお見捨あるまいと、それからといふものは、死ぬなんていふ事はふつゝり思ひとまつて、辛棒をしつくしたが、不仕合せものはどこ迄も不仕合、お前のお父樣に先立たれたはお前が恰度五歳の秋私が二十三の時でした、お父樣が其時の御遺言、私は今あり〳〵と覺へてる、恭一や、お波は容貌も美し、氣立も優しいし、私がかうやつて寂しく病んで居る間、日に一度はきつと尋ねてくれてね、何、お前、表からでは人の口がうるさいし祖母樣に見つけられては却て私に惡いからとて、あの裏庭の細道、そらあすこに白い萩が咲いてるだらう、あすこを通つて、この裏戸からしのんで來てくれて、もう丸で私を眞の親、姑のやうに大切にして、肩をもんだり擦つたり、私はあの娘のあるばつかりに、どんなに慰められたか知れません、こゝにはお前お金やお米はくさる程あつても私の自由には一錢もならん、養生物とて一つもいたゞいた事は無い位、お波は私に食べさすとて、不自由な中からいろ〳〵とこしらへてくれる其心根、私や思ふと涙がこぼれる、だが恭一、私は心を鬼にして、あの娘の前ではなつかしい戀しいお前の名をめつたにいはず、あの娘もまた、世間話はするものゝお前の噂はふつゝりせなんだ、お互にいはれぬ胸の內、何といふ悲しい事では無いか、お波はお前が慕はしさゆかしさに、せめては私の看護でもして、私の口からお前の噂がきゝたいばつかり、其を知りぬいても言はれぬ私の胸の內、なまなか、情らしい事いふて、お前の嫁にと口が滑つたら、それこそあの娘を、地獄の底へ落すも同然、恭一や私は、私の心を鬼にして、あの娘の淚を見て見ぬふり、たしか後月の晩だつけ、お波はな、叔母樣お嬉しう御座んしよう、恭樣のお歸りも一月とはありませぬ、どんなに立派な方におなりになつて歸られる事でしよう、早くそれ迄に快くなられてなと、いつにないお前の噂、お波が先へいひだしたは長い三年の間で其時が始て、それを思ふと胸が張り裂ける、私はな、波ちやんや、あれが

歸れば、其晩に直ぐと本家から嫁樣が來る、家は大方びつくりかへるやうなさはぎで賑やかな事であらう、お前も手傳にきておくれ、といへば、エヽ御本家からお嫁樣、そりやほんとうで御座いますかと、あのおとなしい娘が、お前、根堀り葉堀りきくでは無いか、ほんとの事、何私が僞をいふてよいものか、波ちやんや、だが恭一は本家の娘を大嫌ひだから、相談かければ不承知さ、だから親類衆がね、歸つた晩無理にでも取らせるといふ內證話、村へ知れては、われの友達からわれへ通じても事が破れる、波ちやんこれは內々の話だから其つもりでなと私はいふてきかしたのさ、恭一や私が二十年の苦痛をおもへば、二度と再び、罪の無いものにかくいふ難義苦勞はさせたく無い、今の涙は一時の涙、なまなかお前が未練らしい事いへば、お前もあの娘も私のやうに一生涙でくらさねばならぬ、私が活きたよい手本、わかつたか、わかつたか、あの娘がほんとにいとしいなら、きつぱりとあきらめてな、恭一や、嫌でもあらうが本家の娘を貰ふてはくれぬか、私が手を合せてこの通りたのむ、かしこい恭一、母がたのみをよもや拒みはせまいな、世の中に、村といふものなく、親類といふものなく、勿體ないが祖母樣も無いものなら、嫌といふてもお波を貰ふ、私もお前も、可愛いもの、あの娘の外に貰ふものは無い、恭一やまゝならぬ憂世、さ立派にあきらめてな、私もふつゝりあきらめる、お金があつてもお米があつても、私は一生涙のからだ、わかつたかな、わかつたかな……」

あはれ天上の月は雲にかくれぬ、夜ふけてお波やきぬたうつらん、其音あはれに、斷……また……續……

下

身分には雲泥の隔はあれど、向ふ三軒兩隣、この交際のみはもの六づかしき村落の、いよゝ堅く守らるゝと見へて、けふしも恭一は、歸村のよろこびにとて來りし家々をおとづれ珍らしき土産物など澤におくれる中、わけてなつかしきお波が軒端、よしや骨あらはに障子の破れ眼に立ちて、秋の哀を悉くあつめしやうの侘しさといへ、美玉この中に輝くとおもへば、心なかゝゝにいさみて、美々しき騎兵の制服いかめしきまゝ、

「翁やまめでゐたかな、」

餘念なく草履編みつゝありし翁老は、この勇ましき珍客を迎へていとゑましげに、

「これば〳〵村松様の若旦那様、まづお變りも在らつしやらないで、御目出度う御座いやす、何しろお前様、そこへ坐らしつてはよごれるに、波や、波や、まあ、とけへ行つたな、今、こゝで針仕事をしてゐたに、蒲團はとけへやつた、私はもう年がよつて、つひあなた様何もかも忘れて終ひやす、まあお前様、三年御座らつしやらない中に、變れば變るもので、倅夫婦は、あのそらつい チブスとかで取られて終ふ、私はかうと、七十七お迎を受けるには間も御座いやすまいが、お前様、可哀相なのは波でな、あれの孝行といつたら珍らしいといふて皆様もはめて下さいやす、それは〳〵私にやさしくしてくれますでな、時に波はとけへ行つた、波……波や……、若旦那様に御言葉をかけぬか、」

三日見ぬまの櫻かなとは、それは散り易き春の花をうたへるもの、かゝるうつくしの處女が美を、はたまた何にたとふらん、お波は納戸のかたより、細き聲はして、「アイ、翁や、すぐ行きますぞへ」

誰がため梳づり、ころも改めつらん、お波は今しも水鏡におのが髪をなでつけて、常の衣のあまりにもこの君を迎ふるにむさくろしとや、そと、裏口へまはりて、取りいだして手織の袷、波がためには綾錦にも價すらし曾ては貧しき中の驕のやう氣がとがめつる眞紅の房の花簪、さすがにけふは榮あるべくおもひて、むすびし帶の唐縮緬も、錦ながるゝ立田の川の染模様、俄のことゝて薄化粧のたしなみは無けれど自然が粧ひのうつくしき娘、裏の小萩も色なきに似たり、

「や……波ちやん、きのふは失禮、母様がよろしくつて、これはほんの土産のしるし、お前も大層大きくなつたね、きけば兩親共無くなつたげな、何といふ不仕合せのことつたらう、親の無いものは察しられるよ、僕なんぞは父親の味を知らないからね、ちつと遊びにおいで、母様も寂しがつて居るから」

君が三年の入營中、及ばずながらも盡しゝ我が眞心を君は嬉しとおぼさずや、可愛のものとは思さずや、一言ことばのそれに及ばぬいぶかしさ、叔母様、お話は無かりしか、我が爲にはながゝりし三年の月日、あはれ氣強くも、君には一滴の涙、我が身に惜み給ふかや、御文の上の御詞、そは皆僞にてありしか、はたまたもの

しらぬ田舎娘の、さばかり意味なき筆の跡を、ふかき御心のあるやうよみあやまりしか、我ながら耻かしや、我のみ戀しと思ひし愚かさよ、されど、されど、すぎし日、明日は高崎への御立ちときく夕まぐれ、招かれし白萩がもと、あのお庭の繁みが中で、君樣何と仰せられし、忘れませぬ、忘れませぬ、私は一生忘れませぬ、外に心をおうつしなされても私は忘れませぬ、今この部屋に、唯二人、君と我のさしむかひ、誰はゞかる事なきこの折に、一言だにも洩し給はぬ情の御詞、あかの他人に對するやう、其つめたさは何事ぞ、、、、お前樣大方魂は、高崎あたりの遊女にでも取られて終ふて、其立派なお身體は、裳拔のからで御座んしよう、あんまりな、、、、あんまりな。

かゝる事を小さき胸にくりかへして、お波は悲しく怨めしく、さすが口へは出しかねつ、物をも言はでうつむけば、恭一はあはれさ限りも無うて、少女が悶の身をかい抱かんとする瞬時、ぱつとうつるや、母が廿年の血の涙。

恭一は大理石の如く動かずなりぬ。

お波の身は氷よりつめたし。

「波ちやん、折角たづねて來た僕へ茶の一ぱい位振舞てもよいではないか、田舎の娘さんはお愛想が無いね」から〱と笑ふて少女を顧みれば、今はこらへかねて瀧なす涙のとめともなく、怨めしげに恭一を見上ぐれば、あなあはれ心にも無き僞を言うて、罪なきものを苦しむるよと、彼女が手を取らんとする瞬時、またもや、うつる破障子には……母が廿年の血の涙……。

（終）

後の撫子

（第壹等）

河原芳子

（德田秋聲氏の撫子の花を讀みて彗子の行末を想像したるもの）

（上）滊車の卷

影澤博士の令閨綾子が同情の涙を寄せて、增見文學士と結婚の一條を持出した處、增見の母が、彗子の素性を否認して遂に其意を峻拒したから、綾子の失望は勿論增見文學士の不平も少なからず、まして彗子及其父母の落膽と苦痛とは、實に想像以外の度に高まつて、更に一層、社會の偏執を痛恨し、冷酷なる待遇を拂はるゝ「新平民」の身の上を悔むのであつた。

されど、綾子の懇切なる來訪と、慰藉とを受けて僅かに一縷の希望の光を深き愁雲の裡より認めて、儚ない浮世に萬一の僥倖を待ちつゝある、渠大喜田のさびしい家庭には、不遇佳人の彗子が獨、うつろひ行く撫子の花を抱ては、ひそかに薄命な身を怨んで、泣きはらした眼を、妹の廣江子に笑はれた事は幾度であらう。

かくて冷たい夢の内に、年は一めぐり、面白くもなき春秋を送り迎へて、恨みは多き床夏の花の頃となつたが彗子は不圖、病の床に就て、輕からぬ容體を示したので、父母の愁嘆は一通りでない、醫師よ、藥よ、御祈禱よと、精かぎりの介抱を盡した甲斐あつて、胸なで下す程になつたが、病氣の原因は氣欝から、と聞て一層不憫に思ふ親心、東京に居ては見るもの聞くものに心を痛める道理、寧、御參宮旁伊勢へ行つて、暫時二見浦で療養さしたなら、氣も變り病も散じて良からうに、と評議茲に一決して落付先は太陽館へ見晴しの可い一室を明けて置く樣、案内狀を先へ出して、紅塵萬丈の都を後にした彗子は、母と妹とに同伴されて、まだ初旅の幼な心に、胸を轟かす百餘里の鐵車、中には新婚旅行と見ゆる軍人夫婦もあれば、豪商らしき老夫婦もある、會社員らしき紳士もあれば、官吏らしき美髯郎もある、何れを見ても意氣揚々の、肩身廣う、二等室に座を占めて居るにつけ、彗子は我と我身を卑下して故らに隅の方へ、何やら他人が輕蔑の視線を集中するかのやうに思はれて、自と伏目勝に小さうなつて了つた、扇使ひに迄遠慮する心弱さ、若し、彼の時、增見文學士

の妻と成つて居たなら、この避暑旅行には……手を携へてと思ふにつけても。
蕙子は始終不愉快な面色で、驛々に出入する人々の樣を偸み見ては、たえず、想像を苦悶の内に描いて、時々沈み勝ちの胸を撫で下すのであつたが、廣江子の無邪氣な戯れには、思はず結んだ唇を解いて、美しい笑みを眉宇の間に浮べてはみるものゝ、夫れはほんのお附合に過ぎなかつた。
かくて汽車の名古屋驛に着た時、新婚旅行らしい軍人夫婦も、豪商らしい老夫婦も、紳士も、官吏も下車して了つて、後には靜岡から乘つた教師連らしい一行のみとなつた、其處へ、校書を携へた若紳士の一行と、別に陸軍大尉の制服を着けた一人とが乘込むだ。
大尉はいと洒落相に口髭を捻り乍ら、蕙子等と差向ひに腰を下して微笑一番、廣江子の顏をさしのぞくやうにして、
「孃ちやんは東京からゐらッしやッたンだね、姉さんと、おッ母さんと……。」
と問ひかける、
「さう……」
と簡單に答へた廣江子は、人おめもせず莞爾笑つて、
「これから、お伊勢さんへ參詣つてねえ、二見浦の方へ行くのですわ。」
と言ひ足した。
蕙子は滿身汗びッしよりになつて、顏は火のやう、爺と母の樣子を覗つて、直ぐ眼を窓外に移したが、其若い大尉の妻は或一種の慰籍を齎らして居るかのやう、何とはなしに少女心を動かすのであつた。
大尉は一向無頓着に卷烟草の烟を輪に吹き乍ら、
「孃ちやんは、御參宮をして、二見浦へ往つて、直ぐお歸京なの？。」
「否、二見浦で遊んでるの……ずッと。」
「はアさうですか、ではね、私も二見浦へ遊びに往くンですから、同伴にはどうだね、孃ちやん。」

「どうか、連れてつて下さいよ……ねえおッ母さん。」

母は、廣江子の大膽な挨拶振を笑つて居たが、大尉も同じ二見浦へ往くとの事に、つい向直つて。

「マア廣ちやんの蓮葉ッたらない、貴郎、先刻から失禮ばかり申上げて……、あの、貴郎も二見浦へ避暑に御越しなンですか。」

「ハア一寸養生旁遊んで來る積りでねえ、して貴女方も矢張御保養にですか、二見浦へ。」

「ハイさうですよ、どうか御同伴に。」

「處で、宿はどッかに定つてるですか。」

「宿は、太陽館に……。」

「はヽヽヽ夫れは妙々、私も太陽館に定めてあるので、これア妙な縁になつたものですね。」

「アラ……さう、眞個に妙ですことねえ。」

絅子は、母と大尉との話を聞て、胸の内はこそばゆいやう、今迄沈んで居た氣は急に浮き立つて、温い情の花は滿身の毛穴から匂ひ出る程に、嬉しい感じを起して居る。

母は尚、言葉を繼で、四方八方の話を取かはして居る、夫れが一々胸に泌み透るやう、絅子は廣江子を相手に耻かしい思ひを他に外らしても、氣高い羅紗の匂ひに心神を奪はれて了つて、今迄に無い美しい感情に耽るのであつた。

汽車は、數十百の驛舍を通過して、伊勢の山田に着た、絅子の一行は大尉と共に汽車を下りた、下車する際によろめいた絅子の、大尉の手に扶けられた瞬間は全然夢の樣、若い二人の眼は愛を司る星の如く輝いた、大尉を先に、次に絅子、次に母と廣江子と同乘した腕車は、勢よく構内から駈出して、外宮より内宮へ、内宮より二見へと走つた。

車夫は、絅子を奥樣と稱して、少なからぬ尊敬を拂つた、大尉も戯れ半分に奥樣を以て稱した、母は始終大滿足の微笑を湛えて、兩人の姿を瞶つて居た。

無論、大陽館に於ても、大尉と馨子とを別室の人とは思はぬであらう。

(下) 清渚の巻

青松白砂の間に高樓を構へて、春は勿論、夏季の遊客を當込みに、至極實直に勉强して及ぶ丈の便利を計つて居る太陽館は、何時も滿客の姿で、疊一疊の空間もない位である。

大入道が手を差出したやうな磯馴松の枝が、海に面した手擦とすれ〳〵に茂つて居る、東側の十疊の間には中沼大尉の軍服やら、馨子の帷子やらが整然と同居をして、二個三個流行新形の旅鞄と行李とが、配合よく並べてある、此處は馨子一行と大尉との占領して居る根據地なので、私かに他の羨望する處となつたのも、强ち室の良い計りてはなかつた。

今しも晴れ渡つた夕立の空に、颯と一陣の涼風を催して　岸によする漣、緑なみよる松の梢、海士の鹽燒く煙迄が、愉快さうにさわ〳〵と靡いて居る、沖の白帆に虹がかゝつて、七色の半弓は美の神の手に張りつめられた、遠く聞ゆるは、艪の音か、弦音か、近きは鳴鏑か、船唄の韻きか、と見る内に一羽の白鷺が斜に飛んで、向ふの島影へかくれて了つた。

「あゝ甚麼も夏は海に限る、海の夕に限るですね、實に絶景だ、貴女、少し濱邊を散歩しやうぢやありませんか。」

大尉は樂しさうに濱邊を見やつて、馨子の母を誘つたが、急に思ひ出したやうに後を見返つて、

「廣ちやんがお寢だから可けませんね、私うッかりして居た……、じや獨で散歩して來ませうよ。」

と立ちかゝるのを、

「中沼樣、貴郎御散歩なら、馨子も御同伴に……。」

と母は取持つて、

「馨子、お前もお伴して、散歩してお越でなさい、廣ちやんが起きたら、おッ母樣も往きますから……。」

「では急度お越でなさいな、お先へ往つてますから。」

「よろしいよ。」

と母は笑顔。

「じや、往きませう、奚子さん。」

と中沼大尉は大得意。

「はい、參りますよ……。」

中沼は口の内で恥かしさうに尾て行く奚子の、嘗て過去の歴史には見る事の出來ぬ程、美しい心と美しい姿とを親の許した友の手に捧げたのである、かく兩人の間に熱い同情はとりかはして居ても、未だ一片の汚れには染まないのであつた。

聞けば、中沼大尉の父は陸軍中佐として錚々の名を軍人社會に轟かした人だが、或一種の好奇心から深く同情を新平民に寄せて、遂に奚子と同じ樣な婦人を妻としたので、社會の多くより甚しい擯斥を受けたが、委細平氣に澄まし込んで、熱誠な愛を捧げて婦人を待遇した、其子が即今の大尉、中沼清雄なので。

然るに父の中佐は、臺灣守備隊長となつて渡臺すると間もなく、麻剌利亞熱に犯され、丁度清雄が士官學校を卒業して少尉の任命を受けた當時に、無慘や不歸の客となつて了ひ、母は、其翌々年、猛烈な赤痢病に罹つて儚ない最後を遂げて了つた、後には清雄と海軍兵學校に入學してる弟の忠雄との二人が、悲嘆の涙に狂する計りであつたが、親戚友人の慰藉に依つて落膽の度を減じ得たのである。

清雄もなか〳〵父に劣らぬ敏腕家の、膽力もあり、學識もある好軍人で、今年二十七の春拔擢されて大尉に任ぜられ、參謀部の副官として上官の信任を受けて居る身の上、其榮達を嫉む者は、直「新平民の子」を以つて忌はしい嘲罵の聲を揚げるのであるが、某大佐及某少佐等の、爭はれぬ「新平民の子」であることを認めてる社會は、同じ國民に隔を置くの不穩當なることを解したであらう、彼の樞要の位置に立つて居る顯官でさへ、「日本の新平民」より更に新平民の外國婦人と結婚して居る好適例を擧げて、其罵るもの丶冷酷を反駁するものあ

るに至つた、これは自然の數で、さうなければならないのである、この平等說には上官も左袒して、一層に渠の意氣をして高潔ならしむるやうに勉められた。で中沼大尉は深く其旨を諒して忠實に勤めて居るのであるが、近來腦の氣味で兎角精神の勝れない處から、國家多事の折柄にも拘はらず、醫師の勸告に任せて暫時轉地療養の許可を得たのであつた。

かく不思議な緣で以つて、一の假家庭を作つたやうな大尉は、尙不思議にも「新平民」たりし亡母と、契子等の故鄕とは實に軒を接した間柄なのであるが、如何程談話に興が乘つても、互に其村の小字丈は言はぬのであつた、けれども故鄕を一にして居る事は、其話の端々で知る事が出來るので、互の胸には無限の同情を釀されて深い秘密を洩らし合はうと迄したのであつた。

契子は、紅緒の麻裏をぬげ心地に穿て、少し斜に大尉の後から、しッとり濕れた砂地から、何とも言ひやうの無い床しい薫りの起るのを嬉しさうに踏んで行く、大尉は不圖美しい岩の側へ立留つて夕榮の海上を見やり乍ら、美の威にうたれたやう、うッとりしてるので、契子もつい其側へ寄つて神秘の影を瞶めて居る。

大尉は急に思ひ出したやうに振返つて、

「契子さん……。」

と言葉をかけたが、何か言ひ淀んだ樣子の、ぱッちりした眼を愛嬌作つて、口髯を捻ること暫時。

「貴孃、最早熱誠な愛を誰かに捧げて居られるでせうね、必然……。」

と思ひ切つた調子、契子は不意を喰つて、胸は恰も早鐘を撞くやう。

「否、那麼ことは夢にもありません……。」

「夢にも無い、夫れは貴孃、嘘でせう、假令、貴孃が無いと言つてもですね、神はちやんと其良人のある事を語つてるから仕方がありませんよ、さうじやありませんか、契子樣。」

「でも、其神樣が許しませんもの、冷たい蔭に泣いて居るより外、私の慰籍者となるものが無いのですもの………。」

「戯言じやありませんよ、稽子樣なんかゞ不遇であつたなら、夫れこそ、社會の大部分は冷酷な鬼ばかりに違ひない。」

「でも貴郎、私の身分では……!!」

「身分……!!、貴孃、愛は身分を以つて厚薄のあるものでありません、假令、社會から別視されて居る人間でも、神から頒たれた血の花は一つです、情の熱度に變りはありませんよ、私は物心を覺えてから、此の區別を排斥して平等主義を執りました、そして偏頗な、頑迷な、社會の變屈者を喝破して居るのです、この日本帝國に籍を列ね、同等の權利を陛下から賜はつて居るものに、何で忌はしい區別がありませう、又區別のあつて可いものですか、で私は平素から此持論でもつて濶歩して居るのです、だから人間の階級、即身分と言ふ事には些とも介はないのです、身分を以て愛の自由を束縛しないのです、愛は何處迄も階級に應ず可きもので無いです何で身分と言ふ言葉が此の社會に必要なものですか、夫れは宜敷、貴孃の精神から脫却しなけア不可ません。」

「でも、社會は御高説に同情を寄せる程進歩して居ないですもの、日蔭ものは矢張日蔭もので終らなければなりませんよ……。」

二人は倘も熱心に話しを續けて漸く互の秘密を洩した、そして社會の冷酷を痛論した、神は二人に惠みの光を與へたであらう。

風は音無山から落ちて輕い浴衣をおもしろさうに弄るかと思ふと、岩鼻に咲て居る河原撫子の色の好いのをさも心ありげに戯つて行く、夕陽は海に入つて銀波遠く連り、歸帆點々款乃の聲を漂はして、西に東に走るのであつた。

折しもつか〳〵と駈けて來た廣江子は、波打際を愉快さうに往來して居たが、ふと美しい妹脊貝を拾つて、大尉と稽子に誇るのであつた。

あゝ、其妹脊貝には誰の思ひがこもるであらうか。

* * * * * * *

三十日餘の保養に、大尉の腦も健全に復し、螢子の氣病も全癒して了つたので、同時に太陽館を辭し去つたが同じ年の仲秋の月見には、丸髷姿の螢子が大尉の側に侍して、頻りと來賓たる上官の輿をたすけて居た。

琵琶の音（上）

山口澄子

一村雨の過ぎゆけば暑さはとみに忘られて、燃ゆるが如き濱の眞砂はシツトリと露しげく、磯の香にもる夕風は松の梢に琴をかなでゝ浴衣の袖かろう飜る心地よさ、鷗とびかふ海面いとなだらかに澄み渡り、西の空に赫々とかゞやき渡る夕燒の雲は今や華々しき金色もて、伊豆の濱邊を彩どれり。

あゝ思へば此處の磯邊なりき、父失せはて給ひしより家をさゝへん力なくて、母もろとも都の叔父に引取らるべき前の夜なりき、今日を限りと思ふものから、戀しき潔の君のみ手に縋りて、果敢なき戀の運命に泣きつ、薄きゑにしをかこちしは、あはれかしこの岩陰なりし。其身は遠くはなるゝとも二人の心の愛の花、ともに〳〵替らであれ替らじと、かたみにかたくちかひしも同じかしこの岩陰なりし。其夜は波の音高くみ空に響きて、はら〳〵と落くる雨はいよゝ袖の涙の數そへつ。

さるを二年過ぎし今日妾は一妻、かくと君きゝ給はゞいかばかり怒り給ふ事ならむ、ゆるして給へ、妾は辛き〳〵運命の神にもてあさばれし身なれるを……と心の煩悶に夫と共にある身も打忘れ、咲子はほと吐息して空を見あげぬ。

「いかにぜしぞ、顏色のいと悪しく見ゆるは、夕暮の風身にしみて熱氣の再發せしにはあらざるか、病後の身の殊更に注意せでは叶ふまじきに」と氣遣しげに夫の只管我顏を見詰めゐるに、咲子はハツと胸轟きしが、思ふ心をさとられじとさりげなう夫を見あげつ、「否とよ、あまりに海の景色のおだやかさ、夕の雲の美しきに病もとみに忘られて、胸の中のすが〳〵しう覺ゆ侍るを、いかで熱氣の再發致すべき、露み心勞し給ふな」とつとめて晴やかに故とならぬ笑を見せたり。夫はやゝ心落いて弱々しき咲子の身を己が腕に支ゆつゝ、「實に夕の海の美しさよ、相摸の連山夕榮の雲に彩どられて、遙かかなたの島々は烟るが如く見ゆ、よせては返へす沖津浪の雪かと斗り巖にたぎち碎くる美觀、實に心ゆく景色なる哉」と捲莨の煙豐にくゆらしつゝ、餘念もなう眺めいりぬ。

あはれ楽しと眺むる人の心の羨しさよ、とはに替らぬ相模の山々、昔ながらの津々浦々、袂に通ふ松風も妾の身には皆涙を添ふる種なるに、とまた今更懐舊の涙せきあへず、苦しげに胸おさへて咲子は力なく首垂れぬ。夫はいたく打驚きて眼をみはりつ、「いかにせし胸の痛の再びおこりしにや、さらばとく旅館に歸りて休み給へ、只一間に閉ぢこもりてあらんよりは涼しき濱風に吹れつゝ、心静に磯遊びせんも一興ならんと、常ならぬ身を強ゐて我誘ひ來しはあしかりき」と悔るが如く只管妻の上を氣遣ひぬ。その優しき程咲子は胸を刺るゝおもひ。嫁ぎし日より物優しう、情もいとゞ濃かにて何かといたはりくるゝ夫の心の有難さ、勿体なしと思ひ乍らも、尚それに報い得ざる妾の精神のあさましさ罪深さ、許させ給へと心に詫るかたはらより、涙静なる夕べ夕べ、かしこの濱邊此處の磯に、袂つられし戀人の面影またも浮び出で、心は千々に亂るゝなり。

（中）

朝の程より空かき曇りて盆くつがへすが如くふる雨に、磯傳ひする人影なく、波さへいとゞ荒れ増りて、岩にたぎち砕くる音虚空に響く物凄さに、旅館の内は静まりて、四邊は只浪の音風の聲に包まれぬ。その騒しさに引入られて咲子の胸はさながらかき亂さるゝやうの心地せしが、強ゐて食後に一ふろ浴び、湯上り姿美しう深き愁思を胸に秘めつ、石鹸、片手に部屋へ歸れば、襖の内にどうやら客あるらしきけはいなるに、しどけなき姿笑はれじと裳の亂れつくろいて襖開けば、夫の例ながら物やさしう。「咲か、今日は雨風吹きすさびて何ならぬ身も心結ぼれて楽しからざるに、病ある御身はさぞや胸苦しからめと思ふ折柄、かねて旅館のはしための噂に聞し富山殿の、折よふ此の家におはし給ふよしきゝて、その妙なる琵琶の音にせめてはうさをまぎらさむと、人して此の座へ招き參せしなり、御身もとく此方にいりて聞き給へ」と夫の言葉に、いそ〳〵と進みよりて何氣なう見上ぐる法師の顔。あー、あー、その姿こそ昔に替れど双の目こそ盲てはおはせど……。

＊　＊　＊　＊　＊

高く、低く、疾く、おそく、琵琶の音はいよゝ佳境に進みいりぬ。流れも清き岩清水の思はぬ石にせきとめられて、あへなく別れん悲しき思ひに咽ぶが如く、哀れの音色を人の心に傳ふるかと思へば、轟々たる外面の風を掻き消して四絃一時に高く響き、さながら煩悶に堪へぬ人の子の怒り狂ふが如き音につれて、歌の聲も一節毎に太く高く、撥もつ手の怪しう震へば、やがてまた幽に幽に沈み行きて、無常を告ぐる鐘の音の水底深く滅入るが如く、醒て口惜しき春の夜の短き榮華の夢のあと、忍ぶ思ひにたへざる如く、月澄渡る嵯峨野の奥に袖の時雨の露に咽びて、夫を慕ひし琴の調べもかくやとばかり、妙に悲しき音に引入られて聞く人々の袖搾れば、法師の手も聲も怪しう亂れ、吃と斗り球なき白き眼を見はりて、糸も切れよと強く〳〵琵琶を打ちしが、俄に力なう首垂れて、「の―客人よゆるさせ給へ、我儘なりと咎め給ふとも我

は早や後を繼けん心は失せぬ、胸底深く秘めし思ひの押へんとすれどひらめきいでゝ、曲は亂れぬ、聲は震へぬ、まして聞きゐ給へる方は都の人よと思ふものから、いとゞなつかしうはた恨めしくて……」と愁然と身を背けぬ。聞きゐる咲子の眼は怪しくも涙に輝きて、魘えし如くわな〳〵と身を震はせり。夫はいぶかしと膝をしすゝめて、「惜しき處にてやめ給ふもの哉、まして都の人のなつかしう恨めしとは、なかしき事をのたもふにあらずや、苦しからずは語り聞かせ給はらずや」と尋ぬる言葉にいなみ兼けむ、球なき眼をしばたゝきて、「ようぞ問はせ給ひたる、さらばみ言葉に甘へて語り侍らむ、聞き給へかし、我は元此磯邊より程遠からぬ里に生れて、蝶よ花よと溫き情に包まれて人となりしが、忘れもせぬ十九才の春なりし、ふとせし事の失敗よりさしも榮えし生業は衰へはて、家藏さへも人手に渡りつ、數代續きし我家は亂離荒廢、かてゝ加へて父は重き病の床に呻く身となりぬ。實に果敢なきは人の命なりけるよ、露のひぬまの朝顏さへもまだしほたれぬ夏の朝、誘ふ風さへあらなくに、妻子の歎を後にして父はあへなく消え失せぬ。母は夜毎を泣き悶えつ、己も共にと歎きたりしが、誠や父失せしより七日の後、黄昏の色蒼然と軒にせまりて、うら悲しげなる烏の鳴く音の門邊にさはかしき夕なりき、無常を告ぐる鐘もろとも悲しや父のあと追ひぬ」と聲を呑みしが、涙はら〳〵と襟にこぼれぬ。「我は浮世の運命の辛さに泣きて、憂にたへぬ夕べ〳〵、苔むす石とかはり給ひし兩親の御墓に詣でゝ、思ふ限りを泣きに泣きぬ。」

されど冷かなる世の中に只一人誠もて慰めくれし人ありき、そは振分け髮の幼き頃より親と親との許嫁せし妻に侍る、我は只それにのみはげまされて身に馴ざる生業も辛しと思はで、樂しき未來にあこがれつゝ、三年の春を過し來しに、憎や運命の神は幸なき我等をいづこ迄弄び給ふにや、虫の音老いて吹く風寒き秋の暮、またも無常の夜嵐に戀しき人の父は失せぬ。歎きは同じ人も我も只涙にて過せしかど、遇されざるは日々に、傾く家の樣、己昔しの身ならんには直に我家へ引とるべきにと悔めどかひなく、涙の末に母親もろとも戀しき人は都の叔父に引取られぬ」とばかり首垂れし法師の眼よりは搾られしやうの涙の雫。

折柄颯と一しきりけたゝましき風の聲。

法師は屹と耳聳てしが、「實に訣別の夜も雨風あれて淋しかりき」とまた力なう首垂れつ、「それよりぞ我魂は東の空にのみ走せて、夜毎の夢もまどかならず、只管戀人の上幸あれかしと祈らぬおりばあらさりしに、只一通の文を得しのみ、涙を灑ぎし磯の岩ケ根、誠を語りし松原も去年の姿に異ならざるに、そよとの風のおとづれだになき氣遣しさ、もし禍神の手に捕はれて、文かく事さへ叶はぬにはあらざるかと心も空に尋れ行けば、はからざりき、此處ぞと聞し住家にはその影だにも見えもせで、見なれぬおきなが一人すみぬ。

我は泣きぬ、泣きに泣きて、はては怒りぬ、怒りし末は悶えに悶えて………。

それよりぞ我は酒を友としぬ、されど甲斐なや夢に現に過し日の樂しかりし事ども思ひ出されて、忘れんとして忘られず、ありし名殘の岩根に取縋り身を悶えしは幾度なりしぞ。さるに或日の事なりき、磯づたいを酒にうかれてもどり來しが、思はず浪に足すくはれ、あなやと呼ふ間もあらせず、身を深く〳〵千尋の底へ………。

人々に救はれて我に返れば、落ちいりし折はげしく岩に眼やうちけむ、それより我は盲となりぬ。實に賴み難きは人心よ、其後ほのかに傳へきけば、人の歎をよそにして丸髷姿美はしう奥樣〳〵とかしづかれつゝありときゝぬ。其折ぞ、我はかへりて目盲なりしを喜びぬ、僞多き彼の女の姿を、再び見得ざるを嬉と思ひぬ」と一句一句に搾るが如く落る涙をぬぐひもやらず、我と我胸かき抱きぬ。咲子はあるにもあられぬ思ひ、人目なくば膝に縋りて、君の上のみ忘るゝ間なく思ひ續げつ、悶に過せしこの二年のうき思ひ、辛き事ども語りあひて、思ふさま泣きたしとおもふ心の止めあへぬ程なれど、悲しや今は人妻の切なき身なるを、許させ給へと心に詫てよゝと斗り顔をそむけて咽びいりぬ。

（下）

「ゆるさせ給へ潔の君」と人なき暗の一間の中に、咲子は身を投げ伏してもろでに胸をつかみもだゑつ、今ぞさめ〳〵と泣くなりけり。はげしかりつる雨は晴てあけ放せし小窓より、月は弱々しき光を斜になげ、病る咲子の面はいやが上にも青白う見ゆるなりき。彼は淺ましう替りはてたる戀人の姿を心に描き、その血を吐くばかりの怨みの言の葉思ひ出ては、さながら鋭き〳〵刄もて胸ゑぐられたらんやうの心地しつ、せめて只一言なりと聞ゑあけてみ心慰め參らせたしと心はあせれど、身は人妻のかゝる事思ふてさへならぬ身なるを思ひては、涙はあやなくあふれいでゝ、眞に身を切るにもまさるなりき。

暫くして苦しき胸に袖をまき、窓にすがりてつと立ちぬ。哀れならずや眉の邊は限りなき煩悶の雲に閉されて、鬢の後毛はら〳〵と青白き頰に亂れつ。

やがて物はかなげに茫然と海邊を眺めぬ。岸打づ浪は轟々と雷の如く高く響き、巖に碎くる潮の花は夜目にも白う、後の山には颯々たる松風のさながら人の心を搔き亂すが如くきこゆるなり。咲子はまたも涙に咽びつ。思へば實に人の世は夢なりけるよ、都の叔父に引取られて心落いしも暫しの間、心よからぬ伯母に隔てられて、朝た夕べのうき思ひに袖の時雨の晴まもなう、また今更に幸うすき身をかこちしが、哀れと見給ふ人のありて、我方へとのみ言葉に親子もろとも身をよせしは、春まだ淺き彌生の頃なりき。惡魔は猶も双手をひろげて我等親子を包みけむ、花散りがての夕より心地すぐれずとのたまひしが、母は俄に重き病の床につきぬ。うきの數々語りわいていねがてに明せしある夜の事、母はか細き手に涙を拂いて、縋るが如く賴むが如く、妾を仰ぎつ、の―咲子、過る日あるじの君の我病を訪せ給ひて、是非に御身を我子茂にたまはらずやとのたまふに、我はいたく打驚き再三いなみ申せしかど、是非に〳〵とのたまふに恩と義理とに返す言葉はなくてやみぬ。あはれ我生涯の願ぞ、まげて主の言葉をうべなひくれずや、御身の答へ一ツにて我は此世を去らんのみと、泣き伏せる我が脊をなでつ絕いる斗に咽び給ひき。

かくて幾夜を涙にあかせし末、妾は遂に人妻とはなりしなり。

花のあした月のゆふべ、雨風すさぶ夜はまして胸のなやみに悶ねつゝ、過来しこの二年は辛かりき悲しかりきと思ひ出ては、また更に今昔の感にたへで、よゝと斗り漏る泪を袖にかみしめ、物狂しう身悶ねしてさめ〴〵とふし沈みぬ。

折柄轟々たる濤の音にまぎれつゝ、音もすみ渡る琵琶の調べの、雲なく高きみ空に響きていづこよりか通ひくなり。只一筋の糸の音に、千萬無量のおもひをこめて…………。（終り）

平和

池田きぬこ

（一）

それではどうあつても、玉井へお嫁きかね。と慈愛こもる母に、二たび三度おし問はれても、かたき〳〵決心はなか〳〵動かず、はい如何しても西田は嫌でございます。といづれ、不孝とはしりながら、一生の幸、不幸をきめる大事の瀬戸際に、孝をつくさんがため、このまざる縁を結んで生涯不愉快にすごさんは、忍び難きこと。

一度は決然ことはりしものゝ、さすがその夕は落ち来る涙せきあへで、ほんに有がたい母ア様のお心、可愛いと思しめさばこそ、少しも不自由ない良い家へ嫁入らせ度、京都でも五本の指に數へらるゝ、西田の奥様といへば、立派なもの、誰に恥かしいこともないのに、嫌だとは可笑しいぢやないか。とおつしやつたのも御無理ないこと、けれども私はその西田の奥様が嫌でございます、母ア様私はどうしても玉井へ參ります、どうぞもう世にないものと、御思ひ下されば、おあきらめもつきませう。不孝の罪は幾重にも御許し下されて。と陰ながらお詫したる翌々日、やう〳〵母も我を折つて、玉井へ嫁る事ときめぬ。

軒端の白梅匂ふその月の初め、目出度玉井家へ嫁づきし晴江。夫婦の外に小姑なく、舅姑なくほんの水いらずの二人暮、その上夫宏は天性磊落な、義のかたい、今時の青年には、珍らしき人にて、晴江を又なきものと愛みぬ。

去年十一月三日、目出度佳辰と日を同じうして、しかも太陽ならねど、日の出と共に生れし柳川子爵の秘蔵娘美知子の誕生日に、今出川の邸に催されし、盛なる園遊會は、端なくも玉井宏が晴江を娶る媒となりしなり。宏と美知子とは乳兄弟、晴江と美知子とは、小學時代よりの親友といふ縁より、宏と晴江とは毎日のやう、柳川家にて相見たりき。然して、この間に晴江の少さき胸は、美くしき清き戀を生じて、浮世の果敢なきさま、煩悶、懊惱、あらゆるらだねは、神々しき晴江の胸にわだかまりて、こゝに初めて人生のゆううつをさとりぬ。生れて十九年初めて戀を知りそめてよりは、夕にも、朝にも、美くしき心を苦しめぬ。

さけすむなかれ、戀にもだゆる少女を。

神聖なる戀は、この少女の心をもだゆの内に清うして、遂には、美くしき〱浮世の至業を作らしめん。かくて、晴江は満身の愛を宏にさゝげつ、宏も同じ思ひに、あこがれて、相愛の情いよゝ美はしう、愛の神は二人の間に、白き百合の花を與へて、その愛を永へに、その契りを堅う〱結び玉ひぬ。宏の心は、やがて晴江の兩親に通じられて。晴江を見込みて、薬家よりの縁談も、いや〱の内に破談となりて、遂に美はしき戀はなり、かたき〱契りは結ばれぬ。かくて、晴江は母のすゝまぬ縁の下に、妻とよばるゝ身となりぬ。

限りなき愛は、うるはしき名の美的生活の下にあふれて、玉椿の千代八千代は物かは、二人の間の睦まじさは、近きあたりの人の、鴛鴦の夫婦と、仇名せるにてもしらるべし。一年立ちし此頃はくしや、母の面かげ日に〱和らぎて、やがて三月の後には、初孫のいとしき顏みられむ、何はともあれ、体が大切なるぞ、夜風はあしゝ、時候のかはり目、かぜなどひきては。と何くれとの世話扱ひ、これはた美はしき愛の一端ぞかし。

(二)

きのふ今日はいと暖かく、のどけき好天氣に、櫻もさぞや咲きそろひけむ、あちこちに杖を曳く花見客も見ゆて、世は花鳥の好時節となりぬ。晝過ぎより、今出川の實家をとひしかへさ、晴江は今しも寺町にさしかゝりぬ。とみれば十歩ほど前に、聲高に話しあひゆく書生風の女二人、こは同窓なりし友にて、美人とお轉婆との名、誰しらぬ者なかりし村上糸子と晴江の親友たま子とにてありき。「ほんに嫁な方ですよ、好い家へお嫁入りできるのに、自分からすゝんで、身分を下げるとは、旦那様も萬事に不都合でせうれ、奥様と位が異ふから、オホヽヽ」「でも貴女、玉井さんは實に良い方ですよ、親切な、お優しい、その内に凜とした所があつて、晴江さんが、お見込みなさつたのも無理でありませんわ、いくらお薬商でも、人がわるけりや仕方がないわ」多摩子は氣の毒げに、かくこたへつ。「それはまアそうですれ、けれどもほんとに、……同じ級(クラス)であつた人でも、卒業したら急に地位がかわつてれ、それ阪田さんは、京都でも指折の谷村様へ大層なお仕度でお嫁入りなすつたのに、オホヽヽ思ひ出しても可笑やら、お氣の毒やら、自分はそれで満足してらつしやるのでせうか……」「まア貴女ひどいわ、あんまりだわ、若し陰できいてらしつたらどうなさるの」「オホヽヽヽきいてらしつた方がいゝわ、以後の見せしめで、我々の同じ卒業生に、あんな怪しい人があると、耻辱ですわ」。學校にありし時より、兎かくに中あしき糸子の、自分に對する悪口を、相變らず道にて語りしを、きゝし晴江の胸の中、いかばかり悲しかりけむ。夢心地のやうに家に歸りて居間に走りいるやよゝと泣き伏しぬ。

友達のそしりは、かれての覺悟なれど、あまりといへばあまりの情なき言の葉、洋裝に和裝に、美くしく着飾りて、出るも車、入るも車の、人目羨やましき薬家の奥様となりたきは、誰しも同じ人情なれば、我からすゝんで、俗吏の妻となりし異なる希望を、お笑ひなさるは無理もないことなれど、あんなに悪口なされずともよいもの、ほんに恨めしい友達のお心、きけば、あの糸子も來月は西田さんの許へお嫁きなさるとか、西田さんもどうやら、汝に面あてだろうと、今日母ア様のお話あつたも、ほんとだろう。

いづれ近い内には、おかれもちの奥樣と仰がれる方と、私ごとき者とは、なんで比べものになりませう、ほんに仰しやる通り、夫は地位のひくい者なれど、私にはすぎた配偶。腐つても、玉井宏の妻として、世にある間は、決して〳〵貴女らのお顔にかゝはるやうな事は致しません。ォゝそれはそうと、もう旦那樣のお歸り、私とした事がつまらん愚痴に、御飯の準備もつい忘れて。と思ひ出したやうに、柱時計ながめつゝ涙ぬぐひて立ち上りぬ。

瓦斯の袷に、大島紬の春生羽織着ながしたる宏の年頃は二十五か六、これが夫とよばれる人とは見えぬくらゐ、「弦齋の食道樂が發行ので、買つてきた、チンともやう〳〵手にはいつたからそろ〳〵實行しやうかれ」「オヤそうですか、それは結構でしたれ、まア中々分りやすく書いてありますれ」讀書ずきの晴江は宏のもち歸りし食道樂を手にとりてよみぬ。「芋料理の梅干あへ、田舎豆腐なんか、一寸よいだろう」「そうですれ、ア恰度お芋がありますから晩のおかずにしてみませうか」「そうだれ。僕も手傳ふよ」。宏も共に臺所に下りて、料理法の研究に餘念なし。あはれ、家庭の平和も、せまき臺所にみちて、山海の珍味にも及ばぬ家庭料理は、やがてたのしき夕食の膳に上らむ。

（三）

ふた月すぎし初夏の半ば、五月雨降りつゞきて、庭の森の葉うつ、雨の音靜かなる朝まだき、晴江は恙なくお產の紐ときぬ。しかも玉の如き男の子に、宏の喜悦はいふまでもなく、母の喜び、親族の慶賀、常より平和なる玉井家には、のどけき春の光みち〳〵て、いよゝ溫かき家庭の基はきづかれぬ。

明けし年の秋、宏夫婦は今年二つになりし芳雄をつれて、箕面山に楓を狩りぬ。瀧のかへさ、美々しく着飾りたる商人風の男と共に、こなたへ來る女をみれば、昔の書生風はなけれど、まがふ方なき糸子にてありき。二人はいといぶかしく思ひぬ、富豪の奥樣となりし糸子の俄にかはりし姿のあやしさよと。

その後、たま子の口より糸子の消息は、委しくきかれぬ。げに糸子は、晝夜わかたず、祇園に先斗町に、遊び狂ふ夫西田一也の放蕩を、見限りてわづか三月の後、我から望みて離別を乞ひしよりは、そこゝとあられもなき、浮名を流して、果ては神戸の某とよべる貿易商の妾となりぬ。一時は西田の奥樣とよばれて、多くの婢僕にかしづかれし糸子は、人のいみ嫌ふ賤しき身となりて慈ある父母には見捨てられぬ、親しき友には見離されぬ、一年のむかし晴江の煩悶せし一時の不幸は永遠に幸となりつ、初孫を得し母のよろこび、聟のやさしさに感じて、一也と糸子とをけなしぬ。友はみな、晴江を羨やみて、糸子をそしりつ。御新造樣、奥樣と、たてらるゝことはなけれど、圓滿なる家庭に、錦の夜着うるほすこともなければ、人しれぬ奥深き居間に、くやし恨めしの涙に咽ぶ事もなし。（終）

未掲載秀逸の部

▲天才　赤坂　山村くら子
▲袖の露　福島　白川流子
▲望の星　小石川　中川きよ
▲洋行がへり　本郷　井上芳子
▲小夜嵐　横濱　岩田佐保子
▲名なし文　下野　神山美代子
▲涼夜　すみれ女史
▲猛虎　信州　春江女史
▲わりのさすび　むらさめ
▲秋扇　横濱　加川一枝

▲はらから　岐阜　大村落葉
▲獄中の父　小石川　中田久子
▲緑陰　堺　一ノ瀬はつ
▲一輪ざし　秋雨女史
▲かたわ車　京都　愛濱女史
▲落魄　伊勢　三谷はな子
▲うつせみ　水橋康子
▲紅葉の一枝　近江　青山せい
▲磯わらし　久留米　田中きく子
▲姫松　白ゆり



天人？惡魔？ 女性の涙 花すゝき

失戀詩人

母なる人の縫ひ給ひし、新裁の單衣を着て、心のすが／＼しうなりたるわれは、日曜の一日を家に籠もりて、あだに過ごすことの惜しく思はれければ、唯一人、杖を東郊の秋に曳きけれ。顧みれば、舊城は空高く聳へて、綠の色ふかき並木松の間より、ちらほらと見ゆる白壁の、さながら眞帆の如きところ、夕陽照り添ひて輝きわたりつ、その左手には、甍、煙突、堂塔、などあらゆる建物、打ち連なりて、そこには富の子の、百萬の貧兒を威嚇しつゝあるを思はしめぬ。

われは、その都のさまを眺めて、何となく忌はしき心地しぬ、あはれ、わが心は都會のいたくも暗くして、一道の光明をだも見ることを得ざるを厭ひつ、寧ろ郊外の寂寞を好むやうになりぬ、そは、わが理想の、とても汚なき都の塵の中にては、遂げ得らるゝときなければなり。

嗚呼、世よ、都會よ、などてか恁うは打ち擾れたる、詐欺、姦淫、爭闘、矜驕、榮華、奢侈、あらゆる不義の二字を冠せる罪惡を、その懷中におさめつゝある都會よ、世よ、魔神の冷やかなる手より逃がれて、淨けき慈愛の神の膝下に來れ、嗚呼、早く暗黑なる眠より醒めて、光明ある理想の花彩國に來れ。

くさ／＼の空想に耽りたるわれは、しばしが間われあるを忘れたりしが、遠き／＼田舍の方にあたりて、あやしき獸の聲の聞ゆるに驚き、忽然として吾に返れば、われは悄然として、ひろき原野の上に佇み、空なる想に耽りつゝあるなりき。かくては、わが散策に出かけつる甲斐のなければと、われは再び歩を運びぬ。

日はや、低うなりたれども、未だ全く暮るゝにも到らねば、蓬々たる草をふみしだきて、猶はも奥ふかく進みぬ、あはれ、茫々として果てしもなき此の廣野の、いとゞ麗はしき綠の色に吸收せられて、わが精や宙にさまよひ出でけむ、一步は一步より心遠くなりて、さながら、夢みるらんやうなる思ひのしぬ。

＊＊＊

秋の日の落日は朧々たる光を放ちて、一時その殘落を勇ましうしぬ、われは馴れぬ歩行にいたく疲れて、今こゝに蓬々たる草上に座して、しばしの休憩に息を繼ぎつゝあるなり。

曾ては紫の色に匂ひけん菫の花も今は跡なくうせて名も知れぬ草花の茂りあひて自然の錦を織り成しぬ。顧みれば、一つの蜻蛉、何處よりか飛び來たりて、名も知らぬ灌木の枝にとまりつ、星のごとき美はしき眼を夕日にかゞやかせて、きら〳〵と反射せしめたり、われは、その何の苦悶もなく、煩惱もなき有様を見て、いたくも卑しき動物の、心の中に羨ましうなりぬれば、寧ろ世を捨て、此處等わたりに來らんかとこそ思はへれしが、つら〳〵と考へ見れば、そは、餘りに愚かしう思ひなされつ、怫然として、衣の袂をぞ拂ひたる。

あはれ、西行よ、兼好よ、ショペンハウエルよ、他のあらゆる厭世家よ、冷やかなる長夜の迷夢より覺めよ、あゝ、われ悟りぬ、いはゆる厭世なるものは何ぞや、これ不平の聲にあらずや、失意の響にあらずや、目を擧げて見よ、耳を欹てゝ聞け、悟り顏なるかれ等の眼には、常にうき世の榮華の態を映しつるなりかれ等の耳には、恒につみ人の歡笑の聲を受けつるなり。しかも、猶は且つ、冷然として社會の寰外に遁れ、人間の世界を離れたりと云ふ。愚かしきかな、厭世家。

世の何處に苦毒の充ちたるか、人の何處に害惡の蔓れるか、善人は果たして衰へしか、惡人は果して盛れるか、聖靈は果たして亡さぼれしか、肉慾は果して活きつゝあるか。否、否、あらゆる不義は皆滅ぼされたるなり、あらゆる道德は皆活きつゝあるなり。

迷へる者は聞け、幾萬の日子を費やして、やう〳〵に築きあげたるジエルサレムの宮は、壞ちてこれを三日に立て得るにあらずや、人の心の中に信だにあらば、山は動かされ、河は干さるゝにあらずや。瓶の水は葡萄酒となり、薔薇の花は無花果の實を結ぶにあらずや。

人よ、世の、罪の子よ、惡魔の子よ、失戀の子よ、不平の子よ、早くその肉躰を殺し、再び活きて靈魂によりて歩め。そのとき、何れの處にか五濁の惡世あらん、何れの處にか、十逆の凡夫あらん、老よ、病よ、死よ、これ何の毒霧ぞ、貪よ、瞋よ、痴よ、これ何の迷雲ぞ。

されば家あるものは歸れ、妻子あるものは慰められよ、そこには蜜房と蜜とありて、汝が食ふに打ち任しなむ、そこには沒藥と薫物とありて、汝が手に採りて撰ぶに聡しなむ。げに家庭の快樂は、人をして樂天家とならしむるものなり、不平、失意、沮喪せられし涙の子の、妻と子とによりて慰められて、忽ちに笑の子となりし例は、此の世に少なからぬを見ずや。

吁々、圓らにして玉の如き腿、積みかさねたる麥の周圍を、百合もて繞らしたるが如き腹、二つの小鹿の如き乳房を持てる女よ、汝によりて家庭の圓滿なると否とは、決せらるゝ場合なしとせざるなり、されば女よ、世のあらゆる女たちよ、われは御身に、多くを望まざるを得じ。

仰げば空は奇しく輝きわたりて、夕雲の金色に染めなされたるが、西のみ空を蔽ひ盡くしぬ、日はも早や虞淵にか沒したりけむ、閃々たる餘光も何時しか見えずなりにき。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

われは立ち上りつ、茫々として草の煙れる果に、都の電燈のきら〳〵と輝けるを仰ぎつゝ、道なき道を踏みわけて行くことしばらくなりしが、やがてとある小路に出でぬ、何處の寺院にて撞くやらむ、いとも哀れなる鐘の音を聞きつ、蕭然として夕ぐれの天地の壯大なるを觀じ、人間の能力、意氣の豆よりも小なるを思ひぬ。

されど思は猶は、家庭をつくる根源たる女子の上に在りき、あゝバイロン、シルレル、ゲーテ、これ等錚々たる大文學者大詩人すらも、みな婦女子の爲めに、一ときその肝膽を砕かれしにあらずや、われは殊に大詩人ミルトンと、その妻マリとの間に於ける、家庭の不和の、その源、多くは女子に在りしことを思ひ、愴然として心の中に歎じたりき。

あゝ、男をして功を成さしむるも女なり、業を失はしむるもまた女なり、恐ろしきは女なるかな、頼もしきも亦女なるかな、思想こゝに到つて、われは心中大に亂れさわぎつ、迷雲に胸をとざさるゝの感ありしよ。

されど〳〵、やさしき女のみを責むる勿れ、その罪はまた男子にもあるなり、か弱き女のみを咎むること勿れ、その失はまた男性にも多きなり、されば、われは、家庭をして圓美ならしむるには、唯一の鋭き利器あり、

そは愛情といふ怪しき靈の活動なるを思ひぬ。あゝ世の血なきものよ、涙なきものよ、科學者よ、哲學者よ、宗教家よ、平和、安慰の大靈湖に泛ばんとするものよ、皆來りて愛の甘き蜜に醉へよ。

かくてわれは。乾燥せる哲理の、わが心を慰むる能はざるを悟り得つ。嬉然として腦中に笑を含みぬ、あゝ、われ迷ひしかな、思へば寔に昨は非なりき。

纏まりなき空想に胸を痛めしわれは、慈愛に富める母のみ心を有りがたく思ひつ、新裁の單衣を撫して、その高恩に泣きぬ、されど、かくてあるべきにあらねば、蒼茫なる暮天を眺めつゝ、幾たびか愛、愛と叫びて、なつかしき家路へ急ぎぬ、日は早やまたく暮れ果てゝ、西の空にきらめく星かげ清らに、遠き〳〵未來の希望を示しぬ。

初戀

宮城野女史

「まアさう交つ返さずに聞き給へ、僕は今日まで何れが初戀で、何れが二番目か三番目か注意もせずに過ぎて來たんだ、勿論僕は戀は二度す可らずなどいふ偏屈な議論には反對だ。平生實は恁う信じて居る、自分は燧石のやうな物だ、戀は火のやうなものだ、打燧子が燧石に觸れゝば火を發すると同樣、相手次第で戀は燃立つ、打燧子は必ずしも同一でなくともよいと同じく、相手は幾人でもよいが、唯相手の所作が、打燧子が燧石に於けると同じ所作を要する。マ一言すれば所謂相手變れど主變らずと言つたやうなものだ。既にファストラーブ則ち初戀といふ言葉がセコンドラーブサードラーブと必ずしも戀は一度で終るものでない事を證明して居るではないか。

東照宮の一の鳥居の石段を下り左へ三軒目が高岡といふ人の家で、其家は小士族上りの百姓、先づ富りといふ程では無いが、田畝も一寸持つて居て何不自由なく暮して居た。長男は何でも監獄の看守をして居て、早や妻

君もわつて色の眞黑な丈のズツト高い男であつた。其妹のお褄さん、之れが即ち僕のファーストラブといふ筋だ、兄に似て丈も高く、色も淺黑い方であつたが、僕は何故か非常に此娘が氣に入つた、其癖年も確かに二つ位は年層であつて、此時十五僕は十三と覺えて居る。高岡の家から七八軒目、一の鳥居から左へ二軒目に母方の親類があつて、お住といふ三味線の上手な娘や、お近といつて松魚〱や紀伊の國などを踊る娘や、お高と言つて僕と同年で、男髷に引詰めて結つて竹馬や凧揚げの上手な娘も居た。此親類へお褄ちやん……さう〱此頃確かツーちやん〱と皆が呼んで居た、其ツーちやんと懇意になつたのは此親類の家で、ツーちやんは裁縫をお住といふ娘即ち僕の伯母の處へ習ひに來て居たのだ。

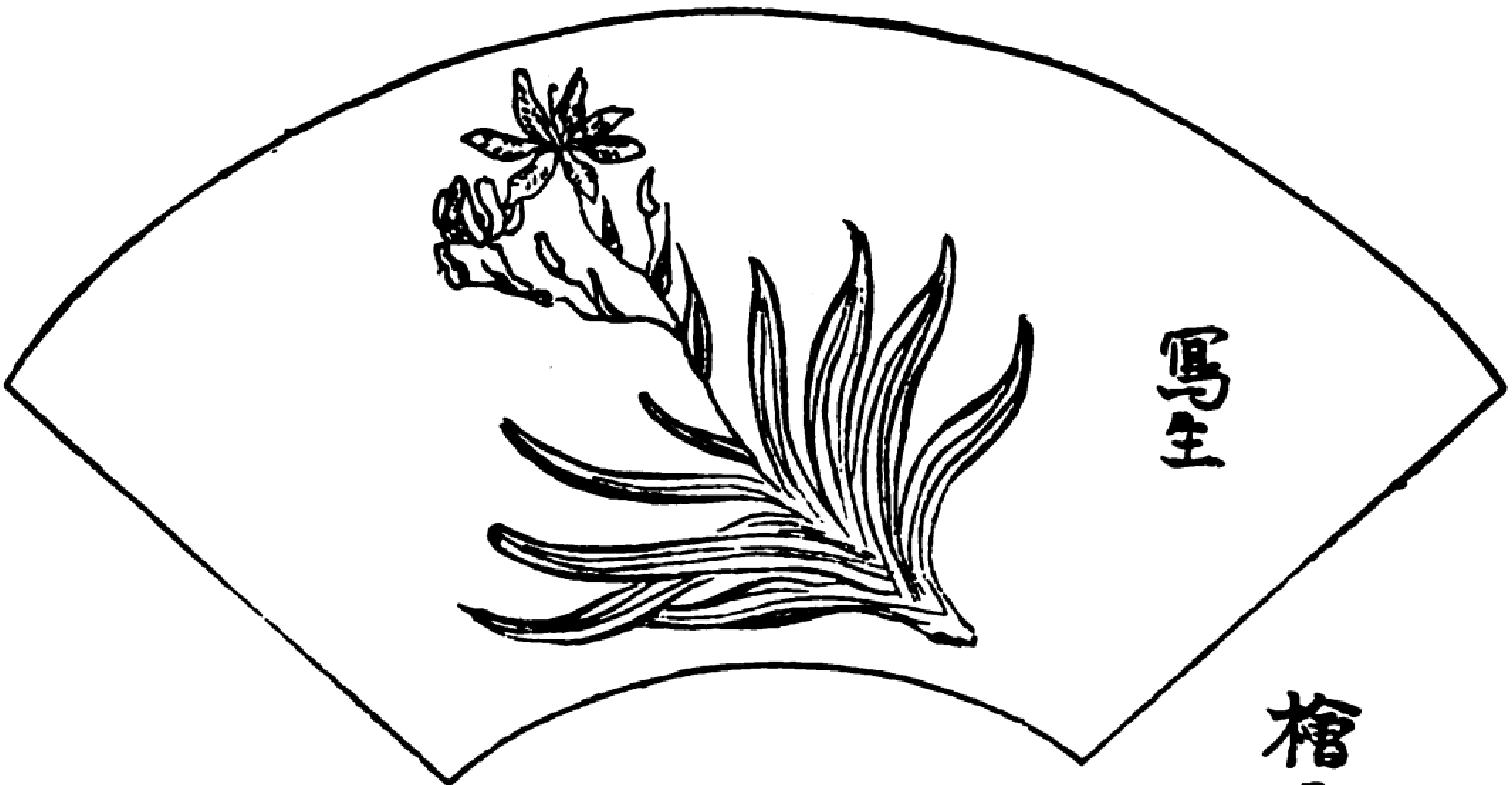
僕はツーちやんの言ふ事ならなんでも聞く、ツーちやんも亦僕の爲めなら何でもしてくれる、或時裏の稲荷様の傍の姫胡桃の下で遊んで居て、大きな毛虫に襟元へ入られて泣き出すと、ツーちやんは縫つて居た着物を驚いて庭へ投り出して、然も跣足で飛んで來て、平生名を聞いてもキヤッと叫んで飛上る程嫌ひな毛虫を、少しも臆せる様子も無く指先で摘み出して池の中へ捨てゝ呉れた事もある。僕も大勢の惡太郎がツーちやんの裁縫の歸途を要して通せん坊をして困らしてやらふとの相談に反對して、衆寡敵せず額を打割られて血塗になつた事もあつた。夫れで大人に御夫婦のやうだと言はれると、互に眞赤な顔をして逃出すが、何故とは無く心の内に新に王冠を戴いた戰勝者のやうな氣がした。十三の年の暮から十四の春へ掛けては最早毎日ツーちやんの顔を見ずには居られないやうになつた。夫れも唯一度其顔を見て、互にニッコリするといふ丈けである。毎日毎日學校から歸ると、東照宮の一の鳥居の傍の天鵞絨のやうな芝の生へて居る土手へ遊びに行く、恰度此土手が高岡の家の前になつて居て屋敷中殘らず見下す事が出來る、此土手に立つて口笛を吹き鳴すと、ツーちやんは窓からか庭先の木戸からか、乾度顔を出してニッコリして呉れる。日曜日などは母から握飯を拵へて貰つて通つた。若し一寸でも姿が見へない時は親類の裏から沼へ船を乗出して高岡家の裏へと廻る。眞菰をガサ〱と分けて、何やら水草の花が白く一面敷詰めたやうに咲いて、土地詞で柳雜魚といふ一寸斗り

の小さい魚の一群が澄んだ靜な水に戯れて居るのを驚かして、船を大きな柳の下、白蓮の花が風にわなゝいで、人を眠に誘ふやうな香を送つて來る邊に乘り入れて、豫て用意した釣竿を取出して、先づ浮標下の深淺を定めて、そろ／＼と蓮と蓴菜の葉の隙間へ綸を垂るゝのである。ツーちやんが家に居る時は必ず此の柳の下へ來て吳れて、其柔しい眼に笑を湛へて樂しさうに浮標を見ながら、いろ／＼な話をするのが常であつた。自分の此時の嬉しさは、其後味はふ事のあつた戀人に遇つた時の嬉しさとも異なつた、二度繰返す事の出來ぬ嬉しい感に打たれて夢のやうになつてしまうのであつた。ツーちやんは能く其裏の畑へ出來た玉蜀黍を折つては船へ投込んで吳れた、梨子を剝て吳れた事もある、蓮の實を折つて吳れた事もある。

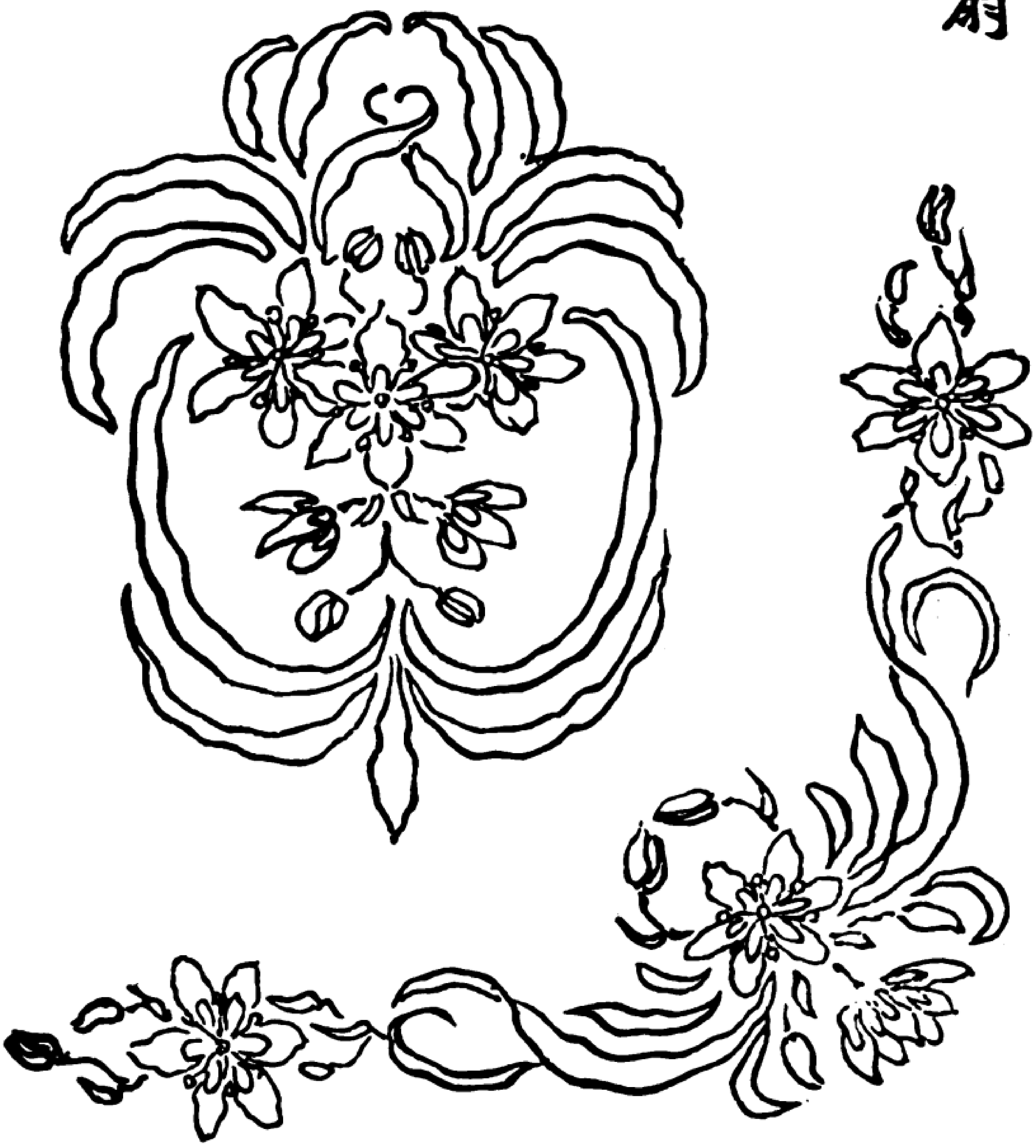
初戀……戀と名づくるが果して適當であらうか、男女互に愛するのが戀であらうか、愛するといふのに自ら程度があるのであらうか、自分は母を愛するよりも勝つて彼女を愛し、彼女は弟を見るが如く自分を愛するに過ぎぬといふ場合があつたとする、夫れは戀と名づくる事が出來るであらうか、或は彼女が自分を嫌つて居ても、自分さへ彼女を愛して居れば戀といふ事が出來やうか、即ち片戀も戀の中であらうか。

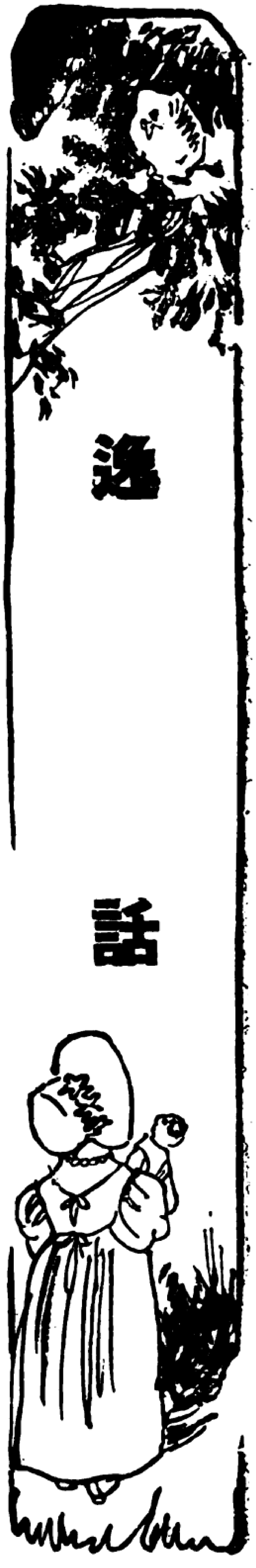
ツーちやんは十六になつた。自分は十四になつた。ツーちやんを慕ふ心は一層募つたのであるが、ツーちやんの自分に對する態度は一變してしまつた。如何變化したかといふに、ツーちやんは今まで友達のやうであつたのが姉さんのやうになつて、口笛を吹いても、裏堀へ船で廻つても、後姿すら容易に見せて吳れぬ、稀に道で逢つても親切に親しく話はして吳れず、何となく素氣無く、冷に、冴え／＼した顏に曇が出て、一寸挨拶したばかりで家へ驅込でしまふ。自分は此變化を見て非常に落膽して、何故に彼の斯く變つたかを疑ひ且つ驚いた

其年の四月、ツーちやんの家の裏の梨の花が咲いて、東照宮の祭禮が濟んで、沼へは蓴菜採の船が澤山に出る頃、ツーちやんはお嫁になつてしまつた。お嫁になつて赤い手柄をかけた丸髷に結つて、紫の風呂敷包を抱えて、片手に洋傘をさして通つた後姿を一度見た。其夫となつた人は警部で、酒家で、氣が荒くつて、髯だらけな醜男で、彼を虐待すると聞いたが、三年目即ち自分が中學の二年級を卒業した年に、彼は產後の肥立が惡るかつた爲め終に亡き人の數に入つてしまつた。自分は此時女といふものは可憫さうな者だと思つた。



檜扇





北極探撿

冒險婦人

高木蔽日

（一）北極探撿の目的

亞米利加の北西の方に住で居た古代の民と、亞細亞の古代の民との間には學者が云ふ通り果して歴史以前の關係があつたであらうか、其證據となるべき事蹟が今以て殘て居るであらうか、とは人類學、人種學及考古學等の研究に身を委ねて居る人々の疑問と爲て居た所であるが、亞米利加博物館では遂に一隊の探撿家を北西伯利に送ると爲つて、今から恰度三年前にモリスケー、ジエサツプ北太平洋遠征隊の代表者で、露國聖彼得堡學士會々員たるボゴラス氏夫婦ジヨーチエルソン氏夫婦に之を依囑し、之に案内者、通譯者、奴僕等を隨行せしめて、目的地へ向はしめた。そこで此一行に二年半の間に一萬五千哩、即ち日本里にして先づ凡そ六千二百里を跋渉し、昨年の暮に旅行を終り米國紐育へ到着して其復命を完うした。中にもボゴラス女史とジヨーチエルソン女史とは文明國の婦人で此の如き探撿旅行をしたのは殆ど空前の事だといふので、甚く社會の注意を喚起したと同時に其學術界に致した効績は永く忘れらるゝことがなからうといふことに爲つた。

此探撿隊の一行が一萬五千哩を旅行した交通機關は何であつたかといふに、勿論汽車、汽船、電車なぞいふ樣な便利なものではない、小舟とか、筏とか、狗の曳く橇とか、馴鹿とかいふ樣なものである。即ち小舟や

役は海や川を渡り、橇は雪の上を走らせたのである。これだけ擧ぐれば北西伯利の吹雪の中に、想像も及ばぬ艱難辛苦を嘗めて學術上の探撿の爲に、殆ど身を犠牲に供するも敢て辭せざる程の決心を以て旅行して居る一隊が眼の前に顯はるゝ樣な心地がするであらう其一隊の中に孱弱き而も勇氣ある婦人が防寒衣に身を包み其夫を助けて苦艱を共にするのがあるといふことを想へば、何となく其人が床しい樣に、哀れな樣に、又健氣な樣に考へられて自然同情を表さずには居られなからう。で、一行は夏の間は誠に氣候の中和を得て爽快な感を抱きながら目的地に進まうとすると、忽ち恐るべき深霧の爲に閉ち籠められて二日間も旅路に彷徨ひ、それで一哩も進み得なかつたこともあり、又五十六日の長い間自分等一隊の外は人間の顏を見なかつたこともあり、ボゴラス女史の如きは單身一小村落に投じて十四箇月を送つたこともある。

（二）砂糖を以て土民を導く

そこで此一隊は各々別々に其探撿を試みたので、ジヨーチエルソン夫婦は始終一緒に旅行して居たが、ボゴラス氏夫婦は手を分けて其目的地に向ふと爲り、夫の方はカムチヤツカの北方なる太平洋の沿岸に出ることとゝし、妻の方は白令海峽から三百哩程内地へと入り込むことゝなつた。で、先づ順序であるからボゴラス氏の方の事からおはなしをしませう、氏は太平洋の沿岸に出た時、是れまで白人も曾て見ず、貿易家も曾て知らぬ印度種族の土民を發見した。此民族は甚だ臆病で抵抗力の乏しい(丁度我が北海道のアイヌの樣な)人民で、生活の程度は至て低く風俗は極めて淫であつた其上猜疑心が深いので白人に近づくと皆殺されると思て居る誠に始末に行かぬ人民であつた。そこでボゴラス氏は土民を近づける方便に先づ砂糖を出して其處の子供等に嘗さして見た、すると土民はまだ砂糖の何であるかは知らないが、子供等に侑められて嘗て見て甘いから、コンナ甘いものを與れるものは決して殺人者ではなからうかと始めて安心したといふ事です。此種族は二十一の部落に住つて居て、其の一部落に一軒の家があつて、一家族凡そ二十人位同棲して居ました。だから一寸隣家へ行くと云ても二日位旅行をしなければ行けず、隨て一家族内の風俗の甚だ潔白を闕いて居ることも想像が出來るのである。ボゴラス氏はコンナ中でいろ〳〵と學術上の研究を遂げたのであります。

（三）高價な品物を與へて土產物を求めし事

それは扨置きボゴラス女史の側の探撿旅行はどうであつたかと云ふに、此婦人は中々豪者である、冒險婦人の標本となるだけの事をして居る。女史は其夫と手を分つてから内地に入り込み、マルコヴアといふ一村落に居を定めることにした。此處にはカストの族制を行ふユカギール族が住で居て其地方部落の首府と爲つて居るのが女史の居を定めた一村落なのである。もつとも首府と云へば大層な樣だが、タツタ三十五軒の架木舍（架木舍といふのは材木を蒸籠の樣に積みあげて造れる此の邊一般の家屋なり）がある許りで、とても文明人の眼には人口の多いことは認められないが、土民には其處が倫敦とも紐育とも見えるのだから仕方がない。で、其村の娘子は北極圈帶の以外に在ては都の美人を以て目せらるゝので、表情に乏しい眼を細くし、扁平い鼻をヒコ附かせて得意がるなぞは中々の愛嬌であつて、それでこの邊の人は年内五回此處に行はるゝ市に出て來て貿易を行ひ、それが濟むと各々數百千哩を隔てたる己が村落へと歸つて行く。それゆえボゴラス女史の爲には土民と貿易をするのに此處に店を開くのは好都合であつた。そこで女史は自ら店番をして三人の哥薩克（コサツクとは露西亞の方より移住せし人）を雇ひ、茶、煙草、鐵壺、鍋鑵、小刀、罐詰食品、南京珠などの入て居る箱を白令海の海岸から運搬させ、それで店を開たのである。北西伯利人の口に最も適するものは茶と煙草で、其交易を行ふ價格の原位は二斤半の磚茶に取るので、其運賃が一斤二十仙（約四十錢）に當る所から磚茶一斤は五十仙から一弗、



旅裝したるジョーチエルソン女史

即ち一圓から四圓の相場を持て居ることゝなるのであつた。(磚茶とは茶を固めて煉瓦のごとくしたるもの諸子は大阪の博覧會農林館にて支那製の磚茶を見られしならん、その色少しく黄色にして殆んど瓦のごとし支那より蒙古西北利亞へ輸出する茶は大抵この磚茶なり、而して西北利亞一帶の地。茶を貿ぶ事甚だしく未開人の常として貨幣を以て貿易の本位となさず專らての磚茶を以て貨幣の代りとなすものなり）扨愈々ボゴラス女史の店が開けてからは、女史の苦辛は一通でない。先づ自分の持て來た品物を以て土民の所持して居る品物に代へるのである。斯うして商賣を營で一年を經過した時には空箱が二百個以上に上つて、此箱の中には茶煙草其他の品物の代價代りに交換して取つた八千餘點の珍品奇物が詰込めらるゝことゝ爲つて、それは皆米國博物館へ送らるゝのであつた。で、其珍品奇物は衣類、刺繍、武器、家具、農具の外植物竝に動物の標本である。何しろ茶煙草などを持て來る商人は今まで入込だこともあり、其度に勉めて毛皮許りを求めるのであつたのに、ボゴラス女史はそうでなく、古い襤褸ばかり求めるかと思ふと、一代中にはとても用ひきれぬ鐵製の堅固な壺を與れて、其代りに直に砕けそうな粘土製の壺を求めるといふ風だから、土民はあの毛唐人めは狂人に相違ないといふやうな騒ぎで、狂人を弄ぶ心算か何かで行て來たから、女史の店は却て意外に繁昌した。其結果は驚くべし、女史が一年二箇月ばかりの寄寓を無事に終へて此地を去る時には一萬五千點の珍品奇物を採集することが出來たのである。實に白人が、未開國へ探撿してその土物を得るの方法に就ては大いに研究したものである。

（四）土人の踏舞を見て古事談を集めし事

ボゴラス女史は冬の長い間斯うして滯在して居る中に又最も趣味のあることを穿鑿して居た。それは此露國人に化した土民の裡に數百年の間、口から口へ傳へられて今日に至るまでも廢らずに殘つて居た所の韻文のあることを發見した一事で、此韻文は音樂に適つた長い詩から出來て居て、中には一千句も聯ねて謳ふ樣になつて居る珍しいものがあり、殊に奇異なことは此等の歌は六七百年乃至八百年前、露國人民の歌つた歌であるといふことである。其中の或る歌は一千年前露國へ基督敎を導き入れた聖徒ウラヂミルの功業を讃したものがあり、此歌は恰度スカンヂナヴィア人のエダ歌集と云つた樣に國歌の風を備へて居る。それで恰度エ

ガ歌集が諸威で全く廢れて、氷洲の村落なる白屋の裡の爐邊に行はるゝ樣に、ウラヂミルを讚美した歌は久しき前から露國で禁遏せられて、西伯利の曠野に生き殘つて居るのである。

此處の土民は二百五十年前から露人と接する樣になつたのであるが、此露人は三四百年前露國を去て漸次に東方に進で來た移住民の子孫で、其謳ふ歌は三四百年前其先祖が露國で謳つた歌である。此等の露人がユカギール族と雜婚をして、其古い〱歌を之に敎へ、其結果土民は何の事やら譯は知らずに其歌を謳ひ傳へて今日に至つたので、其歌の中にある「勳爵士」とは何であるか、「王」とは何であるか、「黄金の位」とは何であるか、一切知らずに、無我夢中で、其意味を解し得ぬ言語を驚くべき熱誠の籠つた音調で謳て居る。其曲其調、又妙に奇しく古調を帶て居て甚く人の感を惹くのである。征人の胡笳(征人の胡笳云々とは昔し支那の遠征軍が胡の地へ行つてその地の笛の音を聞いて悲しんだといふ事)を聞て衣襟の沾ふを覺えなかつたと同樣、ボゴラス女史の感情を動かしたことはマアどうであつたらうか。そこで西伯利の曠野を横て彷徨た此等の歌は六百年の後、初て其休み場所をボゴラス女史の蓄音機の中に見出したのである。即ちボゴラス女史は此等の歌を其携へ行きたる蓄音機の中に收めて來たので、其最も興味のあるのは此等の歌に由て人種の幼稚であつた時の事が憶ひ出さる



北極圏外の美女ユカギールの婦人

北米の印度人に酷肖せり

此種族はエスキモー住民より二千哩を隔てゝ住せり

ゝ一事である。此等の古い韻文の古譚は今日尚は北露國の遠隔せる農村に現存して居て、人類學者が及ぶ限り之を集めたのであるが、ボゴラス女史の集めたものに較べては遥に短いものばかりで、之に伴ふ音樂は更に解らなかつたのである、しかしボゴラス女史の研究の結果、其音樂の全曲全譜が發見せらるゝことゝ爲つたのは大きな成功である。

又此等ユカギール族は音樂者で、踏舞の種類も多く、之に伴ふそれ〴〵の歌がある、のみならず老幼皆其齡に應じた歌と踏舞とがあつて媼は媼、娘は娘、各々其歌と踏舞の方式とが違ふのである。又此種族の婦人は古事譚の傳達者で、其譚は露人のではなく全く土民のであつて、長い冬の夜は此土民の婦人は爐邊に集つて其譚を談り、又歌を謳つて踏舞を行るのである。で、ボゴラス女史は其古事譚を六百種程集めたのである。

（五）土中に埋れし家の事

それから又別の方面に向つたヂョーチェルソン夫人はその間夫と共に阿哥克海から北氷洋へ旅行したので此地方は三區に分れ、各々獨逸帝國位な大さがあり、其全體の住民は五千に過ぎないといふことが解つた。

此處の人民はマルコヴアの住民とは違ひ、雪を以て屋根を葺き半分は土中に埋もれ居る木の枝を以て作つた家に住ひ、其家は長い傾斜の急な途に近く、其内に入るには其道から手と膝とで匍匐して、白痴が椽の下を覗くと云ふ體裁で遣らねばならぬ。ジョーチェルソン氏一行七人は此地方を旅行するに八週間一人の土民にも逢はないで、其食物は危く盡きかゝり、剩す所は僅に十日分であつたとは心細い次第ではなかつたらうか此地方を旅行するには冬が最も適當で、狗の曳く橇に乗り、馴鹿の首に小さな鞍を置て、北氷洋旅行者の樣に旅行するのは寧ろ愉快であつて、又雅趣がある。しかし夏は雪解になるから、泥濘でとても一歩も進めない。

旅行服は土民の服で、馴鹿の皮から製したもので、それに靴下を穿き其上へ長靴を着け常衣の上へ長い外套を被るので、其鹿皮は一は毛の方を内側にし、一は之を外側にして二重に用ゐるのである。これは普通の羅紗服よりも寧ろ輕くて暖いとのことである。

（六）探撿婦人の奏功

さて此探撿旅行が學術界に貢獻した効績は少なくないのである。亞米利加に住で居るエスキモー族は亞細亞

のエスキモー族及チユクチ族と歴史以前の關係を有て居り、(エキスモー族とは北極圏に住する人民の汎稱なり、亞米利加印度人は遙に大洋を隔て丶別の大陸に住で居る亞細亞印度人の親類筋だといふ學理上の議論に對し、それに相違ないといふ種々の證據を齎すことに爲つた。で、其效績の大部分が冒險婦人の努力に由て擧げられたといふことは、何と賞讃すべきことではなからうか。其注意深い、其辛抱强い其微妙な腦髓の作用で贏ち得た所は堂々たる六尺の大男が到底及ばない所で、一緒に行た良人等はホンの冒險婦人の爲に番人たるに過ぎない觀がある。そこで此一行が採集して來た品々總計一萬八千餘點の中に就て著しい物ばかり擧げて、亞細亞亞米利加、兩大陸に住で居る人種間に類似の點があるといふことを比較して見ると中々趣味がある。北亞米利加土人の所謂魔人の織た衣服の摸様に見らる丶意匠は矢張亞細亞土人の繪畫の中に見らる丶し、祈禱文の書いてある板、木皮に誌した文字、狩獵の記錄等亦兩方少しも違ひはないし、木や草で出來て居る假面が北米印度人のと寸分の相違がない。又北西伯利で得て來た二千個の象牙其他の獸骨の彫刻物は中々技術の熟練を示したものがあるが、それが皆亞米利加のエスキモーのに類似して居る。又皮製の魔人の太鼓は北米印度人の中に見らる丶粗末な樂器に似て居り、奇態な冠物や魔人風の衣服はスツカリ同じで、藍や藁細工は亞米利加製か亞細亞製か兩方容易に區別が附けられず、裁縫といふも大業だが針仕事は又スツカ



チユクチー部落に發見したる日本の甲冑

り同じで、宗教に關する四百餘種の繪畫＝（東京帝國大學の人類學室倉庫ではコンナのを迷信材料と云て居る＝は双方較べて見ると、其靈なるものを信ずる點に於て同様で、信仰の根原と爲るものが同一であるといふことを證據立てらるゝ材料と爲る。又昔譚の筋が掠奪を中心として居るのは亞細亞の方でコリアク族、亞米利加の方でトリンギット族の中に專ら行はれて居るのも面白い、それから發見せられた金屬武器八組の中に日本の甲冑が一組あつたのは、早くも日本人と交易でもした事があつたか、但しは日本の武人が流れ込で行たものか、何かソンナ事で北西伯利の雪の中に我々の祖先の體に着けた紀念品が殘て居たのに違ひなからうと考へると頗る興味が湧て來る。（實物を見なければ解るまいが、玆に擧た眞寫繪で其時代が判斷せられたならさぞ面白からう。）

又人種の上から觀察してこう云ふことが解つたのは、此探撿旅行の庇陰である。即ち（一）チユクチ族は亞米利加エスキモー族の住で居る海岸地に接近して住で居るに拘らず、北米印度人の體格容貌を有て居て、其昔譚や宗教は全くエスキモーのとは異て印度人に似て居る點が多いといふこと、（二）チユクチよりもモット內部に住で居るコリアク族、カムチヤデール族などの性格は近い白令海岸の住民と違い、印度人の如く皮膚は銅色で、鼻は眞直で、身長は高く、體格も善く、宗教、風俗、昔譚等が全く北米印度人と同様で、言語は印度人に似て居てエスキモー語又は蒙古語とは違ひ平生遊戯を好み、其中の青年は相撲、競走、射的、操槍なとを好で行て居ること、（三）それよりもモット內地に住で居るユカギール族チエヴアンチ族も亦北米印度人に似て居て其隣人と違ひ、家畜若くは馴鹿を使役せず、ドンナ遠方でもテク〳〵歩行し、性質は獰猛で殺伐の風があり、非常に復讐を好で居るといふことなとである。此中チエヴアンチ族は漸次に滅亡に近づいて居るが其中の賢人は『人民の燒ける火の烟の大きく揚るのは空の鳥を黑めて仕舞ふに足る』と云て居る相な、コンナ人種の中にもコウ云ふ遠大な思想を有て居るものがあるから、そう力を落したものでもない。

（七）

最後に一言して置くことがある、冒險婦人の一人ジヨーチエルソン女史は此探撿旅行に考古學上の材料となるべき寫眞を撮るのが其仕事であつたが、旅行前醫科大學の學生であつたので、歐羅巴に歸れば學位試驗を

受ける筈に當て居たのである。人の妻であつて、探檢家であつて、それで學生であるとは何と豪いものではあるまいか。まだ乳の臭の去らない中から戀だのラグだのと夢の樣なことを夢の樣に語り、海老茶の袴の脫げぬ間から鳩小舍の樣な小さな家に樂しいホームを見出したいなど、、末に蹙かまることばかり考て居る人は、チト此冒險婦人の爪の垢でも煎じて侑めたい。ラヴもホームも一概に惡いとは排斥せぬが、何卒コウ云ふ冒險婦人の樣な豪い氣象がほしい。大國民を生む大國民の母たるべき婦人はどこか異た所がある。其異た所が我國の婦人にも欲いのである。先頃露國の陸軍大臣クロパトキン將軍が初て新橋に着かれた時、物數寄に行て見て、唯々モウ其擧止風采に感心して仕舞た、他國へ來ても自由に居るのと少しも相違はない樣な顏色で、鷹揚な中に快活な氣が溢れて居り、身長は低く眼窩は小さいが、何處ともなく大人の風が備はつて居た。コウ云ふ人を生む母は、矢張冒險婦人を出す母と同じ血が流れて居るからだと、イヤモウ心底から感嘆の聲を發した、それと同時に大和民族にも此の如き母が出なくてはならぬと祈念した。夫の冒險若くは探檢の如き事を男子のする事に限て居ると思ひ、汚らはしい職業を帶て海外に渡航するのを婦人の冒險だなぞと考ふるのは間違である。どうかボゴラス女史やジヨーチエルソン女史の事をなまやおろかの事の樣に思はずに、少し顧みて貰ひたのが山々である。

今回の探險に就て主とする處は學術上の奏功如何で在て、旅行中の艱難、其間の生活狀態に說き及ばないのは遺憾であるが是は後日を期して詳說しませう。（完）

佳人遊魂譚

夜窓鬼史

この牡丹燈といふのは明治の落語家三遊亭圓朝が支那の剪燈新話といふ書物の中から拔き出して一篇の人情譚に飜案したものを、漢儒石川鴻齋翁が更に又これを漢文に飜譯したものである。其本は元より支那の怪談であるけれども既に圓朝が飜案して日本的に化したからには徹頭徹尾日本的であッて、決して支那的の面影を遺しては居らない。けれども再び之を漢譯にした時には彷彿として又剪燈新話の面影が浮んで見えるのは又爭ふ

べからざるものである。それは兎に角此の妖怪譚をこゝに引出したといふものはその内容が他の牛首蛇身的の怪談でもなく、狐狸妖怪の禽獸的でもなく全く男女兩性の熱情を寫した處ろが聊か非常識的でないからである故に他の文章の可否教訓の當非の如何は今爰に穿鑿をしないのである。

牡丹燈

享保年間。江戸有飯島某。數世事幕府。館於牛門之外。家亦小康。有女名阿露。窈窕秀弱。風致勝衆。年十七不幸亡母。父納妾酷愛之。妾性狡悍。風波稍起。父厭之使居阿露於柳嶋別業。

享保の昔、江戸牛込門外に飯島何某といふ旗本があッた、此の家に一人の娘、其名をお露といつて容色は十人並に優れて姿やさしく、年も十七の花盛り觸らば散らうといふ風情であッた。お露は不幸にして母親を亡くし、繼母は迎へられなかつたけれども、其の代り父親が側室を納れて之を寵愛したので聊か家に風波が起り出した。そこで父親は是を面倒とおもひお露を柳島の別莊に遣ッて當分父子別居體にして置いた。

▲享保　今より百四五十年前、江戸八代將軍吉宗の治世で幕府の全盛時代。風俗は元祿の如く浮華豪奢を極めた時代ではないがあらゆる江戸式事物の發達した時代であるから、此の飜案の材料を享保時代に取ッたのであらう。

▲旗本　德川將軍直參の士で三百石以上五千石まで采地を有するもの、當時旗本の數八萬騎といつたが實際は二萬位なものであッたさうな。麹町番町、牛込、四谷、小石川邊はすべて旗本屋敷であッた。飯島の家は確か三千石としてあッたやうだが、三千石といへば旗本でも歷々の内、其の歲入からいへば千俵以上あるから今日の經濟からいつても年俸五六千圓の大臣株、左なくも功勞あッて新華族に叙せられた明治の大官位に見てよからう。幕府では老中若年寄と稱する天下の最高顧問官は譜代大名で勤めたものであるが、若年寄以下勘定奉行、町奉行なといふ實際の働らきをする政治上の役人。又は大番頭、側御用といふやうな、將軍

近侍の役人はすべて旗本で勤めたものである。又將軍の側室を出す家も多くは旗本である。江戸幕府の恩寵、否徳川將軍家の恩寵を直接に被ッた天下の寵兒はこの旗本である。天下の御直參といつて二百七十年間の江戸市中に威張り通したものは實に此の旗本である。

▲側室　二十世紀の家庭にあり得べからざるものはこの側室である。而かも十九世紀以前の日本には貴紳の家庭に側室は決して珍らしからぬ事であッた、而かも是は正妻の有無に拘らず。這般貴紳の家には其の主人の健康の許す限りは二人三人の側室があッて。閨中紛紜の素を作つたものである。彼の所謂御家騷動なるものも多くは此般正側兩室の權勢の爭奪から起ッたもので。是は無論本篇には關係ない事であるけれども。作者が側室に筆を着けて、家の風波を示し。阿嬢が別莊に入るの由縁としたのは亦偶然でない。

▲柳島別業　柳島は本所區にあッて梅園の多い所である。當時は別莊といはず、下屋敷又は寮と言ッたもので。旗本の寮は大槪その采地に在ッた

時屬仲春。園中梅花。紅白放葩。一日醫師志丈伴浪士萩原生。觀梅於龜井村。歸途訪阿露於柳島。萩原生年亦弱冠。標致優雅。才藝兼備。父歿後與僕居根岸里。素與志丈熟。志丈雖醫。實輕薄小人。阿諛富豪。得歡心謀活者。此日欲使生亦觀解語之花也。阿露在屏間瞰之。視生之丰采風度。意好之急命婢供茶菓。又薦小酌。志丈欲使娘子面萩原生。娘子羞而不出。强牽手來。紅潮暈頰。流眄含情。志丈侑杯。應酬如合巹之禮。相借親昵。遂不期爲氷。日漸傾。厚辭而還。

丁度其時今ならば三月の上旬梅花の見頃であつた。或日醫者の志丈といふ坊さんが、萩原新三郎といふ浪人と二人打連立つて龜井戸へ梅見に出掛けた、その歸

り途に飯島の別荘を訪ねたのである。抑もこの萩原といふ男は根岸の里に僕を一人使ふて。侘住居をして居る身分であるが。才藝兼備の青年で容貌亦優美なものである。素より志丈とは日頃別懇ですが、この志丈は醫者稼業でありながら、醫術はあまり巧者でなく、寧ろ御辨茶羅な輕薄もので貴顯紳士の邸宅へ出入して、いかゝはしい御相手をするのが能で、妾の周旋料などを貰ッて僅かに生活するものである、志丈は萩原新三郎を飯島の別荘へ伴ひ入れて解語の花を見せたのである。その時お露は屏風の裡に居て、そッと新三郎の姿を垣間見ると。これは實に珍らしい美男子で、當節の言葉でいふとまづ理想に叶ッた人であるから、急に侍婢に言付けてお茶菓子を出し、それから。酒までも薦めたのである。元より志丈の目的とする所ろは萩原生とお露の兩人をして握手せしめんと欲するのであるから、まアお孃さんそんなに羞かまないでチト此方へ御出なさい。といつた樣な按排で頻りと促かして見るけれども、お露は未通女の人目恥しさで、容易に出て來ない。志丈老人もとかしくおもッて自身に立つて奥へ這入ッて無理やりに手を牽いて連れ出した。するとお露は滿面紅を潮し羞靦帶を含むといふ以下本文に有る通りの次第で、まるで祝言の席といふやうな怪しからぬ事をやつたものである。

▲浪人　武士が家祿に離れたものはすべて浪人といふ。浪人といふ語は江湖に放浪するの意ならん。元龜天正時代から行はれたもので。當時戰國の世。國主が敵に亡されて國土を喪ふとその家來が皆扶持に離れて浪人となッた。この浪人が新たに主を得て仕へれば隨分大祿にも有ついたものだがどうかするとこの浪人共が相集つて徒黨をなし或は名家の子孫を擔いて天下を狙ふやうな事もある例令ば大阪陣の如きは其の一例である。下ッては島原の役、また由井の正雪の謀反なども浪人天下に志を得ずして企てた仕事で幕府の爲には隨分恐るべきものであッた。けれども德川幕府の基礎が固まつてからの浪人は左程恐ろしいものではなく。唯何か一身上に失策があッて主人から勘當されて扶持を取上られたものたるに過ぎない。それ故彼等も又、衣食の計を濟す爲めに。劍法の師範を爲し、又は讀書習字の教授を爲し。乃至謠曲を賣つて活計をしたもので必ずしも天下に放浪して書を讀し、時に逆ふものではなかつた。茲に於て

た萩原新三郎の如きは畢竟泰平時代の浪人で。至極、オトナシイ、ヤサシイ、ミヤビな男である。彼れは決して武權政府に向ッて社會主義を唱へるやう男ではない。又徳川幕府に向ッて政權返上を唱導なした嘉永安政の浪士とは先天的に其の頭腦を異にして居る。

▲才藝兼備　徳川時代の物語に作中の男主人公を描けば、必ず才藝兼備としたものである。現時の小說に。何々博士の學位を得て、英獨の語が達者に出來るなど丶書くのと同じ調子と見たらばよからう。且つ泰平時代に浪人する位な男はまづ才藝兼備、即ち一身の修養が足つて居るといふ事を示して居る。且つ標致優雅とある、浪人の身にして優雅の姿もおかしいとおもふけれども、矢張そこが天下泰平で。且つ享保式である。

▲醫師志丈　文化文政時代の作者小說家に江戸の町醫者が筆の先で侮辱された事は實に甚だしい醫者といへば大抵輕薄な小人で富豪に諂らひ權貴に阿り、遊興のお伴もすれば、密事の周旋もする一口に幇間醫者など丶言はれて、佞人の標本にされたものであるが、是れは醫者社會の爲めに非常な迷惑と言はねばならぬ。當時醫術は未開であッたとは言へ、醫者の社會は決してそんなものではない。天文、地理植物、動物の諸學から、儒學、皇學に就て研究され發明されたのは多く世傳の醫家にあッて、醫師は寧ろ當時の新智識であッた。併し社會の大勢が、既に武家全盛の時代で學問藝術の如きはすべて武家の庇蔭によつて僅かに其の命脉を維持して居たのであるから社會が醫者を新智識として尊敬する譯には行かないのみならず。武權政治の中心たる江戸では天下に尊いものは士人であつて、餘人は一般に百姓町人と見做されて士分に齡する事を許されなかつたから、町人と同視された醫者が社會から決して好遇はされなかつたのである。

この智識侮辱の傾向が醫者をして不知不識の間に品位を墮さしめた由緣となつたかも知れない。そこで世間多數の庸醫中には隨分、這般志丈的の佞人もあつたかも知れないが、文化文政度の小說作者はこの少數の惡醫を捉へ來つて、當時の醫者は皆斯の如きものであるかの如くに侮辱を加へたのである。假令ば、毒を盛つて人を殺す醫者。金を

貪つて富人に媚びる醫者、幇間醫者の如き御家騷動を書いたすべての作者を始めとして式亭三馬、爲永春水の如き知名の作者皆然りである。この篇の作者三遊亭圓朝も亦、この弊竇に陷つて阿露、新三郎、佳人才子(?)媾曳の橋渡しをこの幇間醫者に取つたのである。

志丈慮後累。或恐有其鑽穴踰牆之過。不復到兩家矣。生日夜思慕阿露。屢招志丈。志丈不來。苦慮百計。不能得其梯。因循兩三月。寤寐不忘。悒然送日耳。僕伴藏者。欲慰其憂鬱。頻勸遊步。遂伴伴藏。泛舟釣於深川。行過柳島。將近飯島之莊。見後園門扇半開。乃使繫船。竊覘園中。婢見生喜走告曰。娘子待君久矣。君終不來。以故飯粒不下喉。病日逼。身瘦體羸將就木。請來慰娘子之病。生驚。乃登堂。婢延入帳中。娘子見生。喜且泣。共伸衷情。綢繆將不離。日已昏。將歸。阿露出一香盒曰。是母之遺物也。秘愛不離身。今贈蓋於君。冀待相合之時。生視之。泥金畫秋草。精巧入毫末。生喜收之懷。忽有人。唐突入室。勵聲曰。何者狡兒。來辱我娘。速延首受我刀。兩人愕然。仰見則父飯島也。將揮刀斬生。阿露覆生隔之曰。罪在妾。請殺妾。父怒直斬阿露。生驚絕不覺發聲。伴藏在傍曰。舟來山谷。生遽然覺正是一醉之夢。流汗淋漓。襯衣皆濡。試探懷中。盒蓋依然有焉

青年の男女期せずして相逢ふたのであるが、其後、媾曳の媒介人たる志丈は元々善い事でないから後難を恐れて、いづれへも助の道を切つて仕舞つた。然るに新三郎はお露を慕ふの念が日々に益して寢ても寤ても忘

れる事が出來なくなつた。所謂戀の病といふやうな譯で日夜悒然として日を送つてゐる。下僕の伴藏が此の狀態を見て大に心配をして、是は何でも欝氣の病であらうから。郊外へ出て氣を晴したがよからうと、そこで釣舟を用意して深川の方面へと向けた。その途中柳島を過ぐると、なつかしい飯島の別莊が見へる。日頃おもひ焦れた意中の人はまさしく此處に居るのであると近づいて見ると別莊の裏門が半分ほと開いて居るから船を繫いで四邊の容子を伺つてゐると、先日の侍婢が端なくこの美男子を見止めて、大喜びで駈けて來て、貴郞マア聞いて下さい、お孃樣の此頃の御容子をと、言ふのを聞けば、阿露も其後は新三郞を待ち焦れて飯も食へぬ位、段々と日が重なつて今では眞の病人となつて、身は瘦せ・體は疲れ。將さに牀に就かうとしてゐる樣な按排。早く來てお孃を慰めて呉れといふのである。新三大に驚き乃ち家に入れば下婢は誘ふて、帳中に入る。お孃見て且つ喜び、且つ泣く共に衷情を伸べて綢繆將さに離れざらんとす云々以下本文の通りよく味はつて讀めばお露と新三郞とが如何に戀に渴して居たかの狀を彷彿する事が出來る。そこで男は秋草を描いた蒔繪の香箱を女から貰つて懷に入れて辭し歸らんとする時、突然襖子を開け飛ばして室內へ這入つて來たものがある。大喝一聲、何所の野郞だ、娘を辱しめたこの不屆者奴、見つけた以上は其儘にして置くものか、さア來い尋常に頸をさし出せ。斬捨て、今此の刀の錆にして呉れようと、恐ろしい懸幕で睨みつけられた。兩人愕然して見あげると是は別人ならぬお露の父親飯島何某である。さア大變と新三郞は驚ろいたが今更仕方はない。飯島は刀を揮つて新三郞を斬らんとすれば、阿露は周章て丶新三郞を庇ひ、此段の不義は全く此身の心から、どうか此の身を殺して下さいと言つたから一徹短慮の父親は其刀で阿露を斬つて仕舞つた。新三郞驚ろき返つて覺へず聲を發げると、何これは一睡の夢であつた。

▲寤寐不忘　戀に陷つて寤寐不忘悒然として日を送るは戀の神聖なる所以である。必らずしも社會の制裁の嚴なる時代と寬なる時代とを問はないすべて進步した人類に通有した心的作用といつてよろしいのであるが當時の社會的風尙に男女七歲にして席を同ふせずといふ儒敎主義の道義が普ねく士人の行爲を支配して殆んと天下の道德となつた時代であるから士分以上の青年男女が私に伉儷

を約するといふ事は所詮社會が認識しないのである。是を犯すものは即ち不義ものである。彼れ青年男女の戀人が寤寐不忘、悒然として日を空過したのも尤の次第である。

▲香盒　香を容るゝ筐である。香盒は室内裝飾の具で堆朱、金銀、蒔繪、種々ある。單に香を容るの具、單に室内裝飾の具とすれば何の意味もないが、抑も此の香といふものは、燒いて室内の氣を淨め以て其の不斷の身を修するものである又身に褁んで體氣を淸淨にするを以てその不斷の心を修するのである。昔しの武將が軍に臨む時は名香を燒いて兜に褁んだもので、若し打死の折など兜に名香が薫じて居るとこれは尋常の武者ではあるまい、いづれ歷々の名將であらう。などゝ見たもので香の馨によつて日頃のたしなみも見ゆるのである。この如く香といふものは、身の戒に使ふたものであるから香盒は鏡と同じく女の魂として秘藏したもの、殊に母親の遺物とあれば猶更である。西洋では結婚約束に指環を與へる事となつて居るが。日本では別に品物を交換するといふ事はない、親の遺物の香盒をその戀人に與へるといふ事は大に熱愛を表章したものであるけれども元來彼等の愛の成立に就ては到底二十世紀の讀者をしての同情を惹かしむる事は出來ないのである。

▲直斬阿露　如何に武士は斬捨御免の世の中とは言ひながら、そうムザ〳〵と人間殺されたものではない、然るを舊時代の作者は御手討は武士の家に不斷の事として是の慘劇を記載した。彼等は萬に一ツの出來事を以て尋常普通の事柄として仕組んだのである。それ故人を殺す事を何でもない樣に見做し、不義者を手討にする事は。大きな眼玉を以て人を睨みつけるのと左程の相違はない位に考へしめたのである。本篇飯島が阿露を斬るの條も又此の舊套に陷ッたのであるが。而かもそれを一醉の夢として見せたのは。陳腐な趣向ながら、聊か注意したものと言つべきである。

生怪其奇夢。未敢告人。偶志丈來。潛然告曰。娘子死矣。生又駭。問其故。曰思君數月。沈鬱益病。縱告嚴父。自知事不成。去藥絕食溘然終亡。僕聞甚悼請供香華。修冥福。

君灑一勺之水。勝於萬僧讀經。生亦大悲。始悟舟中奇夢示彼香盒之蓋。志丈亦驚異。既而及盂蘭盆會。邦俗照華燈。供蔬果。以祀祖先。生亦家廟合祀娘子之靈。時初秋暑熱未退。開窗納涼。恨嫦娥隱雲。獨對空庭。悵然不能寢。忽聞牆外屐聲過。生意訝之。竊從牆隙覘之飯島氏婢。携牡丹花繡燈。冉冉與娘子來。生見大喜。匆匆開門邀之。問其所以來。婢曰。阿娘逢君之後。戀戀不能諠。竟爲病。父憂之。將擇婿定嗣。阿娘厭之。懊惱不能置。偶志丈來謂。君以病死。阿娘悲傷。欲剃髮爲尼妾苦諫。遂脫柳島之莊。潛來谷中。僅借茅屋。僦居焉。今夜來貴館。欲拜君之靈牌也。生曰。志丈亦謂阿娘以病亡。何其謬也。遂相伴入室。臥婢於別室。二人喜再會。共極歡好。鷄鳴開門送之。

萩原生は愕然として醒れば夢に見た香盒は正しく我が懷ろに在り。これは不思議と。まだ夢か實在かゞ判然しないで茫然としてあッた處ろへ志丈老人來ッて阿露の死んだ事を報らせる。萩原生大に悲しみ茲に始めて舟中の奇夢を悟ッて例の香盒を示すと志丈も亦奇異に驚ろいた。彼是する内時は經つてはや盆の時節ともなッた。世俗では魂祭りといつて家毎に華燈籠を吊下げ、佛檀の下には瓜や茄子の牛馬を拵らへて魂迎へをする。萩原生も戀人の阿露が初の盆といふので先祖の位牌に併せて魂祭りをした。時しも殘暑の炎熱未だ去りあへず、窓を開いて涼風を納れつゝ、研きわげたる明鏡のその十五夜の月の團々たるが折柄の叢雲に隱るゝのを見て我が身の上を徐ろに偲び庭の秋草を眺めッゝ、悵然としてある處ろへ、表にやさしい駒下駄の音がしたので彼は不思議な事とそつと垣の間から覗いて見ると這は麼も如何にその人は飯島の下婢である。牡丹花の

緒のある燈籠を提げて先に立ち阿露を伴ひからころと遣つて來るのである荻原生は不思議におもひながらも現在我が戀人が訪ねて來たのであるから、大に喜んで早速門を開いて兩人を迎へ入れて扨て容子を尋ねると下婢がいふには阿孃は此方に逢ふてから好情忘れ兼ねとうにかして今一度逢いたいものと日夜焦れて到頭病氣になッて仕舞ッた。そこで父親は心配して婿を取らせるといふ。阿露はそれを厭ふて懊惱する。丁度その時志丈老人が來て容子を聞くと此方は病死したといふので。阿孃は世を墓なんで尼にならうとしたのを段々諫めて到頭柳島の別莊を脫して谷中へ來てそこに侘住居をしてゐるといふ、そこで今夜貴君の御屋敷に參ッたのは。貴君の御位牌を拜まふ爲めであると言ッた一伍一什の物語を聞いて見るとこれは全く志丈老人が双方を誑つたものである。まづ死んだと思ッた兩人が茲に再會をしたのは何よりの事と相携へて室に這入ッた。

▲奇夢　元より怪談であるから夢に就て云々するまでもないが。荻原生が舟で柳島の別莊へ行つたのは夢であッて實在でない以上は香盒が自分の懷にあるのは甚だ奇異である。奇夢は隨分あることで、事實の前兆となる事や或る事實と符合する事があつて、今日でも隨分此の奇夢といふ事は或る心理的作用として科學的研究の範圍内に置かれてある。けれども夢に見た香盒が實在の懷ろに現存してゐるといふやうな事はこれは一個の奇異譚として見るべきもので彼の奇夢とは著るしく距離のある事柄である。奇夢は廿世紀でもこれを研究される餘地は綽々としてゐるか奇異は前世紀的であッて開明の今日最早研究の餘地のないものである。香盒の手に遺るが事既に十分前世紀的のものであると言はねばならぬ。

如此連夜。綢繆愈堅。件藏隔牆構室。竊怪生房夜夜有笑語之聲。穿牆覘之。有兩婦人。與生相媟戲。其形糢糊如烟霧。似非生人。件藏大怪。告之隣家白翁者。白翁以鑒相術爲業。與生甚親。明朝訪生。視生血色不常大驚曰。君生氣大衰。邪氣纏身。恐爲鬼所憑者。聞夜夜有來客。必非生人。終奪

君之命。宜遠避之。生日是飯島氏娘子。今在谷中夜夜與婢共來。固非鬼也。白翁曰。試之谷中尋之。恐無其人。生往而索之果無有焉。歸途過新幡隨院墓所。有新塚。挂牡丹繡燈。與婢所携相同。因問之寺僧。曰飯島氏娘子之塚也。生始駭。

萩原生は二婦人を我が家に迎へ入れて不思議な歡樂を極めて、夜の深くるのも打忘れて居た、晨の鷄鳴に打驚いて始めて氣がついて門を開いて送り出したが、始めの夜がこの通りでそれから次の夜も又次の夜も。同じ刻限に同じ人を迎へ入れて同じ樣な快を極めた、それとは知らぬ下僕の伴藏は毎夜主人の房室でむつまじい女の笑ひ聲がする、ハテ不思議な事とそつと垣根の間から容子を覗いて見るとうつくしい兩の婦人が居て主人と狎れ睦んで居る。併しその人體を注意して見ると朦朧として煙の中に浮んで居るやうで、どうしても生た人間とは見へないから。早速隣りの白翁堂といふ人相見の所へ行つて、その事を話すと、白翁堂も尋常でないから。夜が明けると直ぐに萩原生を訪ねて見る。案の定、血色が甚だよろしくない。そこで前夜の事を話しこの儘にして置けば終には生命を失ふて仕舞ふと懇々注意を加へたが、萩原生は決して怪しいものではないといふ。それでは谷中に行つて見たまへ、必ず悟る處ろがあらうと忠告をした。萩原生成程とおもッて行つて見ると果してそんな家はない。歸り途に或る墓地を通ッて見るとそこに一つの新塚があッて牡丹の繡のある燈籠が掛けてある。而かもその燈籠は正しく前夜下婢が携へて來たのと同じものであッた。

▲與生相蝶戲　蝶戲といふのは男女相戲れること、抑も幽靈と婚するといふ事は甚だ不自然な話であるが。日本にはむかしから此種の話料に富んで居る、愛兒を遺して死んだ母が幽靈になつて出て來て、その子に乳を吞ませた話や。狐が人間に化けて來て人と婚して子を產んだ話しや。共に皆愛情の誠から來てゐる怪談であッて不自然ながらも惻々として人を感動せしむる處ろがある。而かも本篇の幽靈談は元と男女相愛の熱情から來てゐるとは言ひながら、話の筋が一体に艶に過ぎてゐる所爲か人を感動せしむる度が深くないのであ

る。

▲牡丹繡燈　既に盂蘭盆なるが故に繡燈を携へて幽霊が出て來たのであるが、前項にもいふが如く、元來本篇はその幽霊談なるにも拘らず事甚だ艶に過ぎて少しも幽霊談に特有せる凄味がない。そも〳〵道理上有得べからざる幽霊をして、幽霊あるかの如く感せしめるのは人間心性の弱點で怨恨とか嫉妬とか復讐の念とかいふものが凝り固まつて凄氣人を襲ふに至らしむるので、幽霊そのものは道理上ないものとしても、何となく人をして幽霊があるかの如くに思はせて知らず〳〵にその凄味に同化されるのである。タトエば彼の累物語のやうなもので、彼の人間怨恨の蓄積が凝ッて終に鬼となるべく感せしめるのである、然るに此の怪談は全体の調子が陽氣で少しも幽霊の凄味がないのである。

乃告白翁請避之之法。白翁曰我力弗能也。聞良石和尚當世碩德。子往而問之。乃折簡授之。生謁和尚告實。懇請避其鬼。和尚曰。是前世宿因。非一朝之故也。凝魂纏綿。世世不釋。雖換世異所。不能免也。但得佛擁護。或得全今世。宜念佛誦經。則書符授之曰。宜糊貼諸窗戶。必避幽鬼。生拜謝歸。如教貼之。其夜二更又聞屐聲。生密從戶隙覘之。婢曰。君變心矣。閉戶不容。何其薄情也。阿露泣曰。已堅約何遽背也。是必爲人所總也。繞戶徘徊。遂悲號去。其夜二鬼至伴藏宅。懇請除靈符。伴藏恐怖。不能接言。唯唯諾之。期以翌夜。伴藏以爲不除一鬼又來。不得已遂除之。其夜二鬼。又入生之室。明朝伴藏告白翁。白翁憂之與伴藏訪生。生未起。開室生已死矣。

此圓朝氏所レ談、尙有ニ飯島氏僕孝助忠心及伴藏姦惡其妻橫死爲レ怪等之事一。以レ涉ニ枝葉一畧レ之。此事嘗觀ニ於土佐某氏所レ畫橫卷一。畫間以ニ和文一錄レ之。然生死後皆省レ之。孝助復讐伴藏爲レ賊等之事。恐圓朝氏添ニ蛇足一也。

萩原生は新塚に牡丹燈籠の掛つてゐたのを見て始めて大に驚ろいて白翁堂にその事を告げてどうか亡魂の來ないやうにする工風はあるまいかといふ。是れは自分の力に及ばない。當時の高僧良石和尙に行つて聞くがよからうと、白翁は萩原生に手紙を書いて和尙に紹介する、サテ和尙を尋ねて聞くと和尙のいふには是れは前世の宿緣である一朝にして除く事は出來ない。けれども佛の加護に依ッて或は助かる事が出來ない事もあるまいその方法は斯く〳〵、斯樣〳〵と敎へられたのでそれではどうかその御符を戴きたいといふので御符を貰ッて歸ッて戶口に貼ッた、すると、其の晩又例の下駄の音がして。二人の幽靈婦人が顯はれたけれども。御符が貼つてあるので這入る事が出來ない。アヽ萩原さんは心が變つたものと見へる、何と薄情な方ではありませんかといふと阿露は泣く〳〵われほど堅い約束がしてあるのにどうして急に心が變つたらうこれは乾度誰れか邪魔をするものでもあるだらうとつぶやき〳〵戶外を徘徊て居たが、終には伴藏の宅へ這入ッて符を除けて貰らいたいと賴む。若し除いて吳なければおまへに取つくと無理をいつてとう〳〵符を剝させたかくて翌朝主人の宅へ行つて容子を見る萩原生は幽靈と交歡しつゝあるとおもひの外、厲鬼に取殺されて居た。

▲本篇の價値は別に言ふまでもないが。飜案とは言ふものゝ風俗人情すべて我が天造に陶鑄したもので全然圓朝の自作として見るべきものである。一篇二百頁に亘るこの長々しき人情譚を僅か百行内外の漢文に縮譯して然かもよく其の情致を盡した鴻齋翁の筆力には又敬服すべきものである。(完)

阿能局本能寺の最後

文學士　中内蝶二

はしがき

ほの〴〵と空白みゆく橫雲の間を縫うて、翩翻とひ

るがへる幾旒の旗は、水色に桔梗の紋、どつと揚げたる明智が軍勢の鯨波の聲に、都大路をとゞろかしけむ本能寺の變。敵も味方も入り亂れて、擊ちつ擊たれつ、鬪ひあへりし修羅の巷に、忽ち咲き出でたる一輪の名花、芙蓉の顏、匂ひこぼれて、白綾の鉢卷甲斐〲しく、白柄の眉尖刀、水車の如くに揮つて、數多の敵を薙き殪し、竟に大事の去りぬると見るよりも、眞先きに自刄して潔き最期を遂げ、芳しき名を後の世に遺しゝ女武者こそ、問はでもしるき、信長の侍女、阿能局にはありけれ。

　さても此花、何處の土より、如何にして名將の側に移し植ゑられ、かく本能寺の朝嵐に散らさるゝ身とはなりけむ。

一

　過ぎつる應仁の亂、細川、山名の兩黨相せめぎて、輦轂の下を騷がしゝよりこの方、天下は麻の如くみだれて、戰の塵都大路に絶ゆるひまなく、足利將軍の威光も、全く地に墮ち果てぬ。三好、松永の徒、近畿に跋扈するに至りては、室町東山の花も散りて、世は五月闇の、たゞかき曇り〲てけり。

　阿能の兄、後藤六郎太夫は、丹波より出で、三好長慶の軍に從ひ、數箇度の戰ひに功名をあらはしゝかども、後深く心に感ずるところあり、故鄕に退きて醫を業とせり。父は疾く世を逝りしかば、妹と共に母をたすけて唯三人、睦しく其日〲を送りけるほど、何時の頃よりか、この家をたづねて、ひそかに金創の療治受けに來る、一人の浪士ありけり。齡は三十路を三つ四つばかりは越えぬらむ、一文字に濃きし眉太く、星ときらめく眼の光、侮りがたきが、右の臂より骨へかけて箆深に射込まれし矢疵、日數かさねて癒えけれども、傷ましや、重傷のために、腕は不具とぞなりぬる。

　その人、六郎太夫が刀圭の業に身を委ぬるにも似で、心雄々しく頼もしげなるを見て、いつとはなしに交情深く、共に同胞の思ひをなすまでに至りしが、創癒えぬるにおよび、謝禮として、數町歩の田と一百兩の黄金とを贈りぬ。六郎太夫は、あまりに謝物の多きを怪みて、固く辭みて其故を問ひけるに、その人、膝をあらためて聲をひそめ、われには大事の心の秘密、深く包みて打ち明けざりしが、不思議の緣あればこそ、かくは同胞と一つに睦み合ふやうになりし御身に向ひて、今は何をかつゝむべき、われは、前きつ頃、織田

信長の爲めに滅ぼされし、三上左衛門重連が一族にて、福井主水といふものなり。戰場の慣習、勝つも負くるも其日の運と不運とによれば、誰を怨み、誰れを惡むべきもあらねど、唯にくむべきは渠信長、詐謀をもて國を奪ひ、約にそむきて、信連はじめ、その一族を殺しつくしぬ。われ其時は負傷のため、城中にも在らざりしかば、この事を知らず、後にて詳しう聞き知りし時の、胸裏の悲憤は如何ばかりなりしと思したまふぞ。無念骨髓に徹して、この恨み寐ても寤めても忘れがたく、機會を見合はせ、不倶戴天の讐を報はゞやと、心は矢猛にはやりしかども、病ひに臥す身は是非もなく、たゞ平癒の時をのみ待ち居たりしに、かく右の腕の不具となりしをいかにせん。他處の不具にもあらばこそ、今は兵馬の望みさへ、絶え果てにし甲斐なき身の上、天も憐れと思さぬにや、なか〳〵に、日を追うて時めく信長が勢ひを、聞くにつけても、遺恨はいとどますばかり、推量したまへと、男泣きに泣く心根、實にもと思へば、六郎太夫も眼を屡叩き、武士の意氣地は然もあるべし、卿の鬱憤察し入りぬ。聞くならく、女は己を喜ぶものゝために容つくり、士は己を知るものゝために死すとかや。おん身既にわれを知りて、胸中の秘密を明かしたまふ上は、われとても、また卿のために死なざらむや。一臂の力も添えたけれど、われには今一人の老母あり、身はわが物ながら、わがまゝならねば、わが命を、暫くわれに貸したまはれといふに、主水は、六郎太夫が二心ありて、生命を惜しめることよとのみ思ひ詰め、あはれ、今日までは、將來頼みある人と信じて、まことの同胞のやうに思へばこそ、心の大事をも洩らしけめ。さては斯かる言ひ効なき、卑怯漢にてありけるか。一たび口外しぬる上は、駟もまた及びがたきを、復讐の企圖も今はこれ迄なり。不具者の、あるに効なき身を持ちて、存命へしとて何かせむ。おのれ信長、おのれ六郎太夫、死して怨恨は報うべきぞと、一室に退きて悲憤の自殺、あはれ三十四年を一期の春として、見殘しゝ浮世の夢を、吹く風腥し。

二

世に幸なき人は多かれど、わが心を、他のために誤解されし人ほど、幸なきものはあらざるべし。六郎太夫も、この幸なきものゝ、數には洩れぬ一人なり。それも言ひ解く術あらばこそ、死にたる人はまたかへら

ず。墓前にぬかづきて、幾百萬言を繰りかへせばとて答ふるものは峯の松風、心の遣瀬となるべうもあらねば、鬱々として、たゞ時機の到るを待つ外はなかりき。

かくて幾年か經ぬるほどに、老母は米字の賀を終へて、目出度き往生を遂げぬ。七日々々の追善も懇ろになして、はや五十日餘にもなりしかば、主水との約束を果たすべきは、今この時なり。わが心の誠をあらはすべき時こそ到りたれと、或日六郎太夫は、妹阿能を側に招きて語りけるやう、身體髮膚は父母の賜、これを傷くるは不孝の本なりと、古の人も云へり。人の命の貴きこと、今さら云はでものことながら、義のためには、鴻毛よりも輕むずべき時もあり。もしわれ、この命を、義のために捨つることあらば、御身は如何にかすると、訝しき兄の言葉に、阿能は暫らく、その面をうちまもるのみなりしが、やがて心に思ひあたることやありけむ。怪しかることをのたまふものかな、もとより甲斐なき女にこそあれ、物の道理はをさ〳〵存じ侍り。よしや貴き命なりとも、義のためには棄つる世のならひ、いかでか、未練に止め申すべきといふ。兄はいたく滿足のさまにて、健氣にも答へけるものかな。さらば語らむ、阿能、わが命は、義の爲めに捨つべきぞ。義のためとは兄上、如何なる人のためにて候ぞ。さればなりと、兄は膝をすゝませ、さて云ふやう、御身も定めて知りつらむ、先きつ年、わが許へ金創の療治受けに來りし一人の浪士を、渠は三上重連の一族にて、福井主水といひしもの、織田右府を怨みて、不倶戴天の讐を報ひむと企てしも、右の腕の不具となりしために、その意を果すこと能はず、われを知りて大事をたのみき。われ其時は老母おはしゝかば、快く諾ひながらも、暫らくの猶豫を乞ひしに、却て二心あるやうに疑はれて、最期の恨みを被りぬることそうたてけれ。今は老母も世におはさねば、誰を憚りてか猶豫すべき。劍を墓にかけし季札には及ばずとも、一言の然諾をゆるかせにせぬわが志、とても生きて歸るべき望みなければ、御身は誠ある人に嫁きて、母上の御菩提と、この兄か追福とを怠らぬやう、たのみ置くぞといふ、阿能は今更ながら涙にくれて、しばしは首うなだれ、うち萎れたるさまなりしが、かくては、兄の勇氣のくぢけやせむと、故さらにうち笑みて、妾も兄上の妹なり。義のために捨てたまふ御命、勸めてこそすれ、などかは止め申すべき。御心やすく出で立ちたまへと勵すに、六郎太夫も、妹が雄々しき氣象を愛で、かた

みに蔽み妾はす木丕、これぞ兄妹との世の別れかと思へば、さすがに涙の催されて、泣く音を袖に包みかねてけり。

三

その頃、織田信長は安土の城に在り。阿能の兄六郎太夫は、ひそかに此地に忍び入りて、日夜信長の樣子を窺へども、用心いとも嚴しくて、近寄らむことは思ひもよらず、かくて十日餘りを空しく過しぬ。

しと〳〵と降る春雨の、夜に入りては風そひて、景色おどろ〳〵しう、黒白もわかず。今宵こそと、六郎太夫は暗にまぎれ、城門の前を、幾度か行きつもどりつして、忍び入るべきたつきをもとめけるほど、提燈の火影前に見えて、次第に此方へ近づき來る樣に、下馬札の陰にかくれて、待つとも知らで一人の奴隷、狀函たづさへて城に入らむとしけるを。六郎太夫は跳り出で、拔き撃ちに斬り殺して狀函と衣服とを奪ひ、赤合羽に饅頭笠、全く奴隷の姿と化けて門守る男を欺き、首尾よく城内に忍び入りて．物陰に身をひそめ、夜の更くるをぞ、待ちたりける。

撃柝の音に夜は更けわたりて、天もしづまり、地もしづまり、人聲の聲も今は絶えたり。時こそ來れと、六郎太夫は四邊をうかゞひ、脇差の小柄をもて、額といはず、頰といはず、衝きたて、〳〵、矢立の墨を筆にふくませて、これを塗るほどに、誰ともわかぬ異形のくせものとはなりてけり。

垣を跳り踰えて、殿中に忍び入り、書院を經て、長廊下を傳ひ行くに、闌けて往來ふ人もなければ、太刀拔きそばめ、奥殿の方へ進み入らむとする時しも、妻戸の影よりあらはれし一人の少年、袖につゝみし雪洞の火影をさしつけて、額にふりかゝる綠の角髮はらひもあへず、何者ぞと聲鋭くとがめぬ。

思ひもかけねば、六郎太夫は打ち驚き、二足三足たぢろきしが、見れば小童、何程のことかあらむと、太刀取りなほして斬つてかゝるを、彼方は怖るゝ氣色もなく、夜更けて君の御寢所間近く、白刄を携へて進み入るこそ曲者なれ、年わかけれども御近習のその中に、さるものありと知られし森蘭丸、いで搦め取りて功績にせむと、太刀拔きあはせてわたり合ふ、この物音を聞きつけて、馳け集まりし宿直の武士たち拔きつるゝ刀は、秋の野の芒の穗尖ときらめきて、四方より競ひかゝるに、六郎太夫も、今は是れまでよと、暴獅のや

うに荒れまはりて、斬りたて斬りたて、五六人ばかりは倒しけれども、衆寡の勢ひ、もとより敵し得べくもわらねば、遂に蘭丸がために捕へられて、高手小手にぞ縛められける。信長これを白洲に引きすゑさせて、立ち出で、撿たま



ふに、黒々と染めたるは漆か墨か、面貌怪しきまで醜く、見えて、如何なるものともわきがたければ、明日は拷問を加へてたゞさばやと、一とまづ牢獄へひかせけるに、六郎太夫は其夜のうちに舌を噛みて、稜々たる一片の鉄骨

を、義のために潔く砕きてけり。

四

東の空に輝く朝日の勢ひ、英名天下にかくれもなき信長の寝所に、忍びよりしは膽太き曲者かな。如何なる者ぞと問ひたゞすまでもなく、自から舌噛みて死にたれば、その人、その理由、毫も知るべきよすがもなきまゝ、安土の城下外れに、その屍を暴らして、傍に立てたる捨札に、盗みを働く似而非男子、その名を知りて告ぐるものには、重き褒賞を與へむとぞ記されける。

六郎太夫の妹阿能は、兄の首途を送りて後家に在りて、日々その吉左右を待ち居たりしが、人傳に斯かる噂を聞くよりも、さては愈よ兄上にまぎれなし、かねて期したることながら、事就らずして犬死にしたまひしことの痛はしさよと、窃かに安土の城下外れに赴きて、暴せる屍をよく〳〵見れば、小柄と墨とにて、面躰こそ醜うは變へられたれ、疑ふ方もなき六郎太夫なれば、阿能は群集の人々を押し除けて前に進みいで、その屍に取りつきて涙ながらに、後藤六郎太夫ともいはれしものが、さてもあさましき御姿とはなりたまひけるよ。義のために捨てし生命を、なか〳〵に盗賊の名をさへ負はせられて、死後の汚辱、さぞや恨めしうてぞ覺すらめと、叫びもあへず捨札拔き棄て、さめざめと泣き伏してけり。

番卒どもは斯くと見るより、阿能を捕へて、この旨直に明智光秀に訴へけるに、光秀時を移さず、馬に鞭つて馳せ來り、屹と見やりて聲を勵まし、汝何者なれば、この盗賊の屍を抱きて兄とは呼ぶぞ。其兄の名も汝の名もわからさまに、白狀せよ。つゝまば痛き目を見せむにと、嚇せど阿能は怖るゝ色なく、光秀が面を見上げて打ち笑みながら、聲高にのゝしりたまふとも、つゆ怖しとも思はねば、また畏しとも思はず。物柔かにのたまふとも、事はわかるべきを、わざとなる聲樣かた腹痛し、兎角は、織田殿の御前に召連れたまへ、兄の名もこの身の名も、また事の次第も、明智殿の御前にては明かし難しと、花の如き唇を銜いて迸しる不敵の言葉、一度言ひ放つて後は、如何に責むるも、再び口を開かねば、有繋の光秀も爲むすべなく、縛めて城中に引き入れぬ。

信長、阿能を面前に引き出ださせて、つく〴〵と御覧ずるに、實に畫けるが如き﨟闌けたる美人、星より

も清しき眼に、屹と信長を見上げ、雲の鬢づら輕く動かして會釋する風情、愛らしき中に、また凛として冒しがたき節ある、稀有の女丈夫とこそは見えたりけれ。

信長少しく笑みを含むで、やよ乙女、女に似げなきその擧動、鬼をも挫がむずる此信長を、怖しきものとは思はざるかと問ひたまふに、阿能も面に笑をたゝへて、仰せの如く、甲斐なき女の身にはあれど、道に外れし所業の他には、怖しといふ事聞きも侍らず。織田殿も人間なれば、妾もまた人間なり、人より人を見て、何をか怖しと思ふことあるべき。さるにても、織田殿には、怖しと思したまふ人やおはすると、臆する色なく答へてけり。信長うち默頭きて、いしくも答へけるものかな、この信長も返すべき言葉とてなし。さて問はむ、汝等同胞の名は如何に。兄は後藤六郎太夫、妾は阿濃と申し侍り。その六郎太夫とやらむは、如何なる恨みありて、予を刺さむとはしつるぞ。阿濃は覺えず涙を催して、双の眼に溢れて落つる露の玉を袖にて拂ひ、こは私の恨にては候はず、たゞ義といふ一字のためにと、云ひつゝ面を掩ひぬ。

信長かさねて、義のためとは、如何なる事の次第なるぞと、問ふに、阿能はやう〳〵涙を拭ひ、されば事り、聞きたまへ、先きつ頃、織田殿の爲めに攻め滅されし、丹波の城主、三上家の一族に、福井主水といへる者、妾が兄と友垣の契を結び、眞實の同胞のやうに、いと睦しう交らひたりき。三上家沒落の後、主水は織田殿を仇讐と狙ひて、いかで一太刀、怨み參らせむとはかりしものから、重傷のために右の腕不具となりて、其意を果たすこと能はず、或日心の底を打ち明けて、妾が兄に助力を乞ひしに、兄も日頃の知己に感じて、潔く其請ひを容れ、一臂の力を添へむと約しゝかども、其時、妾等同胞には、なほ年老ひたまひし母一人おはしゝかば、暫しがほどの猶豫を請ひしを、主水は、それを疑ひて、口惜しさのあまりに自殺を遂げぬ。その後、老母は天年を終へて世を去りしかば、兄は季札が昔の義を偲びて、主水が素志を果たさばやと、先きつ日よりこの城下に忍び入り、殿に近寄るべき機會を覗ひたりしに、運拙くして虜囚の身とはなりぬ。かゝる際にのぞみても、煩ひを妹の上に殘さじとの慈愛より、一言も名乘らで果てたまひし御心の忝さよ。身にかゝる罪を怖れて、わたら兄が義勇の名を虛しくするに忍びず、事の因由を訴へ申さむとて此處に來りぬ。兄に別れて惜しからぬ命、ながらへしとて何かせむ。

たゞ速に首を刎ねさせたまへと、覺悟の色は面にあらはれてけり。

一坐に並み居る人々はもとより、信長も感涙に咽びて、急に仰せて縛めの繩を解かしめ、さてのたまひけるは、汝等同胞は、まことに天下の義人なり。この信長とは累世の仇敵といふにもわらず、義によつて引かぬ六郎太夫が誠心、われいかでか之を惡むべき。汝が兄、既にみまかりたれば詮なけれど、せめては汝を擧げて、兄の面目を施させむ。汝も兄の怨みを忘れて、これより後予に仕へよと、思ひ入つて望みけるに、阿能もいたく其大度に感じ、これより信長の大奥に仕へて、遂には數多の女中の筆頭にまで進みてけり。

五

頃しも天正十年水無月二日の曉天のことなりけり。逆臣明智日向守光秀、不意に都に押し寄せて、その主信長が旅の宿と定めたる本能寺の周圍を十重二十重に取り卷きぬ。鯨波の聲、攻太鼓の響に天地を轟かして亂れ入るに、さしもの英將信長も、衆寡の勢、また如何にともしがたく、怨みを呑むで空しく泉下の鬼と化りたまへば、蘭丸はじめ近侍の士等、縱橫無迅に奮闘して、何れも潔き戰死をこそは遂げたりける。

阿能も眉尖刀うち揮つて、敵の中に割つて入り、目覺しきはたらきを見せたりしが、信長はや討たれぬと聞くよりも、今は是れまでよと覺悟をきはめ、本堂の方に馳け上りて、炎々と燃えあがる火焰の中に飛むで入り、君の迹をぞ追うてける。

あはれ、稀なる烈女の鑑、立ち上る本能寺の兵火に、骸は燒けても、名は芳ばしく今の世にまで燃えのこりて、千秋の末に朽ちざるぞうれしき。

（をはり）

秋の夜半

あゝ美しき空の色
清く澄みたる月の影。
浮雲はれて差のぼる
月はさやけく照そいて。
下界になやむ人の子を
なぐさめかほに光さす。
あはれつれなき世をすてゝ
月と眠らん雲の上。

憂かなしみ煩ひの
思たゆかれさまよひつ。
千草の露をふみ分て
獨野邊をたどるなり。
尾花が風にそよ〳〵と
虫の鳴音もうちそへて。
物思身のいとゞなほ
衰は深く身にぞ泌む。

岸邊にほゝゆむ糸萩は
きらめき渡る露落ちて。
我足元をそゝぎけり
いとも優なる秋の夜半。
浮世のちまたぬけ出て
こゝ仙鏡の如くなる。
エテンの園に似よりたる
樂しき野邊よ秋の夜半。

吉井八重

淸き御神のめぐみにて
天つ御使立まさん。
賴む甲斐なき世をすてゝ
秋と語らん夜の間に

德川時代のエビ茶式部

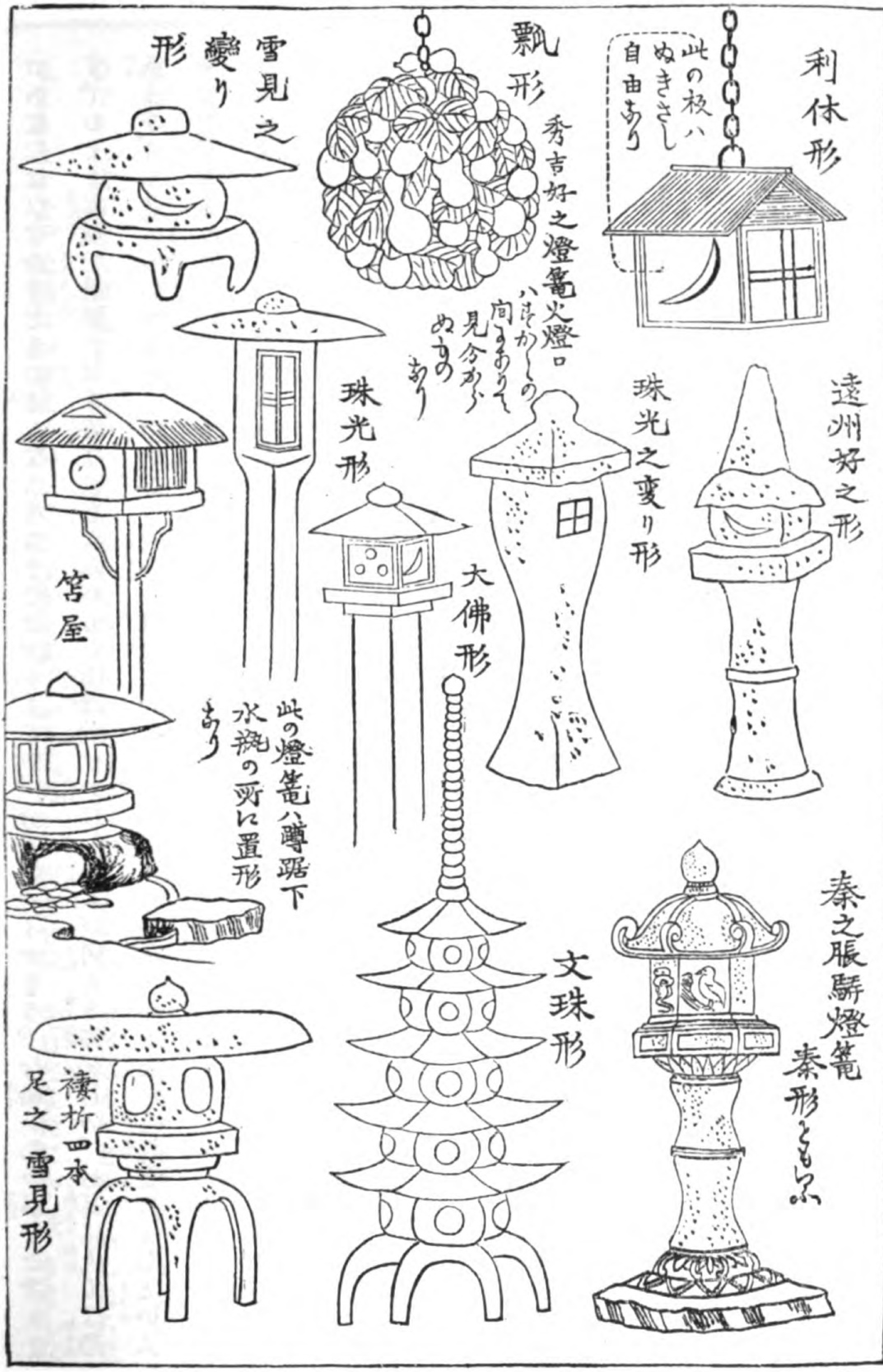
本居信仰にていにしへぶりの物まなびなどすると見えて、物しづかに人がらよき婦人二人、おの〳〵玉だれの奥ふかく侍るだらけの文章をやりたがり、几帳のかげに檜扇でもかざしてゐさうな氣位なり。

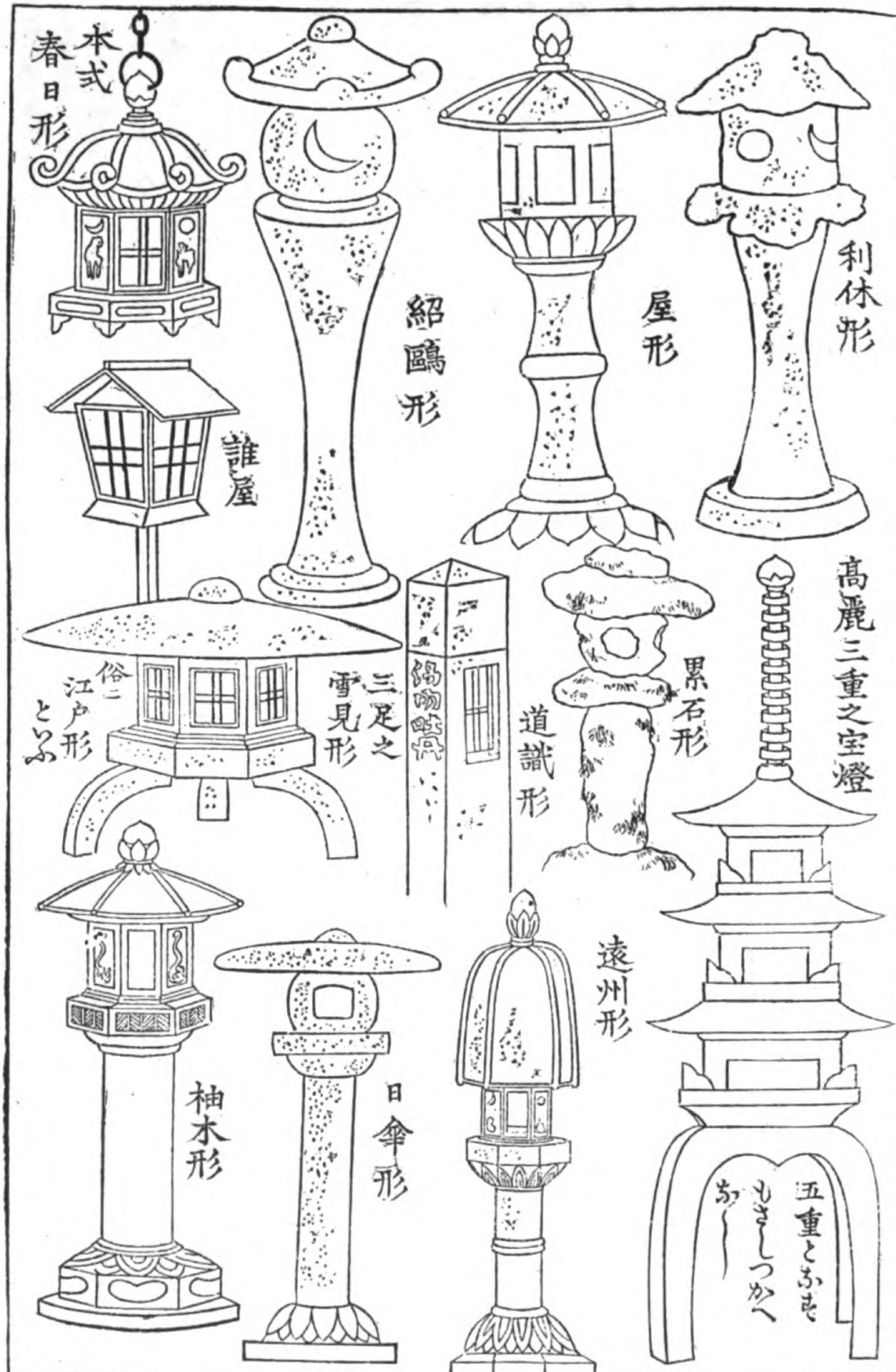
けり子『鴨子さん。此間は何を御覧じますかも子『ハイうつぼを讀み返さうと存じてをる所へ。活字本を求めましたから幸に異同を訂してをります。さりながら舊冬は何角用事にさへられまして。俊蔭の卷を半過ぐる程で捨置きましたけり子『それはよい物がお手に入りましたネかも子『晃子さん。あなたはやはり源氏でござりますかけり子『さやうでござります。加茂翁の新釋と、本居大人の玉の小櫛を本にいたして、書入をいたしかけましたが。俗た事にさへられまして筆を採る間がござりませぬかも子『先達てお噂申した庚子道の記は御覧じましたかけり子『ハイ見ました。中々手際な事でござります、しかし疑はしい事は、あの頃にはまだ開けぬ古言などが今の如ひらけて、つかひざまに誤のない所を見ましては、校合者の添削なども少しは有たかと存せられますよかも子『何にいたせ、女子であの位な文者は珍らしうござります。先日も外で消息文を讀みましたが、いにしへぶりのかきざまは、手に入た物でござります、けり子『さやうでござります、何ぞ著述があつたでござりませうネ。世に殘らぬは惜しいことでござります。ホンニ怜野集をお返し申すであつた。永々御恩借いたしました。有がたうござります。かも子『いへもうおゆるりと御覧なさりませ、わたくしはうけらが花を一冊かし失しましたが、トント行方がしれませぬ。けり子『イエとうもかし失ふでこまりますよ。此間はお歌はいかゞでござります。かも子『何か埒明ませぬ、先日どなたにか承りました

がアなたはひなぶりをもお詠みなさるさうでござりますネ。けり子『ハイサもう。お恥かしい事でござります、あまり本歌で退屈いたす時はなぐさみがてら俳諧歌をいたしますが何もう御恥しい。お耳に入ては恐入ます。かも子『イエサ萬葉の中にも、大寺の餓鬼のしりへにぬかづきの歌。エヽ夫から夏痩によしといふものむなぎとりめせのたぐひ。その外あまた見えますし、殊には續萬葉に俳諧躰と申す躰がわかりましたから、無心躰の歌もおなぐさみには宜しうござります。けり子『イエモウ。松のおもはん事もはづかしでござります。此間ネ。あまりいやしい題でござりますが、おかちんをあべ川にいたして、去る所でいたゞきましたから。とりあへず一首いたしました。

うまじものあべ川もちはあさもよし
きなてまぶして晝喰ふもよし

といたしましたオホヽヽヽヽ。かも子『ヲホヽヽヽ冠辭をふたつ立入れて。至極面白ううけ給はります。まぶしてなどがどうか古言のやうに聞えましてヲホヽヽヽ。けり子『イエもう。ほんのなぐさみでござります。先生などのお耳に入たらお叱り遊すでござりませうよ。かも子『何おまへさん。いづれ雅の道でござりますものをヲホヽヽヽうまじものあべ川とかゝり。あさもよし、きとうけて。晝喰ふもよしとうもいへませんヲホヽヽヽヽ。(式亭三馬)


利休形
此の板ハぬきさし自由あり
瓢形
秀吉好之燈籠火燈口ハきかしの向うありて見分かふぬすのあり
雪見之變り形
珠光形
珠光之変り形
遠州好之形
笘屋
大佛形
此の燈籠ハ蹲踞下水鉢の所に置形あり
文珠形
秦之脹騎燈籠
秦形ともいふ
棲折四本足之雪見形



本式
春日形
紹鷗形
屋形
利休形
誰屋
高麗三重之宝燈
三足之
雪見形
俗ニ
江戸形
といふ
道識形
累石形
遠州形
柚木形
日傘形
五重とふも
さしつかへ
なし

沖の波風

水想

つなぐともづなたちきりて
舟はあらしになぶられつ
右より波のかけり來て
からくくゞればまたも風
身をししづむる間もあらし
氷の山か、それよ波

ともに、へさきに、せまる風
右に左にほゆる波
あゝ我力つきんとす
君故身をば惜しまれど
よはき心は高解の
涙ぞ流る　あゝ　無情

するすみ流す大空の
闇に星かげあとたゑて
四か東かゆくてさへ
今はもしれず　ろは折れぬ
かぢはまがりぬ、波と風
怒りてやりぬ、それよ暗礁

妖雲天にみなぎりて、
天つみ空に光なく
戀の暗路にさまよひし
可憐の魂はゆきにけり
破れし舟と岩かどに
彼女の姿よこたわる

みだれし髮の深みどり
昨日のまゝににほへども
花の唇色もなし
共にちぎりし大丈夫は
今はた何を夢むらん
暴風は笑みぬ沖つ直中。

詞藻

秋の田家

千葉　ゆきえ子

あゝ樂しきは秋の田家よ、殊に今年は豐作とて歡びの聲は至る所に滿ち〳〵たり、中稻は昨日今日にて大方は刈り取られぬ。里の若者等はこの豐けき年の歡びに、村芝居催さばやと、この程より村長の物置に集りて、毎夜の稽古に餘念もなく、來る月の朔日より五日の催しとか、女は老も若きも皆それ見る日、木綿着なりとも新らしきをとて、これも夜毎の機織りに忙はし、又翁達の樂しみは手作りの濁酒のなるゝ日にやあるらむ、あゝ平和の滿ちたる秋の田家よ

秋の取り入れ全く終りてよりは、嫁取り聟取りの相談もかず〳〵あるらむ、里に一人の姫百合とたゝへられしお花と云へる娘の、これは近きに隣り村なる物持ちと聞ゑし某の家に嫁ぐとか、今朝向ひの太郎作爺の來ての物語り、仕度は先方の持ち、此樣なるよき事はあらじ、されど村に一本のこの姫百合の、他村に持ち去らるゝとて力落せし若者は、一人二人にはあらぬと目を丸くして語りしもをかし。

久しく荒れに荒れたる產土の社も、この豐作の折はずさず、屋根の破れ繕ひ參らせんとて、今朝しも世話人達二三人帳面持ちて訪づれぬ、その人達の話しに今の分にて押し行かば、御社の屋根のみならず、少しは不時の備へ金も出來ん、あゝ目出度きは豐作よと、これも歡びの色は面てにあふれたり、その社の普請の出來上りし後は、煙火にても打らあげんと、樂しむ若者も多きとか、あゝ樂しきは豐けき秋よ、神もいかに歡び玉ふらむ、あゝ神よ、來る年も又來る年も、此の村を豐作ならしめよ。

秋日郊行

大阪　岡崎龜鶴子

隙行く駒のあがき早く秋もいつしか深くなり行きて處せまき我庭も龍田姫の惠みに漏れで窓近き紅葉の樹もやう〳〵錦織り初めければ廣やかなる野邊、山の姿、水の色淸きあたりなどをそゞろ歩くはいかに樂しからめと思ひ暮す折柄心合へる友の訪づれ給ひてかにかくと誘かし給ふにいと嬉しく父君のみゆるし請ひていそ〳〵と立ち出でぬ

くさ〳〵の物語りなどしつゝ足のまに〳〵大路小路を辿り行く行く程にいつとなく喧しかりし人車の聲は遠ざかりゆきてやう〳〵心あての野邊にとはたどりつきぬ

見渡す限り秋の田は漸く黃ばみ、そよ〳〵と吹き來る秋風にたへず黃金色のさゞ波をたゞよはせつゝ何處ともなくひゞく小川の流れはさゝやぐ

如く、木々の梢も大方は紅葉して柿は綠より黄に紅ひを帶びて熟せむとし蕎麥の花は雪の如く桔梗、刈萱、女郎花など事々しく云はずもあれ野菊みそ萩などの愛らしき足下に招くすゝきは我等を迎へ顏なり、しげれるむぐらふみ分けて小川の邊りに行けば名も知れぬ草花の一本二本見る人もなきに咲きみだれたるいとゆかしければかざしにもやと白き方に手をかくればハラ／＼とこぼれて水に落ちたる云ひ知らず愛らし、斯かる景色の中に遊ぶはいとめづらしき事なれば友も我も共にうれしさたとへむかたなくさながら仙境にある心地して時の移るも知らざりしが彼方の鳴子突然なり動きて群雀のかまびすしくさはぐにぞと見れば向ひの方に瀨戸に一本の常磐木あるわらぶき屋の黄菊、白菊のたごれる籬の内に綱を引ける童あり、芳紀未だ七八ツならむ其無邪氣なる顏の星の如き眼に我等が姿のめづらしく映ぜしか圓なる眼を見張りて此方をのみ見詰めてありぬ、

仰ぎ見れば日はいつしか西に傾きてねぐら求むる鳥の聲木の間に喧し、

驚きて友を促がしつゝ家路につけば金波の中に佇める案山子は赤き夕陽をあびて一しほあはれに我等が後を見送る如くになむ、

湖上の舟遊

島根　松濤女

「サア出しますぞ」云ひつゝ舟夫は水馴棹とりて陸に突けば舟はいつしか渡頭を放れて丈よりも高き芦の茂みを分けてぞ靜に進み行く。舟端に觸るゝ所サワ／＼とそよぐ音して舟底にさゝやく波の音いひしらず靜に轉淋しげに、やがて芦盡きて出る所に廣き宍道の湖なり。

一行五人、玉造村にいでゆ浴びての歸さ、舟に湖を渡らんも面白からずやとて湯町の渡場より乘て出しなり。

廣き湖面は恰も油を流したる如く和ぎ渡りて風いと靜に見ゆる限りは波もなし。夕陽將に遠く三瓶の山の頂に沈まんとして燃るが如きいみじき日の玉は、青き白きあたりの雲を美しき紅に彩りつ。蒼く靜なる湖面は遙なる山際より次第に紅波を漂はしたる景色の美しさ。舟端に碎くる水又紅に輝けり。いづれも唯「マア美しい」とのみ言葉もなくて眺め入りたり。

「オヤ濤子さんの顏、お酒に醉つた樣よオホ」振り返り樣かく叫びて打笑ひたるは春子の君なり「サウいふあなたこそ赤茄子の樣だわ」見合す顏、白き浴衣、夕日に照り映ゑたるがあまりに紅くていづれも笑ひどよめきだり。白帆點々彼方此方に見ゑて歸帆の影靜に湖面を滑り行く、釣する船も網を納めて家路に就くべく櫓の音幽かに傳はりて出雲一流の安來節、聲ものどかに聞ゑつ絕ゑつ。西よりする風そよ／＼と輕き袂を翻して湖上の夕風いはん方なく凉し。ギー／＼といふ物憂げなる音に櫓を操りし舟夫は湖上中に漕ぎ出し時靜に櫓をおきてやをら立上りつ「ドレ帆を掛けませうかな」とかれて用意の五巾の木綿帆、白帆にあらぬ鼠色帆を高く容易げに揚げ終へつ舳の一隅にドツかと座して先一服「アゝ好い風だナア」張られたる帆は八分に風を孕みつゝ東北さして進み行く。落日いつしか遠なる山のあなたに沈み行きて名殘の光いよゝ美はしうやゝに薄れ行く紅の、藍色なせる空の色との調和面白う、兩岸の山の色暮

みを帶びて黃褐色なる十六飛いと鮮に見ゐたり。東の空漸々灰色の雲もておほはれつ。月昇るらし山際すこし明く彩りて見ゐたり。舟は次第に岸に近付きて今朝辿り來し乃木濱など手に取る如く見ゐて丈低く姿面白き汀の松の夕日に染ゐて綠の色もいやましに、浮べる如き嫁ヶ島、袖師の浦の夕照はげに例ふべくもあらぬ好景なりけり。

暗碧たる湖面、黑み行く空の色、白帆全く影を收めてかくて靜に暮れてぞ行く。對岸に見ゆる松江の市街は手に取る如く見ゐて燈火の影漸く數まさり行く。蒼蒼たる龜田の山に聳ゐ立つ千鳥の城いと嚴めしくさながら我等を迎ふるが如くやがて圓城寺灘に舟はつきたり。此儘に舟を捨てむはいと口をし大橋下へ迄行き與れずやと云へば舟夫は不承々々に纜を解きて舟は再び湖上に浮べり。天倫寺の晩鐘低く幽かに湖面を亘りて餘韻嫋々。沈み果たる夕陽は淡く夢の如く山際を染て光いみじき星一ッ又二ッまたゝきつ靜なる湖面漸々夜の色に掩はれ了んぬ。風はいつしかやみゐれど涼々たる夜氣肌は心地よく夏は何處といひたげなり。漁火三ッ四ッ沖に見ゐて欵乃ほのかに聞へ來つ。實にしづかなる湖上の夜！高う昇りたる十四夜の月、宛然秋夜のそれの如く清く澄み渡りて下界を照しつ、漂ふ金波美しとも美しくて「オ、奇麗！」とのみ言葉もなくてただ眺めたり。

「風と波とに送られて、夏も涼しき船の內――」與に乘じて鼓叩ひて歌ひ出したる「舟遊」の歌、共に唱ふ聲朗かに湖面に微妙の響を傳へぬ。中なる比、笛に合せて瀏喨たる笛の音胸の內より響き來ぬ。冴ゐたる音色、いみじき調、いかなる人のすさびにかと耳を澄ませば、彼方もやがて音をとゞめつ、湖上靜に又聲なく、魚跳る音いたづらに高し。

舟はやがて大橋につきぬ。顧る湖上たゞ黑く、それかあらぬか笛の音かすかに、調ぶるは紗窓……

秋の夕

美濃君子

あかずながめし秋の日もいつしか暮れはてゝ西の空に美くしう漂ひし金色の雲も跡なく消ゐ失せつ、暗の色は漸うあたりに迫り來ぬ。吾は今しも夕飯終へてそゞろ古郷の空をながめつゝ西の小窓によりかゝりぬ。

窓下のすゝき秋風吹き初めてよりあはたゞしう見上ぐるばかりになり、軒端の楓も漸う色づきそめつ。

折から軒の風鈴に音させてさと吹き入りし一陣の風にはら／＼と秋にかゝりし紅葉の一片二片。

膝それよ、昨日古里よりこは養老のよとて送りこせし赤きもみぢ葉とあゝ同じ色なるよ。思ひ出でらるゝ故山の秋影色なつかしき哉こひしき哉我家の後に高う聳ゐたる養老の山こそ我が最親しき友なりけり。

未だ幼なかりし頃よ。かの孝子のお話日每に母上より承はりて幼な心にもよし／＼吾もと或日父上が夜每に振り給ふくすびたる瓢ひそかに持ち出して、紅葉浮べる谷川の流れ危く汲み取りてそゞろ嬉しく紅葉の如き小さき手に抱へて我家の入口あはたゞしう走り込み「かお樣／＼これお

酒よお瀧の御酒よ」と父上を驚かせ参らせ、姉上に笑はれて泣き出せしも幾年の昔紅葉の燃ゆる秋なりけり、月影清く尾の上の松にかゝりし夕今宵こそ鹿の音きかんとて欄干すゝき亂れたる谷川のほとりさまよひつ幽かにとう〳〵と微風に通ふ瀧の音に唯茫然として夢の様に終夜さまよひ明かせしも今宵のごと秋風靜かなる夜なりけり

楓林のひまよりきら〳〵と星輝く宵妹と共にかの美神の眠り給ふ岩頭にたゝづみて無限のそこへ流れ落つる美くしき美くしき水のしぶき白き泡を臨みつゝ自然をうたひし時のいかに嬉しかりしよそれも亦今宵のごと星多き夜なりけり

中燃ね出し紅葉の美くしう瀧を色彩りつ遠近の山々漸う夕靄に消ね行く頃瀧のほとりかの苔むしたる巖の上に詩集片手に横はりつゝそゞろ想ひ出でらるゝ都の君の上さながらそれよ糸のごと盡の節樂しみの節……限りなうくり出されて溢るゝほゝゑみ強いて抑へしも今宵のごと紅葉のはら〳〵落つる夜なりけり

過ぎにし樂しみ夢の様にたどる間に夜やふけぬらん萬籟寂として聲なく夜色は次第に沈み行きつ唯秋風の靜かにすゝきの穗をなぶるのみ突如天地の寂寥を破りて遠寺の鐘の音一つ二つ……

緑陰

高知　小西雅子

一

たのしげに夏の歌うたひつれて流れゆく小川のほとりにいとひろやかにしげりたる一もと柳、おもへばこぞもおとゝしも、いたく年とりし媼のいつも夏にならばこの蔭にところてん賣りたりしよ。柳はこぞよりもみどり深うしげりたるにいかなればことしはかのやさしげなる媼のかげの見ねぬならむ。とんぼおふ童の姿のみ見ねて。

二

すゞしき森のかげにたゝずめる少女子二人、姉妹にや、岡にもやうの美しきひとゑ衣に燃ねたつやうのねび茶袴つけてしたしうよりそひ、あどけなき聲高く夏のうたをぞうたふ。……夏こそ今よいざ來れ……この時すゞ風さつと森を渡れば緑の葉省そよぎ、少女が黒かみはらはらと亂れ白きリボンさながら胡蝶のやうにひらめき海老茶袴ほのほのやうにひろがへりぬ。

三

庭の緑蔭にすゞみ臺すゑて夕げの後の一家のまとゐ、かばかり樂しき時は又あらじ。弟が罪なき話に笑聲にぎはしく妹が唱歌のこゑも淸らかに愛らし。すゞしき風は池をわたりて蓮の香をおくり、かゞやきいでし月は前栽の松の葉かげよりこなたをのぞきて笑ましげなり。

四

みどりしたゝらむばかりの槇の下かげには釣床かけわたされたり。そが中にねむれる兒、年は三つばかり、ふくよかなる頬のあたりうす紅おびて美しく、もゆるやうなる唇何げなう少しひらきつ。白き衣をふく風に任せてましろなる愛らしき手には白ばらの花一輪かろくにぎりてすやすやとあどけなくねむれる姿、あゝいかに美しくも愛らしからむ。あはれ罪なき姿、けがれなき夢。すゞしくそよぐ夕の風よ。このまどかなる夢をなやぶりそ。葉かげをもれてまたゝく星のかげ、この無邪氣なる天使の平和の夢を守りがほなり。

五

湯あがりのすゞしき身を木かげのハンモックに横たへつ。しづかに暮れゆく夕の空を仰げばあさぎ色のところどころにうす紅の雲たなびき、ねぐらにかへる鳥のかげ二つ三つ見えてさながら畫のやうなり。夕風のいと心地よきにしばしわれ夢ごゝちに、おぼろに暮れゆく空をながめ入りぬ。をりからきら〱とまたゝきそめしみ空の星、われにさゝやきて曰く、あはれなる人の子よ。おん身らははかなき世に金と名をえむ爲めには世狂ひもたえなやむにあらずや。はかなきかな、榮、ほまれ。そは夢の世のまぼろしのみ。われ等はつねにみ空よりうき世をのぞみ見てはかなきまぼろしの奴となれる人たちをあざけりつゝあるを知らずや、と。われ聞きて、己れ、金と名の競爭場たるうき世にすみわびて清きみそらをいかばかり戀ひしとや思ひけむ。あはれねがはくば我をちりの世より出して大空にのぼらしめ給へ。と云へば、さらばむかひの行かむといふこゑひゞきてみ空よりは白き雲下りきぬ。我をのせてふわ〱と空にとびゆく。天ちかくなるまゝに見れば紫の雲のたなびくあたりに、美しき衣ながら、みどりの髪はうしろにたれて胸のあたり頸のあたり、まばゆき玉のかゞやきてかう〱しき姿のほのかにぞ見ゆる。あはれ天女とはこれかと見つむればいつしか雲は消えぬ。ふと見れば身は木かげの釣床の上にあり。傍には幼き弟のハンモックゆりうごかしてほゝ笑めるなれき。をかしき夢よとみ空あふげば星のまたゝきも何となう心ありげなり。

半日の旅

ゆづる

日頃一度は試みばやと思居し大師詣今日ゆくりなく都へと歸る友を大森迄送るの歸途折から病みませる姑君に代りて立寄らんと心決めつ午過ぐる頃支度もそこ〱に友と共に家を立出てやがて定めの時は來りて身は車中の人となりぬ黑暗々たる煙一聲の氣笛も勇ましげに滊車は轟々として馳り出でぬ頃は水無月の末つかたなれと今日爽々たる暑氣堪へ難しとにも非ず折から人なつかしげなる東の軟風窓を通して乘客のさまで多からぬなど實に幸なる旅かなと語りあひぬ年頃目なれつる此里の山又畑も今日旅路ぞと思へば何となう珍らしう顧みるほどもなくていつしか鶴見近くなり行けば規劃正しき田畑指々として日の惠限なくうけつ千町に餘る苗代田はそよふく風に綠の波をたゝへて日々成育の樣見るからに嬉しき心地す左には鶴見潟の水渺々として枝面白き老松古杉の絕間遙にちら〱と白き帆影夢の如く浮ふも床しきに何處よりか自轉車一ッ風に向ひて木影を走り行くなと實に心行く眺望なり淸淨なる畑中日毎廣告板の數のみまさり行く實に心なき業よなと打語らふ中いつしかも大森の驛耳朶

にひゞきぬ然れば爰に下車して友と再會を契りて別れ直に電車に打乘りたり 待つ事數分時乘客なければとて途に車は我一人の爲に動き初めたれば其心地よさ言はんかたなしこゝも同し快濶なる田畑颯々たる風に心の憂さも思ひも吹き拂ひつる心地して進めば 左に大森の海蒼然折から行軍にもやあらん一團の步兵隊今や三々五々隊を亂して水邊にいそ〳〵と下り行くさま如何に堪へがたかりつる苦渴を凌ぎやすらんとそゞろ身にしみてあかすながめいりつゝやがて車は穴守よりの乘客二三名を乘せて走り行くにこゝは名におふ梨の產地巧みにしつらひたる枝棚の上纍々として枝も葉もたわむ計り實のりたれば我さへ一ツ採りても見たき心地せらるゝにまして無邪氣なる同乘の幼兒何をかしらん只管母に迫るも無理ならしと笑ひさゝめきつゝいつしか車掌の大師と報する聲に氣付きて下車し靜に步みを運ばせば 何れも同じ茶店軒を並べて客を向ふる聲いとうるさげなる計りなれといふ緣日にもあらねば人足いとゝ稀なる我には反て幸ひ獨り心に喜びつ 進み行けば壯嚴なる山門の左右には幾多信徒の膏血にやなりけんと思はるゝいかめしき仁王嚴然として此堂を守るにも似たりけり 平間寺の額未た新らしき下をくゞりて本堂に入りやがてそこはかとなく打眺め境內をめぐればそが住職の庵にやあらん狹からぬ池の水澄み渡りて 折ふし寓島鶴などの浮びてはさゝやかなる波をたゝへ庭內の構造一わたりの趣考を凝らせし如く四季の草木また乏しからず見ゆ 聞くに月の廿一日には遠近の老若男女集り來て一錐の地を餘さすとぞ實にまことゝは思はれさりし幾十株の梅樹は春の眺望を思はしめ 清けなる鳩の今日心安けに遊べる孔雀小鳥などの飼養せられつるなど罪なき幼兒の目を樂しますする者少からすやがて又た元來し道を辿りてけふの旅の印にもやと參拜の細工物二ツ三ツ買求め 再び電車に身を椅すれば今は颯烈しと言はん計り吹入りて沿道の葉樹靄々として繁り合ふにも實に彌生の頃花の隧道の言葉空しかるまじと思はれつ しばし不規律なる町をよぎりて又も快濶なる畑にいで五時過る頃川崎に着し四行の汽車待ら得て家に歸れば姑君今いはいと心地よしとてさぞや疲れやしつらんとくみ玉へる一椀の茶如何に美味なりしよ

野守日記

伊勢　河原芳子

天つみ神のあもらせ給ふかと思ふ迄、曉の淸霧いとおごそかに高嶺を下りて、露淸き花野をかう〳〵しく覆ひぬ、紅、黃、紫、くさ〳〵の花束は、皆深き神秘の息吹にやふれつらむ。夢よりさめし小鳥は、さやかなる音樂を奏して、光榮ある朝を讚美しつ、やゝに別れ行く天地の間を、さもほこらかに飛交ふことよ。

日は出でぬ、霧は元の高嶺にかへりぬ、葡萄畑に入りし我は甘き香に醉ひて、手に持てる小籠に漿果のあふるゝを覺えざりき。

夕暮れの闇にまぎれて、西瓜を盜むものあり、母君笑ひ乍ら鳴子を曳き給へば、盜人驚きて鳥の如く逃げ去りぬ、あはれ罪なき小盜よ。（九月一日）

年若き畫師の君、いぶせき野守の庵を訪づれ給ひぬ、きけば寫生の爲とかや、母君いたく親しげにもてなし給ふ、畫師の君喜び斜めならず、四邊の景色など寫しとりて去り給ひぬ、再び來ん時は、描き筆をお目にかけむとて。

（二日）

廣霖苑にとて叔父君の立寄り給ふに、畫師の君の事語らへば何とものたまはず、唯意味ありげにほゝ笑み給ふのみ、垣根の萩の眞盛りなるを見て、こはいかにと即興を示さる。

萩咲くや畫筆の乾く椽の先

（三日）

正午頃より雲の通路たゞならず、風さへいとすさまじければ、いかゞあらむと氣遣ひつゝありしに、黄昏頃よりけしきいよゝけはしくなりて心おちゐず、戸など固くさして燈火の下に額を鳩めつ、都の友へ送る可き文認め乍ら、そゞろに思ふ我が身の上。

露深き野末の庵になれし身も都こひしき夜半はありけり

（五日）

夜半の夢路に野分狂ひて、樹は裂け、枝は飛び、棚は破れ、垣は倒れて、みるかげもなきあたりの光景、怖しかりし空さりげなう晴れて、一しほあはれふかき朝の姿よ。

叔父君は畚を荷ひて夙く來られぬ、我は妹と共に例の籠を提げて、先づ葡萄畑を見廻り、夫より梨の林を經て、粟田を回りつ、鶏の床を訪つれ乍ら、茄子瓜などの畑に塗れたるを拾ひ集めて、背戸口に歸りし時、畫師の君は椽端に腰掛け給ひつゝ、荒れはてたる野より趣味多き畫題を覓め給ふ氣高さ、妹はしばし其運筆に見とれて、あはかなる眼を紙面に注ぎぬ、手には野菊の一本を持ちて。

かくて小さき絹に畫かれたる一片の墨繪は、畫師の君の手より妹に與へられぬ、お約束のゝ一首さすがに嬉しうこそ。

大阪なる伯母君より、再び遊學の事を勸告さる。彼の懷かしき友の居ますなる公園のほとり……、あゝ嬉し……　されど我は此の美しき野守の職を去るに忍びずと認めて返しゝぬ。中には草花のあざやかなるを、二ひら三ひら封しこめて。

（六日）

友人に別れて後

伊勢　丹羽さく

御音信も久しく打絶ゑなり候折柄、いとゞ御なつかしさのあまり、水茎の跡つたなき文もて、御たづれまゐらせ候、時候とはいひながら、今年はわきてあつさ、いみじく身もとけんばかりおぼゆるを、まして人家のしげくこみあふ、都の御すまひ、いかにわびしくやおはすらん。さても停車場にて、御別れ參らせしは、昨日の如く思ひ待るに、光陰矢の如く、いつしか一年の昔とはなりぬ、アゝ思ひ出せば、幼なき時より親しく交りかはして、春は共に花をめではやし、夏は河風に袂をふかして、たへがたかりし、ひるの暑さを流しては、心地よく手を引きてかへり、秋の夕べは共になぐさむ琴の調べ、さねゆく月かげをながめては、たのしみ、冬の日は火桶のもとにまどゐて、何となうかたり合ひて、たのしみいたるに、あはれ今は苦樂を共に言ひかはす友もなく、見るものきくものみな涙のたれとなり、すみわたる夜半の月かげ、袖に宿してはいやまし嘆つ言葉の茂りに茂るのみ。

御許樣には今此月を、如何にながめさせ給ふらんと、心淋しく、ひそかに袖ぬらしなり候、さぞ御許樣にも、同じ思ひに、しつませ給ふらん。

れがはくば程遠くはなれあふ身には、只ふみのみたよりなれば、いかにへだて候はんも、ゆめ〳〵心なへだてたまはで、花もれぢの折々には、御地の様など、もらしたまひてよ。なほ申上度言の葉は、濱のまさごのかずつき申まず候へども、とかくまはらぬ筆ゆゑ、止めおきまゐらせ候かしこ

都より山里の友の許へ

美城　山口すが子

落つる木の葉の音淋しく、山家の秋のあけくれ心細ぅ打かこたるゝとの御文、中々に羨しくて、淋しき山家の眞ぞ戀しう思はれ申候。よしや鳴く虫の音は繁くとも、優しき青の君様の養ひ給へし白菊の花、廣き御園に咲きみちて高き香りを放ち給ふとの御文、いかばかり樂しくやおはすらん、訪ふものは峯の松風流るゝ水の音のみなりとも、夕べ妙なる妻琴に調らべ合する笛の音の、下行く水に響きては浮世のうさも忘れはて給ふなるべきと、何も〳〵御羨しく、つれなき人に從ひて夜毎日毎涙に暮す妾の身には、都の中におきふしすとも、秋の露けさは片山里のそれにも增りて。

月淸き夜はわきて心の千々に亂れ申に候。あはれ今は亡き優しき母と打仰ぎしもこの月よ。懐しき御許様と手を連れて、十三七ツと歌ひしもこの月なりきと、昔のおだまきくりかへしては只々涙にて候。

もとよりおろかなる身の姑御様の御意に叶はぬは無理ならねど、あまりに辛き折々は亡き母の上思ひ出られて、人知れずみはかに詣で候ては、苔むす石に歎き聞ゆ、情を拂ふ秋風に促されては、惜しき袂の露はらひに歸り申に候。いつもながら悲しき節のみきこゆあぐるも、語らはん友もなく、堪へぬ思ひの心よりと何も何もゆるさせ給へ。

去年書中に封じて送り給はりし桔梗の花、今年もさぞや美しう咲きいで候ならむ、色香變らぬ花のそれにも涙こぼれて筆もつ手怪しう打震ひ候に、淋しきねやの窓近く哀れにすだく虫の音繁くて、さながらよみぢへ引いれらるゝやうの心地いたし候へば何も〳〵かきもらし候、

交りを乞はれし人に

下野　神山美代子

情あまれき御文いと〳〵喜ばしう拜し參らせ候、さてとや御許様には年月都の女子職業學校とやらんに學ばせられ候て、裁ち縫ふ業に御優れさせ候のみか文學びの道にも御いそしみ又なく御堪能の由承り、數々の雜誌にいみしき御歌共誦し參らせ候ては、かゝる御方様を友垣とも姉上とも賴みなばいかに此身の幸ある事ならむなどゝ、數ならぬ身のならぬ望みにあこがれて夕くれは雲の旗手に慕ひ參らせ候折りから、こ度御便りに接し候さへあるに見事なるお短册添へさせられて行末長く契らむとの御言の葉、世にもうれしく母と共々袖をしぼりて候よ、あはれ父同胞も

なき身の今日よりは栄あるみ手にすがる事を得候へばいかに心強き限りに候。みるめはかなき野菊の花も撫子女郎花の中に交りてこそ目出度かるべく候。後園の葡萄やう〳〵熟し候まゝ一房参らせ候、御味ひ下され候らひてよ。いづれお目もじの上御禮申し上べう候ひども、まづは甲斐なきおん返しごとまでに候。かしこ。

魂まつりの夜友の許に

千葉ゆき子

今宵は陰暦七月十三日、魂まつりの夜にて侍る、精靈棚は室の内に、父や兄の手によりて、しつらはれ候、妾は夕ぐれ妹と共に、門に迎へ火を焚き居り候に、空は霽れて澄のさやかなる月は、かの南手の栗の木の中程にかゝり居り候、魂まつりの夜とて、そこら何となく淋しう思ひ候は心からにや。

妹は、姉さん御精靈様は、何方より来給ふらむ、幾人ほど来給ならんなど云ふに、そは御先祖様はじめ皆様なれば、なか〳〵に人數は知れ難しなど申す内にも、妾の胸に浮ぶは、亡き母の事にて候、今宵来給ふその中におはすらむと思へば、立ち昇る煙りの中に、そのかみの姿の見ゆる心地のいたし候、御許様にも伯母に當る身の、今宵など旅舍の窓に、思ひ出で給ふらむか、妾はげになつかしさには堪へず候。

此の程の御消息によれば、御病氣も追々快き方に向ひしとか、此の月の末には御歸宅の事に相成り候や、一日も早くとこそ待ちまゐらせ候、今迎へ火焚き果てゝ、おなつかしさのあまり、此の文認め申し候。

月は早や栗の木の梢に昇り、兄は椽に詩集を繙き居り候、今宵は誠に淋しき夜にて侍る、おあたりの今宵はいかに、これまたおなつかしうて、かしこ

弟のもとに

備後　岡田美知代

敬さん、何をそんなにおつらいの、それはね、お前の通り人生は眞に不如意なものです、でも其困苦に得堪ねないで無暗と煩悶に泣いて、失望に終るやうな事は假りにも、堅忍不拔、眞の勇者たるもの夢にも見ない處です、だからご覧よ、古から穏かな春の海原を順風に眞帆はつて行く小舟のやうに、世の暴風怒濤を少しも知らない人等に、驚天動地の大事業が出來た例はありません、成功は必ず堪ねぬ逆境に忍び、懊惱煩悶に打勝つた勝利者に限るのです、そして萬事心の持方一つで厭世にもなり樂天にもなるものよ、落日の後には夕雲に浮び出る新月の光があり、残月の影には希望をはらむ朝陽の紅が有るではありませんか、大煩悶の後には必ず平安の光明安慰の活泉が湧くものです、何を歎き何を悲しむ事もありません、ねえ敬さん、螢の光窓の雪幾多の苦を積んで励んだ古聖人の行こそ、誠に學ぶべきではありませんか、どうか僅かの困苦艱難に

自棄しないで不羈獨立、首尾よく本望をとげて、たゞ一人の姑を喜ばして下さいれね、時分折れびねをせぬ樣に御自愛なさいよ、さよなら。

他郷の友へ

弘前　三宅亮子

月日は流るゝ水の如しとかや、日頃なれ親しみ參らせし君と、惜しき袂を別ち、陸奥の故郷をさして、戀しき都を後に、霞と共に立ち去りしは、さながらきのふの樣なれど、指折り數ふれば、今を去る六月あまりとなり侍りぬ。いつしか衣手寒き秋風は、白河の關をも吹き越ゑけん。うら淋しき秋色は日に深う相成候折柄君にはいかゞましますらん、とり出でゝ御あたり戀しう思ひやられ、御氣色承はらまほしうてなむ。同じ學び屋に明暮睦び參らせし折だに、あかず御慕はしう思ひ侍りしものを、斯く山河遠く隔たり候て、相見ることも安からず、誠に心細く、誰とて語ふ友もなく、淋しく暮し居り候。たゞ折々給はる玉章を、せめてもの心やりとたのみ參らすのみ。此夜頃清らかなる月影を仰ぎ見ては、かたみに眺めし昔の秋いとゞ忍ばれ候。君にも短き日れもす成す業しげく御座しまさん。御手すきもあらせ給はゞ、都の御物語洩し給へかし。妾等田舍の秋景色物珍らしく耳目に映ぜしふし、いさゝか告げ參らせん。そも見渡す山はこゝかしこに薄く濃く綠の中に紅葉のほの見ゑ初めしは、龍田姫の先づ試みの手染にやあらん。末遠き門田の稻葉吹く風に、黄金波なびくが如く、苅られし田面のこゝかしこに落つる稻穗をあさる雀の、鳴子の音に驚かされてむれ立つ樣あるは晴れ渡る空にうかれてや、赤き蜻蛉の羽音輕げにむれ飛ぶなど、をかしう待れど、故城のほとりの、半ば枯れし千草の根にすだく虫の音の、たゆ〳〵にきこゆるは、何となうあはれに覺ゑ候。げに山里の自然の山水の秋景は、あかぬ眺めに候。先はこれにて筆止め參らせ候。かしこ。

故郷の友に

伊勢　寺井露子

荻の上風身にしみて鳴き渡る雁に哀を催す此頃君には如何在し給ふらんと懐かしく忍ばれし折柄御情厚き御玉章嬉しう繰返し拜し侍りぬ。さても君と涙にぬれし四つの袂を停車場に分ち參らせしは花美はしき彌生の半にて侍りしにげに月日に關守なくはや虫の音滋き秋となり侍りしよ。思へば去年の秋今宵の如清き夕なりき玉萬橋上に手をとり合ひて互の不幸を語り同じ涙に夜の更くるも知らざりしをもはべりき其時よ假令如何なることありとも決して離るまじと契り參らせしに今日此地よりかゝる事共申上げんとは夢にだに思ひ侍らざりき。あゝ世はみな運命の神の命じ給ふまゝなるよ。御玉章によれば此地にて御修業を望み給ふ由妾も懐かしき君の御顔を拜し得るはこよなう喜ばしけれどいつかも申上し通り殊に女學生の醜聞多き此地故可成は御地にて御卒業を望みまつるよ田舍と申ても御地などは餘程學事の進みたる方なるにまして學才豐なる君にしあれば田舍とて必歎き給はで呉々も御身御大切に勉め給へや。御聞ゑまほしき事は濱の眞砂の數つきれどあまり長くなり侍れば又々後れん雁に

言よせてんと書き殘し侍ろになん。かしこ

朝顔に添へて友の許に

島根　岸崎以志子

是非に一日はとの仰せに、今朝か明朝かとたゞ心侍にまち居候を、そよとの御音づれもなきは如何にし給ひけん。園の朝顔既に見比に候。時れて大なる美しき花咲たる朝あゝあゝ今日訪ひ來まさばと味氣なく思ひしも幾度に候はん。父が自慢の狂咲の大輪・他の一鉢は昨日既に綻び初め候へどこは今朝初て咲き候。獨眺めむもいと惜くて未だ咲終へざる程を御目醒の御慰みにもとかくはとくより御門叩かせ申候。道の程如何に候やらん濃き紫は君も好みます所、御心に叶はゞ御寫生の御料にもとて。

一年に稀なる御休みの事とて御出離うおはさんはさろ事ながら、切なる妾が心汲取り給ひて一日御車枉げさせ給はずや。何事も優無き宅の事とて珍らしき御もてなしもおはされど、俗を離れたろ山里の曉深う、風冷たき園の内に、露をふみつゝ綻び出ろけしきを見んも亦一興と存候。願はくは前日より寫生帖御持參、父が心盡しの程御覽被下度、花も此上なき幸榮に候はん。かしこ

契り置きし友の訪ひこぬ夜に

埼玉　大亦隆子

隔なきをのみ見ろものかはと、君が戀人ぞと聞ねしかの法師も。の給ひつろにあらずや、陰曆八日の此月かげ、いだきておはす靈きうた數ひらき給ふが、あたらしとにや。頭の重くてなんと、いひのがれ給ふはあまりにつみ深きみ心と、怨じ參らするなん。またずしもあらぬ一人ずみのわらはのみには侍らずかし、小萩の君も桔梗の上も、尾花が袖も、いと露けく侍るを、かの日のかれ言、いつはりならずば、とく此使と共に鈴虫のふりはへて、君まつ虫の音をとめこかし。さらでも秋は寂しきに、さのみに物は想はせぬものぞとよ……。かしこ

月見に招かれし返し

伊勢　河原芳子

今宵の月見には、例の歌むしろ小霄に二位の君を招じ給ふとかや、わけて、豐けき秋の空さやかに、千代の松影振おもしろう照り渡ろ程、七草を題に詠み出でん歌の趣向こそ、いと興多き事ならんと待ち渡り侍りしを、口惜しや、やむごとなき俗用のいできはべりて、月の鏡に向ふ可くも覺ねず亂れ心の糸小萩夕風のおとづれをわびしう思ひつゞけ侍ろ、其七草の一つに加へられ侍りしが、今となりて欠け行くも胸苦しうて、思ひの程をきこゑ參らず、別に御目に懸け侍りしは、祖母が心づくしの里芋になん、拙き歌のつくりざまこそかへすへも耻かしけれど、せめてはかなき心やりにとて、

第參卷　第拾貳號　　花すゝき　（上二八）

夕風に花ちりかゝる萩の戸を月ますすまゝに立ちよりて見つ

あなかしこや。

納涼の記

伊勢　丹羽さく

こゝ五六日の暑さ、ほと〳〵堪へ難き程なるを、まいて朝より、ちりばかりのくももなく、木の葉動く風もなく、軒の風鈴さへ眠る眞晝の暑さ。やがて日影の長くなるにつけ、少しは暑さもゆるむやうおぼゆる折から、むしりたる友達三人四人とぶらひきて、いざこよひは、ひるの暑さを忘れなんと、誘はれければ、夕日かげろふ頃より、そこはかとなく、そよふく風にむかひつゝ、あゆみ行く程に、いつしか三瀬川のほとりに至りぬ。橋の上には、數多の人々、すゞしき川風を眞向にうけて、ここちよげにすゝみしてけり。吾等も、あまりの賑しさに足をとめ、たたずみゐたるに、すゞしき川風は、たもとをはらひて、夏もいつしか忘られて、我身ひとつの秋かとおもふ、をりしも東より月いと面白うさしいでて、松の梢にかゝり、きよく流るゝ水の面に、うつりし様の美しさ、一しほのきやうをそへたるなど、ゐもいはれぬながめなり。あな心地よしとてかへるるも忘れて、あなたこなたさまよひつゝ、あるほどに、いつしか月影の高くなり、遠音の笛の聞ゆるを、名殘をしみしかど、さればとて家路につきぬ。

蟲追ひ

埼玉　大亦たか子

浴後の夕風、肌心地よう、欄によりて、ふと見上る松の梢に、三日月細くかゝりて、軒の燈涼しげに、白露ほろ〳〵とこぼるゝ音に、深淵と高うなどりし、池の緋鯉をかすめて、蝙蝠二つ三つ、つと斜に低く消ゐうせぬ。折しも驟々となりいでたる大鼓の音、續いては、鉦の音人の聲、今か蟲追ふ式は始まると見ゆ。

浴衣の袖ひら〳〵と、隣の少女馳せて來ぬ。

「姉様虫追ひが初まりますのよ。サ參りませうれ、サア」

愛らしく邪氣なき其眼ざし、其笑顔はしき少女よいざ……とはしなう誘ひ出されたる、わらはゝ。今此少女の、柔かく美しき手をひきて、程近き愛宕の丘へと、登りゆくなり。

鉦の音、大鼓の響、やゝに近づきぬ、と見る……。現はれ出でつ火光の行列、麥藁を束れし、大松明の眞百焔々として、本町、仲町、新石町、町々

の、記號の提灯も混りて、南は八幡の森蔭より、北は淺間の社頭より、鉦よ、大鼓よ、さて賑はしさよ。

昔に聞えたる藍ヶ谷稲の産地、こゝ、一望千町の青田一つら、只見る炎々たる火光、充ち渡りて、かなたこなた、こゝかしこ、馳せ去り馳せ來る炬火の、狂へる如く打振る毎に、火花はら／＼稲葉にちりて、水にかゞやく其様の勇ましさ、春は吉野の夕まぐれ、櫻花の雪に踏み迷ふてふあはれはかなけれど、壯なるながめ、勇なる有様、まことや、かゝるいそしみには、いかならん害虫も、絶え果てぬらんと、いとたのもし、さてもかくてこそ、美稲瑞穂の國の名も得つるなれ。あはれ、かゝる夕、凉風渡る高樓の、小簾卷きて、玉琴の音ゆかしう、かきならし給ふなる姫君の、夢想も及ばぬ民の苦心よ、さあれ、米のなる木は、いづくに植うるぞとは、得こその給ふまじと、おぼえず、ほゝと打笑まれつ。ふと顧れば、ここにも一團の觀衆、……あな今其眼は、ひとしくわらはに、注がれにき。

折しもあれや、轟々と音凄まじき遠雷の響、滊車よ／＼と皆口々に……。

壯快なる今宵よ。

高く長き滊笛いさぎよく、滊車は今、此火焔の隧道をぬけて、眞一文字に、元荒川の鐵橋にかゝりぬ、其煙の末、焔の末と一つらに、星のほゝゑむ空に舞ふ。

やゝかれがれになりつゝと見えし炬火の、再びあざやかにてりたる時、行事の提灯高くとびて、火光は、漸次、赤山街道に集注しぬ。引揚げの大鼓音重げに、はた勇ましく聞えて、萬歳の聲天地に震ふ。

「今年は虫もつかないし、まづ／＼よい年柄ですれ」「これで厄日が無事にすめば、誠に結構です」など、とり／＼賑はしかりし見物の人も、やゝに散りゆくめり。歸らなんかな少女よ、豐年の歌唱へつゝ、と言ひし時凉風さと、稲の香を運びて、「丈八は、ことし初めて田を植ゑた。しかもできたふ、この稲は、たけが四尺で、穂が二尺、ことし豐年滿作で、舛はいらない箕ではかりこめしよ」と聲は低いが節面白く聞えて、我立つ丘の、下を過ぎゆく人の足音。

夜や更けぬらん、ぬば玉の、黒き波よる稲田には、さきの名殘りか、螢火點々、風に亂れて、蛙の聲、田毎にしげくなりまさりゆく。

夏休み

河内　櫻井喜子

○出立、待ちに待ちし夏休もいよ／＼今日よりとはなりぬいでや懐かしき故郷を訪はんと思ふも胸おどり氣いさみ足の運びも空を驅け行く心地す

梅田より滊車に乘る朝な夕な見馴れし大阪城は見る見る淡煙の中に消え失せて慕はしき故郷の山は笑を含みて滊車の窓に映ず西條驛につきぬ心は飛んで一家團欒の間にさまよへり

○故郷の野、見渡せば郷家は既に指顧の間に來れり笹舟を浮けて遊びし天の川は淡々としてありし姿を改めず毬つきに耽りし鎮守の森は蒼々として昔の笑をもらせり畑うつ人は鍬をやめて吾れをまもり道行く童は足をとゞめて吾れを見送るなどいと恥かし。

過ふ人ごとに別後の辭顔みらるゝも恥かしく夢路をたどる心地してやがて吾が門前には着きにけり庭前の老松は依然千歳の緑をたゝえて吾れを迎ふるさまいと嬉しくあはれ父母の御飾もかくこそあれと心に念しつゝ戶を潜りぬ

○吾家、優しき妹は一掬天眞の笑靨を含みて吾が袖をひき父君母君は慈愛溢るゝ御顔もて吾れを迎へたまふ祖母君はうち寄する年波にいといたう衰へたまひ杖に其身を扶けつゝ兩の瞼に涙を浮べて吾か歸りをよろこびたまふ御姿痛はしの限なり

○懷舊、あゝこれ去年夏休み日記の一節なり杖に縋りて迎へたまひし祖母君いまさず袖にまとひて嬉しみし妹亦なき數に入りぬ吾れ日記をよみこゝに至りて覺えず卷を掩ひて懷舊の涙に咽ぶのみ噫

殘る暑さ

丹波　かきつばた

○朝顏

露を命の朝顏のはかなき浮世を何頼むらん黃に紫に大きく小さく或はカーマンセラ孃が渦き舞衣翻したらんよう思ひ〳〵に競ひてあした〳〵の露の間を吾こそ顏の朝顏の艷を競へる垣根かな

うつろひ易き人心色褪せ易き紫の派手なる姿は先づ眼にうつれどやがて赤に白にとさま〳〵に變り行くは實に世の習ひ是非もなし。思へば二八の乙女子よ露な頼みそ花の色は露を含こそ嬉しき如何に咲くらんと樂しまれつゝ咲けばとて婀娜なる色は保つべしやは。夕を待たず凋みはて頼に刻む白波の數限りなき恨み多し

○暑氣

車井のから〳〵ときしる音絶えず響きてやがて土木學士の細君は片肌ぬぎして髷からげ陳笠忘れし頼朝公の富士の牧狩てふ扮裝にて米桶片手に出で來ればお隣の易學博士の令夫人めそかいてお額よりも眼よりも鼻よりも口よりもだら〳〵ほろ〳〵流しつゝ龜の子の浮遊する如く手足の活動したる二ツ計りの坊稚を背負ひて鼠色づきし白の浴衣無造作に提げて賴朝の御陣へと加はる間もなく左官左中將の御内室もお茄子五つ六つごろ〳〵ところがりたる大の味噌こしをぶらさげて尻切れ草履ぺた〳〵と是はまた双肌までも押ぬぎ兩袖を紐もて後標に結ひ付け後れじものと汗もたら〳〵走せ參じたる女武者もかくやとおぼゆる朝な夕な休む隙なき車のそれよりも一騎當千ならぬ當萬能の口車のはたらき目覺ましく數々拔も時節柄あつくろしき嫁自慢さてはお向ひの三宅の噂より炭の湯の板の朽ち間の蟻の巢のお話まで出る事〳〵窓深き擬遠ぐ見も聞もし玉はぬ井戶端の會議にさはがしき露西亞天氣昨日今日のあつくろしさあゝあらずもがな

○川端

晝間の暑さは何地行きけんゆら〳〵とそよ風に匂ふ錦木のあたり涼しく十三夜の月白う更けき夕を涼を迯はんと人々は風に狂へる胡蝶の其れならで若きも老ひたるも白妙の袖ひら〳〵と徐かにならす岐阜扇の風に招かれてにやふりはへたる友垣の訪れくると音無瀬の川べりをそゞろありけばかしましかりし板橋の下駄の音絶ゑてすゞしき川風よ水鷄もこゝに訪れてたのしき夕べよ夏しらず月も心も涼じくて浮世のちりはよそなれや語り草は盡きじ別れも辛し水鷄の聲もいと高し。あゝいとおしきこの夕べやたのしき今宵や。

雷

大阪　田中しゅん子

あなむし暑きことよ。犬は紅の舌はき出だして苦しげなるいきをつき、常はかしましと聞くせみの聲も今日は今にも絶ゑ入らんさまなり。一雨ほしやとあほぐみ空に、一村の黒雲わきいでしと見るまに廣く〳〵ひろごりて、うれしや涼しき風をさきがけにパチ〳〵と大つぶの雨先づ音づれ、續きてサツと篠つく計りの白雨ふり來りぬ。暫の程に庭はいくすぢとなき小流となり、池となりぬ。そが面には折柄落たる木の葉の舟其處此處にうかべり。立つ小波にゆらるゝ樣のをかしとて、幼き弟妹は手を打ちて喜びくるふ。外の面見れば。みの笠に身をかため鍬をかたにしたる賤の男降雨を事ともせずおのが田さして走り行くよ。詩にも畫にもふさはしの眺めかな。さながらかたき物かみくだきたらんが如はげしき雷に。今まで遠の方のさゝやかなるひゞきに心ゆるせし我は、思はず一聲高く呼びて眼かたくとぢ耳に兩手をあてつ。

白百合日記

和歌山　藤田いさを

○

ゆきくれし夕ぐれ路にこれ一つ見出でゝ、亡き姉君へと露重きを折りて歸りし時。いぢらしの子よとばかりつむり一つ撫でゝ去り給ひし母上、さてはかの鬼の如きばあやのそと涙拭ひし面影。幼心にも深く肝に銘じて忘れ難しや。

○

一夏、西の京の旅、嵐山の麓なる古寺に、なつかしき友の御墓を訪ひぬ。夢もこもるか夏草のしげみの中、苔むせる一個の石碑見るにもあまる涙の落つる所一輪白きゆりの花、汚れなき姿、清き香、宜や、天上の星一夜こゝに落ちて、しばし清香を塵中につゝみ、君が御魂を慰むらむものか。花や有情、去年は去れど今来れば、ありし山邊にありし姿して咲き出づるこそうれしけれ。されど、されど、人は、花の如き人は、一度ゆきてまたかへらず。やさしき言の葉、なつかしき姿、まだ我が耳に残れど、清き姿や今いづら。山色とこしへに翠りに、幽花白き夕、孤客の恨み長かりき。

○

露は情とおき、天上の星影暖をなせる白百合一輪、我れ手折らんとしてたゆたひぬ。さながら汚れなき乙女の前に出でしたはれ男が、神の御前の心地して胸のけがれも清ねうせしにも似たる哉。此の花、など、市に咲かざる。

夕夜虫聲をきく

横濱　二宮愛子

三ヶ月の頃よりまちし今宵の頼みし甲斐もなく、朝のほとより、雲おしみだれて、ふるさには、あられど晴やらぬ空に、こゝろもいとゞ結ぼれて、宵より、はやけれど、ふし戸に入りぬ、されど、口惜しきは猶やるかたなくて、ねまどろまれぬ、折しも隔ての障子に、細う光のもれくるに、ともし火やけち忘れけむと、よくみやれば、おもはずなる月かけのさすなりけり、餘りのこひしさに、そのまゝふし處ないでて、こゝろつくしの甲斐はありぬと、ひとりほゝゑみつゝとぼそ押しあくれば、さきのほどの雲とはかはりてちりばかりの雲もなき空にまどかなる月かげの煌々とすみ渡りたるが、今し松の梢にかゝりたるいはんかたなくめでたし、我にもあらで庭下駄かろく月にうかれて、そゞろありきすれば、草むらにすだくむしの音の、人のけはひにはたとやみたるもをかし、かくて靜にあらば、またなきいでむと、とある切株に腰うちおろす、折しも月は梢をはなれて白き光くまなく庭もせをてらせば、草木のかげやにしきてさながら、池の面にうかぶ水草のそれともみね、虫の音さへいよゝしげくなりゆけるに、しばし耳すます程こそあれ、池の中島なるすゝきのかげの、人まつむし遣水の、ほとり多からず、咲ける糸萩かもとのはたおり籬にそへるをみなへしの下のつゞれさせてふ、虫等とりどりにあるはひくゝ、あるはたかく、しらべあはせたる妙なる箏の音きくにもましてたかし、あはれこの音の雲の上まですみわたらば、月の宮なる天つ乙女も、さこそ耳かたぶけて、舞ひの手ふりも亂れめど、思ひやればいと床しくもをかしうなむ。

秋の夕

松野しげ子

入相つぐる鐘の音いとあはれに、遠山の影次第に薄らぎ行ぬ、袖打ち拂ふ秋風に心あくがれ、久々にて門邊をさまよへば、時を知らばなる萩、女郎花の流るゝ水にうつらふ樣美しう、穗に出し尾花の招くも心ありげなり。見渡す田畑は一面緑の波を打ちて、農夫が心づくしの程も忍ばれてなん、遠にそびゆる山には何時なり出しけむ、紅葉の錦よそほひたる、げに二月の花にもまして紅なるを、賤が伏屋に立つ烟に見へがくれする樣、はたゝとしへなき眺にこそ。あはれかゝる神さびたる樣當にもかき進れんにはと、そゞろにあかず打ち眺むる折こそあれ、いつしか日は西に入りて、雲間をもるゝ月影消し。名殘はいとゞ惜しまるれど、ふきくる夜風身にしみておぼゆるに、急ぎ我家に入れば、燈ほのぐらく、草葉にすだく虫の聲のみ高う聞ゆつ、あゝたへなるは秋のけしき。

晩夏の夕暮

靜岡　栗田よし子

夢の間にいつしか夏の中も過ぎて秋風の立初めなんも近けれど未だ暑さの堪へ難く吹く風は天つ神の送る扇の風なるかと疑はるゝ計りなま暖かく心地宜からず木蔭には蟬の諸聲とりどりにまけず劣らずかしましく歌ふにても酷暑の情は知られけり庭には今盛りを過ぎし鹿の子百合の花の明日に絞まん事の悲しげにうつむきて咲けるを見るとしもなく眺め居し間にあはれつれなき風に堪へやらでか力なげにも一ひら散りかゝりぬあらと思ひつるに又も一ひら折りしも無情を告ぐる入相の鐘は長く餘韻を引きてあたりに響き渡る頃裏に出でゝ作畑をそゞろに逍遙すれば彼の山道にて誰やら姿は見へねども美聲を細く高らかに

今朝秋風の立初めて昨日にかはる靈けさよとあはれ思ひに入る織姫の歌に耳すましてそめは其美妙の聲は山彦かはた仙女が舞ひの調べにやと思ふ迄に桁を渡て聞ゆればいかなる乙女の唱ふらんと聲をたよりて歩み行けども人影も見へればいづ地行きけんと見回せば四方りは只森々として松の夕風に戰ぐ音と谷間に鳴ける日暮らし蟬の聲のみ此蟬こそは都の人は知らざらん深き谷間に住みて夕暮のみ鳴く樣は恰かも短かき夏の逍りくるを悲しめるならんと思へりあはれいつしか夕日は山の端に沈みて草葉の陰には物馴れぬ虫の聲さへ聞へぬ早く此虫の妙なる聲立田姫の織りなす錦も見まほしけれど暮行く秋をいかにせんとあはれ晩夏の夕暮は思ひの種のいと多き事よ

そゞろありき

名古屋　むらさき

いざよひの月にうかれて友どちとそゞろありきなす程にいつしか夏艸茂れる野中の細道にいでぬ折りから吹くろ風のえならぬ匂ひして神にも身

にもしみぬればかの友だちこのわたりいづこの里にか蓮池あらんとゝへど己れもしらずと答へつゝさらば共にたづねんこの香りをよそにしてかへらんもいとほいなきわさなりと香りをしるべに月のあかりをたのみつゝおける白露かきはらい〱やう〱とある寺のまへにいでぬ見あぐれば額と云ふものゝかゝげたれど幾年月雨風にさらされてすこしのあとだになしそこよりおくに入ればあれにあれたる瓦ふきばあれと軒はかたふき屋根には名もしらぬ草のしげりあひて今はたれすむ人もなき古寺とこそ見うけられたれそを右にして裏にいづれは古池ありてそが中のにごれる水にはそまで世にも清らけきはちすの白と紅といろとり〱に今を盛りと咲きそひたるげになつかしく今までうす雲におほはれし月かけの餓にあたりてらせるは旅人の笠ぬぎすてたらんやうなるもをかし立葉浮葉さては卷葉におけるしら露のきら〱とかゞやき渡れるに夕月のかげをとゞめておもしろければ

　はちす葉におく露毎に夕月のかげをとゞめておもしろき哉

と誦すれば友人は

　見るからにいとゞ涼しさまされるははちすにおける露のしら玉

げにつきぬ名殘りなれど月の西にかたぶくに驚きて家路にといそぎぬ

赤

岩代　横山きつ子

青黄赤白黑の五色は、何れも優しくゆかしけれど、一しほぬけ出てゝ、氣高く愛らしきは赤きものなり、をさなき我が妹の下げに結びし黑かみに、紅のりボンをかけ、櫻の如きかほ、すもゝの如き口びるにうつりよく見ゑ、おはさみにむすびたる、紅の地に白きつるをそめぬきしをび、いよ〱見榮ゑありて愛らし。庭のかへで、風のまに〱吹送られて、彼方なる池にまひをちうかびて、にしきをおほひし如くに見ゆる、養ひなきし鯉は、己れが食と見しならん、むれつゝうかび出てたる中に、ひ鯉を見れはむすぼれし心もとけぬる心地せらる。

産子をば赤子といひて、西の外つ國の歌人は、一家の慶事をもちくる天のつかひとまでに、うぶ子をほめたゝうとか、實に〱赤子は春日の如き和氣洋々なる、家庭をつくるものなり、又

三大節の如き大祭日には、いかなる田舍の山住居にても、戶ごとにかゝぐる日のみはたは、赤ありて始めて美はしきなり。

人のつくせる誠をば赤心といひて、後の世に傳へのこりて、忠臣よ孝子よともてはやさるゝものなれ。

大陽も、紅なる御光り限なく照り渡ればこそ、萬つの物、青々したる景色あるなり。

雪しもを凌ぎて、百花に先だち、匂ひ初むる梅花もつぼみのときは、愛らしき紅にあらずや。

赤き手すきを掛けて、田う浮る少女いよゝやさしう、日光の水田にやどりしかげ、いよゝ氣高く見ゆ。

秋立てはわか山里は、時ならぬ紅葉の花に春を現し、門べにはころびたる、なでしこはぎなど、ひなにまれなるみやびやかなり。いと長こけれど、大内の紅の御袴、繪にて拜するさへに尊く思はゆるを、正しく拜し奉らは如何に神々しくありなん。神世の昔し、大國ぬしの御うたにも、赤きみ衣を好ませ玉ひしよし、古書に見ねたり。赤きことをかぞへつくさんに、多くしていとまあらじ、只心にうかび出づるまに〳〵、一つ二つをあげつ、赤は美はしき色ならずや

祖母昔噺

福井笹舟

夕飯をすまして一疊敷ばかりの夜話に、隣のはあちやんもきいちやんも我も腰をかけ一人のばあやをとりまき、團扇をばた〳〵やりながら花の如き星を眺めつゝ、おばあさん何かお噺ちて下さい、とせちがうのでとう〳〵まけて左のはなしをばなされました。

昔々ずつと昔の事で或山の奥に一軒の貧乏な家があつたとさ其家には歳とつたお母さんと十七八の息子と二人きりで暮して居た、家が貧乏だから息子が山で枯れ木を拾ひそれを町に擔ぎ出してやつと御飯を食べて居ました、或年の暮お正月が近くなつた時の事お米がないから少しでも買つて來て餅を搗かうと母と相談して、お錢を僅か五拾錢持つてお米を買ひに町へと行きました、しばらく行くと路の眞中に網が張つて有つて其中に一羽の鶴がかゝつて居た、あたりを見ても人が居ないから立留まつて、あゝ此鶴は可愛そうに此儘置けば人に捕まるだらう、と氣の毒に思つて其鶴を逃がしてやりました、鶴は喜こんで何處かへ舞つて行つてしまつた、すると忽ち横合から二三人の大男が飛び出て、折角我等の捕へる鶴をなぜ逃がしたさアたつた今の鶴をつかまへてよこせ〳〵と非常に怒られ困り果てた、仕方がないから五拾錢を懷から皆出して彼等にやりあやまり奉つて漸く堪忍してもらい折角米買に行く金を皆とられて手ぶらで家に歸つた、母に此事をはなすと仕方がないからとう〳〵米も買わず其正月は餅も搗かずに淋しく歳をとつた、正月も過ぎ二月の上旬或雪の降る寒い日息子は山へ行く母は爐邊に絲を操つて居た、すると向ふから十六七になる奇麗な娘が白の風呂敷包を抱へ此家へ這入つて、寒いから火に暖めてもらいたいと言ふ母はこんな穢ひ所でも好ければお暖りと言ふて心好く傍に招き火にあたゝまりながら色々の話をして其時娘が言ふには、妾を此家の嫁に貰つて下さい、と言ふ母は驚きこんな貧乏な家だから色々に言つて斷つたが娘は肯かないで、山でも野でも息子と一所に働くから貰つて下さい五六日食べる位は妾がこゝに持つて居るがらつてしきりにせちがうので、兎に角息子に話してからの事と言つて居る所へ息子が歸つて來た、で其噺を殘らずはなしたが是非貰はれたいと言ふのでとう〳〵お嫁に貰ふ事にした、其翌日嫁は機を織らして貰いたい機子も何もないてもいゝからとて一人で狹い一間に入り、妾が出るまでは愛へ這入てはいけませんと言つて戸を引立て、機を織り始めた、間もなく一反織つて夫に向ひ、是を町へ賣つて來て下さい千兩になります、と言ふ息子は驚いて賣りに行くと成程千兩になつた、もう一反織らして下さいて言つて又一間に入り、又一反織つて持ち出した、機干も糸も無いに機の織る音は聞へたと言ふ、そして又夫に向ひ、此布は蓮根の筋で織つてあるから一萬兩になります賣つて來て下さいと言ふ息子も母も大

きに驚き早速賣ると成程壹萬兩になつた、又一反織らして下さいと言つて一間に入りまた織り始めた、息子は不思議でたまらぬからつく〲考へて、おらが女房はどうしてあの機を織るのだらう糸も機子も無して、不思議でならぬからそつと戸の節穴から覗いて見ると、こは如何に、眞白な大きなお鶴様がしきりと何かして居る息子は大きに驚き、母に此事を話して二人で覗ひて見ると成程立派なお鶴様である、是は何か仔細があるだらうと思つて親子はわざと知らぬふりで居ると其日も暮れ元の嫁に成つて來て出た、其明日も又機を織つていよ〲其機が出來上つてさて息子に向つて言ふには、此機は亭主の毛と妾の毛と合せて織つたのだから何萬兩になるかわかりません、賣つて來て下さい、妾は昨年あの山の中で獵師の網にかゝり既に危き命を貴兄のおかげで救かりましたから其恩送りに來たのでございます、是で親子共に職業にとついて下さい、言ふかと思ふと忽ち大きなお鶴様になつて羽根をひろげてばあ〲舞つて行つてしまいましたとさ

秋の景色

福井　木村秀子

殘りの暑さも壹の間の暫くにて吹き來る秋風の涼しく身にしみて手馴れし扇の忘れがちなるもこれ秋の來つるしるしなりけり 秋風の音に目を覺せば戸のすき間よりもれ來る月影のいと淡く洩れる庭の草や木に置き渡したる白露も色に染みたるがごとく有明の月のうつくしく影やどしたる哀れさたとへんやうもなし 東の空漸く白みて朝日山に昇れば小鳥の聲喧しく前の山には栗など拾ふ子供の互に嘲る聲す涼しき秋風に吹かれて野邊に出づれば野邊は皆花の盛りにて鳴く虫の聲さへ匂へる心地していと哀れなり色づきたる草葉に萩女郎花其の他名も知らぬ野邊の千草も咲き亂れ眺め麗しきことげに春にも劣らぬ景色なり秋は先づ哀れなることも悲しきことも數多あるゝ心を樂ましめ目を悦ばしむることも多し打續きたる田は青海原のごとく稻の穗波面白く飛びかふ雀の聲をちこちに聞ゆるも濱傳ふ千鳥の音してみちしほひしはわからぬ定めも亦心なぐさむわざなりそよ〱と吹く風にすれ合ふ穗の音の恰も玉を轉ばすが如き響きしてまことに豐年の秋の景色見ゆるも亦樂し頃は雁金鳴き渡りて早稻色づき晩稻も色づきはじめければ賤しき男賤しき女の互に語り合ひつゝ稻かるもあれば運ぶもありていと忙しげなるは世の秋を知りたるが故ならむ秋も稍央となれば四方の山々は紅葉の錦織り出し朝夕の日影も照るに從ひて 赤くなる時に松杉など緑なる木の間に見ゆるはさながら青地の錦の如くにてまことに美し色づきたる木の 葉のほろ〱と散るも夕暮ばかり哀れなるはなし塒をいそぐ鳥の聲さへ虫の音に通ひて その淋しさいふ計りなし頃は霜月近くなりしかば空の色もすみ渡り 鎌のごとき三日月の色づきそめたる柳の梢にかゝりたるは物淋しき景色なりかゝる日にこそ都には筆かきならし歌など詠みて心をやる人もあらむとぞ思ふ秋も漸く深くなり行けばいつしか野山の草や木は霜枯れて眺め淋しきことゝはなりぬ尾花の蔭に鳴く虫の聲も秋の哀れをこめて高く低く空にひゞき渡るこそ又何となくこゝろ細くあはれに聞ゆ 彼方の畑に立てる柿の實のいといと稀に一つ二つ赤く殘れるに入日のさしたる夕餉たく煙うすく立昇ぼる頃木の葉の散り果てし梢に烏のとまりたる 流石に暮れ行く秋のおもかげ見ゐてあはれにも亦さびし双買のすれもののいひけんものゝ哀れは秋こそとさることになん。

納涼の記

安[illegible]貞子

照りはたゝく日のあつき眞中は笹の葉だにそよがず風打ならしつゝ夕をまつのみなりしに今は早夕立の空なごりなう晴れ渡り心いと爽に庭の青葉の露にほのめく光りは星かとまがうばかりなりかゝる時こそと思ひ立ち親しきはらから打つどひ家の子をぐしそゞろありきしつゝとある社の前に出づれば夏木立の下風心もとなき程打そよめきて涼しさ身にあまりかなたの山ぎわよりは月花やかにさし昇りて明けく聳びゐたる峯よりをつるたきつせは月にてらひて金モール引き渡したらん如く岩に砕くる清水は白玉をまぢゐしかと疑はるあゝこの處ぞと足をとゞめつそばなる老松の根にしばし腰打かけひるの暑の殘りなう消ゐうせしこそうれしけれと互にかたらふもまたゝしかゝる眺めはあかなくに時うつるをも忘れはてしにあたりの追々に淋しく只月のみいと高きにうちおどろき皆をうながし家路さしてぞ急ぎけり其道すがらとある堤に出づれば小川の清き流れにやどす月のかげはいと清きにいづちにやゆかしき箏の音のかすかに涼しき松風と相交りてひゞき渡り身にしみて淺茅にすだく虫の音さへあやしき聲の絶々にさては浮世を忘れ仙人ともなりたらん心地して其涼しさゆかしさはげに云ひもしらずこそ。

夏の月夜

西讃 さくら

春秋のいづれはあれど、月のおかしきは夏にこそありけれ讀書の折から蟬の聲に驚かされて仰ぎ見れば堪ゐかれし日影の漸々山の端にかくろひぬ湯あみして心もすが／＼しきに軒端の簾の子高うかゝげて庭に降り立ちやり水汲みつゝ心の限りうちそゝぎて しばし息ふほとや日はまつたく暮れしづまり澄み渡りたる月は松の木の間よりいさゝか面をあらはし草木に宿る露にきら／＼とうつろふ今宵の月を我もの顔に草葉のかげよりたかくひくゝ鳴き立つる虫の音もいとおもしろし風箏取り出し苔むす石に腰打ちをろして二三曲奏せしにあゝ惜しきかな虫の音はたとやみぬゆるせよ虫汝が短かき命をもうち忘れよしなき事して汝が樂しみを破りたりいざ風箏とりかたづけん以前に増したるよき節にて思ふ樣鳴けよかし狹き我が家のなかめより川岸の月も面白からむとふと思ひ浮べしほり戸押開き程遠からぬ橋の方へ足を運びしに橋上の人々言ひ合したらんように北へ目を注げり何事ならんと小走りして行けば何處の人にや岐阜灯提釣りめぐらしたる遊船を浮べて柳の糸に傳ひくる涼風を迎へつゝ小波に送られ流に沿ひてさをさす月とならび水中に映じて繪畫の其れの如く中には詩人のありつるか硯詩箋等の備へあるよう見受けぬ春子の君居まさば必ず筆をもてあそび妾にも一葉給はりなんに伴なはさりしこそ殘念なれ折しも御社の太皷十時を告ぐるに驚き母の妾を待ち詫び給ふならんとまたなき眺を捨てんは心惜しけれどせむかたなく家路に急きぬ

すみれ

廣島 沼田壽木枝

薄絹の如き霞の幕は今しも自然の美を覆ひていさゝ小川のせゝらぎのみ獨り微妙なる音樂を神に捧げつゝあるかの如し
我れは日頃愛読の詩集を手にし涼しき朝風にたもとをなびかしつ露しげきうれりうれりし畔道を行くともなく歩み行けば高く高くのびし菖蒲の
あなた萩桔梗などのゆら〳〵と一本二本のびし所に至りつきぬ
一面に薄紫なりし雲の一端なる東天の峯の端は忽ちもみぢにさも美麗なる模型を染め出せり其瞬間
紅なる朝日はまばゆきばかり光を放ち松原を縫ひ徐々として進み來りぬ
のどかなる朝日にそびらを照されつ萩桔梗を横に眺めて一際高き芝生に腰を下しぬ
咲き初めむとせし一輪二輪の野菊は露を凌ぎて咲き出でたり
持ち來りし詩集など播けばはしなく落ちしは菫の花なりき見よ紫の色あせて莖さへいたく萎れたるを
顧れば去春のなかば振り分け髮の愛らしく日頃なれにし蝶の歌聲ものどかに唱ひながら笹舟折りて小川に流し小魚すくひて樂みしあゝ其時よ其
時もたゞしき岩根もり來る泉のほとり咲きにほひしは此菫よ
妹は愛らしき手をあげてそを乞へりわれは殊に美しきを取りて一つは彼に一つはわがかざりの花となしぬ
あゝこのしをりこそはげに其一つなりきあはれ乞ひし其主はいづこ
あはれ菫よ心あれば懐しき昔を語れかし
あゝ一基の墓可愛らしき妹は獨り松風を絶ねずや淋しく聞くならむ
のどかなりし日影いつしか消失せて岩間をもり來る水の音のみ點々と
あゝ夏去り秋來り冬去りて世は又春に歸るとも返り歸らざる胸の思ひを如何せむ
あはれ妹よ文子よ汝もわれも董も共に共にのどけき昔に歸る事の得まくかば

秋扇

福島 屋壽子

一盛一衰は世の習とはいへど扇ばかりはかなきものはあらじかし水無月の空てりはたゝきてあら金の土はさけ黄金もとけなんあつさにひとり貴身をしまず働きて時ならぬ風を起しわびしきむなぐさむめり　さればその頃こそあれ誰も〳〵こよなうめていつくしみ人のがり音づるゝにも涼みのむしろにも　はた月見のうたげにも飾らでもてはやさるれどやう〳〵秋たちそめて萩の上風物さびしく音づるゝ夕よりはさしもの寵おとろへ

て塵つもる紫檀あるはあやしげの箱のうちにおひやられてはては物むつかしきちごの手に捕はれ腰を折られ骨さへ皮さへとゝめずなり遂には塵塚にほうむらるゝに至る暇にしてもしむあらば如何に浮世の無常をかこつらんあゝさりながら昨日は黄金の殿にすみてあやにしきに身をまとひ出づるにも入るにも多くの人にかしづかれ給ひしやんごとなき貴人も時うつりては見るかげもなきあばら屋にすまひつゝれの衣に身をやつし明日のけふりも立てかぬるはかなき人も多きそかし何そ獨りなれのみならんや

髯の辯

芝區　木下梅子

二頭立ちの馬車に打ち乘りたまふが、硝子ごしにみゆすく大臣のあご髯、さては綱曳き車の上に葉烟草くゆらす紳士の八字髭など、うちはゝいかがあるか知られねど外見はいみじう美くし。されど鼻の下に稍少し生へそめたる髯を、自慢氣にひねりて、さかしらに演說する男の子こそいと憎きものなれ。關羽張飛などの、美髯をさかしまになし、槍劍をたづさへ駒をゝどらして敵を追ふ樣を見ばおのづと腕に力こぶも出でぬべくましてや、世の軍人の、胸に譽れの光りを輝かし、乘る駒も勇ましく挿ぐる劍のひまより、うつくしき髯のくろ〳〵と見ゆたる時などは、かゝらむんは戰場にても定めし强かるべしと思はれていとゞ其人の崇はるゝよ。これも皆ひげの德にや。しれものゝ盜みなどして、配所に送らるゝ途すがら、網代車の隙より黑々と見ゆたる鬼髯は一しほにくう覺ゆ、あそび戯るゝうなひ子のつけひげしたるは、無邪氣なる樣見ゆて愛らし。ひれもす五月雨そぼふる街を、髯ながきかたゐの杖にすがりて行くを見れば、一入をかし。老いたる人の白髯ながく生ひて、胸を掩へるを見れば何となうゆかしきが多けれど物ひさぎて市賣りありくものゝ、髯生やしたるを見ればおのづからほそくゑまれぬべし。さはれ彼等はこの髯あるために商ひも多しとかきく。此外商店の番頭に髯ある者あるときは、何によらず物を購ひにくきが多かり。犬の髯はかれの燈なりときくもをかしきが、虎獅子などの眼を怒らし、太き髯を倒しまに立てたるは、畫に見ても身の毛のよだつ心地せらるゝよ。

寫生帖

芝區　木下梅子

○大空はさながらすみを、ながせるが如くかきくもり、雷の音、おどろ〳〵しう鳴りはためき、さと、吹く風につれ雨ふりそゝぎて、盆をくつかへすが如く。土のかほりの一しきりハにほひくるもうれし。軒の玉水、さては、綠ふかき木の葉に、したゝる雫の、露をかけたらん樣に、庭の面に水走りたるがしばらくにして、雨やみ、雷をさまり。東のそらには、はや、虹のあらはれたるもすゞしく。蟬のなく音やう〳〵やみて。賤が家の軒にたなびく蚊やりの烟、月にかゝり。牧童のふきすさむ、笛の音の清うすみわたりて、きこゆるもやさしきことなり。
○たゝく水鷄に、曉のゆめさめて、時鳥を待つ夜は凉しき、岬の徑に、馬追ひいそぐ、くつはむしを聞かんも、なか〳〵あはれなり。

○月の夜は、空ひきゝが、またなきながめなり。靄をこむる宵月も、春のなごりをとゞめ。蓮の浮葉に、玉こねて、雨のはれまの月をやどし。きら〳〵と見ゐて涼しく、ふける薫風の、遠くおくらるゝに、むれもひらけたらんやう、覺ゐていと清し。闇も亦、風に吹かるゝ、青葉のかげより、螢などとびいでゝ大空の星かげを、友としおもひて、たかくひきく、とびかよふも誰が魂ならんとあやしまれ。童のうつ手の下かいくゞりて、やさしき少女子の、浴衣の袖におもひをこがすなど、いと興あることなり。

○野末にそよぐ風に、かろくなびきつゝ、薄の中に、やさしくたてる女郞花、一枝、折らんとすれど花にはぢてあたりに人やと、手にかけしまゝ、ながむれば、さりとも、桔梗の思ひありがほに見ゆるもあはれなり。

○春とまり、夏ときて、又秋と、めぐり〳〵て小田巻の、とまる瀬のなき飛鳥川。來し夏、來ん夏、かはられど。同じからぬは人の身にこそ。昨日かたりし友どちも、ゆめか、うつゝか秋風にさそはれて、桐の一葉とうせて。共にながめし蓮葉の露をはらひ、おのれ露となりつらんと、おもへば此の樂しき景色もいと戀うぞ覺ゆるなれ。

荒寺

芝區　古賀やす子

形ばかりの柴垣もいたくやぶれて小門の戸びら風に倒れ居たり昔は眞庭にやあらんところ〳〵に殘る飛石づたひ行けば老松一株心のまゝに枝はびこらしたるが苔蒸せる燈籠によりて立ちぬ其側にゐげた朽ちたる清水あり大方は落葉の下にうづもれて思はぬ邊より玉の如き水のとう〳〵と流れ出づさまもをかし草ふみ分けてなほ辿りゆけば枯れがれの秋海棠さびしく咲きてくづれなんとする方丈壁は色うつくしき蔓紅葉にさゝへられたりき

雨後の競爭

富山みどり

此日頃小やみなき長雨も今日は靈の種より美しう晴れ渡りぬ背戸なる小川も水嵩つらんいで其わたり散歩せんと思ふ折から日頃愛でにしヂヤンの吠聲いと喧びすしきに何事ならんと急ぎ出で見れば小川の水嵩いみじう增し瀨枕なければたぎつる音もなけれども流れも早きたゞ中を純白盛りなる鷺等の五人六人小舟に棹さし網うち〳〵漕ぎくるに目珍らしきヂヤンは頻りに彼等を吠ゐたてけりいよゝ近づくまゝにいよゝ聲をはりあげしが何思ひけんあなやと思ふひまもなく勇ましくも水烟散らせてざんぶとばかり躍り入り瀨切りの波打こへ〳〵敵を見かけて泳ぎゆく時しも何處より來りけんいづれ劣らぬ大犬の全身眞黑なるが彼方の岸よりさつとばかりに飛び入りつ寄せくる波を物ともせずヂヤンと競ひて追ひ行けりすは戰といつしか築く人の山皆とゞ〳〵に罵り合ひしが中より一際聲高く「進め梶原腹帶なりかまへて佐々木の計略になのりそ」と呼ばはれ

ば聞きつけかけ來し弟の獨りいらちて「それジヤン否生食よかまへて磨墨にな敗をとりそ地下の佐々木に笑はれん」と呼ばり呼ばり勵ましゐさながら宇治川の先陣を目前に見し心地

やがてはげしき戰にジヤンは勝を得て勇ましく歸陣せりおゝ可愛のジヤンよあつぱれ漲ぎりし武士ゝ痛きはなきや創は何處とパン等與へて撫でやればいとうれしげに尾をふるのみ

とかくする間に日ははや西山の端に入らんとして美しき光を放てるに驚きて夕餐の仕度せんものといそぎ家に入りかれて學舍にて敎はりし料理今こそ試みんとはやれば意地惡き弟の姉上の料理ならは如何程かあらん我こそ今日の出水に乘じよき得物ゑて夕餐の戰試みんと網おつとりてかけ出でたり斯くなりては一心不亂の料理方こそ持たれ鍋こそ取られ赤白の旗こそなびかされ古の戰を現時に行ふ心地彼は何をか得し此手料理は如何に定めし山海の珍味も三舍をさけ父上は例の慈愛こぼるゝ笑顔に舌打ならして味ひ給はん母上はさすがに學びし甲斐ありとて喜び給はんさては無邪氣なる妹の鼓腹か盛り換へて甘がられ果ては意地惡き弟も平身低頭の樣にて打詫ぶるなかしさよあな心地よやさても待遠し今宵の夕餐折しもかすかに呼ぶ人あるにふと目覺むればあゝ夢なりしよ

萩の露

かれあし

塵深き都も、秋の色ふけては、軒打つ木の葉も峯の嵐と疑はれ、尾花を渡る風だにも、妻戀ふ鹿の忍びかれたる鳴音かときかるゝに、遠近に何に咽ぶか、こほろぎの聲絶へ〳〵なる、げに心なき身にも哀をそふる昨日今日。思ひはいつもおなしとはきけ、またすゞろに心ゆく方もやと、月かげの明きにまかせ、そこはかとなくまよひ出ればいよ〳〵忍ばるゝ野邊の秋色。夜々の時雨はうすくこく、千草染めなす色おもしろふ。哀れに細ふ鳴く虫の音も、消ゑゆくかとあはれなり。やせたる袖にまれたる尾花も去年のまゝなるを共にながめし人はあらで。金波ながるゝいすゞ川のほとり、村雨の名殘の露おもげに、下枝を波に洗はせたる白萩も時もたがへで氣高う咲き出したを、また來ん年も共にぞと誓ひし人はいづこぞや。ふり分け髮の其かみ、袖ひちて笹舟浮けつ暮るゝも忘れて、遊びしよりいく春秋、共に樂しかりし人やいづこ。

思ひ出る去年の此頃、そよと吹く風も人生の哀れを歌ふかときかれ、月は夢よりも淡き獨なりしよ。

「萩の葉渡る秋風に、あはれもそふや夜半の色、獨りこぼるゝ白露の……」みそらの月もしばしとゞめて歌ひにし花の姿や今いづこ、あはれ色も香もなき苔の下に。淸けき所は今もなほ、松の梢にひゞくらん。

月はいよ〳〵高く、萩の七葉を渡る風に、ほのかににほふ花の香も君が袖が香かとおぼゑて、そとよりそへば葉末の露のらは〳〵と、汀を洗ふ漣に消ゑて、またいづこをさしてゆくならん。……獨りこぼるゝ白露の……」涼しき聲は遠くはた近く……「なつかしの君いづこにさしてか」……答ふるものはたゞ叢がくれ夜寒むをわぶる虫の聲。

手折り束し白萩一枝、君がうつしゑの前にかざせるを、あはれ朝な夕な笑める面影、などてか蕾の唇におしあてゝ「ひとりこぼるゝ白露の……」と清けき聲に歌ひ給はでか、夢より淡く地に寫る、影と影とは手を取りて道芝の露玉と散らしつゝ、共にめでにし白萩の、あはれかくも早く君が手向けの花とならんとは……

朝の一時

神戸　中村菊子

隣の老翁のせき拂ひする聲に夢さまされしかば、例の如くそゞろ歩きせんとて、裏庭に立出れば四隣は寂として只草葉の影に虫の音をきくのみ。

大空に殘れる月はいよ〳〵細くなり行きて、東天の白むを見る、折しも吹くる風はいと涼しげにて、こゝなる朝顔は日頃丹精せし甲斐ありてか思ひしよりも大なる花の四ツ五ツ、露を含める樣得もいはれず直樣一鉢を父上が居間に一鉢を母上が居間にと運びつ。

吾が書齋のかたへに一つの小さき流れありて、其水は清くチョロ〳〵と自然の音樂を奏しつゝあるが如く、垣根の朝顔は今を盛りと咲きそろひふみ行く路の傍には未だ咲き初めしばかりの白萩の、露を帶びてところどころに女郎花の黃にそみし風情如何に。

遙かあなたには將棋の駒を散したる如き、藁屋の五六軒朝餉たく煙のたなびきて畫にもせまほしき彼の景色、こゝなる垣根越しに「いつくしみ深き主の手に引かれて」南向きの窓によりかゝり聖書を繙ける耳に、清く優しい聲で神々しく聞ゆ。そはまさに隣の美チヤン、

其聲の止みし後は、寂としてそよ〳〵と吹く風の音のみ。植込の先は低い木槿垣で左手は隣の美チヤンの御家、右手は町へ出るの街道

今しもこゝを馬子のむれの鼻歌うたひつゝ過ぎ去りて、後は裏の作爺の今や野良に出づるならんか自慢なる聲にて鄙歌うとふがかすかに、

漸くして垣根越しに「靜チヤンまゝ事して遊びませうか美チヤンもうこしらへしてるのよ」とかすかに

「オヤダーだつて二人ぢやつまらないから君チヤンを呼んで來ませう」

「アー君チヤンをれ」と只下駄の音のみカラコロ〳〵

ふと窓下を見れば桔梗や鷄頭が眞盛り其上露を帶べる樣ダイヤモシドかルビーを並べし如く

あゝなつかしき此桔梗よ

去年の今頃なりしや藤子の君のたまものにて、今尙かわりなく咲きそろへるを、君にはいづ地をさまよひ給ふらんか、去年までは共に樂しく野山をさまよひ此美しき景色を賞せし折もありしを、あゝはかなきは人の運命よ、いざ此花を手折りて藤子の君の御墓に手向けまゐらせむ。

晝の我家

伊豫　小松崎萩子

樂しき晝餉も終れは、斯る暑さの時に務めて物せんも苦し樂にせよとの給ふに、各々花莚取り出し、ころびつまろびつ、或は涼しき影に椅子持ち出で編物に餘念なきもあり、弟はハンモツクの中に心地よげに眠れる其夢や何處に通ふらん蜻蛉の上か、蟬の身か母上の白き温き御手を枕にゴム人形に見守られたる罪なき幼子の睡顔時々薔薇の唇うち笑むは母上に抱かれし夢や見しならむ、一枚のござをば我か家と、或は御隣親類と遊び居て「妹の御馳走か出來ましたよ」とて露の雫ずし、胡瓜のお刺身、木の葉のお皿に盛り來る愛らしさ、親族の仲らひ料理の業おのづと家政の練習となる女の子にはいと尊き遊にこそかゝれば下女達も涼しき方に身をよせて洗濯物の引のし、或は解物持ちいてかたみに語らひつゝ折々のいねむり心地よげなり

三時うちきけは眠れる者も起きいてゝ、冷たき井の水汲みとりて好める方につくるラムネ、ましで母上の燒き給へる、ビスケツト互に賞贊の聲とりどりなり、折しも伊豫簾にすき見せる釣しのぶの吹く風に打ちゆらぐも涼し

あゝ樂しき晝の我家よ暑さを避くるの地必しも大磯にあらず、鎌倉にあらず、此八疊の二間なり、我等滊船によらず、滊車をからずして、暑さに苦します此樂しさを得あゝまどかなる我家よ

我家の庭

山城　古川よね子

まだ木鋏を入れない我庭は非常によく茂り合つてゐる飛石の周圍の苔も石燈籠の上の苔もかはいそふにながく降らない雨のために色ぴからびてチヨイチヨイと茶色になりかけてゐるのゝある大きな老松は枝ながくよりあつてはや日も西にかたむいたに蟬がしきりにないてゐる、愛らしい子猫の玉はまるい眼をはつてその蟬をねらふてゐる、杜樸に躑躅は株大きく圓く牛の伏した樣なも鐘をふせた樣なのもある、今は花は一つもないが多くの樹の古びてこんもりと茂つてゐる

庭の入口に大きな釣條生ときれいな鉢に蘭が植ゑてある、いま湯からあがつた主人はしきりに其しのぶと蘭とに水をそゝいで居る傍には米壽の祖母君小首かたむけて熱心に其有樣をみて入らつしやる、

そして涼しそふな雫は水の青か注いだ條生からポタリポタリ落ちて居るのである。

花すゝき



和歌

佐々木信綱先生撰

（天）秋夜　　岡山　比武秋子

風をりをり虫の音はてふ夕月夜
　病みます母のむかし語ります

三句以下原作「月の宵病みます母とむかし語りや」憂はしげに打向ふやさしき少女面やせたる母幽なる燈火目の前にうかぶ心地す。

（地）霧　　大阪　奥山せつ子

聲ひくゝうたふ我が歌人は知らじ
　川霧ふかき利根の松原

景情共に掬すべし、四句原作「川霧深し」

（人）秋夜　　金澤　とし子

小萩原月夜靜かに更けゆきて
　ねぶれる花の露もうごかず

うつくしき歌といふべし、三句原作「ふけゆきぬ」

秀逸

初秋の月　　仙臺　草間はる子

夕映の雲紅に紫に流るゝ小川萩の花ちる

秋雨　　宮城　宮崎ちう子

背の君はいまだきまさず湯の宿の病の床に秋の雨きく

月前萩　　伊豫　栗田綾子

月影に露の玉てる眞萩原よるの錦の榮もありけり

萩　　定子

燈籠の火影小暗き枝折戸になりなりゆらく白萩の花

虫　　石見　宮内登美子

添乳せるちごは眠りて更ろ夜の竈のあたりいとゞ鳴くなり

くれゆく秋　　河内　大矢たれ子

刈りはてし小田に案山子の影やせておつる日あかく秋暮れむとす

海邊月　　東京　福田太一

靜浦のうらの松ばらつきすみて調もたかしあまのふなうた

雁　　德島　深尾糸萩

夕月に雁を見送くる僧わかしえさびしき山門のもと

秋草花　　　秋田　佐藤　千代能子
まかれちはよそにひちけて秋草の花さかりなりあれしふろみち

山紅葉　　　丹波　前田　久子
立田姫砧の音に驚きて紅葉の錦織り急ぐらん

川霧　　　秋田　佐藤　千代能子
ゆく船のしらほよりまつみねそめて夜ぎりはれゆく利根の川つら

朝顔　　　秋田　佐藤　一子
未たおきぬ庵のあるじをまちかほにかきねにさけるあさかほのはな

秋風　　　越後　小林　靜枝
秋風に茄子は倒れて殘る枝にとふ力なき蜻蛉とまれる

月　　　仙臺　ちどり
島の上の社ふりたる欄干に笛ふきなれば月さし登る

故郷菊　　　北海　白ゆり
わがすみし昔の家やこれならんかきれにのこるしら菊の花

擣衣　　　北海　白ゆり
月ならですむものなしと思ひつるよしのゝ奥に衣うつや誰

都住の秋　　　東京　中村　八千子
秋風に驚ろかされて故里の草家の軒を思ふ夜中かな

朝顔　　　奈良　增田　こう
賤が家のやれし垣根にまとひつゝしはし我世と朝顔のさく

秋の蝶　　　大阪　杉本　みや子
ひら〳〵とたそがれ時を蝶ひと羽何たづぬらむ秋さびしきに

秋風　　　熊本　文子
せみ聲もちしわらはのかげたえて秋風たちぬ產土の森

雁　　　遠江　阿部　三千代
古寺の一本松に日はおちてなくらき空に雁のこゑする

都秋　　　府下　令子
いとし子が學ぶ都の秋やいかに吹く風さむう雁なきわたる

紅葉　　　佐賀　江口　袖子
あめつちの惠み等しく賤がやの庭の一木ももみぢしにけり

秋の夕暮　　　紀伊　ふみ子
立ちならぶ楠は暮れて一筋の小川に殘る秋の日の影

秋の夕暮れ　　　福岡　井手　威子
尼寺を訪ひて歸さの萩の道夕べ靜かに雨降り出でぬ

折にふれて　　　信濃　竹鼻　はる
あやの露にしきの千草よそほへど虫の臥どやつめたかるらむ

蝶　　　京都　原田　園子
色々の花を見捨てゝ秋の蝶香もなき草のかげにとまりぬ

深夜虫　　　伊豫　北村　竹代子
秋の夜の傾く月そなく虫のなきてへぬべきわか世ならまし

佳　調

秋季雜詠　　　北海　しらゆり
さらでだにかなしき秋を草まくら旅路のそらに月ぞすみゆく

●　　　大阪　岡崎　龜鶴
織るか如き車はたえて橋の上に只われ獨り月を見る哉

●　　　下野　すみれ
行水のすみだ河原にすむ月のこゝろもあきのくもぞかゝれる

● 岡山　橋本芳子
世をのがれひじり住みます山の庵の垣根にゆかし白菊の花

● 武藏　安齋照子
何處ゆかゞなく鷲の聲高く九十九峯に霧たちわたる

● 茨城　さゆり子
たけ匂ひ栗ほゝ笑めるやまさとを都の君よはやもとひませ

● 館岩　小原みさほ
たへかれしあつさも今は夢なれや今朝よりすゞし秋の初風

● 福井　三崎眞砂子
いましばしかぜな散らしてくれなゐのこの紅葉を君に見せまし

● 大阪　岩村玉穗
夕くれの雲井の月をながめつゝそゞろに忍ふ父君母君

● 高知　河井つぎ子
御歌持ちて渡殿わたる秋の夕へ月に鳴きゆく雁の影見る

● 東京　小杉みつ子
あやにしきしきたる如き秋の野邊にいほりしあらばいかに樂しき

● 伊勢　齋藤貞
松青く砂白き丘の小祠に人かげたゑて秋風ぞふく

● 小石川　木内てい
ねふられぬ旅のまくらにいとゞ獨鈴虫なきて物思はする

● 東京　坂西敏代
ほにいでゝ尾花は何か思ふらむふく秋風にうつむきにつゝ

● 神戸　高井きくゑ
畵にせんと筆とるうらに心なくきりこそかゝれ不二の神山

● 常陸　鈴木ぎん子
早稻田苅る少女のたもと吹き返へしあぜの柳の二葉三葉ちる

● 秋田　佐藤千代能子
村がらす梢にとまる散みねて柿の實赤し山かげのいほ

● 茨城　菊地みれ子
菫さく春はきのふと見し野邊に尾花なびきて秋風ぞふく

● 陸中　あかし
せみのねのよわり果たる山かげの梢をゆする秋の初風

● 岩代　横山きく子
何事もなるればなるゝ理りにたがひて悲し秋の夕くれ

● 丹波　かきつばた
みとり濃き稻穗そよきて滿月夜足洗ふ子の歌おもしろき

● 神戸　中村菊子
虫賣りの翁は去りて畵師二人歩む萩原月さやかなり

● 照子
うゑすてゝ三とせになりし古里の垣の白萩盛りなるらし

● 大和　岡本花枝
さすらひの背子思ひつゝ病む母のみとりする夜を秋の雨ふる

● 長門　梅田染子
故郷の荒れたる庭のきりぎりす親なきわれは泣きつゝぞきく

● 丹波　植村梅子
見渡せば霧の戸させるあふ坂のせきをもこゆる雁の一つら

● 丹波　植村梅子
今朝栽し竹の姿をうす墨にはやくもゑかく窓の夕月

● 駿河　菊地武子
風渡る一里薄原日は暮れて夕月すごく狐なくなり

松老て蟲の音細き城跡に夕淋しく秋の雨ふる　駿河　[illegible]達武子

夜中の夢あしたに忍ひ庭の面に秋海棠の露おもげなり　廣島　和知廣子

つま戀ふる我に心やよせぬらんまがきの萩の色あはれなる　福岡　田代みき

月みんと獨り門邊にたゝずめばやゝ肌さむし秋の初風　神戸　上田輝子

松が根をながるゝ清水むすびつゝわが身ひとつの秋かとぞ思ふ　弘前　三宅亮子

瀬をはやみ夏やいづくに流れけむ川舟一里風の涼しき　弘前　三宅亮子

み墓より歸る細道日は暮れて聲もあはれにすゝむしの鳴く　前橋　直井潮子

掛川や昔をしのぶ旅人の菅の小笠に秋の雨ふる　伊勢　岡島いは子

行く水に白萩たれてみ空にはいまぞきらめくむらさきの星　廣島　和知廣子

たゆなく壁にめさめて小夜ふかく窓うつ落葉の音をきくかな　芝　藤なばな

紅葉散る秋の夕べのさびしさにはてなき空をながめやる哉　岡山　橋本芳子

少女子がかざせる花のやさしさにわれもと手折るにはの白菊　周防　中谷島羽子

　　　　　　　　　　　　　　　　　　信濃　竹鼻はろ

しめやかに秋の雨ふる窓のもとにふみよむ父のゆめにみえつゝ　熊本　加納やす子

昔の月に秋うたひをれば月をふむで雄鹿とひ來ぬ花をみながら　仙臺　うた子

宮城野の萩の錦はあとたへて昔しを忍ふ秋の夜の月　下總　石渡つれ子

あきの夜のうら淋くもつく〴〵と父亡せし子の行末を思ふ　下總　石渡つれ子

手折らむかはた繪にせんかとしばらくは思ひに迷ふ野路の糸萩　函館　横川とめ

人をのみまれきし野邊の花すゝきおのれなびきてしたれふすらん　須山なみ

露しげき賤が伏屋の草むらにつゞれさせとやこほろぎのなく　遠江　坪井露子

唯一つさびしく咲ける朝顔のかきれ破れて秋のかぜ吹く　丹波　前田久子

裏庭の柿の實落つる音しげし室山颪又一しきり　岡山　稲垣廷子

しら露の玉もてかざるいと萩の葉ずゑにやどる月のかげかな　北越　白ゆり

村すゝき招くあたりや昔ゐしわがふるさとのかきれなるらん　本郷　木山つれ子

萩すゝきとり〴〵にほふ花園につきやこよひの正客なるらん　大阪　富士田章子

一葉ちり二葉ちりきて紅葉ばの夕ぐれさびし友のおくつき

涼しさに驚き見ればいつしかに萩の上葉に秋風の吹く　周防　あさを

●

外つ國にふみにじられしから國のたみのなげきを虫はかこてり　宮城　宮崎ちう子

●

佇みて夕日眺むる菅笠に秋のかせふく川そひのみち　伊勢　岸田ちゑ子

●

栗の日に思ひで多き夕まぐれ萩の下露月にこぼれぬ　土佐　〔　〕枝

●

よしあしもまたしら露のけかれなき少女に似たり糸萩の花　武藏　三枝常子

●

鳥うり名にも似やらで赤らみし墓塲のあたり秋風の吹く　熊本　白藤すさぶ

●

朝ぼらけ淀の川ぎりはれそめてほのぐ〳〵見ゆる雁の一つら　近江　齊山せい

●

つゆふかき野邊の千草に月さゑてあはれに澄める虫のこゑかな　横濱　米原琴

●

秋ふかみ野邊の千草はかれはてゝさひしく見ゆる月のかげかな　備後　矢野傾子

●

久方の月のかつらもやゝやゝにあきのよ長くのひまさるらむ　伊豫　仲田繁子

●

荒磯に秋の雨降る夕まぐれ大鷺一羽低う飛びゆく　久留米　田中菊子

●

はらからと共にながめん秋の月入江の波にうつる秋色な　周防　杉岡あや子

●

　鳥取　天野清子

花に置く露にも秋の色見ねて病めるこの身はいとゞ堪へぬぬ　伊勢　清川黍子

●

なく鹿の聲も哀にきこゆなりわひしさ忍ぶ秋の山住　秋田　佐藤一子

●

八千草の花さく野へをとひくれは秋をさひしと思はさりけり　仙臺　ちどり

●

筆洗の水すてかねてたゝずめは露の姫垣月になりゆく　北越　白ゆり

●

もみぢ葉のにほへる山の夕ぐれはくれてもくれぬ心地こそすれ　備後　岡崎壽枝

●

池水もいまは涼しくなりそめて芦の葉末に蜻蛉とまれる　常陸　鈴木ぎん子

●

なきわたるその雁かれの一と聲に秋の哀は覺ねそめけり　大阪　岡崎鶴龜子

●

こし路なる友の玉章もてや來しと窓ひらくまにかりぞすきゆく　岐阜　荘加ふじ子

●

春逝きし友の紀念の文見居れば窓の戸ぼそにきり〴〵すなく　越後　小林靜枝

●

悲しさをむれにつゝみて涙のみて庭にいづれば桐の葉おちぬ　茨城　さゆり子

●

打ち捨て我子はゆきてあき見むとうゑし白菊いたつらにさく　芝　鈴木杵子

●

火かけうすき少女か國のまとのとの小萩か花に小雨そほふる　神戸　山下とめ

●

大そらの星かけ淡きたそかれに三日月見ねて雁なきわたる

さよふけて淋しき秋の山里になをしかなくれのあはれなるかな ● 長門　飯田ふじ

今はたゞ名のみのこりて花もあらず勿來の關にくつわ虫なく ● 磐城　宮崎春子

立田姫の紅葉の錦見はれども早山里に粘音する ● 丹波　吉坂あい

わがにはの桐の一葉のはらちりて千里も同じ秋は來にけり ● 愛知　中川しゆう

そよ〳〵と萩の若葉の音するは秋のしるしの風やたつらん ● 信州　泰子

白露にむすび初めたる菊のはなたなる秋もかぐはしきかな ● 下野　すみれ

露ふみて出てし嵯峨野の有明月夜君は影さへなく虫の聲 ● 東京　中村八千子

むくら生ひおとなふ人もなき庵に秋來にけりとつくる虫の音 ● 岩代　松露子

花すゝきまれく草むらわけ行けばゆかしや萩の笑みて向ふる ● 紀伊　山田紫子

栗の實の折々落る音のして夕べ淋しき森の下道 ● 横濱　實佐保

松の枝一つ〳〵にかぞへつゝしつかに昇るけふの月かな ● 岐阜　渡邊昇子

夕ぐれを鳴き過ぎし蜂茶屋の宿實にさむく秋の風ふく ● 東京　佐々木富江子

秋風の千草の原をそよ吹けばまれぐ尾ばなに露の玉散る ● 渡島　小林ていい子

秋草の露を命とともす火は夏におくれし螢なるらん ● 和泉　種子島初子

秋の夜は月の宮居の心地すも明けんあしたやもとの山さと ● 岩代　横山きく子

唯獨り過ぎし昔の春秋をゆめみる夜半にこほろぎなきぬ ● 茨城　さゆり子

すや〳〵とねむる子どもの枕べに聲もすゞしく鈴虫のなく ● 大阪　田中しづ

尼君が闕伽くまんとする軒の井にかげ見せてさく質菊白菊 ● 松江　西田錦子

城跡の空てわたり月更けて松原つゞきかりなき渡る ● 相模　あさ子

花の戸に春吊らいし友よいづこ奥城所秋の風ふく ● 豐後　右田まさ子

ふるさとのはらから遊ぶ野に似たるなみなへし原秋風ぞふく ● 岩代　美子

胸なへてたゝかひしたるその野邊に昔をしのぶくつわむしかな ● 伊勢　つじ子

すむ月にみがく玉よと手をのべてさはればおつる草の上の露 ● 津山　河瀬秀子

かけし巣に桐の一葉をちらされて蜘もおどろく秋の初風 ● 和歌山　國中てる子

八千草の花の錦のなかりせば秋のあはれを何にしの[illegible] ● 仙台　うた子

● 奥　村本春代

もろく散る桐の一葉に音づれて淋くもさびし秋の村雨

● 東京　松野すみ子

窓のうちに月影さしておのつから硯の海に映りけるかな

● 芝　をばな

いさゝらは紅葉の床に宿からむゆるせ今宵のあるしさなしか

● 埼玉　大亦纓月

少女ひとり吟道つたひ物おもふかざしの萩に夕日うするゝ

● 伊勢　森本しづ

病める母に藥進むる窓のへになきよわりたる秋の蟬かな

● 信濃　平林しげ子

歸り來てお墓のほとりさまよへば紅葉亂れて秋の蝶とぶ

● 大阪　奥山せつ子

窓ちかく病み伏す人の横顏をさみしくてらす秋の夜の月

● 柳原滿子

書にうみて窓おしあくるおばしまに露まつ虫のこゑあはれなり

● 信州　錦織幸子

芭蕉葉の風に破るゝ音ふけて月すむ夜中に雁なき渡る

● 鳥取　大野悦子

逝きし子のおくつきところ萩さきぬ自然の母のたむけなるらし

● 石見　宮内登美子

くれぬれば己れのみかは草も木も露をやどして月を待かな

● 秋田　佐藤千代能子

つゝれ着てかへり來ればふるさとの萩のにしきぞさかりなりける

● 磐城　作山美子

背の君と秋の富士見の歸り旅たびの宿りに秋の歌よむ

● 備前　駒井友子

このさとのまつりやいかににぎはゝむたろゝいなほにみのりしられて

● 埼玉　鈴木てい子

小鷹手に若駒なへて公達のかへる嵯峨野にうづらなくなり

● 埼玉　羽鳥松子

あす越ねん關の秋風さむからん背の旅衣ぬはん人なき

● 三重　龜井露登子

夏休すみていでたつ兄君を見送る夕べ秋風ぞ吹く

● 四日市　ひろ子

つゆながら庭の玉萩ながめなむしな戸の神よ心してふけ

● 石見　宮内登美子

汽車のまどあけて見かへす故里の空をとざして朝霧ふかし

● 長門　紀藤まき子

いにしへの城あと荒れて苔むしゝ古井のあたり虫の音高し

● 下總　つれ子

燈火を山の端出づる月にけして千草にすだく虫をとる彼

● 廣島　和知廣子

星かげの稀なるこよひ風たちてうづらの床に小雨そぼふる

● 福岡　柴田萩子

故郷の秋な忘れず咲てけりあななつかしの黄菊白菊

● 伊勢　寺井露子

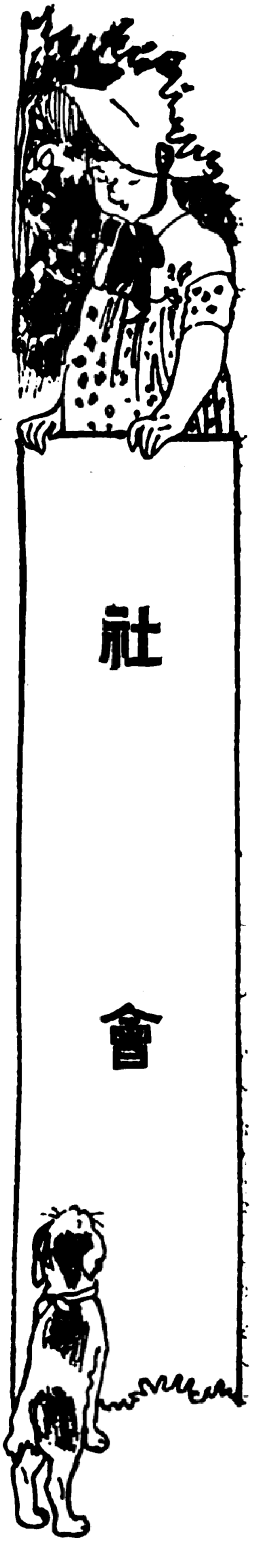
やみませる母はひとしほ哀とぞ聞きましつらむ鈴むしの聲

● 本郷　本山つれ子

入千原の花をあつめて蝶とりてかへる野路に夕月きよし



花すゝき



支那の衣食住

▲足未だ四百餘洲の十一にも及ばずして、該國の衣食住を布說するのは聊か大膽の擧動かも知れませんが、多年の研究材料中其の食物經濟に關する分を拔萃して假りに支那の衣食住としました內容の御粗末なるはその名の大なるに釣合ぬかも知れません

▲挿畫三葉は上海點石齋畫報より拔萃して摘要の圖解を加へました本篇には關係なけれど聊か風俗の參考として添へました

▲末項支那の庖廚は淸俗記聞饗應の部より摘萃したものです。

▲世界一の大國

支那は世界第一の大國である、露西亞が廣い、英國の版圖が廣いといふても支那に比較すると其半分にも及ばないのである。其の面積からいふても日本の二十倍はある、其の人口からいふても英國の十八倍はある、その大さは歐羅巴の大國を皆な集めたほどもあらう、南は熱帶に伸び北は寒帶に擴がり、比馬喇亞山から黑龍江まで一帶の地は皆支那の領土である、それほど廣大無邊の邦國であるから東西南北、涯から涯までの間には隨分風俗や、生活を異にして居るであらうとおもはれるが、矢張り一國は一國で面積の廣い割合に東西懸隔しながら風俗や習慣上にはさしたる大差はない。まづ北の奉天府から南の廣東まで直徑に行つても八百里ある、若し陸路を通つて行つたならば、千里ではきかない。其れほど懸隔のある土地でも言語は同じ支那語衣服は同じ支那服、食事は同じく朝夕の二食、其の他の風俗は皆一樣である尤も蒙古や西藏は高原だけに少し趣を異にして居る。

▲經濟からの割出

支那の生活を一と口に言へば經濟からの割出しである。即ち生活法から割り出した經濟でなくて經濟から

割り出した生活法である、そこで支那人は家政とか食物經濟とかいふ方には極めて熟練で、世界中でも佛蘭西人を除いて他に及ぶ處ろはないと言はれてゐる。

▲世界第一の舊國

何故に支那人が食物の按排に上手かといふと、それは第一國が古いからである。支那の開國は歐羅巴のすべての國は勿論、釋迦の生れた印度よりも、金字塔の遺物のある埃及よりも、又西洋歷史で世界最古の文明國と呼ばれた、バビロン、アッシリアよりも、猶古いのである。即ち支那は世界で第一の大國のみならず、又世界第一の舊國である。

▲舊家と新家

世間に舊家と新家といづれが家事の經濟に長じてゐるかといふと勿論舊家の方が長じてゐる。これは久い間の經驗から來た智識である、又若いものと年老とどちらが物を巧みに遣ふかといへば無論年老が上手であるそれと同じ樣に支那は國を開いてから年所が久しいだけにそれ丈け又生活の法に巧みである。

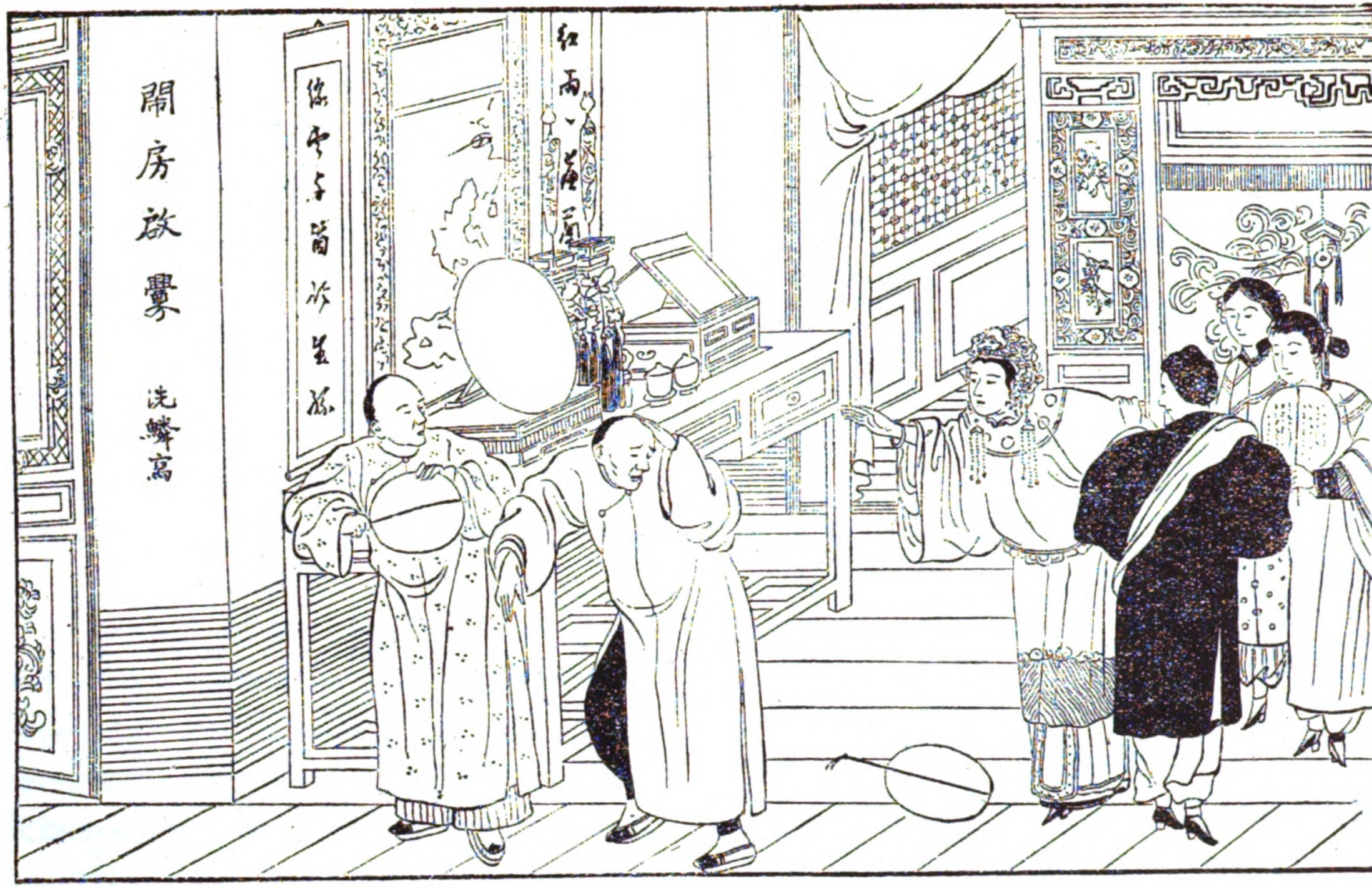
▲大家族の生活

今一つ支那人が生活に巧みなのは人口の多い所爲である。國に人が多ければ多い丈けに必らず經濟が上手でなければ行かぬ。譬へば大家族の暮し向に無駄費ひの少いやうなものである。濠洲や、南亞米利加のやうな新開國では人民の少い割合に生活費は中々多い。南亞米利加で三人暮すほどの費用があれば支那人は十人も十五人も暮すことが出來るのである。此の點から言つて支那人は天成の家事經濟家であると西洋の觀察者が言ふてゐる。

國が古くて人口が多い點から支那人が節儉に富んでゐるとすれば、どの道一ッ日本人はこの支那人に學ばねばならない。即ち家事經濟の御師匠として支那に學ばねばならない。

▲一日に二仙の生活費

以上舊國大國を外にて支那は世界中で一番生活程度の低い處ろである。日本も印度も支那には遙かに及ばない。一日に二仙の錢で屈强な男子が生活をしてゐる處



市井の輕薄人揚氏の新婦に調戲して恥辱を蒙るの圖

ろは世界中に支那ばかりである。それならばこそ今日六億以上の人民が飢えもせずに生活して行かるゝのである、若しも支那人が我々の如く家計に無勘辨であつたならば今の人口の半數も安全に暮して行く事はなるまい。世間もし濫費にして家計の不如意を憂ふる方もあらば聊か支那人の生活を參考にさるゝがよろしい。

▲節儉の三箇條

支那人の節儉といふ言葉には三つの法がある、第一需用の數を減ずる事、第二浪費を省くこと、第三少量を利用して多額を代表せしむる事。

第一需用の數を減ずるは。食物でいふと一飯一菜で濟すこと、日本人の如く一時に汁も喰ひ、煮物も喰ひ、漬物も喰ひ、おひたし、酢の物、あえ物、揚物といふやうに食事に數々の物を、調へぬことである。この點からいふと大阪の町家の三食はやゝ支那的である。

第二浪費を省くことは、いふまでもなく無駄のないやうにする。家内の人頭に割合して物を調へる、その以外に決して餘分なものを拵らへないのである。

第三少量を利用して多量とする、これは一口にいへば萬事德用の品を使ふ事である。米ならば古米を尊び、飯に炊いて分量のあるのを尊ぶのである。

▲常食は野菜數品

西洋の旅行者が支那の內地に這入つてまづ驚くのは食物の非常に質素な點である、多數の支那人は只米、稷黍又は種々に調理した蠶豆、野菜の如き僅か數種の品で一年中の庖厨を理めて行くのである、尤も祭日か又は特別な祝ひの日は別である兎に角五億以上の支那人の常食とする處ろは以上の數種に過ないのである。

▲料理法の達人

支那人は又料理法の達人である、僅か三四種の材料を樣々に調理して朝夕の膳部を作るのである、或る統計家の話に通例日本人が一日の食品は十五六種より多きは三十種に上るといはれた。成程我々が朝晝、晩の三食をするに就てその食品の原料何程を要するかと計算して見たならば忽ちこの說の僞りでないのが知られる、試に一例を擧ぐれば

朝　米、味噌、醤油、野菜、漬物、梅干、鶏卵
　或は豆腐、茶、乳汁

晝　米、醤油、魚肉、或は乾物、砂糖、野菜二
　三種、漬物、茶

晩　米、肉類、砂糖、野菜二三種、漬物、菓物、
　茶或は酒

極めて單純なる生活にしても日本人の朝夕はこの通りである然るに支那人はなるべくこの原料の數を省いて調理を巧みにするのである。經濟上非常な相違を來すこと知るべしである。

▲一物も抛擲せず

それから又支那人は食物材料を利用する事が極めて巧者である。譬へば一頭の豚、一羽の鶏を食ふのに食物として利用さるべき限りはすべて利用し盡して捨る處ろは殆んとない、唯骨と羽だけである。臓腑でも頭でも、爪の間の肉までも悉く食料にして棄る處ろはない、或人は亞米利加の臺所から日々投棄れる處ろの食品の殘物で以て六千萬人の支那人を立派に生活せしむる事が出來ると言つた位である。支那では一旦煎じ出して茶椀に殘つた茶を再び土瓶に移して温めて飲むといふ事である。

▲薪材の不足

今一つ食物調理に就て支那人の經濟思想は鍋の底の薄い事である、一體支那といふ處ろは薪材に乏しい土地であるから、場所に依つては木の葉や、柴や、又は米麥の殼、高黍の根などを薪の代りに使ふ位であるから、迚も日本などのやうに薪木を粗末にしては一日も生活する事が出來ない。隨て鍋釜の底は薄くなくては叶はぬ、是に就て一奇談がある、西洋の旅行者が内地を旅行して居ると數多の兒童が棒を手にして木の葉を打つ様が如何にも熱心であるから、あれは何か栗でも拾ふのかと案内者に質問した處ろがいや、栗ではない、木の葉を落すのであると答へた、木の葉を落してどうするかと問ふと。今は落葉の時節であるから彼様にして一年中の燃料を拾ひ蓄へるのであるといつた。實に支那の生活を活現した話しである。

▲支那の富源

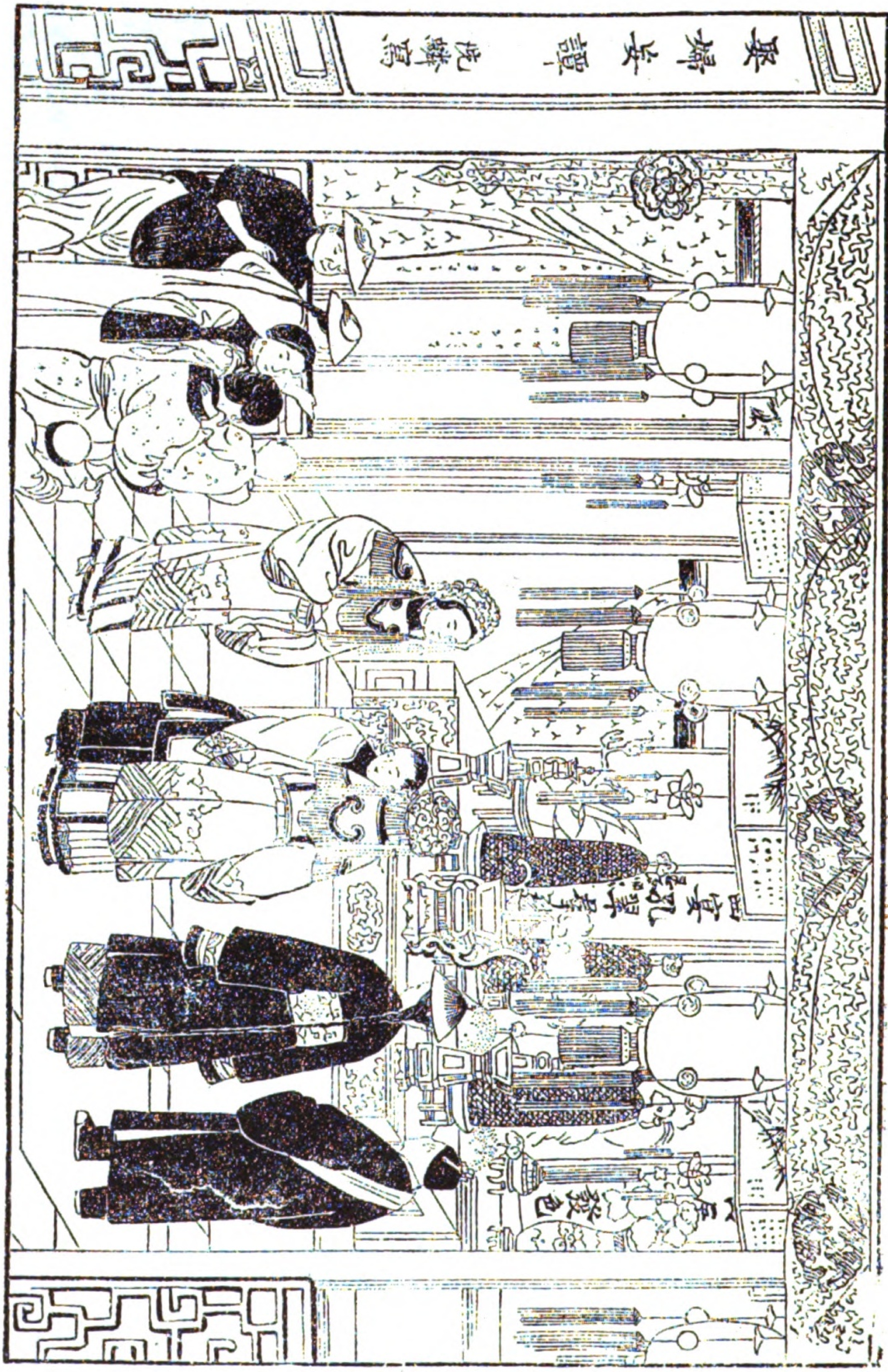
以上は支那が六億の人口を有して居る點から見た支那の生活の半面であるが、玆に又四百餘州の版圖を有してゐる點から見た支那の生活は亦實に饒かである。彼の三國鼎立の時代に蜀の玄德が保つて居た蜀の地、今では四川省、此の地は上海から楊子江を六百里も上つて行つた山の中であるが、別に天地が開けて一大富源を成してゐる、その面積からいつても日本全國よりも廣い人口は四千五百萬人で日本に比敵するほどの土地である。五穀野菜はいふまでもなく、絹、綿、茶、金銀、凡そ、世界に產するほどの物は何一つ不足はない、元來山間の僻地であるから交通は不便であらうと思ひの外、省內には利根川、信濃川よりもまだ廣い大河が幾筋も流れてゐて運漕は自在である。器械工藝も中々開けて盛大な製造場も多い。誠に天賦の寶庫である。支那全體の豐饒である事はこの山間の一省の富んでゐるのを見て大凡を知るべしである。

▲天然の沃土

支那は世界の肥沃であるとむかしから西洋人が眼を着けてゐた。埃及の繁昌は「ナイル」河があるからである。一年一度「ナイル」河の洪水がある爲めに河の近傍にある地面は肥料を用ゐずして澤山の穀物を得るのである。支那の內地も同樣に南に楊子江、といふ大河があり、北に黃河といふ大河がある。世界屈指の大河を二つまで國內に控へてゐるだけ、支那の土地は實に天然の沃土である。

▲長江の天產物

楊子江七百里の沿岸が支那の大富源である事は何人も承知して居る處ろであるが、その河の邊で收穫物の多い一例を擧げると、鷄卵である。今日東京、大阪で上海玉子といつて日々食膳に供される鷄卵は皆この楊子江の沿岸から上る品である。日本では物價騰貴の昨今一個二錢以上もするが、これが支那では僅かに五厘か三厘である。何故そんなに廉價であるかといふのに、安いも道理、鷄を飼ふ方法が全く日本とは別物である。まづ鷄を養ふのに餌が要らない、夏季は農家協同の牧



妾婦の罪を犯したる主婦前に於て其罪を謝せしむるの圖

場に豚や、牛馬と一緒に放ち飼をして置けば、天然生の稗や馬糞を食料としてよく育つ、又冬になると楊子江の水量が減つて來るので其の兩方の岸は一帶の自然の養鷄場になる、河の兩岸が干ると夏の間に發生した無數の昆虫がうよ〳〵として這ひ出すので鷄はそれを啄んで喰ふ、麥や秕で飼ふよりはどんなに利益であるか知れない、この樣に養鷄に手のかゝらぬのが、第一支那人の經濟上に益する處ろである。

▲各戸鶩の馳走

豚や鷄卵と同じく鶩も又支那人の食膳を助ける重なる品である。支那四百餘州如何なる土地へ行つても食膳に鶩の御馳走の置かれぬ處ろはない、又どんな料理店に行つても鶩の油烘の供へられぬ店はない。扨てその鶩はどうして飼はれるかといふのに、長江の沿岸に至る處ろ湖水と河水溝渠とが縦横に連絡して居て、人民は殆んど水の上に生活して居るやうである、それ故鶩は溝渠のほとり河のほとりに自然の飼を得て造作もなく育つのである。鷄でも鶩でもすべて一家の主婦が管理して、家事の片手間に飼育して居るので別段手數を要しないのである。

▲食物に濃味多し

鶩、鷄、豚に就て支那人の食料に饒味の多い事は爭ふべからざるものである。この點に於ては、日本、朝鮮は言ふに及ばず、西洋諸國の料理も又及ばないのである、食物に脂肪の味と、膩の匂がしなければ、支那人は美味でないやうに感じて居る。彼の饅頭でも油で揚げたものでなければ喰はない、蕎麥でも脂肪を混ぜたものである。其淡泊なものは僅かに豆腐と寒天位なものである、

▲不熟を食はず

支那人は食物衛生といふ事に就ては自然にその奥儀を得て居る、第一生水を飲まない。尤も支那には清冷な水、澄水が得られないからでもあらうけれども、如何なる貧乏人でも、其日暮しの日雇人足でも決して不熟の水を飲むといふ事はない一旦は必らず沸かして飲む。水がこの通りであるから、一切の食物を生で食ふ

事はしない、魚でも、鳥獸肉でも必らず一度煮たものでなければ食はない、唯蔬菜だけは生食をする事があるけれどもそれは、必らず一旦鹽に痛めてからでなければ喰はないのである。

▲二食一點心

支那人の飲食は一日に二回である、朝は午前十時、晩は午後四時。此の外に點心と稱して午後一時に饅頭様のものを喰ふ。そしてその食ふ時茶碗で數杯も重ねるといふのでなく、一食分の飯は一度大きな茶碗に盛つたゞけで決して御代りをする事はない。又菜も大鉢、又は丼に入れたものを、銘々の小皿に少しづゝ取つて食ふのである。

▲食膳の献立

支那の上流社會では一食に四盌四碟といつて、羹汁的のものが四品、煮物、揚物的のものが四品、都合八品であるが、少し饗應的の食膳になると八盌八碟といふ事になる、材料は羊、猪、鴨、魚肉、蔬菜、海草、介類である、殊に嗜好するものは、日本から輸出される烏賊、鮑、海參、鰹節である。

▲食膳の嗜好

總じて朝の食は多肉で、晩の食は淡泊である、この點は日本流と全く反對である、又飯は老米と言ッて極めて古米を用ゆる、次には粟、燕麥蕎麥等である。飯の後に粥を食ふて、それから饅頭を喫するのが順序である、有福人は食事の際概ね酒を用ゆる、朝に五加皮酒晩は紹興酒である、點心の奢ッたものは燕窩に氷糖を懸けたものや、又は寒天に蜜を加へて製した羊羹、又は杏子、棗など菓物のジャムである。又單に湯として喫するには蓮子湯、人參湯あり、宴會の盛饌には極めて珍異の食味を供へる事を尊ぶのが支那人の風習で、魚の腦、羊の肝臓、鷄の距、鴨の掌などまづ珍味としたものである。

▲廉價にして美味

一体支那人の食料は歐米諸國に比較して其の價は至て廉價であるのみならず、その質も又至ッて美である、彼の桃の如き、梨子の如き、棗の如き、又西瓜の如き

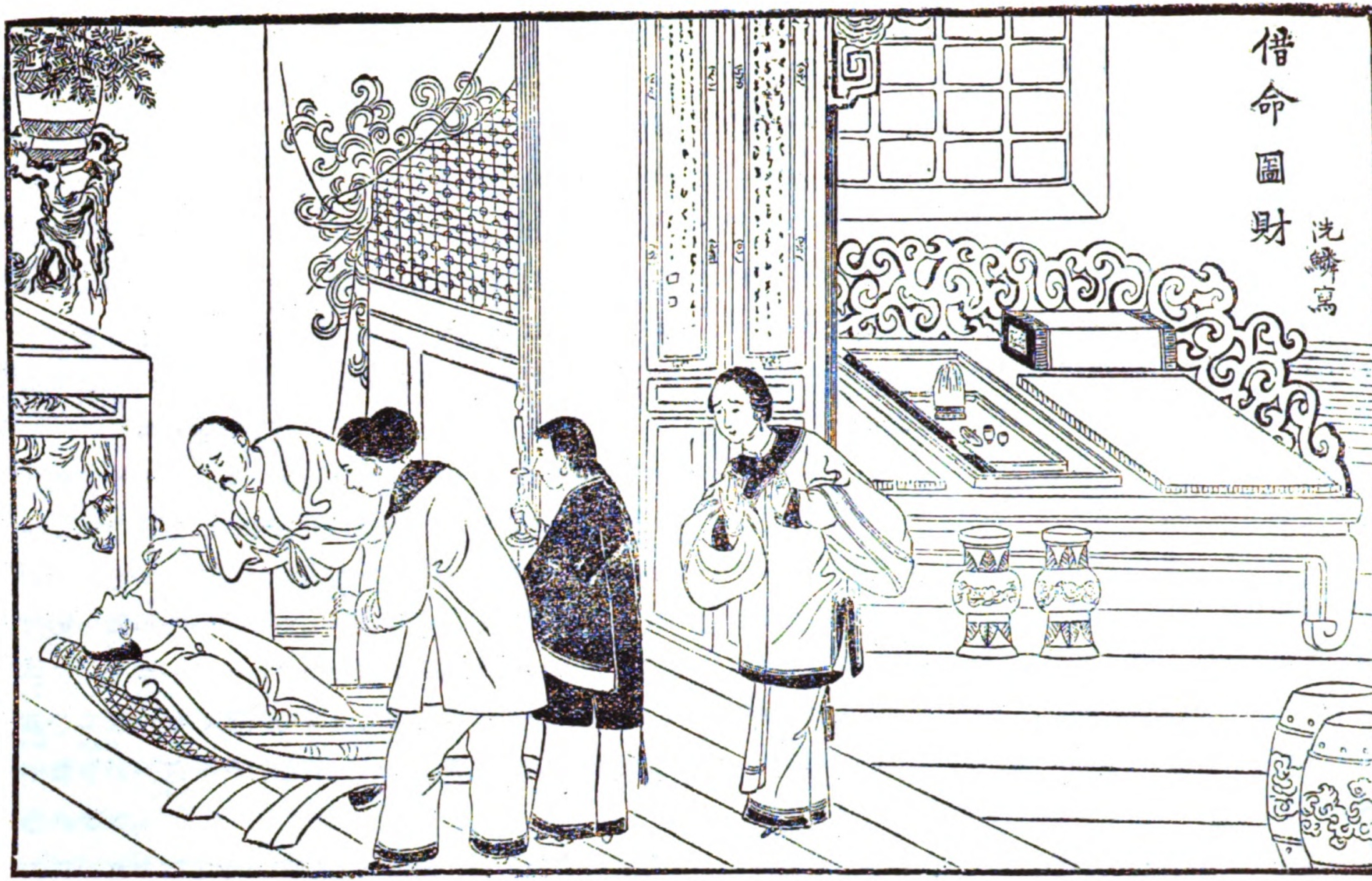
白菜の如き、とても日本などで見る事の出來ない美しさであるのみならず、その質も至つて大きい、支那の或る所では棗三顆で一度の食を過すいふ位である、それでこの價は僅かに一厘か二厘である、文明の度に於ては遙かに歐米に劣るけれども衣食住の點に於ては決して格段の劣りはないのである。殊に料理の點に於ては或は凌駕してゐるかも知れない。

▲婦人の風態

食物の序に支那人の風態を一寸申そう、婦人の頭髪は各地各人風を異にするけれども、まづ一般に化粧には凝る事で白粉を施し、臙脂を點けることは老若の差別なく盛んに行はれてゐる、それと同時に又老若の差別なく金銀珠玉で造ッた花のかんざしを指すのである、それから支那婦人を一目の下に辨別する標目は處女、未婚已婚の三樣で、處女の幼稚なものは髻を長くして岐けて垂らし、未婚は前髪を分け、巳婚は鬢角を剃て額を開いて居る。

▲住居の大樣

風態の序に住居を一寸申そう、支那は大國である家屋の種類が五つ通ある瓦屋、木屋、土屋、舟居、穴居。瓦屋といふのは煉瓦石で積みあげた家で普通の支那の家屋は皆是れである、木造は南方の支那に多くある家の建築であるが、土屋といふのは多く北清地方にあるこれは煉瓦造りの略したやうなもの泥土を干し固めて四壁を造りそれから木を横へて上に土を塗つたもので日本の土藏造りとは性質が異ふのである、それから舟居といふのは廣東福州邊に多くある住居で、これは陸地に住めない人間が舟を家として生涯舟中に暮すもので、舟の中に豚も養へば鷄も飼ふ畑も造れば花園をも設ける舟と舟との間に道路もあれば交通自在であるそうすると舟で村落市街を形造つてゐるやうであるか必らずしもそうでない、つまり陸上の生活を水上に移したもので多くは貧人である、それ等舟中生活の人民中には舟から生れて舟て死し、生涯陸の土を踏まないものは澤山あるといふ事である。この舟は小さな猪牙船で上に籠をかぶせたやうな家根をこしらへて居る中



陳氏の子魔醉劑に依つて財を奪はるゝの圖

には木材を筏のやうに組んで結束して其上に家を造るのもある。

それから穴居といふのは、多く雲南、貴州地方の苗人種の住居であるが、山西省、陝西省の地方にもあッて山の下を穿ちてそこに石を積みあげ累々として一列の墳墓を見るやうである、これは古代の遺風であるそうな、この穴居に蒙古の帳幕と、西藏の巖窟とを合せると支那の領內には世界中に見ることの出來ない、七種の家風がある。實に大國の觀ではあるまいか。

▲家屋の內容

通例煉瓦、木造の家居に就て見るに支那の家居は割合に洋風であッて、日本風でない、家の中には決して疊といふものがない、其の室は土間板敷又は漆喰造で龜甲形の瓦を敷きそこへ椅子、卓子を据ゑるのである。まづその順序をいふと、中央に內庭があッて其周圍に各室がある、南方に面した方が正房で、外部から這入つて來る第一の室を來客の應接所としてある、是から內部に在るものが一家共用の室である、各室の戶口には帷帳を垂らしてある富貴人の應接室には必らず椅子卓子あり、供用の什器は實に善美を盡してある、修飾には陶器の花瓶、絹布の帳羊角の燈籠其他美麗な品々を以て飾られる、寢室には周圍に翠帳を垂らして溫氣を保護し、寢臺の上には籐の席があッてその上に褥がかゝッてゐる。

蒙古の部

▲喇嘛の遊牧

支那の話の序に蒙古の事を言はう。蒙古は亞細亞大陸の中央に在る大部落で海に遠い高原である、單に海がないばかりでなく、川もなく谷もない砂漠の地であるから土地は極めて瘠薄である。それ故土地の廣さは日本の四五倍もあるけれども人民の數は僅かに東京大阪の人口を合せた位の高に過ぎない。つまりは氣候の寒冷なのと、耕作の出來ないのとで人間の生活に不適當であるからです。

蒙古はむかし成吉斯汗といふ世界に大名を轟かした豪傑が出たほどの土地であるが、今は支那の所屬になつて人民は喇嘛遊牧といつて政治は喇嘛教で支配し牧畜を業にして居る人民である、その人種は日本人、支那人と同種類で、黄色人種であるが、その風俗はまづ支那韃靼の風俗である。

▲蒙古唯一の財產

元來蒙古の土地は大半は沙漠地で耕作も出來なければ漁獵も出來ない、そこで僅かに天然の水たまりや草のある所に集つて牧畜を以て生活して居るのであるから羊や牛馬、駱駝の如きは蒙古に於ける唯一の財產でゐる故に貧しいものでも一家に十頭以上の牛羊を所有して居る、富めるものは五百頭から二千頭位蓄へて居る。

▲羊群の監督

扨その牧畜の方法はどうかといふのに皆放任主義でわる、是れは古來からの遺法で皆山野に放ち飼にして置くのである、始めて蒙古へ旅行したものは見渡す限りの山々の牛腹に白雪の降つたかと思ふばかり眞白に蠢めくものを見る、これは皆羊の群である。扨この羊群を監督するのは大抵犬である、蒙古の犬は體格が偉大で小馬ほどもある、そして中々猛獰であるから敵が來ると大聲を發して主人へ報知すると同時に羊群を保護して家路に歸る、その監督力は中々よく行屆いたものである。

▲天幕の內容

元來耕作を爲ない處ろであるから、定住の家屋はない家の代りに帳幕といつて駱駝の毛で織ッた厚い毛氈のやうなもので天幕を造つてその中に住ふて居る、そしてその天幕の裡は陰氣で甚だ居心地がよくないといふ事ですが、天幕内の景況に就ては近頃この地を（蒙古の入口）を旅行して歸られた大學教授の戸水博士の紀行文によつて見ると、まづこうです、

「自分は蒙古人の案内で蒙古の「テント」中に入りました、其「テント」に入る時には必ず大聲を發して行かねばなりませぬ、「テント」の前には必ず猛獰なる本

當の蒙古犬が居りまして他人が其所に行くといふと嚙み付くの恐れがある、其れは頗る猛獰なもので格別吼へませぬが直くにウーと云つて嚙み付く、甚だ實行主義の犬であります。其で「テント」の近傍に行くものは必ず大聲を發して呼んで行くさうすると「テント」から人が出て來て友人だと見ると犬を制しますから犬は一向客を嚙みません「テント」の近傍に犬が居るから之に近くには大聲を發せよと云ふことは蒙古又は「パミール」邊を旅行した人の記事にも出て居るが私共も入る時に大聲を發して行きましたすると「テント」の中から小供が一人出て犬を制へました、犬は小供の命を聽いて默ッて居ました「テント」に近いて見るとその「テント」は木を組んで框を拵らへて高粱で造ッて「アンペラ」を被せて有る、そして其上を氈で蔽ふて有る白に鼠かゝッた色で、あります、「テント」の頂上は開いて居まして靑天が直ぐに見へる、尤も雨が降る時には葢をするといふ「テント」の中に　女が一人男が三人居ました、私共が行くや「サパイ」「サパイ」と言ひました、「サパイ」とは御機嫌如何といふ事です、それから蒙古人は私共に對して大歡迎をしました、牛乳で製へた菓子、あれは乾酪と言ひますか兎に角堅い石の樣の菓子を與れました　、「ツップ」を製らへて與れました、「ツップ」を製へるには竈で牛糞を燃て「ソープ」を製へた、處が牛糞がチョット燃ないで女が之をプープー吹いて居ましたけれども其邊が烟るばかりて一向に役に立たぬ、それで「マッチ」を二三本與へましたら之を火に投じて遽かに牛糞が能く燃へ出したので蒙古人一向滿足の躰でありました、此邊は馬糞を燃料としないで牛糞を燃やすのであります。

▲馬糞の燃料

右の次第で元來樹木のない處ろであるから煖を取り、又は食物を煮るすべて馬糞や牛糞を乾かしてこれを燃料にするのである、これは單に蒙古ばかりでなく、中央亞細亞至る處ろの部落、西藏や、土耳機斯坦の地方も多く牧牛の糞を燃料として居るさうです。それと同

時に又是に用ゆる食器も至つて簡單なもので唯一個の釜があるばかり、それで湯を沸すにも物を煮るにも、何にも使用するのである。

▲野菜の缺乏

されば食物はどうかといふのに是も又實に簡單である まづ主食物は羊肉と牛羊の乳であるが支那(北京)から輸入して來る黍、麥粉、豆の類、又は磚茶といつて茶を壓し固めたものを削つて乳に混せて飲むのである。併しこんな輸入品を食ふものは極く富めるもので、貧乏人はやはり羊肉牛乳の二品である。それから野菜といふものは北京に近い方では多少白菜などを食ふ事も出來るが、遠い地方の蒙古には野菜類皆目見る事も出來ないから他國の人が旅行して第一に困難を感ずるのであります。

▲巧妙なる屠殺法

蒙古人が羊を屠るには極めて簡單な方法を取る、決して人をして惡感情を起さすやうな事はない、其れは唯一個の小刀を用ゆるのみ、小刀を用ひて臍の部を切開する、そして手をさし入れて心臓を拔き出すのみである、それ故羊は一聲だも苦痛の聲を出さずに、斃れて仕舞ふ、誠に簡單である。東京あたりは屠牛場の光景の慘酷は人をして實に感情に堪へざらしめる、のみならず、鳥屋で小僧が鷄を殺すにも甚だ忍びない感情がある、のみならず土鰌や鰻を割くにも何となく厭な氣がする、然るに未開蠻風として居る蒙古で羊を屠るのに斯る注意あるのは實に奥床しいではありませんか、動物優待のよき模範でせう、尤も蒙古では日に幾頭の家畜を屠るのですから一々慘酷な殺し方をしたならば堪りますまい。

▲簡單なる食事

心臓を拔き取ッた羊は直ぐにその皮を剝ぎ取ッて、それから臓腑を取除き釜に入れて丸煮にするのである、熟煮ると一家擧ッて釜を圍み各々用意の椀と小刀とを取り出し随意に各自好む所ろを切り取ッて指で摘んで食ふのです、妙齢の處女でも大口を開いて食ふ、誠に無邪氣なものだ、偖て食ひ畢ると小刀は衣服の裾で拭

ッてその儘腰に挾み、椀は舌で舐めて清めて懐中に取置のです、日本人のやうに決して食器を洗ふといふ事はありません。その不潔なるに至つては實に言語道斷で始めて行つた人はこの汚ないのに驚ろいて仕舞ふ。まづそういふ有様ゆゑ器物として珍重するものは、小刀と椀の外にはない、それですから贅澤な向は小刀に寶玉を鏤めて大に貴重視するのです。

▲蒙古唯一の馳走

一家團食の外客來でもあると黍や豆や麥粉の類を丸めてそれを羊の血で以て煮たものを饗應するのが蒙古唯一の待遇である、若し他邦人が旅行してこの饗應に與つたならば、まづ惡臭鼻を衝くともいふべきで、一箸を下すまでに嘔氣を催ふす位であるが、併し物は馴れと習慣で次第〳〵にその風俗に馴致されると又實に一種の風味を味ひ占めて捨て難くなるのである。

▲蒙古の飲料

蒙古での飲料は支那の內地から輸入して來る磚茶に牛乳が重なるものである。それから又牛乳で製した如皮子といふものがある、これは牛乳を沸騰させて上部に薄皮が張つたのを取つて日に乾かしそれを碎いて粉にしたものである、これを茶の中へ混じて飲むと實に風味のあるものである、この外酒もある、酒も又矢張牛乳から製するのである、この製法は乳を多分に絞り取りその中へ水を混じ煮沸した後、これを蒸溜するのである、蒙古では是を明酒と唱へて居る。中には支那へ輸出する事もあるが、北京邊ではこの酒を蒙古酒と言つて居る、風味のよい且つ醉心地のよい酒だといふ事である。

▲一衣萬用

飲食物の事は大体そんな有様ですが扨衣服はどうかといふのにまづ一様に羊皮で製した支那様の服であるが、それは專ら冬季の服で夏は日本あたりから輸入した木綿ものである、併し蒙古人は衣服を身に着けるばかりでなく、時として是を布巾手拭の代りとして物を、拭ふのに用ひ又は風呂敷の代用として物を運搬する、たとへば馬糞の燃料を運ぶのに自分の着物の裾に入れ

するといふ、風であるから便利とは言ひ乍ら不潔汚穢は實に驚くべきものである。國の風俗といふものは奇態である、若し日本でそういふ事をやれば人は直ぐに發狂者と見るでせう。

蒙古人は水を使ふて物を淸潔にするといふ事を知らぬ人種で、どんなに着物が汚れても洗濯をするといふ事はない、それ故汚物と塵埃との爲に衣物は黑色に光つてゐる。

▲水のなき庖厨

蒙古人は水を使はないから、朝の含嗽はどうするかといふのに、それは例の食器として銘々一個づゝ携へて居る處ろの椀がある、この椀が時としては顔洗ひの代理を務める、そこで朝起ると冷水を此の器に盛つて口一杯に含み、その口の中の水を手に受けて洗ふのである。元來蒙古には限らず高原の地となつては水に不便で、川といふものがないから、天然の流水を得る事が出來ない。僅かに雨溜りの水を溜め置いて少しづつ使用するのである、生活上の不適當は存外でありませう。

▲喇嘛信者

蒙古人の宗教は今の淸朝の祖康熙帝が淸國を一統して蒙古を版圖に入れた時から喇嘛敎を布いてその宗敎で治めてゐる、で蒙古人一般喇嘛信者にして仕舞つた、それ故人命を重んずる事厚く、他國人に危害を加へる事など決してない、天幕の中には通例五六人位住居して居る、幕内の廣さは大概五疊敷ほどでその中央に爐を切り上段を正坐として喇嘛僧を請ずる處ろとしてゐる、如何なる貧家でも必らず佛檀が安置されて居て美麗に飾られてゐる。

支那の庖厨(料理法の一斑)

支那人の常食中一般に嗜好する食品の料理方は

○肉饅頭　饂飩粉を捏ねて小片とし、内に豚肉、葱を細かく切り白砂糖を少々加へ之を餡にして蒸したるもの。

○紅粉糕　糯米三分、粳七分を臼にて搗き粉にして、蓮の子を茹でその汁で捏ねませ、蒸籠で蒸し、中に小豆の餡を入れる、尤も餡は小豆に白砂糖を入れ豚の脂肪を加へて煉り合せたもの。

○義衣餅　麥粉を菜の油と水等分にしてこねわはせ白砂糖を少し加へ棒にてのべ、又丸く堅めて餅の如くして、油にて黄色になるまで揚げ白砂糖をふりかけて用ゆ。

○雪粉糕　糯米粳米等分にして水を少しふりませ合せ米篩にて蒸籠の内へふるひこみ、凡そ粉の厚さ二三分にして蒸し立て酒醬油に葛粉を少し加へ汁氣なき樣に炒て用ゆ酒八分醬油六分の配法。

○鹿筋湯　鹿の筋を水に浸し長さ一寸程に切り火腿の煮汁にてよく煮熟し酒醬油にて淡梅鹽にして肉圓（豚の蒲鉾）椎茸、乾筍、葱を入煮立てゝ用ゆ。

○魚翅湯　鱶鰭を水に浸し鶏をこまかく角切にして鍋に油を入れ、ざつと炒り、醬油、酒、水を入れ鹽梅して文火にて煮熟し鰭椎茸、葱を入れ暫時煮て盛る時は鰭を上に盛る水酒等分にして八分、醬油二分程入れ淡鹽梅にして用ゆ。

○燕窩湯　燕巣を一夜水に浸し又湯にて能わらひ毛塵等をよくさりて細かくさき、湯にひたして置、鶏の煮汁に鹽酒を加へ至極淡鹽梅にして鶏肉火腿（豚を鹽につけて干したるもの即ち臘乾なり）鮮肉糸切にして煮熟し、碗へ盛り其上へ右燕巣を盛りて葱を少しきざみ入る、煮汁七分酒三分の配法、鹽はすこし加ふ。

○海參湯　海鼠を竪四ッぎりにして湯にて煮熟し、火腿の煮汁に酒、醬油を加へ、鹽梅し魚圓（魚の蒲鉾）椎茸、葱を入れ煮る、酒、醬油の配法魚翅湯に同じ。

○全鴨　あひるの羽付をさりて皮の損せぬ樣によく毛を去り、腹を洗ひ、糯米蓮肉を腹につめ、藁にて捲き湯にて七分ほど煮和らげ、其汁を去り、火腿の煮汁に酒、醬油を加へ梅鹽し、又能く煮熟し藁を去り全体の崩れぬ樣にして木耳、葱等を加へて煮る煮汁、酒等分にして十分の一醬油を用ふ、

○火腿　一名臘乾といふ臘月寒中に製する故臘乾とい

ふ、釜中に豚の股を足付のまゝ一腿づゝ切とりよく洗ひ毛を取り暫くさらし乾し凡肉一斤に鹽二十目程のつもりを以てよくすり入日に乾し寒風の當る所に十日ほどつるし置又鹽湯を冷しその内に浸し日に干す事四五度にして能くさらし乾かし前の如くつるし置く。

○羊羔　羊の肉を一塊二斤ほどづゝにして水にてよく煮熟し汁を去り肉をよくわらひ、大根、生姜、葱、をくわへ、醬油酒にて能く煮込骨を去て冷たる時薄く切り用ゆ酒七分醬油三分の配法なり尤も煮へ難き時は酒ばかり入て煮る。

○猪蹄　一名を東坡肉といふ、豚の股付の肉を五寸角ほどに切湯にて能く煮酒醬油白砂糖、茴香をすこし加へ皮付の肉色わかくなるまで煮込み木耳、葱を入る酒醬油の配法羊羔の製に同し

○野鶏　雉子の皮を去つて腹付の肉ばかり薄く切鍋に油をひき炒和げ蒸し上りたるを折敷やうの物にうつし、少し冷めたる頃上に白砂糖を一面にふるいかけその上に紅糸（梨子を薄く切り、紅にて染め、砂糖に漬け糸切にしたるもの）瓜子（西瓜の核）橙子（橙子くの青き内に取り皮を薄くへぎ砂糖につけ糸切にしたるもの）等をふりかけて出す。

○糖糕　糯米、粳米等分粉にして水にてこね蒸籠にて蒸し白砂糖を入れ又よく搗まぜ、薄くのべ置、一寸四五分角に切油わげにして用ゆ凡米粉一升に白砂糖半斤程の配法

○扁豆糕　白扁豆を煮皮を去り水を入れ摺つぶし粗布の袋に入れせんをとり、よく水氣を去り麥粉少し砂糖を加へ、拌わわせて蒸し冷たるを待ちて一寸四分位に切二つづゝ合せ其内に菓物の砂糖漬を入て用ゆ、恰も洋食のサンドイッチの如し

○炒鶏　鶏を骨ともに一寸ほどづゝに切鍋にあぶらを引炒り又水をすこし入半煮になりたる時、酒、醬油豚の油少しを入れ、栗、蒜を加へ煮熟し、汁なきやうに煮こむ、酒、醬油の配法は東坡肉に同じ

○蟹羹　蟹を煮て殻を去り肉を鶏の煮汁に酒、醬油を入れ、葛粉を加へ葱、生姜を細かくきざみ入れ煮熟し

羹汁、酒等分にして八分、醤油二分の配法葛少し加へる。

○鮑魚　干鮑を水に浸し薄く切鍋に油を引て炒やわらげ鮮肉を薄く切加へ、酒醤油にて羹立蒜を加ふ。

○醒酒湯　鷄を水煮にして肉を去り右の煮汁に鹽を少し入葱を細かくきざみすこし入る。

回千と稱して一品づゝ鉢に盛つて卓子の上に排べるもの。

○茘枝、○龍眼肉、○松子、○蓮子、○橘餅、○棗子○落花生、○西瓜子、○柿餅、○佛手柑、○桂花糖○火腿、○胡桃、○鷄蛋、○氷糖、

朝暮平食の菜數　鮮肉、鷄 魚類時々有合の野菜等取ませ煮て三四碗づゝ大碗に盛り點心等はなし。

又村落の小戸は食飯に品々ませ合せ食する事あり、麥飯といふは麥粉を飯焚立て未た水の乾き切らざる内に鍋へ入れまぜ暫く悶蒸して食す、決して麥を丸にて混ぜる事なし、其他大豆小豆、黒豆粟、黍等に麥とまぜ炊て吃す

十碗菜の時は菜數四五碗の後點心を出し醒酒湯を出し又菜を出す。

（完）

福田會の一日

一記者

○炎署蒸々たりといへど地には未だ片陰のある或日の午前、麻布の福田會育兒院を訪ふた。院は笄橋を渡つて右折した長谷寺の丘上、綠樹生々の好地區を占めてゐるから、係る兒童の養育場として申分なかるべく思はるゝ。

○余は取次の若い僧侶に導かれて、玄關（そこには高張二張が禮々しく飾付てある）側の客室に通された。折しも次の室で事務を執て居た監事の朝比奈氏が應接に出て來られて、一通の挨拶が濟むや氏は直ちに余の來意を諒して、先づ院の狀況を知らん便宜にもとて、數種の記錄類を示した。

▲院の創立と由來

○記錄に據て看ると、院の創立は遠く明治の九年で在て、今川貞山、杉浦讓、福田行誡、大崎行智等の諸氏が佛教慈悲の趣旨に基いて首唱したものださうな。爾來緇素の徒の之に贊同協力するもの多く、遂に福田會育兒院と命名するに至つた。此の名目は佛教所說の三福田（敬田、悲田、恩田）、入福田の義に據つたもので救難濟窮、育嬰恤孤の事は、德を種え福を植うるの田園といふ程の意味である。思ふに聖德太子の悲田院に倣ふたものであらう。越えて十二年會則院規を制定し其筋の允許を得て、事務所を南茅場町智泉院内に設け會友を分つて永續（僧俗を問はず一時金二十圓以上を納むるもの）通常（一月十錢以上又は一ヶ年一圓以上を連續納むる者）隨喜（隨時に金品を喜捨するもの）の三種とした。此時の會長は新居日薩居士にして會計監督委員の中には澁澤榮一氏、大倉喜八郎氏、福地源一郎氏などの名前も見える次で十三年本郷龍岡町麟祥院内に福田會の別院を起した事、二十二年に院内に惠愛部といふ婦人の團体が出來たので保育上の全權を女流の手に委ぬるに至つた事、其の人々には部長毛利公爵夫人を初め、男爵夫人楫取美輪子、子爵夫人三浦愛子、鳥尾夫人、佐藤靜子高島倉子、辻里子、原禮子、何多仁子等があること、二十四年麟祥院に皇后陛下の臨御あり、此年濃尾の震災地より孤兒十六を收容した事、二十五年今の笄町に新築移轉した事、二十六年伏見宮文秀女王殿下を總裁に戴き、二十九年三陸の海嘯により二十九名の孤兒窮童を收養した事等、院の沿革に關する箇條が明細に書き認めてある。

○余が是等の記事を左視右眄して居る間、朝比奈氏は語て曰く、近頃は大分慈善事業に社會一般の注意を引く樣に成て來ましたが誠に喜ぶ可き進步で御在ます、當院は隨分長い歷史を有て居りまするが、中頃緩んで居たものですから、名前の古い割に發達が遲れたやうで御在ます、併し近來は著々膨脹の域に進んで來ました。院の沿革に就ては唯今御覽の通りですが、創立當時は發起者の僧侶が銘々の自宅へ凡そ五人位宛引取つて養はれたもので、里に遣つたり壇徒中の特志者に與へたり、いろ〳〵と面倒を見られましたのですが、固より僧侶の事とて子供といふものゝ經驗も何も無いのですから、其の時分の苦心は思ひ遣らるゝので御在ます。其頃の小兒は唯今は已う兵役期も過ぎて、立派な僧侶と成り居ります――尤も此の時分は大抵僧侶に仕立つるのでしたから、と言ひ足された。

○氏は此時數葉の寫眞を持ち來り、毛利公爵邸に於け

る院兒の園遊會を初め、鎌倉慈善旅行の紀念寫眞、院兒喫食、教場整列、庭前遊戯等の撮映を示して一々說明を與へられ、最后に二人の理髪師が二兒の頭髪を刈り居る所の圖を示して。

○此の二人の理髪師は兄弟で御在まして、兄の方は麻布三軒家町に店を持て居る福田鐵次郎と申す者、弟の方は同區霞町に開業致しをる福田兼吉と申すものですが、毎月十七日の休業日を徒に遊んで了ふも勿体ない譯、さうかと言つて營業することは仲間の規約で許しませんから、責ては功德の爲にもと申しまして、此の休日には乾度來て吳るのです。けれど一日では仲々手廻り兼ねますので他に一日を繰合せて、都合一ヶ月二回出張して吳るのですが、其の心掛の奇特なるには感心致します。と語られた、曩には傳通院住職福田行誡師ありて院の創設幷び經營に盡瘁せられ、今又た福田兄弟ありて院の爲に其の職を寄附す、福田會と福田誠に奇なる因緣である。

▲育兒の員數幷に經濟

○そこで育兒の員數、經濟及び教育の事に就て、余の質問したるに答へて……、創立當時より目下養ふ所迄の院兒數は三府二十三縣に亘つて三百七十四名からに成りますか、現在籍兒のみでも九十二名から御在ます此の內譯を申しますと、三歳以下の哺乳兒は里に預けて置きますが之を外養兒と稱へ唯今二十四名あります乳兒を托しまする所は重に神奈川縣下都築、橘樹の二郡で御在ます、此の地方は人氣が宜しう御在ますから里親として適當なものを得られますのは、乳兒の爲に何よりの幸福で御在ます。此外に留養者と申しまして養子として他へ貰はれては行きましたが未だ試驗中で籍の移らぬ者が八名許、修業者と申しまして職人の所に徒弟奉公に出してある者が七名ありますから、是等を除いた眞の院內育兒は、女兒二十七名、男兒二十四名で御在ます。院の經濟を申しますれば基本金二萬圓及其の利子、皇后陛下よりの御下賜金、會友より拂込みまする會費、一般特志者よりの喜捨、各所に配置して在りまする慈善箱の投入錢――是が年七百圓位ありますから、此上擴張した時は兎も角、目下の人數丈を養つて參りますには十分なので御在ます。慈善箱は取集の毎に此方から人を派しては旅費の爲に折角の慈善金を減らす譯ですから、其の土地の人に賴んで爲替で送つて貰ふことにしてあります。停車場などに掛て

置きます慈善箱の中に何うかすると五十錢銀貨が這入てゐることがありますが、斯ういふのは乾度西洋婦人だと申すことです、此の一事に據て觀ても西洋人は日本人よりも慈善心に富んでゐる樣で御在ます。と言つたが、是はあながち福田會の監事として我田引水的に讃辭を呈したのと計りも思へない、兎に角恁る事に奮むのは所謂財を天に貯ふるもので在て、嘉すべきの美風と言はねばならぬ。

▲院兒の教育

○扨て院兒の教育に就て御話致せば、當院には四ヶ年の附屬小學校と二ヶ年の補習科とを置いてあります。十四才を頭に五才までの子供を單級に編入して、敎師も伊藤壽右衛門と申しますのが唯だ一人で、總ての學科を何も角も遣るのですから、仲々骨の折れたものです。敎師も保姆も皆な院内に居住致して院兒と寢起を共にし、家庭的慈愛を以て掬育する樣に努めて居ります。唯今の保姆長と申しますのは村井富といふ人で、もう六十近いのですが、憐祥院の昔から十五年以上も勤續して居られますから、小兒の爲には眞の阿母さんで、院の生命と言ても宜しい位、誠に熱心な人で御在ます。其柄一日間の課業を申しますると、先づ起床の時間は此節なれば五時と定めてありますから、その刻限に廊下に吊てある鈴を鳴らすと、皆の子供が負ず劣らず跳ね起て來て、交る〴〵洗面所に行きます。そこには當番の子が二人づゝ世話をして居ります、次は手分をして衣服の世話から、寢卷の片付、部屋の掃除、緣側の雜巾掛などを致させます。男は重に庭を司り、女は主として室内を掌ることにしてあります。起床后三十分經ちますと掃除も略々終りますから、鈴を鳴らして校堂に召集致します、校堂内の佛壇は此時既に當番の者によつて奇麗に掃除され、佛前には光明を點じてありますから、そこへ僧侶が引連れて行つて、禮拜式を行ひます、其の式が終ると報告をしたり、又た訓誡する事があれば其處で言ふて聞かせます。其間に母屋では保姆の手にて朝飯の準備が整へてありますから佛前を退出して室に歸るや、長幼の順を逐つて、四角に並べた机の前に坐らせ食事に就せます。給事はすべて年長女子六名の受持で御在ます。かくして整列終るや保姆長が出て來てさア皆さんお喰んなさいよと聲を掛けます、すると銘々は戴きますと答へて大人しく箸を取るのであります。朝飯の終るは六時、それより女

の子は髮を結び合ひまするし、男の子は庭園を跣足で駈ずり廻ります。七時より十二時まで、冬分なれば九時より二時までは學校の授業時間故に此の間學齢以下の兒童丈を、庭前に集めて遊戯や唱歌を遣らせますから、謂はゞ恩物の無い幼稚園で御在ます、午后は女子には室内にて裁縫をさせます。今年の夏は九十名からの衣服を保姆の監督の下で小供が皆な縫ひ上て了ひました。其から五時夕飯、三十分を隔いて入浴、八時に幼稚のを寝かし、九時に稍々長じたのを、十時に十才以上の者を臥さしめることになつて居ります。

○此時十二才と十四才位の女の子が、余等の前に膳部を運んで恭しく額突くのである。子供の喰べる物を見て下さるも御參考になりませうから召上て戴きたいといふ監事等の厚意辭み兼ねて、晝餐の御馳走に預つた此日の膳部は牛片に冬瓜の葛掛、白瓜の漬物といふ附合で在つた。食後監事に乞ふて一覧した院の献立表を左に掲げやう。

	朝	晝	夕
日曜日	味噌汁	五目めし	豆腐のすまし
月曜日	仝	冬瓜葛掛	牛片と豆腐の煮物
火曜日	仝	牛肉、馬鈴薯の煮物	大角豆の煮びたし
水曜日	仝	青と豆腐の煮物	冬瓜煮びたし
木曜日	仝	茄子と牛片煮物	蓮根、馬鈴薯、豆腐煮込
金曜日	仝	牛肉馬鈴薯の煮物	茄子の煮びたし
土曜日	仝	青と茄子の煮物	煮豆

○扨て、給仕に坐つた二女は此折膳を撤く、茶を薦める、其の後も時々小用を足しに出入するのであるが、その行儀といひ、その言葉遣といひ、高家の小間使としても恥かしからぬまでに優容で在つた。聞けば二人共濃尾の震災により孤兒と成つたものださうな、親若し地下より今の我が子を見ることが出來たなら那樣に喜ぶであらうか、何樣に感涙するであらうかと、親を想ひ子を思ふ時、余は我が瞼の潤むを禁じ得なかつた

○すると程なく、食後の運動が始つたと見え、垣一つ隔つた彼方の庭園に當つて、『むかし〳〵浦島は、子供の弄る龜を見て、哀と思ひ買取りて、深き淵へぞ放しける』と繰返し〳〵歌ふ聲が聞える。嗚呼、歌はるゝ浦島は故郷を去つて遠き龍宮に養はれたるの人、歌ふ小供は家庭を喪つて慈悲の福田中にはぐゝまるゝの人、消極と積極の異てそあれ、稍々其の境遇の似て居るので、其の歌ふ所が一入あはれに感じられた。

▲院内各所の模様

○談話も略々盡きたので、監事朝比奈氏は余を導いて院内所々を看覽せしめた。先づ玄關前の廊下に出ると、左手の壁には在籍兒の姓名を記した黑塗の札が懸つてゐる。その正面の上壁に、一双子縞一木綿裏地各々九十六反一金四十六圓五十錢・右　皇后陛下御下賜等の文字を拜讀して椽を右に曲ると、第一室は書籍室に充てたもので少年世界や御伽噺の類を初め、簡易な宗敎書類が積み重ねてある、第二室には眞鍮側の柱時計、其の下に針箱、傍に仕立かけの縫物が片寄せてある。第三室以下の育兒室は障子を殘らず除去つた大廣間、こゝには重に五六才より八九才までのいろ〳〵の小兒が集つてゐる。而して才槌頭や福德面や布袋や御出額や南瓜の樣なのや福助の樣なの、又は頭を繃帶したのが、ありとあらゆる態度を以て蠢動いて居る。中には目を白黑さして口を動かすものあり、坐つて足の先を弄る者あり、柱に倚つて付紐を舐るものあり、寢轉んで芋虫を極るものあり、歩いて腰巾着の鈴を鳴らすものあり、其他首を振る者、肩を搖る者雜然として小さな頭顱を揃へた所は、宛然二眠起の蠶兒を見るやう。彼等は余等の入り來るを、見るやキチンと端坐つてピヨコ〳〵額突く、而して彼等は余等の傍に集つて來て頻に話かける。子供に有りうちの含羞むとか、人見識をするとかいふ風は微塵も無く、臆面なしに人馴濃くて、手を出せば抱き付さうにするのは、仲々可愛らしいもので ある。試に年齡を問へば、紅葉より優しい手を擴げて私五つよ！　と答ふ。而して彼等は交る〳〵種々な問題を持出して熱心に其の解答を促すので、余等は暫時そこに立往生して了つた。

○彼等の顏色は蒼褪めて居て、枯槁憔悴、一躰に生動の氣の乏しいのは、這麽に大勢の子供が雜居しながら毫も喧囂をせぬにても解る。一見殆ど人間の雛許を集めたかの樣で、迚も紅顏なる此世の嬰兒に比すべくもない、彼等は實に呱々飢寒に泣けるの兒、そが懷胎中の生活すら坐ろに想ひ遣られて、唯だ氣の毒といふより外はない。併し年齒を加へた十歲以上の子になると、殆ど普通人の子の如く顏に光澤もあり、進退に活氣も有つて、大に見直すものあるは、全く多年間養育の効果であると言はねばならぬ、人の子を斯くまでに世話する全院の勞や實に吾人の感謝する所である。

○さて此處を去つて、椽を左に折曲ると勝手、幷んで洗面所兼帶の風呂場、その隣の八疊が病室、立戻つて北面の椽に出ると、その椽つゞきに棟を異にして校堂

がある、戸を排して内に入れば、正面の所に鐵舟居士の敎育敎場の文字が額にしてある。其の下に黑板、其前に敎師机、左右に風琴、夫と向ひ合つて二人共同の机が六脚づゝ三側に並んでゐる。場の左右は硝子窓、ニス色の羽目玉子色の壁といふ構造で、頗る明るく靜楚に出來てゐる。但だ普通の學校と異るは場の右手中央に佛壇の設あることである。内陣には金碧燦爛の地藏尊立たせ玉ひ、花立、香爐を供へ、他に尙は本尊として大隈伯母堂三井子刀自奉安の觀音像が安置してある。こゝに小供達は毎朝集つて合掌禮拜し『露の命』とか『佛の力』とかいふ讃歌を三唱するので御在ます、と朝比奈氏の說明。

○此處を出でゝ再び育兒室の前に來た時、散つて居た多くの子供達が育兒室の一部に集つて、疊の目なりに行儀善く列坐して居るを見た。何事かと思ふ間も無く、岩崎導師（先に余を取次いだ若い僧侶）の案内で、五十四五の品善き老婦人が孫であらう十二三の女の子と十許の男の子とを連れて靜かに出て來られた。すると保姆長が進み出て禮をする、其に習つて子供が例のいろんな頭顱を下げる。同時に菓子箱が運ばれる、すると後列の二女（先に余等の給仕に出た子）が坐を立て銘々の前に配つて遣る、其間保姆長は團扇を持つて子供の背后から絕えず煽いで遣つて居た。此時可笑かつたのは前列の一兒が菓子を貰ふや、我用終れりと言はぬ許に立上つてサッサと步き出したので、保姆の一人は飛で行つてマア〳〵と制して元の座に落着けた事である。かくて菓子が一同に行渡るや、難有く頂戴の謝意を表すべく保姆長が先に立つて小供達に禮をさせた。そこで參看の老婦人はいと滿足氣に立去つて了つたが、余は始終の樣子を目擊して甚だ如何はしく感じた、斯の如く外來客の前に故に整坐せしめて、目の前で其の人の持來つた苞苴物を分ち、禮拜して其の恩惠を感謝せしむるは、果して敎育上喜ぶべきことであらうか。之が爲に無垢の子供に一種の乞食的卑屈心を起さしむる患はなからうか。寧そ這麽形式的の事は無くもがなである。

○余は椽を一周し終つて玄關前の廊下を左に書記室に案内せられた。此室の椽側に以前の小間使代用の女兒が遊んで居たので『先刻庭で歌つた浦島の唱歌を敎へて下さい』と言つた所、彼女は直ちに優しき口を開いて節面白く

ある日大きな龜が出て、モーシ〳〵浦島さん、龍宮といふはよい所

そこへ案内致しませう」浦島太郎は龜に乘り、波の上やら海の底、鯛シビ平目鰹鯖、群る中を分けてゆく」見れば驚く唐門よ、珊瑚の柱やシャコの屋根、眞珠や瑠璃で飾り立て、夜も輝く魚御殿」乙姫樣の御氣に入り、浦島太郎は三年を、龍宮城に過せしが、我家戀しく成にけり」歸りて見れば家も無し、是は不思議と玉手箱、開けば白く煙の立つ、白髮の翁となりにけり」

と結末まで歌ひ續けたのである。嗚呼可憐なる聲よ、可愛き姿よ、此の兒許は養つて子にして見たく思つた。折しも奥で保姆長の呼ぶ聲がしたので慌てゝ其の方へ駈て行つた。朝比奈氏も亦た玄關に音なふ聲がしたので其の應接に赴き、余は元の客室に戻つた。

▲院内餘談

○此度は岩崎導師が代つて話相手となり、院の年中行事や、入院志願者の酸鼻の境遇や、入院許否の面倒等の事を語られた末、余の、院兒は親といふものに就て何ういふ感念を持て居りますか、といふ質問に對し、何しろ產れ落ちた孤兒から引取つて世話するのですから、彼等に親といふ考は全然無いやうです、彼等の心にある親なる者は里親の事ですから、考へて見れば見る程不便なものです。元より可愛い我が子を我が手に育てられいで、他手に托す位の不仕合者ですから、仲

仲子供を見舞に來る所の詮義では無い、けれど稀には女親が有繫に諦め兼ねて、逢ひに來ることも御在ます。それから又殊に哀れに感じますのは、外養期を經過した子供を里親の手から取戾す時分で、日增に愛が加はつて我が子の樣に思ふて居るのですから、手放すのを嫌がるのです、此時は實に泣の淚です、其を漸う納得させて連戾りますが、當分とはいへ親となり子と成つた愛情に引かされて、此方へ引取つてからも、時折逢ひに來ては歸り得ないで居りますから、つひ〳〵其に牽かされて泊めて遣るやうになり、子供を一所に寢かして遣るので御在ます。緣の淺い假の親子とはいへ斯くまでに愛し慈しむ人の情は不思議なもので御在ます。愆うすると子供の爲に善くないは知れた事で、その後當分扱ひ惡くなるので御在ますけれど、溫い人の情に對しても冷かに禁じて了ふといふ譯にはゆかぬので。と言つて稍々暫くは双方撫然たる態であつた。

○突然朝比奈氏が這入つて來て、岩崎導師を顧み今來たのは入院の志願さ、女房は產後の肥立が惡いので、病院へは入れるには入れたが、新聞賣子如き身空で、子供を抱へて居れば共に日乾に成つて了ひますから、何卒御養育に預りたいと言ふからね、兎も角當方から

檢に行つた上で挨拶しやう、と言つて返して遣つた、と語り相見て苦笑せられたのである。世の中に子を生みて育つる事の出來ないといふ程憐なものはない、是も其一人か、吁。此折から、男の子は跣足に成つて庭に下り、裾を端折つて面白さうに驅ずり廻つてゐる。仕舞には余等の居る客室の椽端にズラリと列んで、各自に異論な事を饒舌る、私先刻貰つた饅頭が一番好きだよ、とか又は、今日大變御客樣が來ますね、などと勝手なことを囀つてゐる、而して彼等の語る樣子を見るに、言葉使丈は上品であるけれど、殆ど何を言つて居るのやら意味が聽取れない程早口である、未だ舌が廻り兼ぬる年頃の者さへ、中々に辯口が達者で、非常な驅走である、何うして斯うかと怪んだ所、これは多人數の兄妹が雜居して居るので、彼等が保姆に對し教師に對し其他の來客に對して語りかけんとする時、往々他の兒に話の頭を引奪られて先を越されて了ふ恐があるので、我勝に他より早く事の要領を告げて了はふといふ一種の競爭心から起つたのであると言はれたが、余には此の早口が餘程異樣に、聞づらく感じられた

○それより余は子供の沸かした据風呂の馳走になり、長居を謝して辭し去つたが、玄關を出る時、跣足の小兒が二三人木戸口より驅出て來て『御客樣左樣なら』と丁寧に御辭儀して居る。此の可憐な樣に余は立ち去り兼て、暫し門際に佇んで居ると、奥の子供が歌ふのであらう

朝顔花咲く、力に垣根、我等の頼みは、佛の力、杖をば力に、辿るよ盲目、我等は佛に、便りて行かむ。

と合唱する唱歌の聲が朗々として響くのである。』（完）

鳩

戀しきか、餌たえぬ籠、
さはあれど、かごに飼はるゝ

ひんがしの、嶺しらむ、
紫雲木の雲かげに見たる、

夕ぐれのうすれゆく日に、
情あつう燃え上る時、

あゝ清き鳩よ白鳩、
朝夕に見舞ひくる我れ

いざさらば放たむ、
羽のしていざや飛びゆけ。

朝夕に、見舞ひくる我れ。
汝が心、さびしかるらむ。

空見ては、やさしき胸に、
なつかしの夢思はずや。

籠のうちのなれがにこ毛の、
森の古巣ゆかしからずや。

戀しきか、餌たえぬ籠、
さはれ汝はさびしかるらむ。

山や川、心のまゝに、
く朝空に雲はなびきね。

眼の記臆 (衣服織物の部)

裳



裳(も)に古代官女の服なり腰より下につくるもの「萬葉集に「をとめらが玉裳すそびくこの庭に秋風吹て花はちりつゝ」

衫



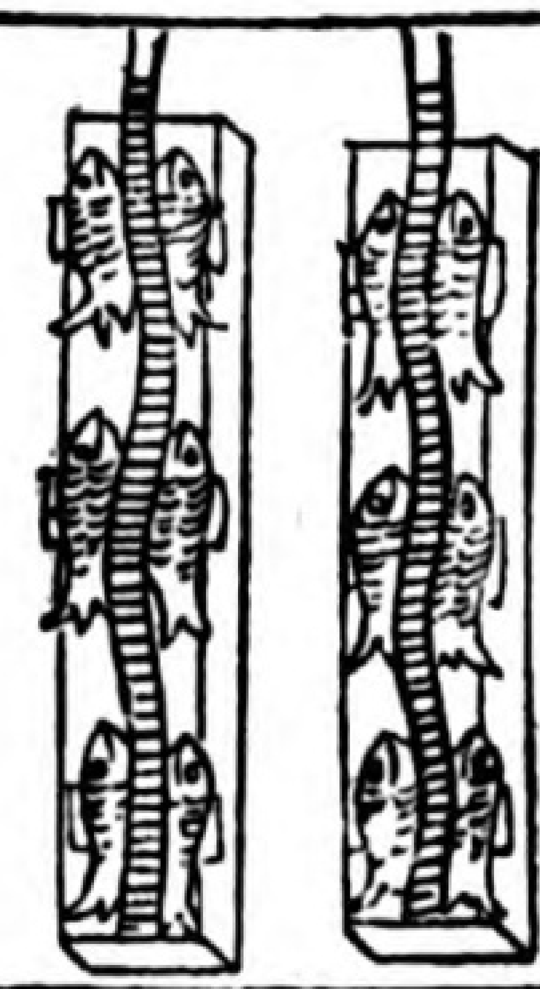
衫ははだぎなり又かたびらともいふ麻布にて造りたる短衣なり

襟



襟(えり)衣の衽まわしたる處なり今は半巾もて衽の上に蔽ふ是を半襟といふ

魚袋



魚袋は官人の腰に帶るものなり公卿は金魚袋四品以下は銀魚袋なり

和冠



冠に紗を以て造り染ぬりにしたるものなり、髮を覆ふものを巾子と言び後に立たるものを羅といふ、貫くものを串といふ

笏



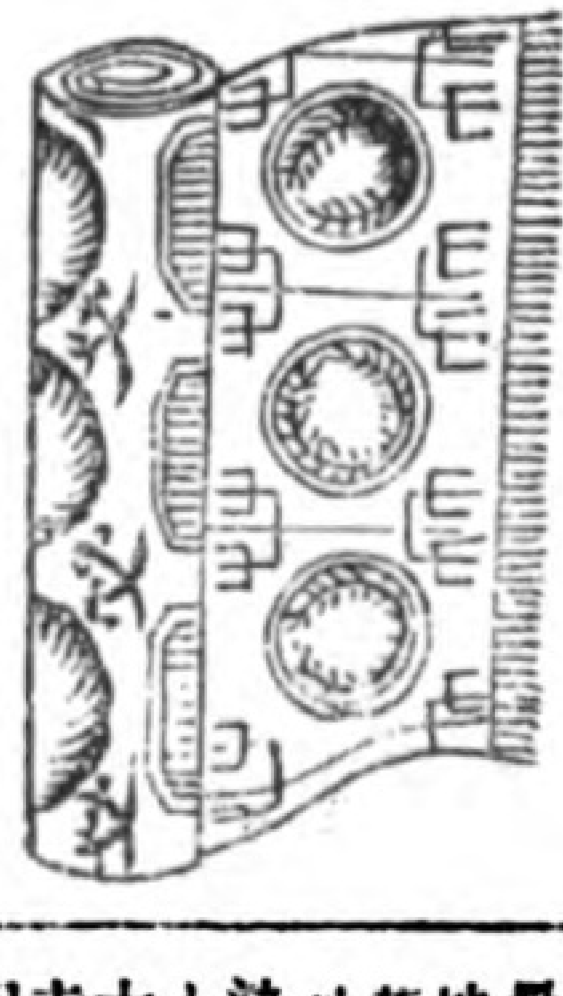
笏は手板なり上代の天子大臣家の手に持ちたるものにて飛彈より產する柘植の木にて造る

線



線は蠶のはく處なり、練りて絹布を製す又生糸の儘にて外國へ輸出す貿易品の王なり

高麗織



こうらひ織は京都西陣より織出す疊の縁の白地に雲形菊花などを織り出し又は染出したるもの古宮中大臣家神社寺院などに用ゐしものなり

繻子



繻子はよゝを經の間に織りかくしたる絹なり地厚く滑かにして光澤あり、今婦人の帶地として用ゆ

眼の記憶 (衣服織物の部)



靴

靴はかわぐつなり古昔の官人の用ゐしもの、王朝の時鞠を蹴る時これを用ゐたり



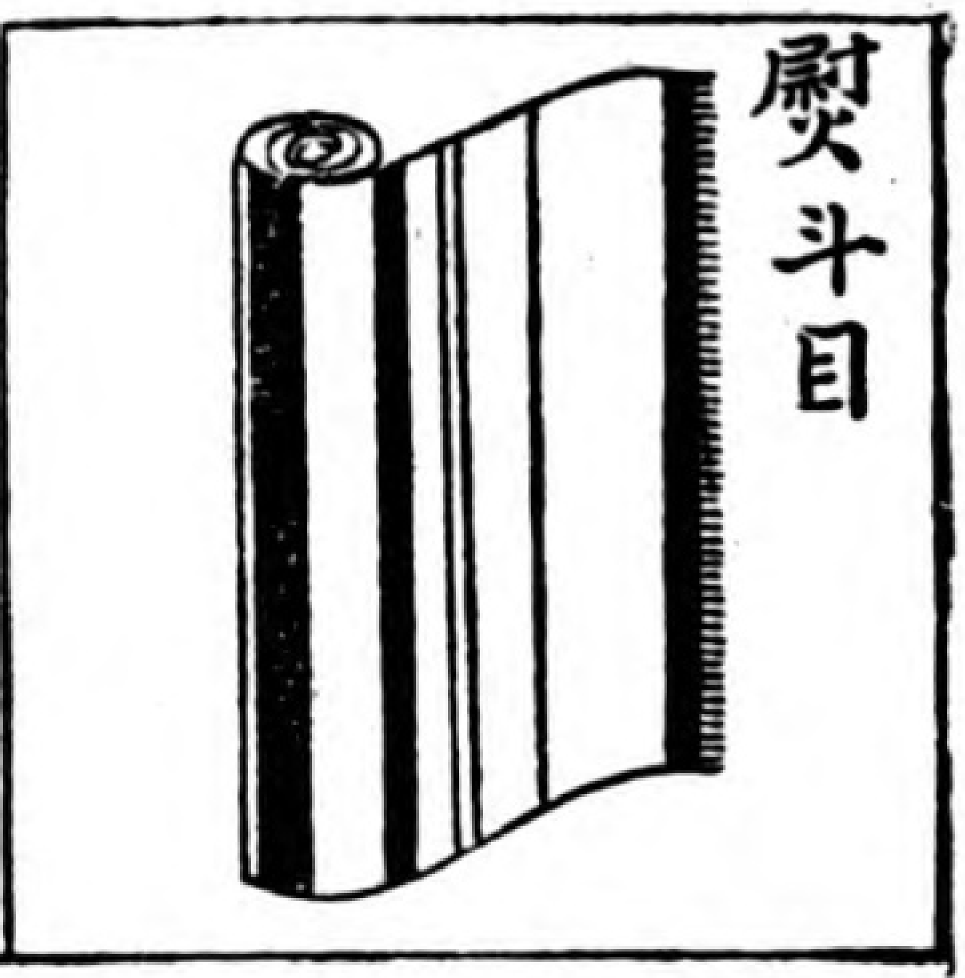
鞋

鞋はわらぐつなり麻又は藁にて造り下賤の履ものなり



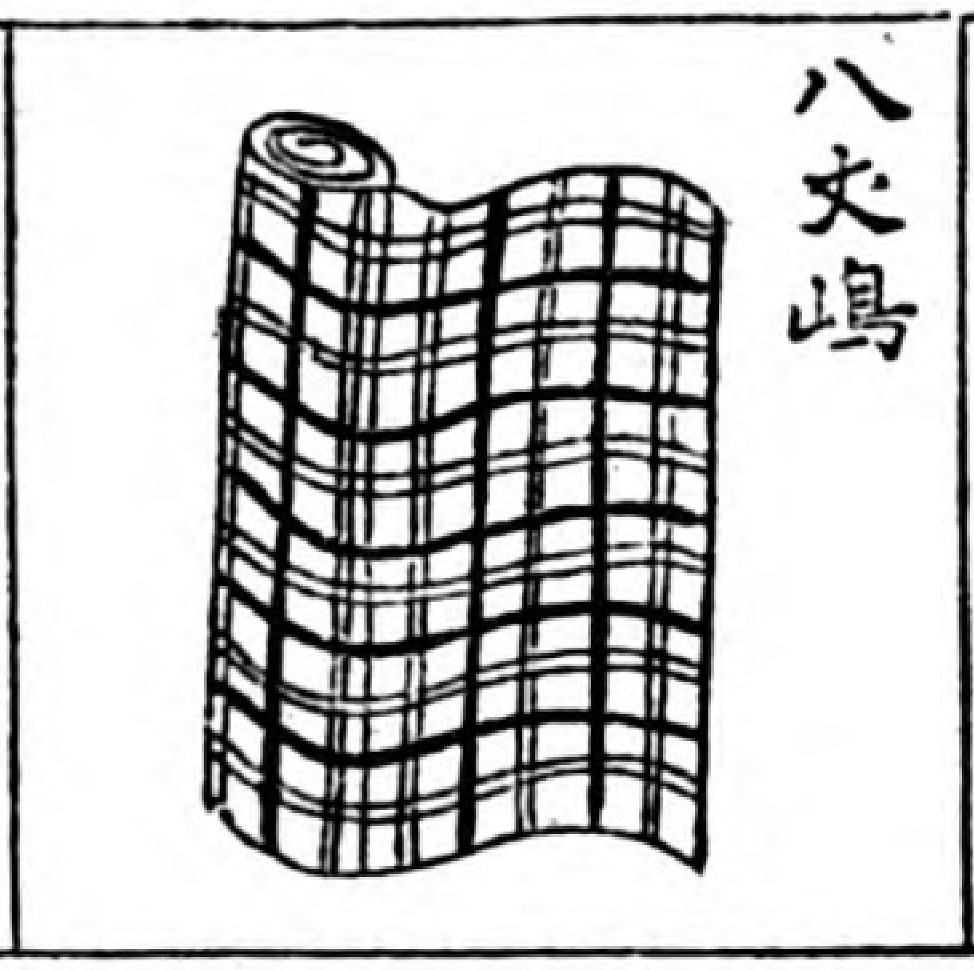
韈

韈はしたぐつといふ靴の下に穿く足袋なり、支那朝鮮等専ら之を用ゆ



熨斗目

のしめは節ある織物なり祝儀に士人の着る服なり又能役者なども用ゐたれど今は廢れり



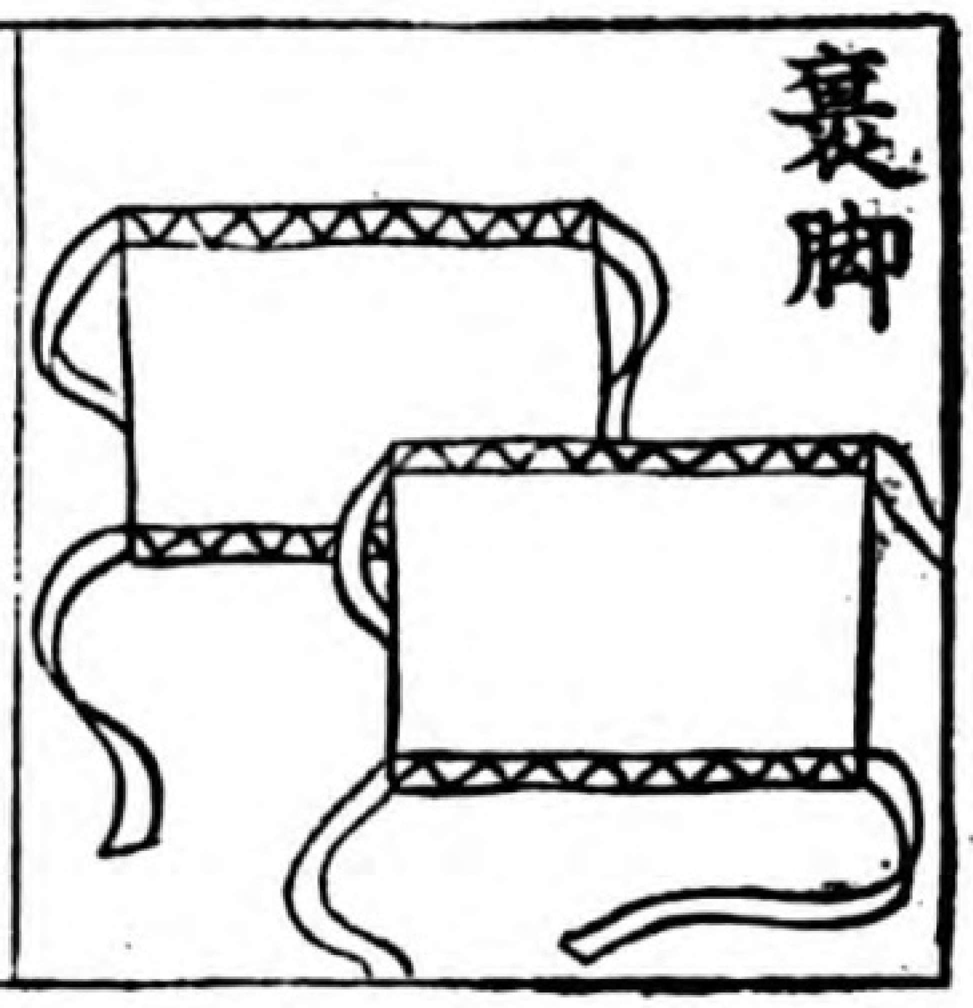
八丈嶋

八丈は八丈島より産する絹の名にして天蠶を以て造り木[illegible]もて染めたるものにて至て丈夫なるものなり、むかし同島より将軍家へ貢物にしたるものなり



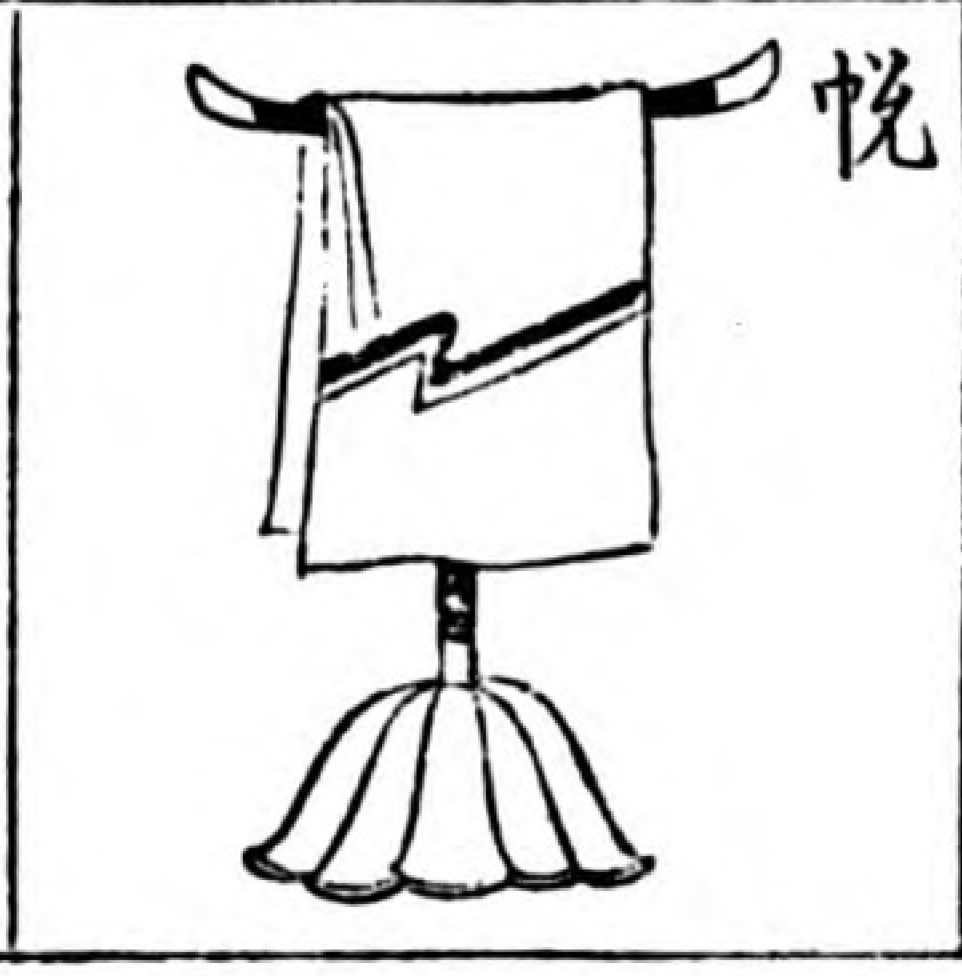
繻珍

しゆちんは錦の一種にして五色の彩糸を以て織りたるもの帯地又は嚢物に用ゆ



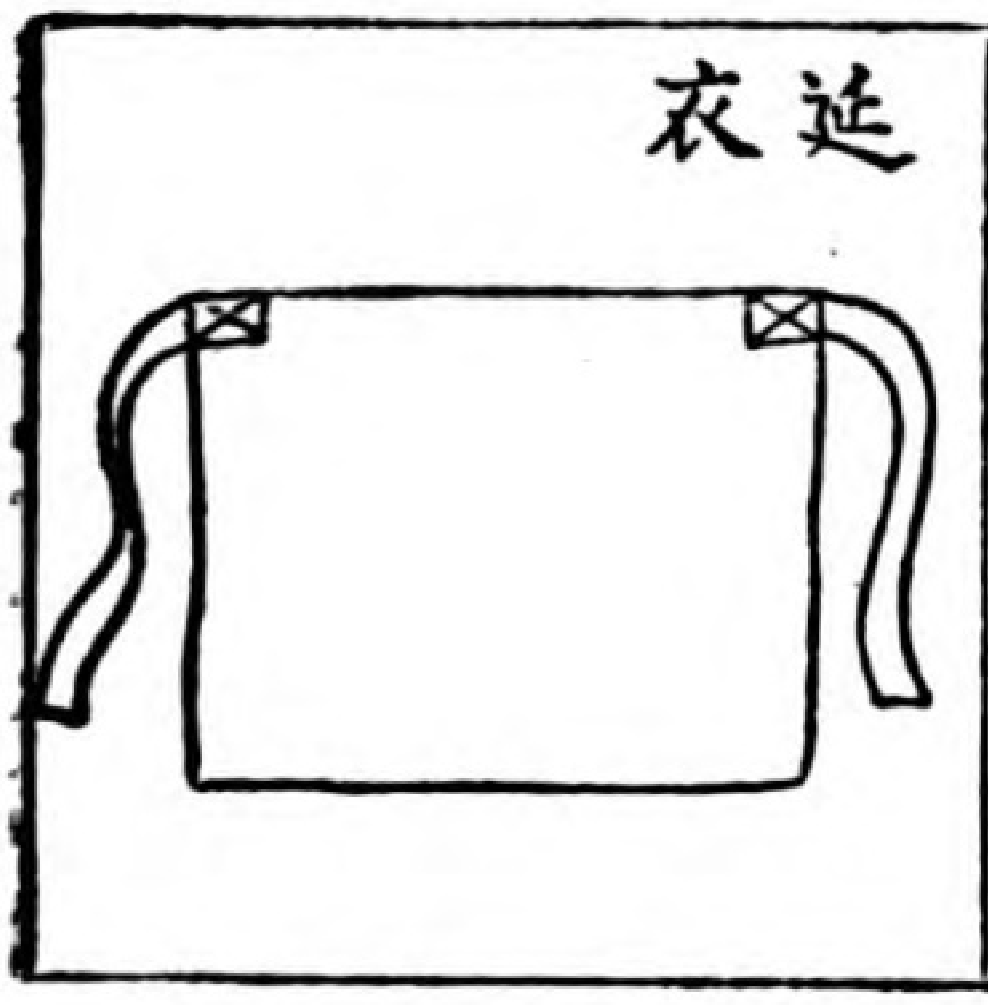
裹脚

俗にはゝきといふ脚絆なり脚をつゝみて歩行に便するものなり



帨

○は手拭なり



延衣

よだれかけなり、小兒の胸部に垂らして衣の汚れをふせくもの

泰西名什

支那の少女

ヘレンクラーク作
長谷川天溪譯

アーフオンは支那の少女で、九歳位ですが、年の割合には非常に小さく顔には、最早小皺が寄つて、嘗つて櫛を入れた事もない黒い亂れた頭髪の間からは、憂の眼が不幸を語つて居ります。

アーフオンは傭人です、少さな奴隸です。外の支那の小娘は、皆な美麗に髪を結んで居りますが、此の兒の主人は、其んな必要は無いと言つて、髮などを梳いて遣つた事はありませぬ。向側のアームーさんは一年に三度奇麗に顔を剃つて貰らうし、平常可愛らしく髮を結んで、赤い絹布を懸けて居りますが、アーフオンは此樣の事は、夢にも見ませぬ。

正月になりますと、アームーは、黄色の美しい上衣を着て、玉の糸の付いた帽子を冠り、額には、硝子製の輝く髮飾が垂て居りますが、アーフオンは年が年中、襤褸ばかりを着て居つて、たとひ新年とても、衣服らしい衣服を着た事がありませぬ。

アームーの家には、毎週教師が來ます。アームーさんは、赤い少な書物を讀むとが出來ます。また英語の唱歌を歌ふとも出來ます。それに引きかへて、アーフオンの家には教師は來ませぬ。これは主人が免しませぬからです。

アーフオシは其の女主人と一所に、紐育の支那町の後の、屋根裏の様な所に住んで居るのです。東に向いて、光線とりの大な窓がありますが、何時ぞや、此處から盗賊が忍び入たとやらで、板を打ち附けてあつたのですが、アーフオンの主人は、此の板の二枚だけを外しました。これは皆な取り外しては、女房が、外ばかりを眺めて宜しくないと言ふ考からです。併し二枚だけは除してありますから、アーフオンは此處から、街を見下して、往來する種々の物を見ることが出來ました。

アーフオンは支那町には、もう數ヶ月居るのです。故郷は、遠い遠い支那の、其の内地の、見渡限り米の畠の所です。兩親は非常に貧乏で、アーフオンの六歳の時に、船で來た或る商人に、其の兒を賣り渡しました。アーフオンは歩行ける様になりますと、直ぐに家庭の手傳を致しましたから、六歳とは云へ、中々壯健で御座ました。さて船の中では、茶碗や皿を洗て、可憐さうに、小さな體で、一生懸命に働きました。

廣東に着いた時に、商人は、アーフオンを醜い顔の老人に渡しました。老人はアーフオンを連れて　香港に行つて、大な太洋通の汽船に乘せましたが、其の中には、一人の支那婦人と、可愛らしい子供が二人居りました。此處では苦しい仕事を勉めませんでしたから、前よりは、ずつと氣樂で、二人の男の兒と樂しく遊ぶことが出來、兒童は亦、アーフオンは只女の兒とばかり思つて、奴隷とは知りませんでした。

支那の婦人と言ふのが、アーフオンがまだ見たこともない程美しい人です。常に絹の上衣を着て、足は、兼ねて聞いて居りました足で、蓮歩を移すとは、此の事であらうと思ひました。歩行の出來るのは、其の部屋内位で、小船の中などは、到底歩くことが出來ませぬ。併し其の美麗い衣服、その少さな足、その可愛らしい二人の男兒あるために、立派な上品な奥様と見えました。アーフオンは子供ながらに考へました、是れ程に偉い奥様は、世界を尋ねても有るまいと。

ヴアンタパートに到着すると、憐やアーフオンは、阿片の烟で滿ち充て居る暗い部屋に投げ籠められて最早其の朋友を見ることも出來ず、心地も惡くなつて、泣きつゞけました。アーフオンを連れて來た老人は、泣き入る小女を、打ち据ゑて、石炭の穴に押し入れました。穴には鼠。アーフオンはもう死ぬやうな思をして、漸く抜け出して、男の煙草吸ひながら寢て居る臺の下に隱れて、泣き寢入に眠むりました。

數日經つた後、例の老人は、此の女兒を臺の下から引きずり出して、恐ろしい男の前に連れて行きました。男は侮辱み果てた眼付でアーフオンを見て後に、二百弗を老人に渡しました。少女の賣買はこれで濟んだので男はアーフオンを連れて、とある方に行きました。

無慈悲の男は、足にまかせて行きます。アーフオンの支那靴は、凹凸の多い敷石の下は歩けませぬ。轉びつ、倒れつ、引きずられるやうにして、漸と或る停車場に着きました。恐れ慄ひつ泣き續けのアーフオンを、男は汽車に積み入れて、亞米利加の町へと向ひました。其處で亦幾何かの錢で、賣り渡してしまひました。此の新主人、こそ今の主人で、名はゴングワと云ひます。ゴングワはアーフオンを其の女房の所に連れて來て、今の家根裏に住はしたのです。

斯樣な辛い苦しい家は莫い、是れ迄は、茶碗や皿や器具を洗ひ、拭き掃除もし、赤兒の守も致しましたが、此處の仕事に較ぶれば、其れは何でも無いことです。子供には無理の掃除を仕終れば、少しの休息もなく、直ぐに高い椅子に置つて、支那服の扣鈕孔をかゝる糸を造るのです。

無理な重い拭掃除のために、指先に針を持つことが出來ませぬ。自由のきかぬために、仕事が遅なれば、棒で指を打たれる、主人の氣に入る程糸が出來なければ、また撲たれる、夜に入て居眠をすれば、鋏で耳を撲たれる、或る時の如きは、餘りに疲勞て、椅子から落ちるまで知らずに寢りました。オヽ其の夜の恐ろしさ。忽ち

頸根に燒火箸が押し付けられました。アーフオンは、これだけは一生忘れますまい。

　朝早く起きてより、夜の晩くまでアーフオンは、仕事は命せられます。其の間一度でも窓外を眺めたならば、邪見の女主人は、撲つやら、傷を付けるやら、それは〳〵堪え難い苛責に逢ひます。されば憐な支那女か、外を見るときは、女主人の眠て居る間で、その他は、絶え間なく働いて、氣息つく暇もありませぬ。

　兎角する間に、新奇な恐怖が、此の少女の身邊に迫つて來まして、其の主人は、女房を賣り飛すとに定めました、女房は、泣かれるたけ泣きました。一日に、澤山の扣紐穴をかゝる此の女房をさへ、賣り飛ばすやうならば、仕事の自由に出來ぬ此の身は、什麼なるでありませうか。思へば想へば、恐怖の淵は、測り切れぬほど深いのです。

　此の家の垣根を隔てゝ、黒奴の一家族が住つて居ります。此の家に、アーフオンよりも一二歲年上の女兒があります。毎日公立小學校へ熱心に通ふて居りまして、學問の出來る善い兒といふ評判です。成程其の十一歲の時には、既に米國史の概畧を憶へました、殊に奴隸の家に生れただけに、アブラハム、リンコルンが事は、餘程詳しく知て居りました。知つて居るばかりでなく、此の大人物を、奴隸解放の神樣の如くに、尊み崇めて居りました。

　アーフオンが、苛責の笞を免れますのは、裏の井に水汲みに出る時ばかりです。そのたび毎に、垣根の間から、黒奴が娘マリアンナさんの庭園を覗きますのから、遂マリアンナと朋友になりまして、月日の經つ中には、片言の英語を憶える樣になりました。

　今日の恐ろしさは一倍です。非道の主人は、愈よ女房を、來週には賣り渡たすと宣言しました。其の次は吾が身の上と、アーフオンの悲は筆も及びませぬ。

主人の何處かへ出て行つた後に、女主人は、自分の怨や怒を、アーフオンに向つて發しました。撲つやら、蹴るやら、それは其れは、詞も及ばぬ程、無道のとを致しました。これがために、アーフオンの額前は、大な傷が出來て、血は流れて紅の顏それにも、頓着なく、支那の女主人は、自分の不快や、憤怒を慰め且つ忘れるために、例の調子で、阿片を喫んで、すや〳〵と眠てしまひました。

女主人の眠込だのを見濟して、アーフオンは外に出て、例の垣根を潛ぐつて、黑奴の庭に行きました。其處には折善くも、マリアンナが、甘さうな林檎を喰べて居りました。

ア『マリアンナンさん、

信實の色を以つて、マリアンナは、

マ『アーフオンさん、お前さん、今泣いて居ましたね。

ア『ハイ、あの今……

マ『まア、什麼して其樣に怪我をしたの、あらまあ、耳の所まで血が流れて、

言はるゝ儘にアーフオンは、顏を撫でました、撫でるに從がつて、血染の顏。

ア『お前さん、今日は何の日か知つてますか。今日喧嘩するなんて。今日はリンコルム樣の誕生日ですよ。私達は皆なリンコルム樣の所へ行つて、今お花を捧げて來たとこだわ。

リンコルムと言ふも、アーフオンには何も解りませぬから、只默つて居るばかり。

マ『リンコルム樣は、誰れにでも、自由を與へて下さる人ですわ、妾のお父樣が言ひましたよ。今、誰れでも自由を持つて居るんですて。

マリアンナは稍激した調子で、且つ又、アーフオンの傷を、さも憐れと言ふ顏付で見て、

ア『其れは斯ういふ事なんですつて。リンコルム樣か、立派な規則を拵へて下さつたから、もう誰れでも撲たれたり、苛責られたりするヿは無いんですつて。詢にリンコルム樣のお蔭で、誰れでも樂になるヿか出來るんですわ。それで米亞利加では、人の賣買は出來ないんですつて。

駭いてアーフォンは目を見張り、動悸うたせたから、

『其の人は、何處に居るんです。

ニ『公園の大な石の上に、今日は薔薇の花で、それはそれは眞實に美麗ですわ。

ア『公園ッて何處にあるのです。

ニ『それは彼方の方の町に、

マリアンナは公園の方角を敎へました。

ア『おやあ誰れも賣るヿは出來ないんですね。

ニ『リンコルム樣がお許なさいませぬのですよ。眞實に偉い人で、世界中、一番偉い人ですつて。

アーフォンは思に沈んで、只手をもぢ〳〵して居るばかり。ふと見れは、木戸を開らけば、大路は、敎へられた不思議の公園に續いて居るのです。

扉を開らいて、荒々しく家内に這入る主人の足音が聞えます。周章狼狽いて、アーフォンは二階に駈け上つてそしらぬ顔で、仕事にかゝりました。男は歸つたまゝ床に就いて、一時間ばかり熱睡た後に、再び何處かへ出て行きました。後見送つたアーフォンは、足音の消えるを待つて、漸く胸を撫で下しました。

最早眞闇です。振り向いて看れば、女主人は、眠た儘ですが、はや起る時刻です。さあ、アーフォンは、忍び出て、敎へられた公園に行くヿが出來ませうか、リンコルムを拜むヿが出來ませうか。

忍びに忍んで椅子を下りました、拔足さしわし、ストーヴの前を通つて、女の動く度毎に、膽を潰して這い出ました。女は目覺ませんでした。アーフォンは幸に、見咎られずに、戸口に行きました。

出たものゝ、外は暗い。いづてが門か、悲しや籠の鳥であつた身には解らぬ。其の疲れた手で、探り探り、漸と門に來て見ると、喜しや、鍵は懸けてありませんでした。

門を出てみれば、此處は支那町。兼ねて敎へられてありますから、公然には歩けませぬ。家の蔭、車の蔭、積荷の蔭、暗い中にも、暗い處を擇て、只一筋に、公園の方に行きました。暗にも公園の森は、眼の前に見えます。道は煉瓦敷、飛び立つ思をして、夢中に馳けて、公園に這入りました。

月は隱れて雪は霏々と降る。一念凝つた支那女は、恐れず進んで、小公園の内を馳せ廻り、降りかゝる雪を拂ひのけて、他の側に行つた頃、石に躓いて、倒れました。ふと見上れば、雪と花とを冠つた嚴然たる銅像。

是れてそ「リンコルム」の銅像です。アーフォンの考では、リンコルムとは生きた人であつたのです。併し今此の銅像の前に來て、新らしい思付をしました。元來支那に育ちましたから、石や木で、粗末に造つた像の前で、一心てめて、祈拜するならば、願の適ふとは知つて居ます。

「リンコルム」とは尊い佛様のとよと思うたアーフォンは、此かる立派な偶像に。お願申したならば、自由にして下さらぬとはないと、其の銅像の前に、俯伏して、自國語で、爾も滑かに、吾が身の窮狀を救ひ給まへや、自由を與へ給まへやと、一心に祈りました。

阿片で暫時の快樂を貪つた女は見覺ました。見れば椅子にアーフォンは居らぬ。「アーフォン」と續けて呼ぶも答はない。戸を開らいて、けたたましく呼つても、空な部屋に反響わるばかり。

近隣の者は集まつた。主人の出先に使者は行つた。十人許は、逃げた方角に後を追ひました。併しアーフォ

ンの行つた方角とは、反對の道を驅けて行きました。これは其の方向に、奴隷として虐待せられた支那少女を救濟し、養育する家があるからで、人々は、アーフォンは、何處からか此の事を聞いて、救を求めに出たのと考へたのです。

アーフォンは斯樣な家の有らうとは、露知りませぬ。知らぬだけが其の僥倖で、若しも其の方角に馳つたならば、如何にした所で、追手の者に捕へられて、想像の出來ぬ程、困められたでありませう。

アーフォンは雪中に坐つたまゝ、其の小い唇から、出來得るだけの祈禱をあげて、何卒幸福を下し給へと、一心こめて、頰の傷も忘れてしまひました。折しも通り掛つた警官は、怪しき少女を見て驚きました。立ち寄つて聞けば、アーフォンは片言で、

「今、妾の賣られないやうに、此の神樣にお願ひして居ます。オゝ善いリンコルム樣。惡い人が、妾を連れて行かぬ樣にして下さるのです」

悲哀と苦痛とに惱るアーフォンは、苦しまぎれに兩手を上げて、リンコルンの銅像を見上げました。血に染つた顏は淚の雨。

警官は立つたまゝ考へました。たつた一時間程前であつた、自分の可愛い、黑い髪の兒を、抱いて愛して、巡廻時間に來たまで、離さなかつた、その兒の髪にも似た、此の兒の頭髪。はて誰人の兒であらうか。世には高下のあるものよ。

「お前は何うして欲しいのぢや。見れば、支那の女じやないか。

「ハイ、支那の兒です。惡い人に賣られたくありませぬもう。澤山賣られました。幾度も賣られました、何時でも鞭ばつかり。恐い鞭よりも死ぬ方が、……屹度死んでしまひます。もう賣られたくはありませぬ。

警「何ぢや、支那人がお前を賣るつて、
ア「必定賣ります。何時でも賣ります。もう鞭は澤山です。何處へも行きたくはありませぬ。マリアンナさんが言ひました、リンコルム様は善い神様で、私を賣らせませぬ。
警「ム丶左様だ、左様だ。リンコルン以後は人を賣ることが出來ないのぢや。また支那人とても、人を賣ると言ふ法は無い。併しお前は、デキスター町の支那少女を置く家を知らぬのか。
ア「知りませぬ。
警「年は何歳じや。
アーフォンは自分の年すら知りませぬ。
警「ぢやア何處に居るのだへ。
ア「大層惡い人の家に。ゴングワと言ふ人です。女房を來週賣るのです。何時でも妾を撲ります。大變惡い人です。ア丶わのリンコルム様は、妾を賣らぬ様にして下さるのです。
公園の一隅に、確に一人の支那人が、何か尋ねながら通りました。アーフォンは低く泣きむせんで、雪の中に正坐して、見るも憫れに再び祈りました。
「オ丶リンコルム様。もう賣られぬやうに。妾は善い女になります。眞實に善良い女になります。何卒、惡人が賣りませぬやうに……
少女の悲み迫つた嗚咽の聲は、默然として居た警官の心を動かしました。
「さアお出、善い娘じや。支那人の苛責ぬ處に連れて行つてやらう。
恐れ慄くアーフォンを抱き上げて、とつし〱、雪を踏み分けて公園を出た、アーフォンの知らぬ街を行く

と、十分間許り。不幸の支那少女は、警官の肩に顔を押し付けたまゝ、額の血は外套に汚點を殘しました。やがて石段を登つてベルを、押しますと、扉は開かれて、温かさうな、美しい光が、みすぼらしいアーフォンの躰を照しました。

　早速ですが、此の兒を、今公園のリンコルムの銅像の前から連れて來ましたが、支那人の奴隷として賣られたらしい。又更に賣られて、虐待されたのを恐れて居るやうです。何卒お世話して下されば、此の兒の幸福です。

　アーフォンは顔を上げました。見れば、アームーの教師の柔和の顔やがて、婦人の腕に抱かれて、扉は閉れ、身は、温かで、平和で、安全で、而して明い部屋に連れて行かれました。

　親切の人々が、傷を洗つたり、顔を拭たり、甘い物を出したり、新らしい、上等の、温かい着物を着せたりそれは〳〵手の屆いた介抱をして呉れて、眠るときには、温かで、柔かな床の上。もはや心配するには及ばぬ、此處に居りさへすれば、何が追掛けて來やうと安全と言ふ親切な慈悲な聲を聞きました。

　アーフォンは數年此の家に、安らけく、樂しく送りまして今では一人前の婦人で、アームーよりも立派に讀み書が出來ます。而してアーフォン程、リンコルンの尊い人たるを感じて居る人は無いでせう。　（完）



池畔の寫生畫

米國 ブレット、ハート作
上村左川譯

オクソン、ポッターは英國ドメスデー公園の大門の正面に、此尊き城内への入場切符を賣つて居る半分は店屋半分は旅舍といふやうな小舍の前で停立つた。彼れは茲に西部亞米利加人の特色を現はして、啻其話風ばかりでなく、殆んど官吏じみた件の切符賣が切符を出してくれた時に、滑稽半分に半分の問ひなど發したが、併し毛頭惡氣はなく、其切符賣と服裝立派な外國人たる我との間に、何の懸隔をもして居ないといふことは明らかに語氣に見えて居たので、對手の感情を害するやうなことは更になく、否却つて切符賣當人は素より、其妻や娘、來客までの好感情的注意を惹いたのである。尤も此旅客の風采の好いのが、それには幾らか與つて力があつたのでもあらう。ポッターは珍らしい美貌の壯漢であつて、西部の村落などで偶に見受ける彼の一種の理想的の風丰がある、少しも男先祖の方から遺傳したのでなく、恐らく其の女先祖の方が、國境の寂しい小舍で心細い冬の長夜に耽り讀んだ小說其の他の書物の感化から遺傳して來たのであらうと思はるゝそれである。口髭は無く、格好よき頸と肩の上に、短かい美しい捲髮が程よく揃つて、普通の亞米利加式といふよりは大躰がもつと希臘式の方なのである。僅少の聽衆を十分樂しませて後終に彼れは麥藁帽子を揚げて「貴女だち」に挨拶し、道を橫ぎつて門の方へ徐々と歩み、其處で佇立つて案內記を見ながら高聲に

「聖、ヂョーンの門。此宏大なる建物の築造せられしは、レランド氏の說に據れば……」

と讀みかけて、忽ち小聲に「ナニ何時建築せられたつてそんなことは何うでも可い、聖、ヂョーンを通つて見やう」と、鉛筆で其頁へ記號を點けて、それから門番に切符を渡し、聞けば丁度今外に誰も觀覽者は來て居ず案內者は大連の觀覽者に隨いて行くことになつて居るから、獨りで見て來るの外は無とのことに却つて有難い

位、早速且ある隈路へ逼入り込んだ。

此日は何時にない無上の好天氣……英國に於ける暑い夏日……實に英國のやうに常住海風に吹かれる島國は今日のやうな日こそ其濕氣は吸出されてしまつて、頭の上の蒼穹の方に發散し、或ひは遙か彼方の森の中へあるかなきかの俤となつて去つてしまひ、長き歳月の間に養ひ立てられた此古き土地の趣きが、さしつける大陽の光りに、活氣を帶びて自然と光彩を放つて居る。絶間なき耕作の爲めに幾度となく鋤き返されたる過ぎし收穫の死灰は素より、幾年月の間此中にて働らきし人々の墳墓の土さへも、今日の日光に逢ひて再たび蘇りて動き出せるかのやう、何を見ても色は濃く、和らいだやうで、樹木の影すらも其の印て居る芝生と齊しく軟らかになつて居る程である。西亞米利加の曠野の地に育つたポッター。我生國の自然の儘なる、人に喩へ云はゞ若隨氣氣儘な土地の有樣に慣れて居ることゝて、此英國の土地の、平素天然から阻礙せられて居る其感化と云ふことを感ぜずには居られなかつたのである。

今や彼れは繁つた枝の間から、日光線に輝やく空處を距てゝ、實に玆の土地から生へ出た物でもあるかのやうに想はるゝドメスデー寺院の癈墟が蔦に蔽はれたる有樣を一見した時、「玆はひどく物が面白く出來て居る」と獨り呟き、小供の時に讀んで忘れて居た書物……歴史讀本の一節、生覺えの小說などの事が、歩を運ぶに從うて心に浮んで來て、其本に在つた色々の人物を寂しい身の四邊へ澤山描き浮べるのであつた。

併し暑さは確かに酷しい。尤も酷しさ加減は故郷も仝じ位であるが、唯其及ぼす結果が違つて、血管の中が火になると云ふよりは、氣が鬱して夢のやうな心地になつて來た。そこで樹葉の繁つた處へ引込んで、短上衣を脫いでしまつてシャツの儘で逍遙して居たが、程なく復彼の寺院が透間から目に付いた、寺院には附着した建物があつて、これへは高貴なる持主が年に二三週間は來て棲むのであるが、今は誰も居ず、陰森たる四邊の光

景に放任せてある。〔マヽ〕そこで彼れは彼の場所から出て、苔の生えた廣やかな平場へ來た。前には灌木花卉の種々心の儘に枝を交へて茂りつゝき、柏と杉とは蔽ひ榮えて小暗きまでになつたあたりに、目を射るばかりの白き塑像、瓶、方眼垣、其外幾年月を打ち捨てられて繁る草葉に半ば隱れた幾條の敷石の徑路などで彩られて居る復もや案内記を出して見ると、これは「舊き伊太利風の園」といふのであつて第三代の公爵の代に或名高き伊太利の園藝家の意匠で造られたものであるが、其飽く迄も正式に拘泥した處が、第四代目の公爵の氣に適はなかつたので、成り行く儘に放任して更に顧みなかつたのを、其後も代々其儘にして置いたものである。これが即ち美術に熱心な此案内記々者の歎じて居る處であつて、記者は慨然として、遺棄の爲めに敗壞に歸しつゝある大理石の塑像、水瓶噴水等の比類稀なる美に對して讀者の注意を喚起して居る。尤も殊に貴とい品物の中一つ二つは現時の公爵の別邸へ持ち行かれてあるとのこと。

云ふまでもなくポッターは此批評家の美術的熱心に對し早造反對の意見を起して、件の園の中へ侵入し、其の荒廢の模樣、美術の正式なるものと鬪つて『自然』が勝利を得つゝある狀態を見て意地惡くも喜悅の感に耽つた。枝の絡みあつて迷路のやうになつた間、到る處『自然』の反抗の爲めに精巧と秩序とは蹂躙せられ、彼の強硬な泥工術さへも破壞せられ歪められて居ることが見える。それでも猶此處彼處に『自然』と『人工』と云ふ二つの力が結合して、單獨にでは現はし得ない一種の美を現はして居るのである。玉蕊花の蔓は蔓つて、如何に巧なる彫刻家でも作り得ないやうな工合に、さも調和宜しく水瓶に絡み、重くるしい欄干は其小柱の間毎に組絲でもあるかのやうに種々の植物で格子模樣が出來て、宛ながら天國の物かと疑はれるのである。然るに此時最前から汗に濕して咽喉が渴いて居るポッターの耳に嬉しく響いたのは、何處かで水の溢れ出る音で、彼れは忽ち自然の美よりは此物質的の物の方へ注意を向け、件の音を便つて行くと、程なく恐ろしい大きな長

方形の大理石の水溜の在る處へ來た、此水溜の中に古色蒼然たる噴水器が三個あつて、それには影像が澤山付いて居る。噴水口も孰れも葦や其他の水生植物の爲めに妨げられて皆水が停つて居るが、大きな水溜其物は、何處か目に見えぬ源泉があると見えて溢れるまでに水が溜つて居る。

此長方形池の片側は平坦の散歩所が付いて居り、池には處々に、茂る柳に半ば蔽はれた向う岸に沿うて、海神、山神、山姫などの淡く彩つた大理石の影像が半ば葦に隱れて立つて居る。影像は皆歳月の爲めに多少は損はれ、曾て是等の像を支へて居た方形の臺石の今は唯空しく苔に埋つて居るのも此處彼處に見えて居る。しかし影像が陰の處に立て、其褪せた色合の工合が如何にも生きて居るやうなので、ポ、ターも霎時ば眞の人間かと驚いた位。

水はさも快く冷たさうに見えるので、ふと彼れは横着な考へが起つた。茲には今自分一人であるし、それに場所は隔絶つて居る。外に一人も來て居る者の無いのは知れて居るのに、池は園の他の部分からは全く隱れて居て、唯自分が今來た路より外からは來られないし、そして其路は茲から殘らず見えて居る。そこで彼れは柳の樹の下で打寛ろいで徐ろに服を脱ぎ畢るや否、何の遲疑することもなく件の池水の中に這入つた。水は四五尺の深さであつて、萍蓬草や其他少しばかりの水草が清い水面を汚し、或は影像の臺に附着しては居れど、片隅から斜に向うの隅まで泳げば無類の泳浴が出來るのである。彼れは此の快絶なる水の中に暫らくの間遊び戯れて後、半ば水に沈んで殆んど葦に隱れて居る臺石の上に坐を占めた。此臺石は以前は河神の影像を載せて居たのである。彼れは此臺石の上に肘を突いて體を支へながら、猶半身は水の中に入れて居たが、忽ち其鋭敏な耳を驚かしたのは、衣の裾の摺れ合ふ音と人の跫音！

霎時の間は我が感覺を疑はうとした位で、前には誰も居ぬ彼の小路と寂然たる散歩所ばかり、更に人の姿は

見えない。然るに彼の音は次第に明瞭に聞え出し、しかも柳の樹の並んだ池邊の後ろ側から來る樣子で、氣が付かなかつたが無論其處に別に小路があつたものだと思ふと不安心至極である。服は其柳の下に脫いであるが今自分の居る處が其岸の方から凡そ十間は離れて居り、平塲の側からも仝じ位の距離である。彼は水の中へそつと潜り込まうとしたが、南無三！已に娘の姿が、隱れたる柳の下路から彼の散步所に現はれた！娘は頭の上に涼傘を捧げ手には一冊の本を持ちながら徐々と步いて居る。ポッターは心中大狼狽の塲合ながらも、其娘の姿……白服に水夫帽、それに黃靴の愛らしい姿が、ふと立停つて……無論こんな池のあつたのに驚いた風で、噴水器の方を眺めた時の樣子が深くも記憶へ泌み込んだのである。

忽ち彼れが心中に一つの思案が浮んだ。娘は今自分から少くも三十間は離れて居る。自分は丁度好い工合に柳の樹の長い蔭の處に居て、半分は葦に隱れて居るから、若し今此儘で少しも身動きせずに居たなら、距離があるから自分が居るのに目が付くまいし、付いた處が矢張彫像の一つだと想ふのであらう。それに自分は肱で體を支へて居るし殆んで水中に隱れた臺石の上で、半身は水の中に在るので、幾分か河神像と云ふ態度である殊にさうするより外にもう逃れるべき術がない。潜り込んだところが、娘が玆に居る間水の底に居ることは出來まいし、それに少しの身動きをしても知られるのは判り切つて居る。そこで彼れは其儘全身を固めて殆んど息づかひもしない。彼れに取りて僥倖なことは、態度が自然で、其儘にじつと保つて居るのが容易であつた。それに又好くこそ斯う覺悟を極めたれ、娘は少しも急かれて居る樣子は無く、徐々と步きながら、時々立停つて池の景色や中の彫像どもの有樣に視恍れる樣子。忽ちポッターが氣の付いたは、娘は今殊に自分の方を凝視めて居るらしく、それに彼方此方居塲所を變へながら、何う見た方が好からうかと思案して居るかのやうに、其愛らしい頭を動かし、手を額に翳しなどして居る。ポッターは愈軀を固めて息をも繼がなかつたが、併し娘

が此方を視るのに、其樣子がさも眞卒で、少しも驚いて居るらしいところが無いから、これは何も俺の姿を怪しんで視て居るでは無く、全く半ば水から出かけた彫像と信じて居るといふことは判つたので、ホッと息をついた。が娘は程なく立停つてしまつて四邊を回顧し、軈て眼は始終自分の方を凝視ながら徐々と後ろへ退り出して、後部にあつた石の欄干へ達すると、其上へ跳び上つて腰を掛け、持つて居たスケッチ、ブックを前垂の上に廣げて、軈て鉛筆を取り出したと思ふと……這は大變！娘は我姿を寫生しだした！

はッと狼狽へて一時は潜り込んで一生懸命に後ろの岸の方へ泳ぎ着かうといふ最初の考へが復起りはしたが今はもう少しの身動きをしても見顯はされると、猶依然として軀を固めて居る。もう斯うなつては、命にかけても、生きた人間を寫生して居たといふことを娘に知らすには忍びないのである。娘は迅速に而も確實に寫すらしく、又心はそれにのみ注いでしまつて外の事は全たく忘れて居る樣子。描きかけては幾度となく畵を前に捧げて實物と見較べて居る。ボッターに取りては此處實に一秒が一分、一分が一時間の心地、折から突然と、有難い哉、遙か彼方で「ロチーさん」と呼ぶ聲が聞えた。婦人の聲で、殊に其音調が亞米利加人のやうに想はれる。

娘は性急たやうに一寸頸を動かしたが、顏は擧げもせず、鉛筆は更に迅速に動き出した。復呼ぶ聲、今度は前より近く。娘の鉛筆は正に紙の上を飛んで居るかのやう。それでもまだ顏は擧げず、愛らしい聲を出して「はーい」と返答。

娘の音調も亦矢張同國人であるらしい。

「一體まア何處に居るの？」と、復初めの聲、今度は其聲が、初め娘が來た路の柳の樹の彼方側から來る樣子

「叔母さん、茲よ」と答へて、娘はパチッと音をさせてスケッチブックを閉ぢながら起ち上つた。

流行の服裝した肥大つた婦人が柳陰の路から現はれた。

『先刻から今迄茲で何をして居たの？』と件の婦人は不滿の語氣『寫生して居たのじやアあるまいねえ』と、娘の本を疑はしさうに見遣りながら『先生があれ程休日には決して寫生などしてはならないと仰有つたでないかね。』

娘は肩を揺りながら『私は此處の噴水器を見て居たの』と言ひぬけた。

『そしてまア此噴水器の厭らしいことねえ』と、年嵩の婦人はさも厭らしさうに直ぐ顔を脊けて池の方を二度とは見向きもせず、『さア、寺院の方も見るなら早くしないといけない。汽車に間に合はなくなるよ。叔父さんが園の端れで待つていらつしやる。』

そこでポッターは實に大厄難を逃れたやうな具合で、叔母は姪の手を取つて急き立て、間も無く兩人の姿は絡みあつた灌木の藪の中へ消え込んでしまつた。

ポッターは此機を逸さず、今まで固めつけて疲れ果てゝ居る四肢を直ぐに水に投じて後ろの岸に上り、茲で日に燒けた木葉や苔で、敏捷くも半ば軀を乾かし、慌たゞしく服を被ながら、今しも兩人の女の行つた路と反對の方向に駈け出したが、うまく道を變へて必死と急いだので、誰にも逢はないで大門に達した。それから活潑な一歩行きで、丁度最終列車に間に合ふ時刻に停車塲に着き、半時間も後にははやもうドメスデー公園と半ば忘れた此日の出來事からは幾哩も遠方を駈けて居るのであつた。

＊　＊　＊　＊　☆　＊　＊　＊　＊

扨又彼の二人の婦人は寺院の方へ歩を續けながら

『何故何でも見る物を寫生せられないでせう、私は合點がいかん』と娘は性急たやうに『それア私はまだ稽古の始めだから、色々初心の踏まねばならぬ路を踏んで、型を見て寫したり透視法を習つたり、そんなことを皆しなくちやならないことは判つて居ますさ、けれど氣の窒るやうな稽古室へ閉ぢ籠つて、腕とか手とかばかりを寫す……それはホンの研究でさア、……さうするのと外部で光線やら陰影やらある中で、そして遠見で色々不思議な好い趣きが出來て居る像の全身なり半身なり寫生して、腕やら體やら一緒に寄せ集めて描く……これが眞個の畫といふものですのに、それをするのと何處が違ふでせう。人の描く眞の畫といふものは、其儘で人なら人の形になつて居るのでさア。』

『ロチーさん、何うか後生だから又例の間違つた理屈は廢して頂戴なね！お前は生れつき畫心があつたから、お前の阿爺さんが承知して、巴里で一番費用の要る畫の先生に付けて居るのだから、お前は唯何事も規則を守つて行けば可いのだ。畫を描く人が何時も〳〵スケッチブックを擴げる程厭らしい風つたらありやアしないよお前、阿爺さんが若し此地へ來て、俺は亞米利加での大きな呉服屋だから見て置かねばならないと云つて、世間の婦人の着て居る着物を一々撿べ出したら、お前は何と思ふの？』

娘は叔母の尋常放れな事には慣れて居ることゝて何とも返事はしなかつた。が。其夜彼のスケッチと相對して、我が天資と今日噴水池での深奥なる印象とには我ながら深く信服させられて居たことゝて、中止させられたスケッチを記憶を辿つて窃かに完成することが出來たのである。それと云ふのは畢竟此ロチー嬢は天性の美術家であつて、父に勸めて自分を畫家にさせ初歩の修業を受けさせることにしたとも、決して一時の出來心からではないのである。嬢は自分の手に成つた此始めての畫作を一心に眺め入り、我ながら上出來と認めた。とはいへ今の處では唯鉛筆のスケッチで、此上へ色彩を施して生氣を帶びさせねばならない。

巴里へ歸つてから孃は……猶も秘密に……一層大きく彼の畫を油畫に寫し始めて、稽古室から出て來られる暇さへあらば、師匠には隱して、自分の室に退きながら彼の畫を描き續けたが、實に一身の心血を此畫の爲めに注ぎ盡して肉も落ち色も蒼ざめて來た程の事で、到頭出來上るに及んで、茲に始めて怖々ながら師に見せた師は默然として甚く驚きの體。實に面前なる畫架には、蓊鬱たる林を後景に見せ、其から此方に鏡のやうな水があつて、其清澄なる表面の華の葉の間に、半身を水面に現はしたる輪廓整然たる河神の像、而もその優雅な輪廓は、光線と陰影と空氣との作用から來た幻想でもあるかのやう。

『これは好く原圖を寫されましたね。規則に背いてはいけないといふことは貴孃に申してあるし』と、師は長い息を吐きながら『しかし私は此んな原畫を覺えませんがね。』

『先生それは、畫を寫したのではありません』と、孃はおづ〳〵云つて、それから殘らず秘密を打ち明けながらそれは全くそんな像があつたのです。然し何處かまだ足りないところがありませう』と謙遜の辭を添へた。

師は畫に視入つて獨語のやうに『成程、肱を突いて居る處に水の溢れて居る少し傾いた瓶があるべき筈だ。併し此肩の處の線の引き方は――さすが貴孃が平素其處の稽古して居るだけ實に好く出來て、見えなくなつて居る腕の工合も想像が出來る位だ。うまい、うまい！』

俄かに詞を停めて、師は殆んど吟味するかの如く孃の眼の方へ眼を向けた。

『貴孃は實の人を摸型にして描いたのではないと仰有るのですねえ』

『決してそんな事はしません』と孃は眞卒な貌。

『成程』と師は再び呟いた『これは實に高尚な理想化したところだ。今這んな手足は無い。併し實に珍品だなそして這んな尊い像が英國に在つたと云ふですね？』

「はい。」

「宜しい。それでは私は近日の中に其處へ行つて來る。それを見る爲めにわざ〳〵旅行するです。歸つて來るまでは貴孃は勝手次第に規則を破つて下さつて可いです。」

それから三週間を經て後、或朝孃がふと見れば師は我が居室へ來て彼の畫の前に立つて居る

「おや、英國からお歸りでしたの？」と嬉しさうに挨拶すれば

「はい」と師も極めて眞面目の語氣。

「眞の像を御覽でしたか」とおづ〳〵問ふと

「いゝえ、見ませんでしたよ」と師は眼鏡越しに孃の方を見おこせながら

「見やうにもないです者、そんな像は決して無いのですもの。」

娘は顔色が變つた。師は



詞を續けて『ねえ。私は英國へ行つて、ドメスデー公園へ出かけ、美しう繁茂つた園を通り拔けて噴水池の側迄行つて見たが珍らしい池水や光線と陰影とのうまい工合になつた樣や、萍蓬草や、奥幽しい葦などは見た、それも貴孃が描



いて居る程に好くはないでしたが、それは兎も角這んな像と云ふものはないです……河神の像は一つも無いです！門番に聞いて見たが門番はそんな像の事は全く知りませんそこで私は園の持主といふ公爵が遠方の屋敷に居て、損だ大理石の像など其處へ集めて居ると聞いて遙々行つて見たが、其處にも這んな像は一つも無いです。』『けれども私はそれを見ました』と、孃は熱心に云つたが、顏には稍困つたやうな色。『先生、それではあれは何でしたでせう？』

師は嚴然として『何うも貴孃が自分の想像でしたらう。全たくそれは天才の力です！天才の證據……實に爭はれぬ結果です！貴孃はその美しい池や、壞みかゝつた噴水器や、靜かな陰影の工合や、半ば葦に隱れた、像の無くなつた臺石やなどを見て、其處で貴孃が此間自分に云つたやうに『何か不足な處が』あると思つたでせう。さう思つたから、自分の想像で知らず〱其不足な物を實際其處に在るやうに想ひ浮べたものです。貴孃がこれ迄に神話の事で夢想つて居た種々の事やら、又これ迄に諸方で見た種々の影像の事などが、其場合にみんな貴孃の心へ浮んで來て、そこで貴孃の自分の想像から自然と其處へ河神が生れ出て來たものです。全たく貴孃の天才の產物、一つには其時其場所の微妙な空氣の工合と光線と陰影の魔力からも來たのです。お祝賀を申す、貴孃はもう長くは私に就いて習ふには及びません。』

師は挨拶して席を起ち、二階段を下りる時に輕く肩を搖りながら、口の中で

『實に畏敬すべき天才だ。併し女だ。女だからして情人は持つて居さうな事さ」わゝ情人……あの河神の像は！さもありさうな事だ。』

件の奇らしき作の爲めといふでなく、汎てロナー孃が繪畫の大成功、畫家として其功績が俄かに世に承認せらるゝに至つたので、師の云つた六かしい理論よりは、これが爲めに遙かに孃の不安心は平かになつたが、しかし其成功は皆孃が詩的神秘的の想像に原因を歸せられたのであつて、孃が筆に成つたる他の作も、全じく非常なる成功に逢ひ、孃は唯一ヶ年內に、世評以上に確かめ得たる名譽を荷うて亞米利加に歸ることになつたがそれでも孃は其初陣の作と關聯した彼の奇異なる出來事を忘れなかつたのである。

そして其後だん〱孃が心に一種の不思議なる變化が起つて來た。金は出來、名は揚り、世間の耳目を惹くやうになつた今、孃は彼の時の出來事の中に、感情的小說的の面白味を覺えるやうになつて來た。一度友達が

ら、孃は人の歎稱を受けてもさして喜ぶ樣子のないのを批難せられた時、孃は笑ひ半分に、自分は唯一度自分の『理想』なるものを見たが、二度とは決して見なかつたと答へた。尤も此諧謔が口を出てしまふかしまはぬに色は蒼ざめて默つてしまつた。此變化に伴なうて孃は又初期の成効の時米國の投機的の或畵商人に賣渡した彼の河神の畵を買戻したいと云ふ念が起つた。そこで詮議して見ると、殘念！其畵は僅か一兩日前にポッターと云ふシカゴの紳士がひどく望みで、それへ賣渡したとの事。

ロチー孃は斯くと聞いて其愛らしい唇を歪めたが、それでも更に挫けず、何處までも目的を果さうと試み、件の紳士の泊つて居る旅館まで逢ひに行つた。早速其紳士の客室へ案内せられ、這入つて見れば、其處には美しい畵架の上に今度買入れたる彼の畵は掛けられてある。折からポッター氏は外出して居たが、直ぐに歸つて來るとの事。

孃は實に救はれた心地、唯一人、誰に憚ることもなく茲に我が怪異なる創作物を縱に眺めることが出來た孃は茲に立つて居る間に英國の古き公園の魔力……光線と陰影の作用、靜かな池、葦の間から見えた彼の思慮ありげに下を見たる目を有てる神々しい顏と半身の形が、今再たび眼前に現はれ來るかのやうに感じ、そつと前で兩手を握り合した。再び彼の時と全じやうにあれを見ることはなからう！

『何うぞ私には少しもお關ひなく……しかしまアお坐りなさい。』

此聲に孃は急に振り向くや否、吃驚してハッと叫んだまゝ氣絕した。

ポッターは驚いたが狼狽はせず、孃が正氣に返ると徐ろに『貴孃が此畵に全く覗入つて居なさる處へ、私の這入つて來やうがあまり唐突であつたです。私が始めて此畵を見た時丁度今の貴孃と全じやうに見恍れたことでした。それ程だつたから私はそれを買つたです。貴孃はロチー孃の何か御類族でゝもおありなさるか』と、

手に持つて居た孃の名刺をそろ〳〵見ながら云つた。

孃は答へが出來るやうに應つてしまつて、品位を落さずに委細の事情を打明けると、

『わゝ、それは又別問題です。私は以前英國で這んな古風な園を見たことがありますから、此畫は私には殊に價値があるです。』併し其處の其小男……失敬ですが、小男といふのは其像のことですよ、これは全く貴孃が自分の想像で創へてお描きなすつたものだらうと思ふです。兎に角貴孃の今のお話の都合は猶一つ考へて見ませう。そして若しお差閊へが無くば、私の方から貴孃をお訪ねしませう。』

其後ポッターは一度ならず數度孃を訪問し、孃の繪畫に對して少からぬ感興を示した。然るに彼の畫を賣る賣らぬの問題は先づ中絕の姿になつて居たが、それより二三週間後に、常よりも長時間の訪問の末にポッターが云ふに、

『お互ひに讓り合つたやうな工合にして、此畫を二人の共有とするのが一番好いじやありませんか』

斯くて二人は共有にすることになつた。

（完）



彙報

御避暑中の兩内親王殿下

箱根宮の下御用邸に御避暑中なる富美宮泰宮兩内親王殿下には御轉地後益々御健勝に渉らせられ侍醫より一回も御藥を御進め奉りたる事なき程にて日々の御運動は毫も怠らせ玉はず過日は强の浦へ（大地獄の裏手にて御用邸よりは約一里半あり）迄御徒歩相成り又翌日は絶頂湖水畔なる函根離宮に成らせられたり斯く連日の御運動にも全く御疲勞の御樣子を拜し奉らずとて林御養育主任以下何れも喜び合へり兩殿下は毎日午前六時御起床午後八時より九時の間に於て御寢に入らせられ御食事は朝夕日本料理晝食は洋食を召させらるゝ御用邸には四ヶ所に温泉を引き毎日一回づゝ御入浴（御用邸に湧き來る時は百三十度の高熱なるを以て數刻間冷したる後御入浴）相成る由暑中は各教師に休暇を與へさせらるゝ御思召より御課業は一切御休止只近侍の人人より御復習を申上ぐるのみなりしと

▲御避暑中の皇孫殿下

又箱根に御避暑中なる廸宮殿下には過日侍醫より御體量を伺ひ奉りたるに約八十五匁を增させられ日夜御健勝に渉らせらる又淳宮殿下には過日來少しく御時候當りの御氣味なりしが昨今は全く御快癒に赴かせられ常の如く御用邸内の御運動あり先月來全く御乳人の乳を廢せられ牛乳五合並に柔らかき米食、輕き魚類等を召させられつゝありと承る

多田染筆翠雲會

女學世界の愛讀者は毎號本誌の卷頭に掲載されつゝある習字手本の筆者多田親愛翁を知らるゝならん、同翁は明治の初め職を帝室博物館に奉せられし以來深く本邦の書道に就て研磋の勞を積まれ、遂に世尊寺俊成卿の筆法を汲んで自から一家の流派を立て超凡脫俗の妙筆を以て知らるゝに至れり、今回翁の門人岡三郎安田善之介等の諸氏相謀り、翁の爲めに翠雲會なるものを組織し翁に色紙の染筆を乞ひ、之を表裝して江湖の同好に頒たんと普ねく希望者を募集中なり。右會規並に趣意書は本誌の廣告欄に詳かなり、御希望の向は下谷西町廿四番地多田方翠雲會へ御申込あれ

▲女子大學學報

本誌は年四回發行にて今回其初號を發行せり記事には校長成瀨氏の時弊論、又岩崎男、大澤博士、廣岡淺子成瀨氏、大隈伯、澁澤男等の講演を載せ坪井、元良、井上三博士の科外講演之に次ぎ文苑欄には敎授學生の美文譯文新體詩短歌あり其他雜錄校報あり

次號記事豫告

（第三卷第拾參號十月五日發行）

毎月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）…前金七十五錢
八册（半ヶ年分）…前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）…前金二圓八十錢
內｛定刊數…十二册
　｛增刊四回…三、六、九、十一月價格同一

郵稅　一册　二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引三十三圓
一等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
二等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十二圓
三等	二十九錢	九圓二十八錢	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

◎本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
◎御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
◎郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る。
◎總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ。

明治卅六年九月十五日發行　第參卷第拾貳號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

中學世界秋季增刊

白雲黄葉

九月廿日發行

節方に秋に入つて、天高く氣清く、燈下最も親しむべき此讀書の好時に際して、中學世界の秋季增刊は出づ、六月以來天下に募りたる懸賞文の披露にして、種目は論文、抒情文、叙事文、小説、新体詩、漢詩、和歌、俳句、美文にして、撰評は大町桂月、中内蝶二、巖谷小波、高島捨太郎、佐々木信綱、岸上質軒等諸氏の手に成り、入撰の作品百數十篇に上れり、全誌二百四十頁内約八十頁を割きて、名流雜俎欄に宛て左の諸編を收む

名流雜俎

- 瀧の窟……江見水蔭君
- 哀愁……德田秋聲君
- 平安朝の和歌批評家……與謝野鐵幹君
- 落第……石橋思案君
- 桑港の妖怪……松原廿三階堂君
- 中央亞細亞の麒麟兒……國府犀東君

太陽

九月一日發行 第拾號 正價卅錢 郵税三錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

文藝倶樂部

第拾貳號

九月一日發行

正價二十五錢 郵税二錢五厘

◎表紙 滿月(精彩石版畫)…武内桂舟筆
◎口繪 凉風(精彩木版畫)…河合玉堂筆
◎思ひが屆いて(原色版)
◎美人と風景(濃淡寫眞)

▲小說▼
ストライキ……小栗風葉
家庭難……内田魯庵
兄弟……上村左川譯(モウパッサン作)

◎懸賞小說◎
緋帛紗……秋玲瓏
へたて……大石夢幻庵
此の子……舟川玄人

時文
人生の三期△戀愛の時代△自殺を奬勵す△本誌時文に於る余の態度……大町桂月

雜錄
博覽會後の祭…關根默庵
仕入殘り…齋藤綠雨
サルチル心中…巖谷小波
人旅…泉斜汀
月の夜頭…武田櫻桃
讀懸賞小說…石橋思案

世態
探訪員…長耳生
朦朧組…山本柳葉

譚海
犬の今昔…片山友彦

演劇
新俳優と舞踊…山岸荷葉
俳優七癖…土肥春曙
市川團藏皮肉談…杉贋阿彌

落語
年ぼめ…柳亭左樂

藝林
源氏節の樂屋…魔釼道士
京坂合併角力…門翁

流行
セルとネル…(白木屋調)

●奇談●風俗●勝地●墳墓●詞苑等材料如山趣味如海一讀快哉

前金
一册二十五錢四册九十五錢八册一圓八十錢十六册三圓五十錢郵税一册二錢五厘宛

發兌元東京博文館

(後付の三)

田中法學士著
通信法釋義
（全壹冊洋裝）

大藏省御編纂
租税法規纂要
（全壹冊洋裝）

柳田津々雄君著
恩給扶助法大全
（全壹冊洋裝）

賣價 金五十錢　郵税 金十八錢
賣價 金二十錢　郵税 金十錢
賣價 金十錢　郵税 金四錢

博文館

少年世界

九月五日發行　拾貳號　正價金拾錢　郵税壹錢五厘

●鳴子の助……さゝなみ
●雛の歌（小波作、鐵笛曲）
●五分の魂……石橋思案
●カナリヤ塚……德田秋聲
●運の巣……木村小舟
●學校始め……武田櫻桃
●鮎の天上……久保田小魂
●絶島通信……押川春浪
●鬼軍曹……尾上新兵衛
●勘忍の大將……松原三階堂
●小行商人……生田葵山
●火屋の利用……木村小舟
●小動物の話……林壽祐
●留學の少年……小松蘭雪

口繪
●田家の蟲（精彩石版密畫）武内桂舟の筆
●かむりづる
●おゝ二少年
●ヂバタの瀧
●孤兒院の小兒

●癈馬物語……西村渚山
●時の車……杉内白想
●菅原道眞……幼學生
●小波一家言……巖谷小波
●入爲の月球……武田櫻桃
●門涼み……泉斜汀
●室内遊戯……國府康東

前金 一冊十錢四冊卅八錢八冊七十五錢十六冊一圓
四十錢郵税一錢五厘宛

本號には少年寄稿家十傑第一回披露あり

發兌元 東京 博文館

多賀陸軍中尉著
家庭軍事談
（全壹冊洋裝）

長尾海軍大尉著
海軍出身案内
（全壹冊洋裝）

上野義八郎君著
海軍兵器説明
（全壹冊洋裝）

賣價 金十五錢　郵税 金六錢
正價 金四十錢　郵税 金六錢
正價 金十八錢　郵税 金四錢

博文館

（後付の三）

（後付一七）

醫學士 近藤常次郎先生著

仰臥三年

全壹册洋裝 正價卅五錢 郵稅六錢

石黑男爵 森鷗外博士序文

仰臥三年は燕處生の作る所なり。燕處生は近藤氏、通稱は常次郎。嘗て醫科大學に學びて業を終へたり。又曾て海外に留學して譽を馳せたり。然るに一旦痾を得て支體糜し、一臥三年、面承塵を仰ぎ、背痲痺に支へ輾轉反側すること能はず。若し夫れ起座立行は、其夢想する所に非ず。凡そ是の如き境遇に處する者は庸俗無能なるものと雖、將に呻吟煩悶するとを禁ぜざらんとす。何ぞ况や有爲の資を抱ける士、逸翰忽ち殺がれ、雄心自ら局す。其怨傷狂せんと欲し、天を怨み世を厭はんこと固より其所ならん。獨り燕學生は、心を持すること恬靜、且つ書を讀み文を屬し、病の身に在るを知らざるものゝ如し、此書の說く所も、亦溫雅平正にして、一毫不平の音なし。中に養ふ所凡常に超絶するものに非ざるよりは、恐らくは是の如き能はざるべし。抑も此書、大小の人事、錯綜敘出して、之れを貫穿するに一條の哲理を以てす。是れ作者方寸の鍛ひ成す所にして洵に測度し易からざるものあり。披讀せん者、夫れ玆に留心せよ。

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

(後付の八)

十千萬堂藏版

紅葉先生の病むや天下擧げて嘆惜せざる莫く文を贈り藥を貼りて同情を寄する者多し、殊に門下生に至りては、殆んど寢食を癈して先生の枕頭に侍し其快愈の速かならんを祈れり、然も至誠を致もの悉さゞらんを恐れ、相謀りて各心を籠めたる一文を草し床下に献して秋夜の伽と爲す、曩日各新聞紙上に美談として傳へられたる『換菓篇』此れなり、小說あり、隨筆あり、句あり、歌あり、紅紫錯互金碧掩映して一幅の美觀を極む眞個に此れ文壇稀に觀る所の佳話にして先生師弟の情の如何に濃かなるかを見るべし今や剞劂漸く成り併せて天下有情人の清覽を辱ふするに至れるは本堂の光榮とする所なり。

十千萬堂出版部 敬白

換菓篇

目次

目次

全壹册洋裝上製　金文字入美本

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

女學世界定期增刊 花すゝき

毎月一回五日發行

第參卷第拾貳號

（明治三十六年九月十五日發行）

（明治卅參年拾貳月廿五日第三種郵便物認可）

（定價金貳拾錢）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㉒
明治36年9月（第3巻第11号、第12号）

2006年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　有限会社オンデマンドジャパン
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-3051-9　C3321